黒の魔本

コーヒー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の魔本

【Ｎコード】
Ｎ６３９０Ｐ

【作者名】
コーヒー

【あらすじ】
図書館島で見つけた不思議な黒の魔本、それを手にしたとき一樹は新たな力を手にする。彼が交わることでネギ・スプリングフィールドや３-Ａはどう変わっていくのだろうか。そしてその先に待つ彼らの運命とは。この作品は魔法先生ネギま!と金色のガッシュ（設定のみ）のクロス作品です。ガッシュのキャラクターは出てきません。現在エヴァンジェリン編まで終了、修学旅行編開始直前。

設定（前書き）

設定は一番下においておこうと思っていたのですが、割り込み投稿すると最新話が最終投稿に反映されないみたいなんで、一番上におくことにします。
はじめてこの作品を読む方は先に物語を読んでから設定を読むことをオススメします。

設定

設定、術が増えるたびに追記していきます。

原作内とは少し設定の変わっている術もあります。

この作品内だけで実際に正しい設定ではないので、勘違いされないようお願いします。

【人物設定】

主人公：松井一樹

身長：１７２ｃｍ

体重：６１ｋｇ

容姿：短くした髪をワックスで固めてセットしている、髪の色は黒。

顔は目つきの悪ささえ気にしなければ整っている。

左手の中指と人差し指にそれぞれ指輪をはめている。

この作品の主人公でブラゴの魔本を手にいれる。

麻帆良学園男子高等部の1年生。

彼は突発的に生まれた魔法使いで、両親は魔法の存在を知らない一般人。

魔力量は一般の魔法使いの約7倍持っている。（ネギ魔力量は主人公の約2～2．5倍）

彼はネギま世界の魔法の詠唱が出来ないので、ネギま世界の魔法使いとしては落ちこぼれ。

彼が使用できる魔法は身体強化の魔法などの補助魔法や魔法障壁、魔法の射手のみ。

幼少時に大人から失望されると言った経験が、心に小さな傷を残している。

魔法の詠唱は出来ないが、魔法使いとしての才能は天才的（ネギ並かそれ以上）でブラゴの魔本を手にいれエヴァの訓練を受ける事で一気にその才能を開花させる。

戦闘のタイプとしては”魔法使い”タイプ

魔本を手にいれる前は夜間警備には参加せず、普段は学園長に頼まれる雑用をこなしていた。

趣味は読書と人をからかうこと。最近は特に反応のいいエヴァをターゲットにしている。

寮で暮らしていたが、図書館島での仕事もあり不便であるため、図書館島近くに引っ越すことになる。

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル

見た目１０歳、年齢６００歳の吸血鬼の真祖。

自らを”悪の魔法使い”と呼び、”闇の福音”　”人形使い”　”不死の魔法使い”　などさまざまな二つ名がつくほどの魔法使い。

しかしサウザンドマスターに敗れて封印されて麻帆良に学生として縛り付けられている。

満月の時だけその力が少し回復する。

現在は主人公に興味を持ち鍛えているが、よくからかわれるため悪役っぷりを発揮できず、人の良い所ばかり目立ってしまう。

現在は一樹とこのかの二人を弟子に持っている。

絡繰　茶々丸

エヴァンジェリンの従者で超、葉加瀬が作ったガイノイド。

からかわれているエヴァを撮影する係。

主人公とは仲良し、しかしたまに間違った知識を植えつけられることも。

最近本人も自覚していないが、主人公と共にエヴァをからかうことにより、自我が芽生えはじめている？

チャチャゼロ

エヴァンジェリンの従者である人形。

主人であるエヴァの魔力が動力であるため、普段は動くことができない。

最近は主人公と共にエヴァのからかわれている所を撮影した映像を見ながら酒を飲んでいる。

近衛　このか

学園長の孫である女の子。

女子中等部の２－Ａ（後に３－Ａ）の生徒で図書館探検部に所属。

主人公とは図書館島で出会う。

極東一の魔力の持ち主だが、本人は魔法の存在を知らない。

最近魔法の存在を知って、現在はエヴァの元で魔法を学んでいる。
刹那との仲直りも成功し、気分は最高。

綾瀬　夕映

女子中等部の２－Ａ（後に３－Ａ）の生徒で図書館探検部に所属。
主人公とは図書館島で出会う。
特別司書（見習い）の資格を持ち、図書館島の内部のことを知っている主人公に興味津々。

宮崎　のどか

女子中等部の２－Ａ（後に３－Ａ）の生徒で図書館探検部に所属。
主人公とは図書館島で出会う。
男性恐怖症を患っているが、主人公にはその症状があまり適応されないようになってきている。

早乙女　ハルナ

女子中等部の２－Ａ（後に３－Ａ）の生徒で図書館探検部に所属。
主人公とは図書館島で出会う。
通称パルで結構騒がしい、ラブ臭と言うものを探知できる。
主人公にからかわれて以来、その仕返しと称して、様々なことを仕掛けている。

桜咲　刹那
女子中等部の２－Ａ（後に３－Ａ）の生徒でこのかの護衛役。
エヴァの悪巧みにより酷い目にあわされる。
だがこのおかげでこのかと仲直りに成功し、内心エヴァに感謝している。

学園長
ぬらりひょん
麻帆良最強の魔法使い？

主人公をまともに扱ってくれていた人で、主人公も一応学園長を信用している。

最近は主人公がそっけなくなって寂しい。

タカミチ・T・高畑

デスメガネ。

主人公をまともに扱ってくれていた人の1人。

主人公同様呪文が詠唱できない体質、そのためマギステル・マギとして認められない。

ほとんど出番がない・・・

17話でついに彼にも出番が！

クウネル・サンダース（本名不明）

図書館島の地下で生活している謎の人物。

主人公に重力魔法、そしてエヴァのからかい方を教える師匠である。

【魔本】

・ガッシュとのクロス作品ですが、魔物の子供は出てこず魔本だけがネギま世界に現れました

・ガッシュ内で魔本を使うのに必要なものは心の力ですが、この作品内では心の力の代わりに魔力を使用します

・魔本は開かなくても触っていれば呪文が使用できます、ただし魔本を所持していない時は絶対に呪文は使用出来ません

【呪文】

ブラゴの持つ呪文は強力な呪文が多いので、まずディオガ以上の呪文は主人公の技量不足という事にして威力を落とさせてもらいます。物語が進み、彼の技量が上がれば威力を上げて行きますが、それでも少し威力を下げようと思います。

1、レイス　（プロローグ時から使用可能）
掌から重力弾を撃ち出す術

2、グラビレイ　（プロローグ時から使用可能）
重圧をかけ、敵の身動きを封じる術

3、ギガノ・レイス（2話時追加）
レイスの強化版。より大きく強力な重力弾を撃ち出す術

4、アイアン・グラビレイ（3話時追加）
グラビレイの強化版。一定範囲に強力な重圧をかける術。重力場は任意で操ることが可能。

5、リオル・レイス　（3話時追加）
両手から螺旋状の2つのレイスを放つ術。ムチのように使うことが可能。

6、ディゴウ・グラビルク　（3話時追加）
肉体を重力の力で強化する術。身体能力は3倍近く、打撃系攻撃（パンチ、キックなど）の威力は5倍近く上がる。

7、ディオガ・グラビドン（3話時追加）
真空波を纏った、球状の巨大な重力球を放つ術。

8、ザング・マレイス　（14話時追加）
手の平から重力の刃を出し、斬りさく、または飛ばすことも出来る術。

設定（後書き）

3月22日更新

プロローグ（前書き）

はじめましての方ははじめまして、お久しぶりの方はお久しぶりです。以前ａｒｃａｄｉａで投稿していた作品をこちらで再構成して投稿したいと思います。とりあえず作者本人であるということの証明に３日後の１２月２５日にａｒｃａｄｉａの方にあるこの作品を下げ更新します、そして話があちらに追いついたらあちらを削除しようと思います。

プロローグ

俺は松井一樹、麻帆良学園男子高等部に通う一年生だ。

この学校は学園都市と言う表の顔がある一方、関東魔法協会という裏の顔も持っている。

この時代に魔法なんて、と思うかもしれないが、世界には本当に魔法使いがいて、魔法世界という別の世界まである。

そして俺もその魔法使いの一員である。

魔法使いにとって重要な魔力量は、なんと一般魔法使いの平均の7倍近くもあるらしい。

それだけ聞けばエリートと思うかもしれない。

しかし俺の場合、身体強化の魔法などの補助魔法や魔法障壁、魔法の射手は発動するが、それ以外の魔法が発動しない。

そのため、魔法使いとしての俺は落ちこぼれと呼ばれ、俺より年下の魔法使いからもバカにされているようだ。

俺の両親は2人とも一般人のようで、魔法の存在なんて知るわけもなく、俺もたまたま麻帆良学園に入学して、そこで魔法の存在を学園長直々に教えられて、魔法の事を知った。

あのころの俺は、魔法と言う未知の技に魅入られるように学んでいたが、俺に才能がないとわかったとき俺の指導を担当していた魔法

使いが見せた落胆したあの顔。

それを見た途端、目が覚めたように魔法への興味を失っていったのを覚えている。

魔法使いが目指すべきマギステル・マギというものにも、俺は理解が出来ない、いや、しなくなったと言った方が正しいのか。

そのため、俺は周りの魔法使いからは異端者のような目で見られている。

俺をまともに見てくれるのは、学園長やデスメガネ（高畑）のような一部だけだ。

だから俺は、彼らにだけは普通に接していて、他の奴らとは距離を置いて、なるべく関わらないようにしている。

そして現在、俺は学園長に頼まれて図書館島にやって来ていた。

「この魔法書を返してきて欲しい」と言われ、現在図書館島内の地下5階まで降りて来ている。

この図書館島内には表、裏に関わらず、貴重な本の数々が保管されているため、盗難を防ぐために罠が仕掛けられてるのだが、本を返して来いと言うのなら罠ぐらい解除しておいて欲しい。

身体強化の魔法のおかげで、一般人とは比べ物にならない身体能力を持っているが、危ないものは危ない。

しかも降りるたびに罠が凶悪になるから結構命がけだ。

この魔法書は地下9階まで行かないといけないので、生きて帰れるか不安になってきたぞ。

帰ったら絶対に学園長に文句を言ってやる。

学園長への恨みを募らせながら、何とか目的地にたどり着き、本を元の位置に返す。

頼まれた仕事は果たしたので、さあ帰ろう、そう思った時、本棚の中に1つだけ光っている本を発見した。

明らかに裏関係の本であるようだが、少し興味があるので手に取ってみる。

その本は黒い魔道書で、タイトルには「ブラゴの書」と書かれていた。

サーと本の中身に目を通していくが、何が書いてあるのかわからない。

パラパラと本を捲り、目を通していくと、一説だけ読める部分を発見した。

「第一の術　レイス」

本に書いてある言葉を読み上げると、手に持った魔本は先ほどより強く光を上げる。

体内の魔力が消費され、だらんと下げていた右腕から魔弾が飛び出し、地面に激突して煙を噴き上げた。

煙がはれて、地面に目を向けると、そこには何かに砕かれた跡が床に残っていた。

俺の手から放たれた魔弾は、魔法の射手と同等か、それ以上の威力を発揮して床を砕いていた。

手に持った魔本に目を戻すと、そこには相変わらず「第一の術　レイス」と書かれており、先ほどの魔弾はどうやらこの呪文のようだ。

他のページに目をやると「第二の術　グラビレイ」と言う呪文が書かれてあるが、その他のページは読む事ができない。

グラビレイのページを見ていると、呪文の情報が頭の中に流れてきた。

レイスのページを見ると、同様に情報が流れて来ている。

どうやら2つとも重力系の呪文のようだ。

床も壊してしまったし、謝るついでに学園長に報告と相談だな。

図書館島を脱出して学園長室に向かうと、そこには学園長の他に、デスメガネと金髪の小学生くらいの女の子がいる。

「おぉ～待っておったぞ、魔法書は無事返してきてくれたかの？」

そう俺に声をかけてきたのは、この学園の理事長である近衛近右衛門。

彼はこの学園の魔法使いのひとりで、関東魔法協会の理事も務めている。

話ではこの爺さんが、今この学園で一番強い魔法使いであるらしい。

が、普段からはそんな事は一切想像が出来ないのだが・・・

特徴は異様に伸びている後頭部で、はじめてみた時は「ぬらりひょんですか？」と本気で尋ねたくらいだ。

「はい、渡された魔法書は、指示された場所に戻しておきました。それと報告したいことがあるのですが」

「うむ、我々もその事について聞かせてもらおうと思っておったのじゃ。是非聞かせてもらえるかの」

学園長は知っていたかのように、俺に話をするように促す。

「まず学園長に任された魔法書を返却しました。そして上に戻ろうとしていた時に、本棚の中に一冊だけ光っている本を発見、つい好

奇心に負けて本を手に取りました」

「ほうほう、それで？」

長く伸びた顎鬚をさすりながら、続きを促してくる学園長。

「その魔法書の中を見ていたのですが、全く見た事のない文字で書かれていて、その中に何故か1つだけ意味のわかる呪文があって、それを唱えると魔弾が発生しました」

「なるほどのう、話は確かにわかった。それで今その本は何処にあるのじゃ？」

「ここに持ってきています、この本です」

そういって俺は手に持っていた魔本を学園長の中に差し出す。

渡された本を覗きこむ目の前のお三方。

「ふむ、この本か。一樹君この本のタイトルはなんと書いてあるかわかるかのぅ？」

「はい、一応読む事ができますが、学園長たちは読めないのですか？」

「それがさっぱりじゃ。この本は、どうやら持ち主と認めたものしか読めぬようになっているのだろう」

学園長は本当にさっぱりと、そう言う。

「そうなんですか、でもそれだとこれは俺の物になるのですか？
それとも、やはり元の場所に戻すべきですか？」

「うむ、難しいところだが、君はこれを用いて悪事をするかいの？」

「いえ、別に何をしようとも思いません」

とんでもない、という身振りをしてその意志を示す。

「ならこの本は君に預けておこう、ただし悪用した場合は、力ずくで奪い返すのでそのつもりでの」

「わかりました」

そこまで言うと、学園長は俺に本を返してくれる。

学園長が許可したので、とりあえずこの本は俺が所有する事になった。

「ちなみに今読める呪文はいくつあるんじゃ？」

「今読めるのは2つだけです、効果はわかっているんですが、実際に使ったのは1つだけです」

「うむ、確かにあのような狭い場所でうかつに魔法は使えぬの」

「それで壊してしまった床のことなんですが？」

「それについてはわしが直しておくとしよう、じゃから気にせんで良いぞ」

「ありがとうございます」

床の件も許されて一件落着だ、本を返してもらったし、眠くなってきた。

そろそろ帰らしてもらおうかな。

「おい、お前っ！」

そう考えていると、金髪の女の子が声をかけてきた。

「そういえば学園長、この子誰です？　小学生がこんな時間に何してるんですか？」

今の時間は夜の１０時、良い子は家で眠りに入る時間だ。

「誰が小学生だこのアホ～！」と言う叫びと共に、飛び蹴りを食らった。

「これこれエヴァンジェリン、お主と一樹君は会った事がないだから仕方あるまい。一樹君、彼女はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルといって、この学園で警備員をしてくれている吸血鬼なんじゃ。これでも６００年近く生きておるんじゃよ」

フォフォっと笑いながら、説明をしてくる学園長。

「ジジイ、警備員をしているんじゃない、無理やりやらせているんだろう。間違えるな」

エヴァンジェリンは鼻をふんと鳴らしながら、嫌そうにそう答える。

「そうじゃったの、まあ少し事情があって、彼女はここに封印されておるのじゃ。そこでわしが生活の面倒を見るかわりに、警備員をしてもらっておるのじゃ」

悪気など一切なさそうに答える学園長に、こちらもなんだか大事のような気がしなくなる。

「そうなんだ、見た目幼女なんで、つい小学生だと思ってた。すいません」

「まあ、わかればいい、って幼女て言うなっ！！」

そう言うと、また飛び蹴りを食らった、今許す方向に向かっていたのに。

「まあいい、それよりお前松井だったか？　奴と似たような本を持っているし、お前の力に興味がある。ちょっとついて来い！」

「え、今から？　長くなるなら明日にして欲しいんだけど？」

「黙れ、お前に拒否権はない。早くついて来い！」

そう言うと、ズンズンとドアの方向に歩き出すエヴァンジェリン。

「まあ一樹君、君もその呪文を良く知るためにもついて行きなさい。彼女の別荘なら、多少の無茶も関係ないわい」

なにかすごく横柄な態度だが、確かに呪文についてはしっかりと把

握しておきたい。

仕方ない、ついていく事にしよう。

「ああそうじゃ、明日の放課後またここに来てくれるかの？　その時に少し、その呪文の力を見せてもらいたいのじゃ」

「わかりました、ではまた明日来ます」

そう返事をして、俺と幼女、エヴァンジェリンは学園長室を後にした。

そういえば、デスメガネ一言もしゃべらなかったけど、何のためにいたんだろう？

＜学園長＞

一樹君とエヴァンジェリンが出ていって、残されたワシとタカミチ君はあの本について話している。

「学園長、あれはあの人が持っていた赤い本と同じものなのでしょうか？」

「うむ、あのバカが持っていた本も奴以外には読めなかったようじゃし、間違いないじゃろうな」

「あの人が持っていた本は雷が出てましたよね、彼の本はどういった系統なのでしょうか？」

「それは今からエヴァンジェリンが調べてくれるじゃろう、それまで報告を待てば良い」

「そうですね、それにしても、あの人は馬鹿げた威力を持った雷のドラゴンを出しましたけど、彼もそのような呪文を持っているのでしょうか？」

「それについても今はまだわからん、しかし今は持っていなくても、いずれ手にする可能性はあると考えて良いじゃろう」

「彼はその力を手にした時、その力を悪用しないでしょうか？」

「その時はワシが全責任を持って彼を止めてみせる。まあそのときは、タカミチ君の力を借りるかもしれんがの」

「わかりました」

「もうすぐあのバカの息子も、この麻帆良にやってくる」

「ネギ君ですか？」

「うむ、この事が、彼にとっても、ネギ君にとっても、良い方向へと向かえば良いのじゃがのう」

今はあと3ヶ月後に来るネギ・スプリングフィールド君と、松井一樹君をどうやって知り合わせようか考える事にしよう。

プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグを投稿しました。
以前あちらで考えていた別の魔本を出すかどうかの話ですが、とりあえず辞める事にしましたので報告しときます。
ツイッターで更新情報をつぶやきます
ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／＃ｃｏｆｆｅｅ０８０３

1話

ついて来いといわれて幼女、もといエヴァンジェリンについてしばらく歩いていくと、木々の中にぽつんと立ったログハウスにたどり着いた。

「ここが君の家？　なかなかいい所に住んでるね」

「ふん、そうだろう。よし、中に入るからついてくるがいい」

家の事を褒めたら少し機嫌がよくなったらしい。

ログハウスの中に入ると、部屋の中にはたくさんの人形が並んでいる。

この幼女、なかなかファンシーな趣味をしているようだ。

「貴様何か失礼な事を考えていないだろうな？」

エヴァンジェリンはこちらの様子を伺いながら、こちらの考えを的確についてきた。

「別に、ただ６００歳って聞いてたから、この少女趣味丸出しの部屋を見て驚いていただけだよ」

「それが失礼だと言うんだっ！」

そう言って今度は近くに置いてあった人形をこちらに向かって投げつけてくる。

「危ないな」

それをキャッチしてそばにあったテーブルに置いておく。

「で、学園長が言ってた別荘ってここの事？　見た感じは確かに別荘だけど」

「ここは私の家だ、別荘は別にある」

別荘は別にあるらしい。

でもここ以外に別荘に出来そうな場所なんて他にあったっけ？

「お帰りなさいませ、マスター」

そんなことを考えていると、家の奥からメイド服を着た女の子が出てきた。

「今帰った、茶々丸」

出てきた少女にそう言ってドスンとソファに腰掛けるエヴァンジェリン。

「マスターそちらの方は？」

「ああ、こいつの力を見たいから別荘を使いたい。あれは今何処にあった？」

「確か地下室の倉庫に片付けてたはずです」

「そうか、なら探して使えるようにしておいてくれ。それとチャチャゼロも探しておけ」

「わかりました」と言って、再び家の奥に入って行った。

「えっと今の子は？　マスターと呼ばれていたけど？」

「あいつは私の従者の茶々丸だ」

「なんか普通の人間と違うような気がしたけど？」

「あいつはガイノイドとかいうタイプのロボットらしい」

「らしいって自分の従者でしょ、あの子？」

「私も詳しい事は知らんのだ、作ったのは私ではなく私のクラスメイトだからな」

「ふ～ん、まあいいや。それよりも別荘が地下にあるってどういう事？　まさかシル○ニアファミリーの森のお家とか持ってきて別荘だとか言わないでね」

「貴様私をバカにしているんだなっ、バカにしているんだろっ、ふざけるなっ！！」

ちょっとふざけすぎた、マジ切れしてしまった。

人形を当たりかまわず投げつけてくる。

俺は一向に構わないが、さすがに人形とはいえ壊れるのを見るのは嫌だから1つずつキャッチして床に置いていく。

ふと家の奥を見ると先ほどのメイドの子、茶々丸がビデオカメラ片手にエヴァンジェリンを様子を撮影している。

「マスターがあんなに楽しそうに」とかつぶやいている。

とりあえずグッと親指を突き出してやると、恥ずかしそうにほほを染めながら空いている手の親指を小さく前に突き出す。

俺の指を見て、後ろの茶々丸を見て「茶々丸っ！！」と叫んで近づいていく。

彼女の後ろに回りこみ「ええぃ、このアホ従者めっ！　巻いてやる、巻いてやるぞっ！！」

とか言いながらじゃれあっている。

もう俺帰っていいかな、眠い。

黙って帰ろうとしていると、じゃれあっていたエヴァンジェリンがこちらに気づく。

「おい、お前なに帰ろうとしている」

「だってついて来たのに見せられたのは別荘じゃなくて漫才だけじゃん。もう眠いんだよ」

「もとはと言えばお前のせいだろっ！！　もういいついて来い」

そう言うと家の奥に向かってドスドスと音を立てて歩いていく。

「ねえ、茶々丸ちゃんだっけ？　これ無視して帰ったらまずいかな？」

近くに立っていた茶々丸ちゃんにそう尋ねてみる。

「たぶん次に出会った時にマスターが問答無用でとび蹴りを食らわせると思います。ですのでここは帰らずについていったほうがいいと思います」

「君も大変だね、あんなマスターで」

「いえ、私は従者ですから」

とび蹴りを食らうのは嫌なのでついて行こう。

地下に降りてみると、そこにはミニチュアサイズの城の模型が置いてあった。

エヴァンジェリンはその横に立っている、どうだと言わんばかりの顔でこちらを見ている。

ならばこちらはやっぱりかと言う顔を返そう。

「なんだ貴様その顔は、何か言いたい事でもあるのか？」

こちらの態度を見てエヴァンジェリンは不服そうにそう尋ねてくる。

「やっぱりシル○ニア「それはもういいっ！！」」

同じネタはダメだったようだ。

「・・・・・・じゃあこれ何？」

「お前は口で説明するより実践したほうが早いな、その城の前に立て」

言われるがままに城の前に立つと足元に魔法陣が起動し、目の前の景色が一転する。

どうやら全く違う場所に転移してしまったようだ。

「どうだすごいだろう、この別荘は？」

今度こそどうだと言う顔で見てくる。

だが所詮は幼女、せいぜい大人のマネをして威張っている子どもにしか見えないのでせいぜいかわいいくらいだ。

「すごいすごい、でこれ何？」

手をパンパンと叩いてそう答える。

「貴様やはりバカにしてるな。私が誰だかわかってやっているのか？」

「誰ってエヴァンジェリンだろ？　６００歳で幼女趣味の」

「マスター、彼は突発的に力に目覚めた魔法生徒のようです。なのでマスターを知らなくても無理ありません」

茶々丸ちゃんがなぜ知っているのかは知らないが、俺の情報をエヴァンジェリンに伝える。

「なに、そうなのか？　なら改めて名乗ってやろう。我が名はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。”ハイ・デイライトウォーカー”　”闇の福音”　”人形使い”　”不死の魔法使い”　吸血鬼の真祖である悪い魔法使いだっ！」

また威張っている、しかし先ほどもいったが、その姿じゃ全然怖くない。

それよりも茶々丸の頭にくっついている変な人形のほうが気になる。

「ふ～ん、そうなの。それより１つ聞いていい？」

「貴様っ、・・・・・なんだ？」

俺のそっけない返事に、頭に青筋を立てながらも何とか自分を抑えて聞きなおしてくる。

「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルのＡ・Ｋってなんの略？」

「なんだと！？」

「耳が遠くなったのおばあちゃん？　だからＡ・Ｋってなんの略？」

エヴァンジェリンはプルプル震えながらこちらを見ている。

あ、震えがとまって右手をこちらに突き出している。と、その瞬間無詠唱で魔法の射手を一矢撃ってくる。

何とか体をひねってかわし、エヴァンジェリンに抗議する。

「いきなり危ないだろ、無詠唱の魔法の射手なんて！」

「黙れ！貴様は１回力づくで黙らせんと私の気がすまん！」

そう言いながらまた無詠唱の魔法の射手をこんどは三矢飛ばしてくる。

俺には無詠唱の魔法の射手なんて使えないのですぐに発動出来そうな魔本の呪文を使おう。

「食らえ、第一の呪文　レイス」

といって右手を前に突き出すが何も出ない。

止めるもののないエヴァンジェリンの魔法の射手はとっさに張った魔法障壁とぶつかり爆破。

魔法の射手を放った本人であるエヴァンジェリン、少しはなれたところでまたビデオカメラを構えている茶々丸、そして茶々丸の頭の上に載っている謎の人形。

俺が自信満々に使おうとした魔法が不発に終わり、エヴァンジェリンの魔法をもろに食らった俺を見てその場にいた全員が固まった。

吹っ飛ばされた俺は自分の無駄に高い魔力量のおかげで何とか助かった。

とっさとは言えかなりの魔力を障壁のためにつぎ込んだからな。

立ち上がるとエヴァンジェリンに向かって腕でT字を作り「タイム」を要求。

固まっていたエヴァンジェリンは「・・・ああっ」と答えたがあれは無意識に答えただけだろう。

しかし了解を得たので俺は持っていたかばんの中にしまっていた魔本を出し呪文を確認する。

「第一の呪文はレイスであってる、なのになぜ発動しない？」

今度は本を持ちながら手を空に向け「レイス」と唱える。

すると今度はしっかりと魔法が発動し、上空に魔力弾が放たれる。

本を離してもう1回、発動しない。

本を手にしてもう一回、今度は発動。

「OK、エヴァンジェリンもういいぞ。原因が判明した」

「・・・・・はっ、そうだ何故今魔法を発動させなかった？」

「俺も今知ったが、この呪文は魔本を手にして唱えないと発動しないみたいだ」

「そうか、もういい私もお前の相手をして疲れた。ここは外の世界の一時間が1日になり、1日過ごさないと外に出られない。とりあえず8時間やるから休憩だ、そのあとお前の力を試そう」

そう告げると彼女は仕事に疲れたサラリーマンのような歩き方で城の中へと向かっていく。

「エヴァンジェリン最後に1ついいか～?」

「・・・・・なんだ?」

「A・Kの略がなにか気になって仕方ないんだけど!」

「しつこいわっ!!」

マジ切れして城の中に戻っていった。

まだこの場に残っていた茶々丸と頭の上に乗ってる人形に向かって親指を突き出す。

今度は彼女らも普通に親指を突き出してくれた。

今の一連の流れをカメラに上手く撮れたらしい。

その姿に満足していると、城の中から魔法の射手がまた飛んできたを追記しておく。

1話（後書き）

ａｒｃａｄｉａのほうも消さなくても良いのではという意見もあるので、とりあえず3日後の下げ更新だけは確実にして、消すかどうかは考えます

2話

朝、目を覚ますと、何故かエヴァンジェリンが目の前にいて、その表情は羞恥と怒りの二つが浮かんでいる。

顔を赤く染めながら、今にも殺すと言わんばかりの視線をこちらに向けてくる。

しかし、ここは俺が茶々丸に案内された客間のようなところ、その布団の中だ。

こちらに非はまったくないはず。

「なんだキティ、寂しくなって俺の布団にもぐりこんだのか？」

俺は状況が掴めないので、とりあえず目も前にいるキティ、もといエヴァに話しかける。

「な、何故その名を知っているっ！」

俺の言葉に、エヴァンジェリンは顔をさらに赤くしながら絶叫してくる。

「それは昨日チャチャゼロに聞いたからだ。いくら寂しいからといって、もう６００歳だろ、１人で寝ようなキティ」

エヴァの頭をなでながら、そうやってエヴァを諭してやる。

するとエヴァンジェリンの額にさらに１つ増える青筋。

「それともまさかとは思うが夜這いか？　夜這いなのか？　なら悪いが相手をする気はない。俺は年下好きだがロリではないんだ、早く自分のベットに帰れ。英語で言おうか？　Ｒｅｔｕｒｎ　ｔｏ　ｙｏｕｒ　ｂｅｄ」

そう言って、この部屋のドアの方を指差して、エヴァに退室を促す。

「うるさいわこのボケ～！！」

「グフッ！」

少々からかいすぎてしまい、渾身の右ストレートを鳩尾にもろにくらってしまった。

「とりあえず茶々丸ちゃん、説明プリーズ」

しばらく悶え苦しんだ後、布団から出て、茶々丸ちゃんからあの状況に陥った原因の説明を受けることにする。

流れだけを説明すると

約束の８時間を過ぎても起きてこない俺を、エヴァンジェリンが起こしに来る

←

呼んでも起きない俺を踏みつけて起こそうとする

←

俺がエヴァンジェリンの踏みつけを寝返りで回避

←

寝返りの途中で、何故か俺がエヴァンジェリンに対し足払いをする

←

エヴァンジェリンが足払いを食らい、俺のベッドの中へとこけてくる

←

エヴァンジェリンが俺の抱き枕化

で冒頭に戻ると言うことらしい。

うん、俺なんも悪いことしてないな、むしろ悪いのはエヴァンジェリンだな。

俺と恋人（布団）を引き離そうとした罰が落ちたんだろう。

言ってはなんだが俺は三度の飯よりも、ずっと寝ていたい派なんだ。

「まあもういいよ、それよりシャワー浴びたいんだけど？　茶々丸ちゃん、案内してくれない？」

寝てる間に大量にかいたらしい汗を流したい。

「わかりました、こちらです」

茶々丸ちゃんは俺のお願いに律儀にこたえようとして、俺を浴室まで案内しようとする。

「おい待てお前ら、私をおいて話を進めるな。だいたいなんでお前にシャワーを使わせなければならんのだ」

エヴァンジェリンが俺の前に立ち塞がり、そういってくる。

「お前が人の布団に進入するから汗かいたんだ、だからお前のせい

だ」

本当は寝汗だろうがこの際責任転嫁してやる、だから早くシャワーに行かせろ。

「なっ！　貴様」

シャワーに行きたい俺とそれを阻止するエヴァ、2人は睨み合いになる。

「マスター、ここは松井さんにシャワーを浴びてもらったほうが話が早く進むと思いますが」

睨み合いが1分も続くと、茶々丸ちゃんが仲裁に入ってくれる。

「・・・チッ、そうだな。もうシャワーにいっていいから、終わったら昨日の場所まで来い。茶々丸、お前はこいつについて行って、昨日の場所まで案内しろ」

そういうとエヴァは部屋から出て行く。

「わかりました、マスター。では松井さんこちらです」と茶々丸ちゃんに促されて、俺と茶々丸は浴場へと向かう。

「貴様今まで何をしていた?」

シャワーを浴びてから茶々丸と昨日の場所へ戻ると、また頭に青筋を浮かべ怒っているエヴァンジェリン。

「何をしていたって、俺が何しにいったのかもう忘れたのか？　ボケたのか？」

やれやれ、と手を横に出し、ため息を吐く。

「シャワーに行っていたんだろう、それは知っている！だが、たかが汗を流すだけのシャワーに1時間もかかっているんだっ！」

そう、俺は一時間近くかけてここに来たのだ。

「キティは別に時間指定してなかったんだから、何時来ても俺の勝手だろう、なぁ茶々丸ちゃん？」

「はい、マスターは終わったら来い、としか言われませんでしたので、問題はないと思います」

俺の問いかけに、茶々丸ちゃんも肯定する。

「茶々丸っ！　お前はどちらの味方だ！　それと頼むからキティと呼ぶなっ！」

と言って、また茶々丸ちゃんの背中のねじを巻きまくるエヴァンジェリン。

「だってエヴァンジェリンって長いじゃん。キティの方が短いしいいじゃん」

「エヴァと短縮して呼べばいいから、もうその名では呼ぶなっ！」

エヴァは半分涙目で俺にそうくいかかってくる。

「ああ、わかった。じゃあエヴァ、もういいから呪文試していいか～？」

自分で怒らせたんだが、それより他の呪文の方が気になるので話を進めたい。

「もとはと言えば貴様のせいだろっ！」

「わかったわかった、ごめんなさい。これでいいだろ」

仕方なしにこちらが先に折れる。

「謝る気ゼロだろうがっ！！」

「もう、話が進まないだろ。いいからためし撃ちやるぞ、ちゃんと見てないと後でもう1回見せろって言われてもやらないぞ」

まだ文句を言っているエヴァは無視だ。

俺は魔本を開いて呪文を確認、誰もいないほうに的になるものを置いて、手をむけて呪文を唱える。

「グラビレイ」と唱えると、魔本が光り、目の前の的が何かに押しつぶされるように地面にしずんだ。

おお、これはまさに重力系の呪文だな。的は何か見えないものに押しつぶされているようだしな。

これは敵の動きを封じるにも役立つし、物理的な攻撃も叩き落とせるかもな。

「今のは重力系の魔法か？　なかなか珍しいな」

先ほどまで怒っていたエヴァだが、俺の唱えた魔法を見てそうつぶやいている。

「エヴァ、ちょっと魔法の射手を１矢撃ってくれ」

そうお願いして、グラビレイを唱える準備をして、エヴァは自分の始動キーを唱える。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　来たれ氷精（セプテンデキム・スプリトゥス）　１７柱！！」

っておい！　１矢っていったのに、なんで１７も呼んでるんだよ！

「魔法の射手（サギタ・マギカ）　氷の１７矢（グラキアーリス）！！」

エヴァから放たれた１７本の魔法の射手が一直線に俺に向かってくる。

俺は手を飛んでくる１７本の魔法の射手に向ける。

「グラビレイ」を唱えると、魔本は再び光り、魔法の射手は俺に当たる前に全弾地面に落ちた。

「エヴァ！　１矢でいいって言っただろっ！　何で１７矢も飛んでくるんだ！」

「うるさいっ！　この際はっきりとどちらが上か教えておいてやるっ！」

そう言うと、エヴァがまた魔法を放ってくる。

今度も17本の矢が飛んでくる、俺はまたグラビレイで叩き落として、レイスを唱え反撃を行う。

俺の放ったレイスに対し、エヴァは「氷楯」を使用して俺のレイスを弾き飛ばした。

オイッ！　そんな簡単に弾かれたら、俺の攻撃手段なくなるだろっ！

「ふふん、どうしたこの程度か。あれだけ私をおちょくったんだ！楽に死ねると思うなよっ！」

エヴァはそう言いながらも、呪文を唱え続けていく。

俺はエヴァの死刑宣告を無視して、レイスを何度も放つが、氷楯を破る事ができない。

俺の攻撃はレイスと魔法の射手だけで、レイスの方が攻撃力が高いので、それが効いてない今、俺に打つ手はない。

今はグラビレイで魔法の射手を撃ち落としているので、何とか膠着状態を保っている。

だがエヴァが本気を出して攻撃してくれれば俺はひとたまりもないだろう。

仮にグラビレイをエヴァにかけても、力づくで技を破られるだろう。
仮にも二つ名がつけられる魔法使い、その意味ぐらい俺でもわかっている。
なんとかしたい、あの楯を打ち破れる魔法が欲しい、このまま何も出来ず無様に負けたくない。
俺が心から願うと俺の手にある魔本が突然大きく輝きだした。
突然の事に驚いたが、魔本を開いて確認すると読めるページが増えている。
呪文を確認して情報を理解すると、俺はいったん立ち止まる。
「どうした、もうあきらめるのか？」
エヴァは俺の方を見ながらそう問いかけてくる。
「そんなわけないだろっ！　いくぞ！　第３の術　ギガノ・レイス！！」
魔本は先ほどまでとは比べ物にならないほどの光りを灯しながら、新しい呪文ーギガノ・レイスが発動する。
レイスよりも大きなその魔力弾は、エヴァに向かって飛んでいく。
エヴァは今回も氷楯を作り出して、俺の攻撃を防ごうとする。
俺のギガノ・レイスとエヴァの氷楯が衝突する、しかしレイスのよ

うに弾き返されるわけではなく、氷楯とぶつかり続けている。
そしてエヴァの氷楯を突き破ると、ギガノ・レイスはエヴァに命中する。
エヴァのいたところは俺の魔法の余波で煙が上がっており、良く見えない。
しかしエヴァがこれくらいでやられてくれるわけもないだろう。
煙が晴れると、着ていた服が少し破けているが、ダメージらしいダメージは見受けられないエヴァが立っている。
「あの状況から新たな呪文で状況を打破した事は褒めてやろう、だがこれで私とお前の間にある差はわかっただろう」
エヴァは俺の前に近づいてきながらそう告げてくる。
「ああ、俺はまだまだ弱い。それはこの戦いで十分理解したしさせられた」
悔しいが事実だ、今の俺では万に一つも、いや、絶対にエヴァには勝てない。
「そうだ、お前はまだまだ弱い。お前は自分に才能がないとわかるとそこで訓練を止めていたらしいな。だから新しい力を得た今も、それを上手く扱えておらず今の戦闘だ。今回は状況を打破できる新しい術が出たようだが、そんなものはただ運が良かっただけだ。今のままではお前は弱いままだ、だがその力は珍しく面白い。お前が望むなら私がお前を鍛えてやってもいい、さあどうする」

そう言うとエヴァは俺の前に手を差し出してくる。

俺は確かに才能がない事を理由に訓練を止めた。

あの時あきらめずに訓練を続けていれば、何か変わっていたかもしれない。

実際にあきらめず、自分と戦ってきた男を1人知っている。

今のままじゃこの力を持っていても今まで通りかも知れない。

だが、今この手を取れば何か変わる、変えられるかもしれない。

俺はエヴァの手を取る。

「俺に強くなる方法を教えてください。お願いします!!」

「よかろう、私がお前に戦い方を教えてやろう」

こうして俺はエヴァに強くしてもらう事になった。

「これからは私の事は師匠、もしくはマスターと呼べっ!!」

「だが断るっ!!」

「何っ！！　何故だっ！？」

「俺の中の何かがそれを拒むからだっ！！」

この後口論となり第2ラウンド開始。

2話（後書き）

とりあえず今日はこれで終わり、続きは明日の夜します。

3話

強くなるために、エヴァに鍛えてもらうようになってから1週間、色々な事をさせられた。

まず教えられたのは攻撃を回避する事。

エヴァが放ってくる魔法を一時間回避し続ける事からはじまった.

その際使用していいのは魔法障壁と身体強化の魔法だけで、呪文の使用は禁止された。

エヴァいわく、最初から重力の呪文を使って回避していたら、呪文が使えなくなった時に敵の攻撃を防ぐ事ができないからしい。

その後少し休憩を挟んで、ナイフを持ったチャチャゼロの攻撃から回避し続ける事を一時間。

また休憩を挟んで、最後にエヴァの魔法とチャチャゼロを同時に回避し続けるのを一時間。

この時だけ呪文を使用することが許されるが、その分攻撃してくるエヴァとチャチャゼロは加減を少し緩めてくるので、前の2時間とは比べられないほど攻撃の厚みがましてくる。

最後の方はこれに茶々丸も混ざったので命がけでよけまくったな。

実際3回ぐらい死にかけたし・・・・・

次に魔力の運用法について学んだ。

俺の呪文は無駄に使われている魔力が多いらしく、篭めなくてもいい魔力を篭めているので、魔力が切れるのが早い。

詳しく説明すると、例えばレイス一発放つために必要な魔力が１０だったとする。

しかし俺はレイス一発放つ魔力として、２０～３０ぐらいの魔力を使用しているらしい。

このとき必要な１０の魔力はレイスとして放たれる。

必要外である残りの１０～２０の魔力はどこに行くか？

その答えはレイスに使われているわけでもなく、俺の中に戻るわけでもなく、空気中に霧散している。

一流の魔法使いならば、その魔力を圧縮してレイスに篭めることもできるが、俺にはまだそんな事が出来ないので、それは後回しにして魔力の運用を学ぶ事になった。

俺はエヴァから渡された腕輪をつけて、魔力が切れるまでレイスを放ち続ける。

この腕輪は無駄な魔力を使用すると、その魔力を使用して電撃を使用者に与えると言う矯正魔具の一種らしい。

無駄な魔力を使えば使うほど電撃が強くなるので、手っ取り早く魔力の運用を覚えるためにはちょうどいいようだ。

今では大分ましになったらしい。

そして1日の最後には模擬戦もさせられた。

日によっては茶々丸だけの日もあったし、エヴァと戦う日もあったし、1（俺）対3（エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ）という日もあった。

1対3の日はほぼ回避に専念するしかなく、そのうち誰かの攻撃に当たり気絶させられた。あれははっきり言ってイジメだイ・ジ・メ

この模擬戦の俺の勝利条件は、有効的な攻撃をエヴァが指定した数、対戦相手に当てる。敗北条件は気絶するか戦闘が不可能と判断されるまで。

このどちらかが満たされれば、模擬戦は終わりとなる。

なので基本は茶々丸、もしくはチャチャゼロの攻撃を回避しながら、俺はレイス、もしくはギガノ・レイスを当てにいくという形となる。

グラビレイは攻撃とは認められなかった。

逆にエヴァが相手の場合はほぼ魔法の撃ち合いとなる。

この時は氷楯を使わずに純粋な魔法の撃ち合いだったので、俺にも当てられるかと思ったが、こちらの攻撃は相殺されて、エヴァの魔法はグラビレイで叩き落とすので、エヴァと模擬戦をする時は基本長期戦となった。

結果？　人間が幻想種である吸血鬼の魔力量に敵うと思うか？　こちらが先に魔力切れを起こしてやられるわっ！！

こんな感じで1週間別荘の中で鍛えられた俺は、外の時間が朝の6時になるという事で一時解放された。

それと修行中にいくつか呪紋が読めるようになったが、出たのが最後のほうだったので、あまり模擬戦で使うことが出来なかった。

そしていったん男子寮に戻った俺はシャワーを浴び、朝飯を食べ、再び制服を来て学校へ行く。

寝たのかって？　エヴァの別荘で5時間ほど寝かせてもらってから出たからばっちりだ。

退屈な授業を寝て過ごし、放課後になると学園長に呼び出されていたので、学園長室に向かう。

学園長室に着いて中に入ると、学園長以外にはデスメガネとエヴァがいる。

「おお～、待っておったぞ。それでは早速じゃが、君の魔本の力を見せてもらいたい。良いかのぅ？」

俺がやってきたのを確認すると、学園長が早速本題を切り出してくる。

「はい、でも何処でどうやってやるんですか？」

「うむ、ワシが召喚魔法で何体かの敵を用意するので、それと戦ってもらっても良いかのぅ？」

「おいジジイ、そいつの術は1対多数でも実力を発揮できるからある程度数を揃えて召喚しろ」

エヴァが余計な事を口出ししてくる、そんな事言ったら敵が増えて疲れるじゃないか。

「ほぅ、エヴァがそこまで言うのならそうするとしよう」

エヴァが余計な事を言ったから、学園長も了承して敵が増やすみたいだ。

エヴァめ、本当に余計な事を。

「あの、学園長！　俺にそこまでの実力はないと思うのですが？」

とりあえずあまり多数の敵と戦いたくないので、意見させてもらおう。

「安心しろ一樹！　お前は毎日私たちにぼこぼこにされているから実感がわかないだろうが、お前はこの1週間で並の魔法使いとは比べ物にならないくらいのスピードで強くなっている。私に感謝するがいい！！」

なんかエヴァが俺を褒めながら胸を張っているが、ここでは逆に自重して欲しい。

って言うかその胸を張っても生まれるのは劣等感だけだぞ。

俺がそんな事を考えていると、エヴァはさらに余計なことを口にする。

「そこにいるタカミチも戦い方次第では苦戦するぞっ！」

「え、エヴァ、彼の術ってそんなに厄介なのかい！？」

エヴァの言葉に、さすがのデスメガネこと高畑先生も驚きの声を上げる。

「そうだ！　こいつの力は重力、あのアルビレオ・イマと同じだ。今はまだ強力な呪文を覚えていないが、それでもお前が相手をするとなると厄介に変わりはないだろう」

エヴァの言葉にひやりと汗を流すタカミチ。

「そうだね、僕も目の前で何回もあの人の戦いを見たことがあるからわかるよ、重力を操る魔法使いを相手にするのは相当骨が折れるね」

アルビレオ・イマ？　なんか知らない名前が出たけど誰だろう？

「すいません、そのアルビレオ・イマでしたっけ？　どういう人なんですか？」

置いてけぼりは寂しいので、会話に参加するべくその人物について聞いてみる。

「あ、ああ、君はあまり魔法界の事を知らないんだったね。アルビレオ・イマっていうのは、大戦時の英雄と呼ばれた、赤き翼というパーティーの一員なんだ。彼も君と同じ重力を使う魔法使いでね、ちょっと性格が曲がってるんだけど、とても強かった人なんだ」

「あいつの性格の曲がり具合はちょっとどころではないっ！！　ねじのように捻くれてるぞ！！」

エヴァが性格の事を相当強調している、おそらくだが、からかわれまくったんだろう。

「そうなんですか、出来るならば教えを請いたいですけど、その人は？」

「行方不明なんだ・・・・・・」

そう言う高畑先生の表情は凄い勢いで暗くなっていく。

「・・・そうなんですか、残念です」

「うむ、重力を使う魔法使いは数が少ないが、その中でも奴はワシが知る限りの最高の重力使いじゃったからの。奴がいないのはおしいわい」

そう言う学園長も表情が少し暗くなる。

「ジジイ、今はいないあいつの話をしてもしょうがない。早く試験を始めるぞっ！」

エヴァがそう言うと、学園長や高畑先生も表情を元に戻してこちら

に向き直る。

「そうじゃの。では松井君、我々についてきてくれるかの？」

そう言って学園長は学園長室から出たので、俺も後に続く事にした。

学園長に連れられてやってきたのは、この学園にある1番大きな木、通称世界樹の前の広場にやってきた。

「こんな時間にここで戦うなんて大丈夫ですか？　学校を終えた生徒とか通らないんですか？」

俺は疑問に思ったことを口にする。

「大丈夫じゃ、ここら一帯に人払いの結界を張ってあるし、万一生徒が結界に近づいた時に備えて1魔法先生を配備させてある。君は何の心配もせんと戦いに集中してくれて良いぞ」

俺の質問に簡潔に答えてくれる学園長。

「わかりました、では準備も出来ているので早速お願いします」

俺はそう言うと魔本を手に持ち、準備完了の合図を送る。

「そうかい、じゃあ早速召喚するぞい。危なくなれば手助けするが、基本はないものと考えておくのじゃぞ」

「わかりました」

「では始める」といって学園長は呪文を唱え始め、しばらくすると３０ほどの鬼が現れる。

学園長が鬼たちに俺と戦うように命令すると、後方へと下がっていった。

「兄ちゃん、召喚主の命によりワシらと戦ってもらう」

鬼の中のリーダー格のような奴が俺に話しかけてくる。

「ではいくぞ」と向こうが合図を出したので、あいつらが固まっているうちに数を減らさせてもらおう。

「アイアン・グラビレイ！」

呪文を唱えると、前にいた鬼が１０体重力によってつぶされる。

俺はこの１週間の間で新たに覚えたいくつかの呪文を試させてもらおうと思う。

アイアン・グラビレイ

この呪文はグラビレイが強化された呪文で、グラビレイよりも強力な重力を一定範囲、任意でかける事ができる。

弱い相手ならこの術で押しつぶす事ができるぐらいの重力があるので、雑魚を一掃するのに役に立つ術だ。

「なっ、お前ら固まるなっ！　周りを囲んで攻撃するぞっ！」

いきなり１０もの仲間を消されて驚いたようだが、すぐさま指示を出して、仲間たちを俺の周りに散らばせる。

どうやら伊達にリーダーをやっていないようで、俺の攻撃に対する対策を立ててきた。

動きの鈍そうで弱そうな奴を探して、そいつから順に潰していこう。

「レイス、レイス、レイスッ！！」

動きの鈍そうな奴に立て続けにレイスを3発放ち、2体は直撃を受け、倒したが、1体は何とかかわしている。

残り１８体、俺は慌てることなく周りを確認し、左側から４体の敵が近づいてくるのを確認、手をそちらに向けて呪文を唱える。

「リオル・レイスッ！！」

そう唱えると、俺の手から螺旋状のレイスがあらわれ、俺に向かって接近していた鬼たちはかわす事ができずに直撃を喰らい、４体とも倒れる。

リオル・レイス

この呪文は手から螺旋状のレイスを放つ呪文で、ある程度ムチのように操る事ができるので、中距離で活用できる術だろう。

むやみに接近するのは危険と考えたのか、弓を持つ鬼は俺にむけて矢を放ってくる。

俺はそれをかわす事もなく、グラビレイを唱えて俺に当たる前に叩き落とす。

このまま遠距離戦で迎えうつのもいいが、時間がかかりそうなので接近戦で行こう。

「ディゴウ・グラビルクッ！！」

そう唱えると、俺の体は黒いオーラを纏い力がみなぎる。

ディゴウ・グラビルク

体に重力を纏い肉体を強化する呪文で、身体強化の呪文ってないのかと考えていたら、いつの間にか読めるようになったいた。

魔法で身体強化するよりも効果があるので、最近はもうこちらの術しか使わない。

この術の欠点は一定の時間が経つ（大体１０分前後）と切れるので、かけ直さないといけない。また任意で解くこともできる。

手近にいる敵に接近して鬼の顔に拳を放つ、今の俺の体は重力を纏っているので、その威力は人間はおろか、並の鬼のそれを越えている。

俺に殴られた鬼は一撃で倒され、その近くにいる鬼も同様に殴りつけ倒していく。

地上にいる鬼は殴りつけ、上空にいる鬼はレイスかグラビレイで叩きおとしていくと、気がついたころにはリーダー格の鬼しか残っていなく、いつのまにか１３体を倒していたらしい。

「兄ちゃん、これではどちらが化け物かわからんぞ。だがワシも鬼の一族の頭、仲間の敵討ちやらせてもらうぞっ！！」

そういって俺に接近してくる鬼のリーダー。

手に持った石剣を掲げて切りかかろうとしている。

俺の身体よりも大きそうなその剣を、軽々とこちらに振り下ろす。

俺はそれをかわしていくが、鬼の攻撃もなかなか早い。

すぐさま剣を切り返して、薙ぎ払うように剣を振るう。

それでもチャチャゼロの切りかかりに慣れてしまっている俺には少し遅いぐらいに感じてしまって、難なくかわせてしまう。

俺は大きく距離をとって鬼に話しかける。

「お前の仲間に対する思いはわかった、でも俺もやられるわけにはいかない、これで決めさせてもらう」

そう言うと、俺は自分の手の内の最大の呪文を唱える。

「これで終わりだっ！！　ディオガ・グラビドンッ！！」

鬼の目の前に真空波を纏った巨大な重力球が現れ、鬼を飲み込む。

ディオガ・グラビドン

真空波を纏った、球状の巨大な重力球を放つ

術が消えると、そこにはボロボロの鬼がかろうじて立っている。

「兄ちゃん、ワシの負けや。今度会える時は戦場ではなく、酒の席で会えるといいのぅ」

そういうと鬼は倒れ、元の世界へと帰っていった。

「そこまで、良くやったの松井君」

鬼が全て送還されたのを確認すると、学園長達がこちらに近づいてくる。

「いえ、結構疲れましたよ。実際にあんなに大勢の敵と戦うのは初めてなので」

エヴァと訓練で何回も戦っているが、それは所詮訓練。

今回のように命の奪い合いをするのは初めてなのだ、どちらかと言うと精神的な疲れが大きい。

「うむ、疲れているところ悪いが少し学園長室まで着いてきてくれるかの？　２人で話したい事があるんじゃ」

学園長が申し訳なさそうな態度でそう告げて来る。

「わかりました。エヴァ、学園長と話をしたら別荘にいくから先に帰ってくれ！」

「そうか、だが断るっ！！」

俺がエヴァに断りを入れると、そう返してきた。

「はぁっ？」

「いや、一度言ってみたかったのだ」

「じゃあ帰るのか？」

「私もついていくぞっ！」

「俺がいないと寂しいからかっ！？　寂しいんだなっ！？　そうなんだなっ！？」

「誰が寂しがるかっ！！　もういい、私は先に戻っておく。話が終わればさっさと戻って来るんだぞっ！！」

そういうとエヴァは鼻を「フンッ！」と鳴らして家のほうへと歩いていった。

「悪いのぅ、松井君」

「いえ、２人でという事は、何か大事な話でしょうから」

学園長の謝罪を受けるが、そんなもんはどうでもいい。この後エヴァとの訓練の事を考えると、恐ろしくてそれどころではない。

別荘の外だと俺のほうが強いからおちょくりまくれるが、別荘内ではエヴァの魔力が復活するので、ろくにおちょくれない。

しかも今からまた別荘にこもるので、どんな目にあわされるかと思うと・・・・・・

「タカミチ君、君も今日は帰ってかまわんよ」

「わかりました、では失礼します。学園長、松井君」

「高畑先生さようなら」

俺も挨拶をすると、デスメガネはタバコを1本取り出して火をつけると、それを吸いながら帰っていった。

俺と学園長は学園長室に戻ると早速話を始めた。

「さて松井君、君もこの麻帆良学園の裏の顔は知っておるじゃろ?」

「関東魔法協会ですか?」

「そうじゃ、そして関西呪術協会と現在も仲違いをしているのも?」

「知っています」

「それでその者たちの一部や他の魔法使いが、ここに保管されている貴重な魔道書や関係品を狙ってたびたび襲撃を加えてくるのじゃ。ワシらも魔法先生、魔法生徒を動員して対処してはいるが、人材不足でな、君にも力を貸してもらいたいのじゃ」

「じゃあ今日の戦いも?」

「すまんが君の力を測らせてもらうためのものじゃ、それを見て君の力は魔法先生にも劣らん、むしろこの学園では上位といっても過言ではないわい」

「俺にそこまでの力があるとは思わないのですが・・・」

「今回君に戦ってもらった鬼たちなんじゃが、あれは低級の中でも上の方、一番最後に戦った奴は中級の中でもそれなりの実力を持っていたんじゃ。あれを倒せるのは魔法先生の中でもそう多くはない、ましてや君は最高の技を使ったとはいえ一撃で奴を倒したのだ。エヴァのいう通りタカミチ君相手でも戦い方次第では勝ちを拾えるぞい」

デスメガネって詳しくは知らんけどめちゃくちゃ強いんだろっ!?

俺が勝つとか、あいつを動けなくしたうえで、ディオガ・グラビドンでも喰らわすしか無理だろっ!?

「まあ、その話は今はいいわい。松井君、学園警備の仕事請けてはくれんかのぅ？　もちろん報酬は払うし、負傷した場合はこちらが責任を持って面倒を見させてもらうわい」

う〜ん、どうしようか？　受けてもいいが睡眠時間が削られるかも・・・

「それは毎日やらなければならないのですか？」

「いや、ローテーションでまわすので、君に毎日出てもらう必要はない。せいぜい週に2日か3日というところじゃ」

「ん～、なら細かい条件はまた後で交渉しますが、やりましょう」

「そうか、やってくれるか。ありがとのぅ、松井君」

この後２０分ほど細かい条件について話し合いをして話はまとまった。

「これで話は終わりですか？　それなら戻らせてもらいますが？」

「いや、ちょっと待ってくれるかの」

そういうと学園長は机の中から本を一冊取り出す。

「悪いんじゃがこの本をいつものように地下に戻してきてくれんかのう？」

「わかりました、行きます。エヴァには・・・・・」

「ワシのほうから連絡しておく、ワシが無理に頼んだといっておくから気にせんくて良いぞ」

「はい、では失礼します」

そういって学園長室を後にした俺は本を返すために図書館島に向かう事にした。

3話（後書き）

前との変更点として体の一部にくっつけとけば呪文が仕えると言う設定は削除しました。
理由はオールラウンダーを作るより完全な後衛型の魔法使いにしようと思ったからです。
そして俺は学びました、更新スピードは無駄に上げると後がしんどくなるだけだと。
４話からは以前と話が変わっていくので、そこまで速い更新は期待しないでください。

4話

学園長に頼まれた魔道書を返却するために、図書館島にやってきた。

図書館内を進んでいくが、周りにはまだ人がいるので、彼らの視線が向いてない時に動いて進まないといけない。

万が一俺の姿を見られて後をついてこられたら、厄介な事になるのは想像にたやすい。

現在俺は地下2階にいて、ここまで来れば生徒も減って来ている。

しかし気をつけないとならないのは、時々図書館探検部が探検を行っていることだ。

図書館探検部というのは中・高・大の合同サークルで、その名の通りこの図書館島内を探検するのが目的、という部活だ。

一般の生徒は大抵1階で勉強なり読書なりしているのだが、彼ら図書館探検部は地下にも潜りこんで来る。

そんな彼らに見つかってしまえば、あとをつけられかねない。

しっかり気をつけて進まないとな！

「お兄さ～ん、そんなところで何しとるん？」

そんな決意を固めたとたん見つかってしまった・・・・・・

「どうしたんお兄さん？　本の探し物？　なんならうちが手伝おか～？」

黒髪のかわいい女の子が、俺のほうに近づいてきてしまった。

「いや、大丈夫だよ。ところで君は？」

「うちは近衛　このかっていいます、女子中等部の2年生です。お兄さんの名前はなんていいはるん？」

「俺は松井　一樹です、高等部の1年だよ」

近衛　このか・・か、確か学園長の苗字も近衛だったような？　親戚か？　いや違うな、ぬらりひょんにこんなかわいらしい親戚がいるわけない。

「近衛　このかさんか、違ってたらごめんだけど学園長の親戚？」

「学園長はうちのおじいちゃんやぇ～」

遺伝子の神秘だ～！！　彼女はあれの血を四分の一受け継いでいるのか。そういえば魔力もかなり、というかめちゃくちゃ多くないか、この子！？　俺の3倍はあるぞ！！

「近衛さん、君はこんなところで何してるの？」

「うちのことはこのかでええよ～。うちは図書館探検部の活動で探検している最中です」

しまった～！！　やっぱり図書館探検部の子かっ！！

見つかってはいけない子に早速見つかってしまった。

「そうなんだ、このかちゃんは1人でここまで潜ってきたの？　もし一緒に潜ってきた子がいるなら俺の事は気にせず「このか～！何処～？」」

追い払おうとしたら彼女の仲間らしき子が遠くの方から呼ぶ声が聞こえる、これはチャンスだ。

「君の友達が探しているようだから、俺はこれで失礼させてもらうよ」

そう言って俺は先に進もうとする。

すると突然俺の足に地面を踏む感覚がなくなり、地面を確認すると穴が開いている。

どうやらトラップの落とし穴にかかってしまったらしい。

俺は何とか落下から耐えようとするが、無駄な足掻きでしかない。

何とか落下する寸前に落とし穴の端を掴むが、俺は予想外の状況に追い込まれる。

なんとこのかちゃんが一緒にトラップにかかって、すでに落下し始めているのだ。

俺一人なら落ちても助かるが、このかちゃんまで落ちると命の保障が出来ない。

俺も落とし穴を落下してこのかちゃんを助けなければ。

俺はすぐに手を離してこのかちゃんを抱えると、そのまま落とし穴のつながる場所へと落ちて行った。

「学園長、あなたの指示どおり、落とし穴で私のいる所の近くまで移動させましたが、これでよろしいのですか？」

学園長室の中で、学園長は誰かと話をしている。

しかしこの場に学園長以外は居らず、何らかの形で外部との交信をとっているようである

「うむ、彼の魔法のことを考えたら、お主に会うことは必ずプラスになるはずじゃ」

「私もナギの使っていた魔道書と似たものを持つ彼には興味があります」

「お主の門番が彼を殺してしまわんようにしてくれよ」

「それは大丈夫です、少し彼の力を見せてもらえば止めますよ。・・・・・ん、申し訳ありません学園長、その彼ですが、見たところ誰かを抱えています。どうやら一般人を巻き込んでしまったようで

す」

「なんとっ！！　それはまずい、作戦は中止じゃ！！」

「すでに門番が彼らの前にいます、攻撃を加えているようです」

「大変じゃ、すぐに止めるんじゃ！！」

学園長がそう言うと、通信をとっていた相手は通信を切り、学園長は自分の指示で一般人を巻き込んだことを後悔した。

一方、落とし穴に落ちた一樹とこのか

身体強化をかけて地面に着地したため、一樹とこのかに大きな怪我はなかった。

あるとすれば、一樹の足が衝撃で痺れていることだけである。

「大丈夫？このかちゃん？」

「うちは大丈夫やけど・・・一樹さんは大丈夫なん？」

心配そうに俺の顔を覗きこんでくるこのかちゃん。

「大丈夫、大丈夫」

そう言ってこのかちゃんを下ろすと、その場で身体を動かし身体の健全さをアピールする。

それを見たこのかちゃんもようやく安心した表情になった。

「それにしてもここ何処なんやろ？」

このかちゃんの疑問も最もだと思う。

宙を見上げても落とし穴の形跡は跡形もなく、結構な時間宙に浮かんでいたので、相当な距離を落ちたのだろう。

だが少し考えればおかしいことに気づく。

仮にも学生達が中をうろついているのに、ましてやあそこは地下２階。

あんなトラップがあるなんて聞いた事がない。

思案にふけっていたところに、何か巨大なものが近づいてくる音が聞こえる。

ズン、ズン

一歩一歩こちらに近づいて来ているようで、このかちゃんは俺の背中に隠れて、不安げに俺を見つめている。

そしてその足音の正体が姿を現した時、俺たち二人は絶句するしかなかった。

「グルアアアアアアアッ！！」

目の前にはドラゴン・・・・・・最強の幻想種の一角が俺たちを見下ろしていた。

顔を真っ青にしたこのかちゃんを抱きかかえると、俺は一目散にその場から離脱をはかる。

様子から推察するに、このかちゃんはこちら側を知らない一般人。

目の前で安易に魔法を使ってはいけない。

いや、それ以上に見てはいけないものを見ているんだろうが、そんなことは言ってられない。

まず魔法を自由に使えたとして今の自分ではまだドラゴンに勝てるなんて思わない。

できてせいぜい足止めだけだろう。

今選べる選択肢の中では、この場からの離脱が一番の選択だ。

ところが俺のそんな甘い考えを踏みにじるかのように、ドラゴンはブレスを吐こうとしている。

仮にも最強と呼ばれる種族のブレス、遮蔽物に隠れようとも、こちらが無事ですむ保障など何処にもない。

こんな時に、もう魔法の秘匿なんて言ってられるか！

俺はすばやく魔本を取り出すと、ドラゴンに向けて呪文を唱える。

「アイアン・グラビレイ！」

唱えた呪文はアイアン・グラビレイ、だがこれはドラゴンを押しつぶすためではない。

俺の魔法はちょうどブレスを吐こうとしていた口辺りで発動し、ドラゴンは口を開けることが出来ず、結果としてブレスは不発に終わった。

この隙にとも思ったが、ドラゴンの瞳はこちらをはっきりと捉えており、現状では逃走は不可能そうである。

腕の中のこのかちゃんは気絶することなく、ただ目の前で繰り広げられているファンタジーの世界そのままの光景に言葉を失っている。

暴れないでくれているだけでも万々歳なのだが、気絶していないのは驚いた。

このかちゃんは相当な度胸の持ち主なのだろうか？

そんな考えを今は放棄して、ドラゴンに更なる攻撃を加えていく。

「ディオガ・グラビドン！！」

レイスはおろかギガノ・レイスも効くかどうかわからないので、最初から全力でいく。

ディオガ・グラビドンを喰らったドラゴンは少しひるんだ様子を見

せる。

「グウォオオオ！！」

しかし再び大きな口を開いて、こちらを威嚇してくる。

自分の最強の呪文を使ってほとんどダメージをうけていない。

しかし俺にはショックに打ちひしがれている時間などなかった。

このかちゃんだけでも何とか逃がさないといけない。

「このかちゃん、先に逃げてくれ」

このかちゃんを下ろすと俺はそう告げる。

「そんなっ！　一樹さんだけを置いて逃げるなんてうちできへんっ！」

このかちゃんはそう言って俺の傍を離れようとしない。

「逃げろっ！」

「嫌っ！」

二人で言い合いのような形になってしまう。

そんな状態でドラゴンは俺たちの事を素直に待ってくれるはずもなく、気がつけばドラゴンは俺達の１０ｍ前までせまっていた。

すでに回避できる余地はなく、俺はとっさにこのかちゃんを背で庇った。

ドラゴンが俺たちに飛びかかる寸前、俺は遠くからベルの音が聞こえたような気がした。

４話（後書き）

理想郷の更新はやりました。
以前の４話とは流れを変えて見ました。
出会ったのはこのか一人、さらにこの時点で魔法バレ。
この続きは次回までお楽しみに。

5話（前書き）

あけましておめでとうございます。
大変お待たせしました、年末は忙しくてほとんど書くことが出来ませんでした。

5話

ドラゴンに襲われた衝撃は何時まで経ってもこず、恐る恐る振り返って見ると、先ほどまでいたドラゴンはその場からいなくなっていた。

そしてドラゴンがいた方向から、かすかな光りが零れており、目を凝らして見ると、わずかに開かれた巨大な門が建っている。

「あそこの中に入れってことなのかな？」

明らかに怪しいのだが、この場に残っていたら、ドラゴンが再び戻ってくるかもしれない。

このかちゃんも、目の前にドラゴンがせまってくると言う恐怖には耐えられなかったのか、俺の腕の中で気絶している。

ここは行くしかないか。

俺はこのかちゃんを背負うと、その門に向かって歩き出した。

そして俺が近づいていくと、門はひとりでに開き始める。

やはり門の中に入るという選択肢であっていたらしい。

少しの不安を抱きながらも、俺は足を進めていく。

門の中に入ると、そこは下りの階段となっていた。

このかちゃんをしっかりと背負いなおしてから、俺はそこを降りていく。

ほんの1、2分も歩けば、階段を降り終わり、降り終わった俺の目の前には、想像外の世界が広がっていた。

「なんだここは？」

周りには巨大な木々が生えており、その中心には空中庭園のような建物が存在している。

「わ～、すごいな～」

此処が地下であるということも忘れて、俺が呆気にとられていると、後ろからこのかちゃんの声がきこえる。

「目が覚めたの？このかちゃん」

俺は背中からこのかちゃんを下ろしながら、そう尋ねる。

「うん、さっきと場所が変わってるけど・・・」

俺の背から降りたこのかちゃんは、若干恐怖の表情を浮かべながら、そう尋ねてくる。

やはりこのかちゃんは一般生徒、こちらの存在を知らないらしい。

「ドラゴンは何故かあの場からいなくなったんだ、それでドラゴンの後ろに巨大な門が見えて、入ってみたら、今この空間に出たところなんだ」

俺のドラゴンと言う言葉に、先ほどのことが夢ではないことを理解したのだろう。

このかちゃんは恐怖に身を震わせている。

「あのことは必ず説明するから、まずは地上に戻ろう」

俺のその言葉に、区切りをつけたのだろう。

身体を震わせながらも、一度頷くと、周りに目を向けるこのかちゃん。

その目には、先ほどまでの恐怖の色を覗かせるが、他の色が強くなって来ている。

図書館探検部でもある彼女は、図書館島の地下に、こんな空間がある事に感動しているのだろう。

好奇の色が見え隠れしているのが、傍から見てもはっきりと解る。

そんなこのかちゃんを観察していると、まるで幽霊のように、突然、建物の中から人影が現れる。

その人影はローブを身につけ、フードで顔を隠しているので、性別すら判断できない。

その男はゆっくりと、しかし、確実にこちらに近づいて来ている。

俺はこのかちゃんを後ろに下がらせると、魔本を構えて相手の出方

を伺う。

「その魔本を下ろしてください、私はあなた方と争う気なんてありませんよ」

謎の人影が、俺たちにそう話しかける。

声から判断すると男のようだが、まだ信用できない。

何が狙いかはっきりしていない。

「ならそのフードだけでも外してください、あなたは顔も見せない人を信用できますか？」

俺の言葉に、なるほどと呟くと、目の前の人物は、片手でフードを下ろしていく。

フードの中から現れたのは、声で判断した通り男であった。

「これで問題ありませんね？では聞きたいこともあるでしょうが、とりあえず私についてきてください」

男はそれだけ言うと、先ほど現れた建物の中へと歩いていく。

こちらがついて来ているかはまったく確認せず、男は建物の中へと入って行った。

俺がどうすべきか考えていると、後ろからグイっと俺の服が引っ張られる。

振り返ると、このかちゃんがこちらを見ている。

「一樹さん、うちも色々聞きたい事があるんやけど、それは後で説明してくれるんやろ。ならとりあえずあの人についていこう」

俺の魔本を見ながらそう言うと、このかちゃんは俺を引っ張って歩き出す。

外に出る手がかりは他にないので、それしか手はないか。

特に反対することもせず、このかちゃんに引っ張られて、建物の中へと入る。

建物の中に入ると、そこには男の姿はない。

「こちらです」

しかし、魔法を使っているのだろう。

誰もいない部屋の中から声がして、そちらに進むと、どんどんと建物の奥へと入っていく。

男の声に従って建物の中を進んでいくと、テラスのような場所に出た。

大きめなテーブルと椅子が置いてあり、テーブルの上にはティーセットや様々なデザートが用意されている。

男は俺たちに席につくよう促すと、飲み物の用意を始める。

その手際は慣れたもので、俺たちの前には、すぐに用意されたお茶が並ぶ。

「どうぞ」

そして自らも席につくと、俺たちに用意した紅茶を勧める。

怪しい人物から勧められるものなど、口に入れれるはずもない・・・ないのだが、

「うわー、これおいしい！」

横では用意された紅茶を、何時の間にか飲み始めているこのかちゃん。

素性の知れない人から出されたものなんだから、少しは警戒しようよ。

目の前の男は、ニコニコしながらこちらを眺めている、恐らく早く飲めと言いたいのであろう。

何故かこのかちゃんも、早く飲んで欲しそうな目でこちらを見ている。

きっと美味しさを分かち合いたいのだろう、悪意がないのはわかる。

けれど、このタイミングでそれはちょっと・・・しかし、このかちゃんの純粋なあの目を見て、ここで飲まないと言う選択を取れるはずもない。

俺は覚悟を決めて、紅茶の入ったカップに口をつける。

「どうですかお味は？」

「どう？」

俺がカップを口から放すと、男とこのかちゃんは俺にそう尋ねてくる。

「・・・・・美味しいです」

カップを静かに下ろしたあと、俺は呟くように感想を述べた。

だってあれだけ警戒しておいて、こんなに美味しいお茶だったなんて、認めたくないだろ！

俺の内心を理解しているのか、男はすごくいい笑顔で俺を見てくる。

そして、このかちゃんは俺にお茶の感想を話しかけてくる。

よほど美味しかったのだろう、その感想は5分近く続き、ようやく語り終えると、このかちゃんは満足そうな表情を浮かべた。

「それではお話を始めましょうか、松井　一樹君に近衛　このかさん」

このかちゃんが話し終えたのを見計らって、突然そう話し始める男に、俺は再び警戒心を抱く。

「何故俺たちの名前を、それもフルネームで知っているんですか？」

少なくともこの男の前では名前を名乗っていない。

俺たちのフルネームを知る事はできないはずである。

身構えるこちらを制止しながら、男は話し始める。

「単刀直入に言うと、あなた方を知っている理由は、学園長から聞いているからです」

「おじいちゃんから!?」

このかちゃんが驚いた表情でそう尋ねる。

その理由には俺も驚いた、しかし、ある意味納得のいく理由でもある。

あの学園長は、時々、何を考えているのかわからないような行動を取る。

「ええ、彼とは古くからの知り合いですので。本来この場に招くのは彼だけだったんですが、あなたを巻き込んでしまったのは、私のミスです。申し訳ありません」

そう言うとこのかちゃんに頭を下げる男。

「ちょっと待ってください、俺だけをと言うことと、このかちゃんを巻き込んだ、と言うことは」

そのことが事実なら、学園長が関わっていると言うのは事実である

と確信できる。

少なくとも、自分の孫を危険に巻き込む馬鹿ではないだろう。

「ええ、あの落とし穴を開いたのは私です。いや、それにしても驚きました。目標のあなたを落とそうと思ったら、まさか一般生徒である彼女まで巻き込んでしまうことになるとは。さすがの私も、ここからでは大体のタイミングでしか罠を発動できなかったので」

少しも困った様子をしないでそう言う男。

「このかちゃんを巻き込んだことは置いておいて。いや、良くはないんですが、俺を招くと言うのはどういうことですか？」

睨むように男を見ながらそう尋ねる。

だが男はこちらの視線を物ともせず、飄々としている。

「一言で言えば興味ですかね、あなたの持っているその魔本」

紅茶を一口飲み、カップを下ろしながら、しかし、真剣な目で魔本を見つめて、はっきりとそう言う男。

男のその言葉にさらに警戒心を強める。

しかし、男は魔本から目を放すと、先ほどまでの飄々とした表情に戻る。

「別にその本が欲しいわけではありません、それは私の古い知り合いが持っていたものとそっくりなんです。持ち主以外誰も読むこと

が出来ない、その魔本とその力、それに興味があるんです」

「では俺からこの本を奪うつもりはないと？」

「奪ったところで、私にはそれを読むことはできませんし、それなら使用者の傍で、その力を観察したほうがはるかに効率的、そうでしょう？」

俺の言葉にそう答える男、表情からは読み取れないが、嘘を言っているようには思えない。

「でも、俺がそれに承諾するとは限りません」

この男の考えは、俺の都合を無視した形である。

それに付き合う理由は何処にもない。

だが男はそれすらも読んでいたようだ。

「そう言うと思っていました。ですので私から提案があります。まずあなたにはこれをお渡ししておきましょう」

そう言って、男は懐から一枚のカードを俺の前に差し出す。

「図書館島特別司書（見習い）」

俺がそのカードに目をやると、表にはそう書かれて、何故か俺の顔写真まで張ってある。

このかちゃんはカードを手に取って、興味深そうに眺める。

「ほえ、これほんまに？」

しばらくカードを見ていたこのかちゃんが、カードの裏に書かれた一文を指差しながら、俺たちに確認を求めてくる。

「このカードを持つものは図書館島内のあらゆる施設に入る事を許可する。ええ、これを持っていれば、図書館島内を自由に行き来することが出来ますよ」

このかちゃんの質問に笑顔でそう答える男。

「ええなぁ、うちも欲しい！」

このかちゃんは本当に欲しそうな表情である。

「すいません、本来彼しか呼ぶつもりがなかったので、この１枚しか用意していません」

男がそう告げると、このかちゃんはすごく残念そうな表情になる。

その落胆振りは、見ているこちらまで罪悪感を抱きそうなほどである。

「ですが、彼についてくるならば、この場所にはいつでも来てもらって構いませんよ」

その表情を見て気の毒に思ったのか、男がこのかちゃんにそう告げる。

「ほんまに！」

すると、やったー！と手を上げて喜ぶこのかちゃん、その顔は先ほどとは正反対で、見ているこちらまで嬉しくなる笑顔である。

「で、何故これを俺に？」

男の方を見つめてそう尋ねる。

「これは学園長と相談して決めた事です、ほら、カードにも、しっかり学園長のハンコが押されてあるでしょ」

そう言う男の指差す方を見ると、カードに確かに学園長のハンコが押されてある。

「私はその魔本を調べたい、そのかわり、あなたには私の持つ技術を全て伝授しましょう」

男はそう言うと、手のひらに魔法で作られた球体を出現させる。

その力は重力、俺と同じ力である。

しかし、その重力球から感じられる圧倒的な力は、エヴァの魔法と引けを取らない。

俺はその魔力球を見つめて、思わずつばを飲む。

この力を自分の物に出来るのか、魔法を始めたときに抱いた、あの思いが再び甦る。

魔本を手に入れた時にも、エヴァから手解きされている時でも、抱くことのなかったあの思い。

俺の到達点とも言えるこの力を、俺は手に入れられると言うのだ。

しかしその一方で別の思いもある。

「師匠のエヴァの存在が引っかかりますか？」

目の前の男は、俺の考えていることをまたも当ててくる。

「想像してみてください」

男に言われて思考を切り替える。

「自分の力で弟子を育てていたと思っていた。ところがその弟子にはもう一人、別の師匠がついていた。その事実を知った時のエヴァの表情」

恐らくとてつもなく間抜けな表情を見せてくれるだろう。

それこそ、今まで見た事もないような。

そしてその後百面相を見せてくれるに違いない。

男もその光景を思い浮かべたのか、にこやかだった表情が、さらに増している。

俺と男は何も言わずに手を結び、ここに新たな師弟関係が成立する。

しかし、その理由が、魔本を抜きにすれば、エヴァをからかうためだと言うことは、決してエヴァ本人に知られることはないだろう。

そんな様子を、このかはわけのわからぬ表情で見ているしかないのであった。

おまけ

「くちゅん！」

「マスター、風邪ですか？」

自らの主人の突然のくしゃみに、従者である茶々丸はそう尋ねる。

「いや、別に体調に問題はない。だがなんだろうな、この懐かしいが、腹立たしい感覚は」

エヴァはそこで語るのを止めてしまう。

そんな様子のエヴァに、茶々丸は質問をしようとする。

だが、それを実行することはなかった。

ガイノイドである茶々丸に、空気を読む、ということは出来ない。

なら何故彼女はエヴァに質問をしようとして、実行しなかったのだろうか？

一樹との出会いで、今までにない経験をした。

主人のエヴァをからかう手伝いをしたり、からかう手伝いをしたり、からかう手伝いをしたり、ｅｔｃ・・・

もしかしたら、そんな経験の中で、茶々丸の中に感情と言うものが、芽生えはじめたのかもしれない。

複雑な感覚を抱いたエヴァ、そして芽生え始めたかもしれない茶々丸の感情

それらがはっきりとするのは、まだまだ先のことである。

5話（後書き）

アルと一樹が師弟関係になるところまでで、区切っておきます。
アルが名乗らないのは意図的なものですので、突っ込まないでくださいね。
次回はこのかの魔法ばれですね、お楽しみに。

6話（前書き）

やぁ、お待たせ。
6話がやっと書き終わったよ。
それでは早速読んでくれ、続きはあとがきで話すとするから・・・

6話

「私のことは・・・・・そうですね、クウネル・サンダースとでも呼んでください」

新たに俺の魔法の師匠になった目の前の男、もといクウネルさん。

結局、今の今まで名前を聞いていなかったので、こちらが名前を尋ねると、少し間を置いて答えた名前がそれ。

明らかに偽名である事は確かだが、恐らくいくら問い詰めても、本当の名前を語るつもりはないだろう。

「クウネルさんか～、なんかどっかのお店の前で立ってるおじいさんみたいな名前やな～」

「ええ、そうでしょう。私もこの名は気に入りましたよ」

名前を聞いたこのかちゃんは、そう言ってクウネルさんに話しかける。

クウネルさんもまんざらではないという表情で、このかちゃんに答えた。

っていうか今考えたって認めるような言い方だろ、今の。

その後少し談笑を挟む。

「え～！　クウネルさんってほんまに此処に住んではるん！？」

「ええ、訳あって私はここから出ることが出来ないのです。ですので普段はここで一人で生活しているのです」

このかちゃんはクウネルさんの話を聞いて、酷く驚いている。

クウネルさんがここから出られないと言うことには俺も驚いたが、その理由は聞いたら教えてくれるのだろうか？

いや、きっとはぐらかされて、教えてもらえないだろう。

「でもそれじゃあどうやって生活してるん？　買い物とか不便やろ？」

このかちゃんは当然の疑問をクウネルさんにぶつける。

「必要な物は学園長、このかさんのおじいさんに送ってもらっていますね。必要な時は連絡すれば大抵用意してもらえますし」

紅茶のおかわりを注ぎながら、クウネルさんはこのかちゃんにそう答える。

クウネルさんはその紅茶を口に含むと、満足そうにカップを下ろす。

俺も口をつけると、入れてから少し時間が経っているにもかかわらず、一杯目と変わらぬ温度と旨味が口の中に広がっていく。

何か魔法がかかっているのか？と一瞬考えたが、クウネルさんの表情から見るに、そのようなことは考えられない。

クウネルさんの腕により、この紅茶はその良さを存分に引き出されたのだろう。

「でもそれじゃ不便じゃないん？」

このかちゃんは心配そうな表情でクウネルさんを見つめながら、そう問いかける。

「いえ、私はこの生活に満足していますよ、それにこれからはあなた方も私に会いに来てくれる」

そうでしょう？それだけ言うとクウネルさんは他に何も答えない。

「そうやな！　うちらが会いに来るから楽しみにしとってな！」

「はい、その時はまたこのように色々お話しましょう。お茶とお菓子は用意させていただきますよ」

このかちゃんの言葉に、クウネルさんは笑顔でそう答える。

「クウネルさんはエヴァと知り合いなんですよね？　でも何処で出会ったんですか？」

今度は俺がクウネルさんに質問する。

すると、俺の言葉を聴いた瞬間、クウネルさんの眉がピクリと動く。

「エヴァってうちのクラスのエヴァンジェリンさんのこと？」

「そうだよ、そう言えばこのかちゃんも２－Ａ組だったんだっけ？」

「そうやえ、でも、エヴァンジェリンさんってクラスでもほとんど誰とも話さへんねんけど、一樹さんは知り合いなん？」

そう言うこのかちゃんの表情は疑問の一文字しか浮かんでいない。

「知り合いと言うか・・・・・・うん」

毎日魔法の訓練で殺されかけてると思うと、体が震えてくる。

言葉のつまった俺を心配そうに見つめるこのかちゃん。

「まあ、そのことは後で解ると思うよ」

俺は、ははは、と乾いた笑いで答えるしかなかった。

そう言うと、このかちゃんもとりあえず俺とエヴァの関係について聞くことは諦めたようだ。

「で、クウネルさん。結局のところどうなんですか？」

俺が尋ねると、クウネルさんは目をかっと見開く。

その動きに俺とこのかちゃんは少し驚かされる。

「私とエヴァの出会いですか」

もったいぶるように話しだすクウネルさん。

俺たちもそれに惹かれるように前かがみになりながら話を聞く。

「それはですね・・・・・・秘密です」

「「だぁ～！？」」

クウネルさんのもったいぶった態度とは裏腹に、期待はずれを言葉を聞いた俺とこのかちゃんは、思わず机に倒れこんでしまう。

「なんですか、それは！」

机をバンっと叩きながら、俺はクウネルさんに文句をつける。

「いえいえ、すいません。この話がエヴァに伝わると、私も都合が悪くなるので・・・」

俺の非難に、カップからお茶を一口飲みながら、申し訳なさなど微塵も感じさせず、そう答えるクウネルさん。

俺はカップの中身をグイッと一息で飲み干すことで、落ち着きを取り戻す。

クウネルさんはそんな俺を見ながらポットを持ち上げ、お茶のおかわりを注ごうとする。

が、いくら傾けてもお茶は出てこない。

クウネルさんがポットのふたを開けて、中身を確認する。

そして残念そうな表情で首を横に振る。

いつの間にか、用意された紅茶は全て飲み干してしまったらしい。

「このような時間を過ごせたのはいつ以来でしょう、ですがそろそろお開きのようですね」

空になったポットを持ち上げながら、クウネルさんは少し残念そうにそう言う。

「では地上までの足はこちらで用意しますので、少しお待ちください」

そう言うと、クウネルさんは何処からか取り出したベルを一振り。

チリーンっとどこかで聞き覚えのある音が鳴り響くと、クウネルさんは空を見上げる。

つられて俺たちも上を見上げると、そこには見覚えのある姿が現れる。

バサバサと大きく羽をはばたかせながら、先ほど、門の前で俺たちを襲撃して来たあのドラゴンが舞い降りてくる。

地面に降り立つころには、俺もこのかちゃんも開いた口が塞がらず、あのドラゴンだけを見つめるしかない。

「先ほどはすいませんでした、この子は門番をかねているので、見知らぬあなた方を襲ってしまったんです。許してやってください」

クウネルさんがそう言うと、ドラゴンも頭を下げる。

その姿は何故か非常にコミカルで、先ほどまでのあの威圧感を一切感じさせず、本当にあのドラゴンと同一なものなのか、疑問が尽きない。

俺とこのかちゃんがドラゴンの背に乗ると、ドラゴンは再び羽を大きく広げ、空へと舞い上がる。

「それではまたお越し下さるのをお待ちしています」

クウネルさんはこちらに向けて手を振りながらそう言ってくる。

「また来るから～」

このかちゃんもそう言って笑顔で手を振り返す。

もうどうでもいいけど、俺たちが今いるのは先ほど襲われたドラゴンの上だよ。

このかちゃんって適応力高すぎ・・・

苦笑いしながら、俺も手を振る。

ドラゴンは一気に飛び立つと、俺たちはクウネルさんのいた建物から離れていくのだった。

ドラゴンは俺たちを図書館島地底図書室まで運んでくれると、俺達に一礼して再び飛び去っていった。

このかちゃんはドラゴンに手を振って見送っている。

さてと、隠し通路の扉は何処だったっけ？

さっさと地上に戻るため、俺は隠し通路のあるはずの滝の裏へと足を進める。

滝の裏を確認すると、記憶どおりそこには隠し通路の入り口があった。

「このかちゃん、こっちに来て」

俺が声をかけるとこのかちゃんはこちらに駆けよってくる。

「なあなあ一樹さん、もしかしてここって幻の地底図書室っ！？」

息を荒げながら俺にそう尋ねるこのかちゃん。

「そうだよ、ってああ、このかちゃん図書館探検部だから、ここって最終目的地みたいなところか」

それよりもすごいところに、先ほどまでいたんだけどな。

「ん～！　みんなに自慢したいけど、やっぱ言わんほうがいいやんな？」

身を悶えさせながら、残念そうな表情で俺にそう問いかけるこのかちゃん。

「そうだね、とりあえず話を合わせておこうか」

このかちゃんは突然いなくなったのだから、理由ぐらいはつくっておかないと。

「このかちゃんは運悪くトラップにかかって、そうだな～、地下7階まで落ちた。そこで運よく俺と出会って、戻ってくるまでに今までかかった」

「一樹さんが地下7階に居った理由は？」

「学園長に頼まれた仕事中。都合よくこんなもの貰えたしね」

そう言いながら、手の中でクルクルとカードをまわす。

そのカードとは先ほどクウネルさんから渡された、特別司書の証明書。

このかちゃんは羨ましそうにそのカードを見つめてくる。

俺はそのカードを胸のポケットにしまうと、このかちゃんは残念そうな表情になる。

そんなこのかちゃんを見て、俺はくすりと小さく笑う。

「あー！今うちのこと笑ったやろ！」

プンプンと怒りながら、俺に詰め寄ってくる。

「笑ってないよ、ククッ」

詰め寄ってくるこのかちゃんが面白くて、笑いを堪え切れ無くなってしまう。

「やっぱり笑ったっ！　もう知らんもんっ！」

そう言うと、このかちゃんは扉の中へと一人で入って行ってしまう。

「悪かったってこのかちゃん」

俺は笑いを堪えながらも後を追いかける。

中に入ると、目の前には地上の光りが点にしか見えないほど長く続いている螺旋階段。

「うわ～、こんなん上まで登らなあかんの！？」

このかちゃんも目の前の光景に、そんな感想しか出てこないのだろう。

俺もこんなの生身では登りたくない。

「このかちゃんさっきの約束覚えてる？」

「約束？」

このかちゃんは俺の言葉に首を横に傾ける。

「全部話すって言ったでしょ」

俺は魔本を取り出してあるページを開く。

「ディゴウ・グラビルク」

唱えるのは身体強化の魔法、俺の身体を黒い魔力が覆っていく。

これで俺のことがわかるだろう。

このかちゃんも俺の事を驚いた目で見ている。

「このかちゃん、俺魔法使いなんだ」

6話（後書き）

ということで6話でしたっと。
書くのが遅い理由を話したいと思う。
ぶっちゃけ大学が忙しい、学期末なのでレポートとか、試験の準備とか、バイトとか、やることは山のようにあるんですよ。
正直来週からは本当に暇がない、だから来週更新がなくても気長に待っててね。
2月からは時間が有り余る予定だから・・・

7話（前書き）

やっとテストが終わって、明日から春休みだーっと。
大変お待たせしました、前回は忙しすぎて口調まで変わっていましたが、これで時間に余裕も出来ました。
これからまた頑張って行きますよー

7話

身体強化の術で身体を強化した俺は、このかちゃんを抱えて地上まで登りきった。

今は図書館島の前に立っている。

先ほどの俺の「魔法使い」宣言を聞いて、このかちゃんはぽかんと口を開けて驚く、と言うことはなく「そうなんや～」と言う言葉だけを返してきた。

「自分で言うのもなんだけど、驚かないの？」

「そんなんさっきまでのことを考えたら、もう驚くことなんてないやんか」

何を言っているのと言う顔でそう言ってくるこのかちゃん、まあ確かにそれもそうか。

実際ドラゴン出てきたし、俺も魔法を普通に使っていたし。

そこから勝手に推察したんだろうな。

「詳しいことは学園長に説明してもらう事になるから、とりあえず学園長室に行こうか」

「あっ！　ちょっと待ってな」

そう言うとこのかちゃんはポケットから携帯電話を取り出し、誰か

に電話をかけはじめる。

「もしもし、パル？　うちやけど」

「・・・・・・！？」

このかちゃんが話しはじめると、電話の相手はすごく大きな声で話しているのか、内容までは聞き取れないが、声がこっちにまで漏れている。

「うん、大丈夫。うちは無事やから。今は図書館島の前に居る」

「・・・・・・・！？」

「えっ！　パル？　あー切れてもうた」

このかちゃんはそう言うと、携帯を切ってポケットにしまう。

「一樹さん、うちの友達がこっちに来るっていって「こーのーかー！？」って言うてる間に来たわ」

図書館島の中から、もうスピードでこちらに走ってくる女の子が３人。

それについて来るように図書館島探検部の先輩だろうか？　高等部や大学部の人達もいる。

「このか、あんた本当に大丈夫？　それよりも何処にいたの？　突然いなくなってみんな心配したんだから！？」

このかちゃんに抱きつきながら、心配そうな表情でそう言葉をたたみかける女の子。

眼鏡をかけており、黒髪をきれいに伸ばしているのだが、触覚のように二つに分かれたアホ毛が特徴的だろうか。

後ろにいる二人の女の子も、安心したという表情でその様子を見ている。

片方は小学生ぐらいの身長しかない、独特な髪型をした子。

もう片方は前髪で顔が隠れていて、顔がよく見えない。

二人もこのかちゃんに近寄ると、何事もなかった事をただ喜びあっていた。

そして彼女達の先輩であろう人達も、一人一人このかちゃんに言葉をかけていく。

中にはこのかちゃんに厳しい言葉を投げかける人もいたが、その顔には安堵の表情が浮かんでいたので、本当にこのかちゃんを心配してくれていたんだろう。

やがて皆がこのかちゃんに声をかけ終わると、その場で取り残される形になっていた俺に注目が集まる。

「ところでお兄さんはどちら様ですか？　見覚えがないから探検部の人ではないと思うんですけど？」

触覚のようなアホ毛が特徴的な女の子が俺にそう尋ねてくる。

周りの人々も俺の返答を聞こうとこちらを注視する。

「とりあえず自己紹介から、麻帆良学園男子高等部の1年、松井一樹です」

俺がそう言うとアッという表情をする女の子達。

「私はこのかのクラスメイトで同じ図書館島探検部に所属してます早乙女　ハルナです、それでこっちが綾瀬　夕映」

「どうも」

早乙女さんに紹介された綾瀬さんは軽く頭を下げる。

「で、こっちの子が宮崎　のどか」

「うぅ、はじめまして」

早乙女さんの背中に隠れるようにそう挨拶をする宮崎さん。

「あー、この子引っ込み思案ていうか、ちょっと男性が苦手なんで気を悪くしないでください」

そんな彼女を見かねたのか、早乙女さんは彼女に対するフォローを入れる。

俺も気にすることはなかったので、手で了解という合図を返す。

「で、松井さんはどうしてこちらにいらっしゃる？　うーん、いる

んですか？」

早乙女さんは正しい敬語がわからないのか、難しそうな顔で言葉を選びながら話す。

「普通に喋ってくれていいよ」

俺がそう言うと、「ホントに！」と先ほどの表情が嘘のように笑顔になる。

「じゃあ、松井さんはなんでここにいるの？　さっきも聞いたけど探検部の人じゃないよね？」

「まあこのカードを見てくれれば話は解ると思うんだけど」

そう言って俺は早乙女さんにカードを手渡す。

その瞬間このかちゃんは「あっ」と、しまったと言う顔をしていた。

早乙女さんがそのカードに目をやると、何か恐ろしいモノを見た時のように固まってしまう。

そんな彼女を不審に思ったのか、綾瀬さんと宮崎さん、それに彼女の先輩方もそのカードを覗き込む。

そして全員が早乙女さんと同じように固まってしまう。

「な、なんじゃこりゃー！？」

早乙女さんがそう声を上げると、あるものはこちらとカードを何度

も見返し、あるもの、というか綾瀬さんは凄くこちらに興味深げな視線を送ってくる。

「松井さんこれ本物っ！？　こんなものが存在しているなんて！？」

彼女のその言葉に周りの人々も全員揃って首を振っている。

そんな仲綾瀬さんはカードの裏面を注意深く眺めており、ある一文のところで目を止め、手を震わせながらゆっくりとこちらに近づいてくる。

「松井さんこれは本当ですか？」

彼女が指差すのはカードに書かれた権限の部分。

「このカードを持つものは図書館島内のあらゆる施設に入る事を許可する。確かに俺は図書館島内を自由に行き来しているよ」

俺は気づかなかったが、後からこのかちゃんに話を聞くと、この時綾瀬さんの目は獲物を見つけた肉食獣のように光っていたらしい。

「中で仕事している時に、このかちゃんが危険なトラップにかかってしまってね。地下7階まで降りてきちゃったんだ。それで安全なルートを選びながら地上に戻っていたら、この時間になっちゃったんだ」

だが、俺の言葉に綾瀬さんは不思議そうな表情を浮かべる。

「それだとどうして私達と遭遇しなかったんですか？　私達もこのかが活動できる地下1階から3階を探してましたです」

その言葉に一同は「たしかに」と頷いている。

「言ってしまえば一般には知られていない通路もあると言うことだよ。もちろんこのかちゃんには絶対他言したり、教えないように固く誓ってもらったけど」

俺のその言葉に、何故かフルフルと震えながら、嬉しそうな表情になる探検部一同。

「一樹さんアカンよ、そんな言い方したら「「「よぉーし！」」」・・・やっぱり」

このかちゃんが何かを言おうとしたところで、彼らは雄たけびを上げる。

そしてそれを見て、このかちゃんは予想通りと言う表情になっていた。

「探検部に裏道があるなんて教えたら、みんな喜んでそれを探すに決まってるやん」

このかちゃんのその言葉に、ようやくこの状況を理解する。

たしかに彼らからしたら、存在を知っているものがいると言うだけで探す価値があるのだろう。

彼らのことだ、俺が図書館島にやってくるのを見計らって、後をつけるなどやりかねない。

とりあえず綾瀬さんからカードを返してもらう。

綾瀬さんは渋るようにこちらにカードを渡すが、その光景は苦渋の選択と言っていいだろう。

カードをしまうと、俺はここから離れる算段をたてる。

「それじゃあ俺はこのへんで、学園長のところに行かなくちゃならないので」

俺がそう言うと一同は不満そうにこちらを見つめる。

「えー、私達はもっと色んなお話が聞きたいいんだけど」

ブーブー、と彼女が不満を口にすると、周りもそれに追従する。

「いや、また誰かが今回のこのかちゃんみたいに危険なトラップにかかるかもしれないからね、学園長や司書長と話し合ってトラップを処置しないと」

そう言うと、彼女らも文句を言えなくなる。

実際に危険な目にあった人物がすぐそこにいるのだから。

「やはり司書長も実在するんですね、言い事を聞けました。残念ですが今日はこれくらいでいいでしょう」

図書館島の中には幻の司書長がいると言う話があるらしいが、また口を滑らせてしまった。

「このかちゃんは悪いけどついてきてくれる？　学園長も自分の孫がそれに引っかかったって聞いたら、さすがに対応してくれると思うから」

このかちゃんだけにわかるように目で合図をおくる。

「ええよー、うちからもおじいちゃんに言うたるわ」

まかせてーと胸を張るこのかちゃん。

それじゃあ、と彼女達と別れたのだが、綾瀬さんからは是非またお話をとメールアドレスを渡され、それに便乗するように早乙女さんと宮崎さんも交換させられた。

宮崎さんまでやるとは思いもしなかったが、彼女も探検部の一員と言うことだろう。

はぁ、それにしても学園長になんて言おう。

お孫さんに魔法バラしましたなんて言ったら・・・・・・はぁ。

もう全てなかったことにして、帰って寝たい。

先ほどから俺に向かって送られてくる殺気もあるし。

俺に殺気を送ってくるのは、ここから少し離れたところで、隠れながらこちらの様子を伺っている女の子。

女子中等部の制服からしてこのかちゃんの知り合いだろう。

背中に何か物騒なもの背負っている。

竹刀袋に入っているけど、この殺気からして裏の生徒だから何を入れているか解ったもんじゃない。

本当に帰っていいかな、・・・・・ダメだよね。

重い足取りで、俺はこのかちゃんと学園長の元へ向かうのであった。

7話（後書き）

探検部の3人がやっと出せました。
っていうか話が短い、進むの遅いでダメダメですね。
次は学園長室でのお話になります。
刹那はその後かなー、前とは展開を変えるつもりなのでお楽しみに

8話

俺はこのかちゃんを連れて学園長室の前までやってきた。

学園長はそのほとんどを女子中等部校舎内の学園長室で過ごしているので、ここに訪れるたびに周りの女の子達からの視線が痛い。

こちらも用があって来ているのに、あの視線を受けないと来られないなんて、こちらからしたらちょっと迷惑。

とはいっても呼ばれたら行かなければならないのが生徒の辛いところ。

今日はこのかちゃんもいたので視線もそこまで厳しくなかった、それでよしとしよう。

ドアの前で立ち止まり、一つ息を吐き、ドアをノックした。

すると学園長室の中からすぐに入室を許可する声が聞こえてきた。

「「失礼します」」

二人でそう挨拶をすると、中には学園長専用の机で仕事をしている学園長の姿があった。

「学園長、実は大事な相談ごとがあるのですが」

俺がそう言うと、学園長は俺に少し待つように言って、電話に手を伸ばす。

「あーしずな君かの、ワシなんじゃが、これから少し学園長室に誰も近づかんようにしてくれるかの」

「・・・・・・」

「そうじゃ、誰もじゃ。用が済めばまた連絡を入れるので、それまではよろしく頼むわい」

学園長はそこまで言うと電話を切り、俺たちをソファへと促す。

学園長はお茶を3人分用意すると、俺たちの座る対面のソファに腰を下ろす。

「学園長、すいません。お孫さんの前で魔法を使ってしまいました」

何の前置きもなく、俺は学園長にそう告げ、頭を下げる。

「松井君、頭を上げなさい。とりあえずその時の状況を教えてもらいたい」

学園長は何の感情も浮かべずに、俺に説明を求める。

「はい、図書館島に入った後、お孫さんのこのかさんと遭遇。そこで二人とも落とし穴に落ちました。穴の下でドラゴンに遭遇、そこで一度魔法を使いました。ドラゴンがいなくなった後、クウネルさんに会い、穴を開いたのは自分であると謝罪を受けました。そこでもこのかちゃんの前で魔法関連の話をしています。そして地上へと帰る際、彼女の前で魔法使いである事を告白、その後魔法を使いました」

そこまで言ってもう一度頭を下げる。

「一目見て、彼女がこちら側を知らない一般人である事は気づいていました。それでも彼女の前で魔法を使ったのは事実、処分は受けます」

そう言うとこのかちゃんが口を挟んでくる。

「おじいちゃん、一樹さんはなんも悪くない。うちのこと守るために必死やったし、処分って言うのが何かわからんけど許してあげて、お願いします」

このかちゃんはそう言って俺の横で頭を下げる。

学園長は何も言葉を発さず、長い沈黙が続く。

そして遂に口を開く。

「二人とも、頭を上げるんじゃ」

学園長はソファから立ち上がると、そう言って俺たちの方に近づいてくる。

「松井君、その事はあやつからも報告を受けておる。よく正直に話してくれたの。もしなにか一つでもごまかそうとしたり、黙っていたらワシは処分を下すつもりじゃった」

そう言って学園長は俺の肩を叩く。

俺は顔を上げて学園長の方を見た。

そこにはいつもどおりの学園長が立っており、怒っている様子など欠片もない。

「じゃが君は正直に告白してくれた。それにあれはワシとあやつにも責任がある。今回は処分なしじゃわい」

学園長はそう言うと笑いながらもといたソファへと腰掛ける。

「おじいちゃん！」

このかちゃんは嬉しそうに学園長に飛びついていく。

ありがとうと抱きつくこのかちゃんに見えないように、「こんな役得までであったしの」と口だけ動かし、ニカッと笑う。

「このか、ワシもうれしいんじゃが、話はまだあるので離れてくれるかの」

学園長は本当にもったいなさげにそう言うと、このかちゃんも学園長から離れて俺の横に腰掛ける。

ほんまによかったなと俺の方を見てそう言うこのかちゃん、俺も庇ってくれてありがとうと答える。

「オホン、それで大事なのはこれからの事じゃ。このか、これからワシの言う事をよーく聞いておくんじゃぞ」

学園長はそう言うと、魔法についての話を始める。

「この世界には魔法使いと言うものが実際に居る、ワシもそうじゃし、そこの松井君もそうじゃ。この学園の中にも大勢の魔法使いが一般人に紛れて生活しておるし、世界中にも多くの同胞がおる」

学園長は一枚の紙を机から取ってくると、このかちゃんの前において、何かを書きはじめる。

信じられんかもしれんが、ワシらの居るこの地球以外にもう一つ世界が存在しておる」

そう言いながら、学園長は二つの円を書き、片方に地球、そしてもう片方に魔法世界と書き込む。

「このもう一つの世界が魔法世界、ムンドゥス・マギクス。この世界には人間以外にも、獣人や妖精などが実在しておるし、魔法技術を基盤とした独自の文明も発達しておる」

そう言うとそこまでうまくない絵で、獣人や妖精を描く。

思わず笑ってしまう画力だったが、このかちゃんも同じように笑っていた。

学園長は拗ねたように絵に斜線をいれ、咳払いをする。

「この話はひとまず置いておこう、先ほども言った通りここには魔法使いがおり、その拠点として関東魔法協会と言うものがある。ワシがその長じゃ」

すごいじゃろ、とこのかちゃんに自慢するが、このかちゃんは半信

半疑と言った表情で俺に確認を取ってくる。

俺は残念だけど事実だよ、と答える。

すると学園長は残念とはなんじゃいと声を上げるが、その顔は笑っているので別に怒ってはいないようである。

「魔法使いが居ると言ったが、日本にはそれとは異なる呪術師と言うものがおる。俗に言う陰陽師とかのことじゃの。彼らはワシらとは仲が悪く、西を拠点に関西呪術協会という物をつくっておる」

「何で仲が悪いん？」

このかちゃんがそう学園長に問いかける。

「それに色々事情があるんじゃが、それはまた後で話す。このか、京都の実家は大きいじゃろう？」

学園長はそうこのかちゃんに問いかける。

このかちゃんは首をかしげながらうんと答える。

「このかの父、詠春君じゃな、彼は関西呪術協会の長なんじゃ」

学園長の言葉に俺は驚きの声を上げる。

父が関西呪術協会の長ということは、このかちゃんは関西呪術協会の次の長候補である。

それなのに本人はそのことを一切知らず、あげく敵対する関東魔法

協会の元で暮らしている。

「婿殿はこのか、お主にはこちらの世界のことを知って欲しくない、一般人として生きて欲しいということでワシの元にこのかを送ったのじゃ」

学園長の言葉にお父様と呟くこのかちゃん、その胸中はどのようなものか、俺にはわからない。

「ワシと婿殿の仲は特に悪くない、むしろ良好と言ってもよいじゃろう。だがその下に居るものがそうとは限らん。中にはおぬしを手に入れて関西呪術協会を乗っ取ろうとする者も居る、そして実際こちらに何人もの刺客が送られてきておる」

その言葉にこのかちゃんは不安そうな表情を浮かべる。

「このかが一般人のままならワシらはただお主を危険から遠ざけておけばよかった。じゃがもう知ってしまった。だからこの話をするんじゃ、わかるな？」

このかちゃんは小さく頷く。

「これからこのかには魔法を覚えてもらい、最低限自分の身は自分で守れるぐらいにはなってもらう。いや、なってもらわなければ困る」

「うちも魔法を使えるん？」

このかちゃんは不安半分、期待半分と言った表情で学園長にそう尋ねる。

「すぐには無理じゃろうが、使えるじゃろう」

なんせワシの孫じゃからな、と今までのシリアスな雰囲気を台無しにする。

だが、このかちゃんも学園長のその態度に先ほどまでの不安げな表情は消え去っている。

こういうことができるのが、学園長が人の上に立っている理由の一つなんだろう。

「それで誰が魔法を教えるかと言うことなんじゃが、半端な者は先生としてつけれんし、ワシは忙しいので無理じゃ」

学園長は机を指差すと、そこには大量の書類が積まれている。

この巨大な学園の長でもある学園長のもとには、それだけの書類が回ってくるのだろう。

「一樹さんはどうなん？」

このかちゃんが俺の方を見ながら尋ねる。

「残念じゃが松井君も無理じゃの、理由は彼の特殊性にあるんじゃ」

学園長はそこまで言うと、俺に続きを喋るように促す。

「え～と、俺が使っている魔法は学園長達が使っている一般の魔法使いの魔法とは違うんだ」

そう言って魔本を目の前に取り出す。

突然現れたことにこのかちゃんは驚いているが、少しすると興味深そうに俺の持つ魔本を眺める。

「今のがほんまに魔法やな」

「はは、それでね、この黒い魔本には俺にだけ読める呪文が書いてあって、俺はその魔法を使っているんだ。俺は普通の魔法使いが行う、呪文の詠唱が出来ないからほとんど使えないんだよ」

いくら呪文を唱えても、発動しない魔法のほうが、唱えられる魔法の数よりも圧倒的に多い。

「そうなんや～」

このかちゃんは残念そうにそう言う。

「このかちゃんは俺と違って魔法使いとしての才能もある、だから俺にはこのかちゃんに教えられる事なんてほとんどないんだ」

「そうか、じゃあうちはすごい魔法使いになれるよう頑張る」

そう言ってガッツポーズを作りながら意気込むこのかちゃん。

「でもそれじゃあ誰に頼むんですか？」

俺が学園長にそう尋ねると、学園長はうーんと腕を組んで、考える素振りを見せる。

「このか、お主は出来るなら松井君と一緒にいたいかの？」

突然学園長がこのかちゃんにそう尋ねる。

それと同時に何か嫌な予感が俺の中を駆け巡る。

「できるんやったらうちはその方がいい」

嬉しそうな表情でこちらを見ながら、学園長にそう答えるこのかちゃん。

俺の額に嫌な汗が一筋浮かぶ、この後の学園長のセリフがなんとなく予想できる。

「松井君、おぬしの師匠に頼んでみてはくれんかの？」（俺がエヴァに頼め）

やはり予想通りの言葉だった。

このかちゃんは誰かは知らないので、俺の方を期待をこめた目で見つめている。

そんな目で見つめられたら断りにくい、と言うか断れない。

「・・・・・聞くだけ聞いてみます」

少しの沈黙の後、俺はそう答えるしか出来なかった。

「なんだ、面白そうな話をしているじゃないか」

唐突に扉が開いたと思ったら、話題の人物、俺の師匠、エヴァンジェリンが入ってきた。

このかちゃんは突然のクラスメイトの登場に、首をかしげながらその光景を眺めている。

エヴァは空いているソファにどかっと座りこむと、足を組んで学園長の方を見る。

「エヴァンジェリン、誰も入らんように言ってあったのじゃが」

学園長が呆れた顔でそう尋ねるが、エヴァは知ったことかとだけ答える。

「暇つぶしに訪れて見れば、なにやら面白そうな話じゃないか。その話受けてやってもいい」

ただし条件付きだが・・・、そう言ったエヴァの顔はかなりあくどかった。

「エヴァちゃんって？」

このかちゃんが小声で俺に尋ねてくる。

「・・・・・俺の師匠」

少しの沈黙を置いて俺はそう答える。

「ええー！？」

俺の言葉にこのかちゃんは酷く驚かされていた。

「オホン・・・・・それで条件とは？」

学園長が恐る恐ると言った表情でエヴァに尋ねる。

「封印を解けと言っても不可能だろう、だがジジイの力なら呪いの改変ぐらいはできるだろう？」

呪い、登校地獄のことか。

エヴァの言葉に学園長は渋い表情になる。

「可能か不可能かはワシにも解らん、それほど強力なものじゃ。それはおぬしもわかるじゃろう」

「だがお前と私の知恵を合わせれば可能性はゼロではあるまい」

エヴァの言葉に学園長もうなりながら考えている。

「エヴァちゃん、呪いって何のこと？」

話が掴めないこのかちゃんがエヴァにそう問いかける。

「私はある男に呪いをかけられてこの学園から出ることは出来ないし、力も封じられている。もう１０年以上私はここで学生をやり続けている」

エヴァの言葉にこのかちゃんは衝撃を隠せないようで、学園長に詰

めかける。

「おじいちゃん、うちからもお願い。そんなんエヴァちゃんが可哀相やん。何とかできへんの？」

このかちゃんの言葉に、学園長は更にうなり声を上げて悩んでいる。

「・・・・・やれるだけのことはやってみよう」

学園長がそう言うと、このかちゃんはエヴァの手をとって「よかったな」と言って喜んでいる。

エヴァも言質は取ったと嬉しそうだ。

「それじゃあ今日はこれでしまいじゃ、このかは婿殿にも話をせんといかんので、今日はワシの所に泊まりなさい」

学園長はそう言ってこのかちゃんをこの場に残した。

そして俺はエヴァと共に学園長室を去っていくのだった。

8話（後書き）

改訂前との変更点
・この場に刹那いない
・エヴァが現れる
・エヴァが自分で呪いの改変を望む
一つ目は次に出る予定なので、スルーです。
二つ目はエヴァはよく学園長室に来るみたいなので、三つ目の理由と合わせて、その設定を利用することにしました。
三つ目は前に書いた時は主人公が提案して決まりましたが、なんか不自然かなと自分で思ったので、こちらに書き換えました。
学園の魔法使い達は実力がわかりにくい、これが一番困るんですよね。
そのへんもう少し原作でも描写が欲しいですよね

8．5話（前書き）

感想でポンチョさんから疑問を頂きましたので、この話を書いてみました。

8．5話

ここは学園長が生活を送る屋敷、その一室の中でこのかはルームメイトであるアスナへ電話をかけていた。

「アスナ？　うん、うちやけど。今日はおじいちゃんの所に泊まる事にしてん」

「そうなの？　このか、あんた何かあったの？」

アスナは心配そうな声でこのかにそう尋ねる。

「うん、なんもないよ、それよりアスナの方こそ大丈夫？　ご飯一人で準備できる？」

普段の食事はほとんどこのか一人で用意している。

アスナはほとんど料理をすることはない、それがこのかが心配なことである。

「大丈夫よ、それに最悪誰かに頼んでご馳走してもらうから。このかこそ久しぶりにそっちに泊まるみたいだけど、風邪なんかひかないようにしなさいよ」

冗談交じりの言葉でそう言うアスナに、このかはそれはアスナのことやでと笑いながら返す。

「それじゃあ私も今日は料理を頑張ってみるとしますか！　また明日ね、このか」

「また明日、アスナ」

そう言って電話を切るこのか。

後日、部屋に戻ってキッチンの惨状に度肝を抜かれることになるが、それはまた別のお話である。

このかは電話をしまうと、その部屋から出て廊下を進み、ある一室を目指す。

向かう先は彼女の祖父である近右衛門の部屋。

近右衛門の部屋に辿り着くと、このかはふすまをノックする。

「このかじゃな、入りなさい」

その声に従って、このかはふすまを開き部屋の中へと入る。

部屋の中は近右衛門の趣味なのか、実に日本らしい和室であった。

床には何枚もの畳が敷かれ、床の間には高級そうな掛け軸や色とりどりの花がその存在を主張し過ぎない程度に活けられている。

鼻からは畳のいい香りが入ってきて落ち着いた気持ちになれる。

そんなこの部屋がこのかは大好きであった。

その大好きな部屋の中央に、今日はこの部屋には似つかわしいであろう物が設置されていた。

大きなスクリーンとこちらを撮るためであろうカメラ、それにパソコンが設置されてあり、パソコンの前には一人の男性が座っている。

「おじいちゃん、これ？」

「おぉこれか、ワシが頼んで設置してもらったのじゃ。これから大事な話をするのに、相手の顔を見んと言うのは失礼な話じゃからな」

近右衛門のその言葉に、このかはホッとした表情になる。

この大好きな空間を壊すつもりは祖父にはなかったのだと。

「婿殿の方にも連絡は入れてある、あちらの準備ができるまでもう少しのはずじゃ」

近右衛門がそういった数瞬後、パソコンの方に反応が起こる。

「学園長、あちらから連絡が来ました。そちらのスクリーンに画像を写します」

男性がそう言ってパソコンを少し操作すると、その大きなスクリーンにはこのかの父である近衛　詠春の姿が映し出される。

「お父様」

このかがそう声をかけると、彼はこのかの方へ優しい笑顔を向ける。

「お義父さん、それにこのか、お久しぶりです」

そう言う父の姿に、このかは嬉しさと共にある変化を感じ取る。

お父様なんか少し痩せてる、それに顔色も少し悪いみたい。

「婿殿、久しぶりじゃの。そちらの方は変わりないかの?」

近右衛門の言葉に詠春はこちらは変わりありませんと返す。

そこまで話すと近右衛門はパソコンの前で座っている男性に視線を送る。

「明石教授、忙しいのにこんなことを頼んですまんかったの。これから大事な話をするので少し席を外してもらえるかの?」

その言葉に男性は席を立ち上がる。

「では学園長、私はこれで失礼します。お話が済みましたら、こちらのボタンを押していただければ電話は終了します。後は電源を切っておいていただければ、後で回収させていただきます」

それではと言うと、男性、明石教授は部屋から出ていった。

詠春の方も人払いをさせ、この会話に参加しているのは近右衛門、詠春、このかの3人だけとなった。

「お待たせしました、それでお義父さん、お話とは?」

詠春がそう切り出すと、近右衛門はつばをごくりと飲み、話しはじめる。

「このかが魔法の存在を知ってしまった」

近右衛門のその言葉に、詠春の表情はこのかが今まで見たことのないような、恐ろしいものへと変化する。

「ひぃっ！」

今まで見た事のない父のその顔に恐怖を覚えたこのかは、思わず声を上げてしまう。

それに気づいた詠瞬は慌てて顔を片手で隠す。

「すいません少し時間をください」

詠瞬はそう言うと、せわしなく手で顔を押さえながら自分を落ち着かせる。

誰も喋ることの出来ない、長い沈黙の時が続く。

やがて落ち着いたのか、詠春は話し始めた時と同じ表情に戻る。

「お待たせしました、続きを聞かせてもらえますか？」

「うむ、今日のことじゃ。お主にも黙っておったが、この学園にはアルのやつが隠れて居る」

「アルがっ！？」

近右衛門のその言葉に、詠春は信じられないと言う表情で近右衛門を見つめる。

アルという人物に心当たりはないが、このかにはその人物に心当たりがある。

父がその人物について知っていることについても驚きだが、父のこの驚きようがこのかにとっては最も驚かされたことであった。

「そうじゃ、あやつはこの学園の中におる。いずれあやつの方からお主にもコンタクトを取ってくるじゃろう。とりあえず続きを話そう」

近右衛門がそう言うと、詠春も一息ついて近右衛門の方に耳を傾ける。

「ワシの学園の生徒の中に、ナギの持っていたあの赤い魔本とそっくりなものを持つ生徒が現れたのじゃ。それでワシはアルのやつに頼んで、それについて調べてもらう事にした。アルがその生徒を招き入れる際、運悪くその場にこのかが入っていってしまったのじゃ」

詠春は「ナギの」と呟き、それを振り払うように頭を振ると、このかの方を見つめる。

「そうやで、お父様。その時うちが偶然その人の近くに寄っていってしまって、一緒に落とし穴に落ちてしまったんよ」

落とし穴という部分に眉をぴくっと動かすが、そのまま話を聞き続ける詠春。

「そこでアルの飼っておるドラゴンが二人の前に現れての、その生徒はこのかを守るために仕方なく魔法を使ったんじゃ」

近右衛門の言葉に詠春は下を向いて何かを考えている。

「アルのやつ」

「今度会ったら真剣に、いや、真剣で話し合う必要がありそうだ」

何かを呟いているが、幸い近右衛門とこのかにはそれが聞こえていなかった。

「お話はわかりました。それでこのか、これからどうするつもりですか？」

詠春は真剣な表情で、このかの方を見つめる。

「うちはおじいちゃんから話を聞いて、西と東でいがみ合ってるって言うことも、おじいちゃんが東の長でお父様が西の長やって言うことも聞いた。もちろん片方の話だけしか聞いてないし、お父様にもいいたいことはあるやろうけど、うちはこっちに居りたい。アスナやクラスの皆、この学園の人が居るこっちにいたい。だからうちは魔法を学ぶつもりです」

このかのその言葉に、詠春はじっとこのかの方を見つめ続ける。

そしてこのかの方も、父から目を逸らさずじっと見つめあう。

数秒の間だったか、何分も経っていたのか、わからないほど見つめあった後、詠春は笑顔を浮かべる。

「私はこのかには一般人として普通の幸せを掴んでもらうつもりで

した。ですがこちらのことを知ってしまった。それならば私の元で私の後継者として生きてもらいたいという思いもあります。ですがこのかはもう決めてしまったのですね、その目を見ればわかります」

詠春は眼鏡を外すと手で顔を洗う。

「私が関西の長としてもっとしっかりしていれば、有無を言わさずこのかを連れ戻していたかもしれません。ですが今こちらにこのかを戻すのは、私に従わない者達にすれば、私を引き摺り下ろす良いチャンスと見る者もいるでしょう。それだけは避けなければならない」

そう言う詠瞬の表情は先ほど見せた恐ろしい顔とはまた別の、このかの見たことのない表情であった。

「お義父さん、誰がこのかに魔法を教えるのですか？」

「ワシはエヴァンジェリンにまかせたいと思っている。あやつはこの世界の良い部分、悪い分、それを一番見てきた存在だと思うのでな」

「エヴァンジェリン、確かに彼女ならそれを良く知っていますね。ですが彼女はそれを了承したのですか？」

詠春も少なからずエヴァンジェリンという人物については知っている。

そして彼女が義父に頼まれたからといって、易々とその願いに答えるような人物ではないと言うことも。

「いくつかの条件と交換に、話は受けてくれた。明日からこのかはエヴァンジェリンの元に預けることになっておる」

近右衛門の言葉に、詠春は果たして義父がどのような交換条件をつきつけられたのかと心配になってくる。

「その条件というもので、何か私がお手伝いできるようなものは？」

その言葉に近右衛門は黙って首を横に振る。

「わかりました、それでは私の方からは彼女に何か物を贈らせてもらいます」

「それが良いの、エヴァはこの学園から出られん。何か京都の物を贈ればエヴァも喜ぶじゃろう」

近右衛門の言葉に、詠春は明日早速贈る物を選別させようと決心した。

それと同時に、このかについている護衛について気にかかった。

「刹那君はこの事を知っているのですか？」

詠春のことばに近右衛門はしまったという表情を、そしてこのかは驚きの表情を浮かべた。

「お父様！？　なんでせっちゃんが出てくるん！？」

このかのその言葉を聞いて、詠春も自分が口を滑らせたことに気が

ついた。

刹那君こと桜咲　刹那は普段このかと接触を避け、影ながらに護衛の任についているということを、本人から報告を受けていた。

詠春としてはそんなことをせずに、傍でこのかを守って欲しいという思いもあったが、彼女の気持ちを尊重して、その行動に対しては特に文句をつけていなかった。

そして幼少期から彼女と共に過ごし、現在の関係にこのかがどう考えているかも、少し考えれば詠春にも理解できた。

そしてこのかが魔法について知ってしまったのだ、これがその関係を修復するいい機会なのかもしれない。

そう思い、詠春は全てを話す事にした。

「刹那君、桜咲　刹那は幼少期からこちら側のことを知っていました。彼女はこちらで京都神鳴流という裏の剣術を学んでいます。そして私は彼女にこのかの護衛を命じました。彼女なりに、その任を受けて陰ながらこのかを守るため、このかから遠ざかっていったのでしょう。私は彼女からそう報告を受けています」

「じゃあせっちゃんはうちのことが嫌いになったわけやないん？」

詠春のその言葉に、泣きそうな表情でこのかはそう尋ねる。

「それはないでしょう、彼女はこのかを守る。そう言って辛い剣術の修行に耐えていたのですから」

その言葉を聞いて、このかの瞳からはついに涙の雫が零れ落ちる。

「話し過ぎました、これ以上はこのかと刹那君が話し合うべきことです。このか、しっかり話し合いなさい」

「はいっ！」

詠春のその言葉に、涙をぬぐいながら笑顔で返事をするこのか。

そんなこのかを見て、詠瞬の表情もほころんでいく。

「それではお義父さん、このかのことをよろしくお願いします」

詠春はそう言って頭を下げると、画面の前からいなくなってしまった。

近右衛門は先ほど指示されたボタンを押して回線を閉じる。

そして慣れぬ手つきでパソコンの電源を落とすと、孫であるこのかの方に目を向ける。

そこには泣き疲れたのか、または安心して眠りについたのか

涙のあとを残しながらも、まるで赤ん坊のように穏やかな表情で眠るこのかの姿があった。

近右衛門はこのかをそっと抱きかかえると、彼女が泊まる予定だった部屋へと運んで行き、優しく布団の中へと下ろしてあげる。

「せっちゃん」

夢の中ではすでに仲直りが出来たのだろう。

嬉しそうな顔でそう刹那の名を呟くこのかを見て、学園長も穏やかな表情を浮かべ、自分の部屋へと帰っていくのであった。

翌日関西呪術協会では大きな動きがあった。

長である詠春に集められた者達の前で、詠春が正式にこのかを彼の後継者から外すと言う発表を行ったのだ。

そして今後彼女に接触、または危害を加えようとしたものは、どんな例外もなく厳しく処分、最悪破門を言い渡すと。

これにより過激派の者達は彼女を人質に取ることを牽制され、同時に詠春の後継者は誰が選ばれるかわからなくなり、これにより関西呪術協会内での力は、皮肉にもこのかのおかげで上がっていくのだった。

8．5話（後書き）

理由としては矛盾はないと思います。
関西呪術協会は一枚岩ではないようですし、このかの固い決意もあり、詠春も認めると思います。
刹那の部分は入れるか悩みましたが、次の話を進めやすくするため入れました。

9話（前書き）

よく12時に合わせて更新する人がいますけど、作者は何故か12時になってから執筆を開始しています。
自分って変ですかね？

9話

その日、桜咲　刹那に知らされた話は、彼女にとって信じられない話だった。

それを知らせてくれたのは彼女のクラスメイトである龍宮　真名。

「近衛　このかが図書館島で行方不明になっているらしい」

携帯電話の向こうでそう話す彼女が何を言っているのか、最初は理解することができなかった。

いや、したくなかったと言うほうが正しいだろう。

彼女の役目は近衛　このかの護衛。

しかし、いかに彼女とて、いつ何時（なんどき）でもこのかの傍から離れず護衛を続ける、そんなことは出来るはずもない。

ただ、桜咲　刹那にとって、近衛　このかとは自らの命を投げ捨ててでも必ず守り通す、そう心に誓った相手。

それが何だ、彼女が行方不明になっていると言うのに、自分はそのことを知らず、それをそこまでこのちゃんと親しいわけでもない龍宮　真名から教えられて、初めて知ったなんて・・・

護衛失格

そんな言葉が彼女の頭の中で、止むことなく浮かび続ける。

「おぃ、刹那、聞いているのか!?　刹那!?」

龍宮のその声で正気に戻った刹那は、図書館島に駆けつけるため一目散に走り出す。

彼女を静止する声が聞こえてきたが、そんなこと今は気にしていられない。

彼女に声をかけた人々や、携帯の向こうの相手、そんな人達のことなど頭から忘れ去って、彼女はただ地面を蹴り続けた。

「ちっ、刹那のやつ、話も聞かずに電話を切ったな」

電話の向こうの相手、龍宮　真名は、まだ知らせていない情報があるにもかかわらず、勝手に電話を切った刹那に苛立ちを感じていた。

そもそもこのかが行方不明になったのは、今から数時間前。

彼女がこの情報を手に入れたのも、完全に偶然である。

たまたま図書館島の近くを通りかかった時に、何やら慌ただしい図書館探検部の姿が見えたので、何事かと尋ねたところ、中等部の生徒が一人行方がわからなくなっていて、更に聞き込んだ結果、その人物が近衛　このかであったのだ。

彼女の行方がわからなくなってからすでに2時間近く経っていて、それを聞いた彼女がすぐに刹那に電話をかけた。

この時間、刹那は剣道場で表の人間に混じって剣道の稽古をしてい

るのを彼女は知っていた。

正直携帯に出るかどうかも怪しかったのだが、ちょうど運よく休憩中であったよう。

そして電話をかけたらこの有様。

真名はパニックに陥った刹那が、図書館島を破壊して回らないか、それでだけが心配になるのであった。

一方、図書館島に駆けつけた刹那が見たのは、無事な姿で立っているこのかと、その周りを囲む図書館探検部の人達、そしてその場にいるのは不自然な一人の青年であった。

何故不自然だとわかったかと言うと、刹那はこのちゃんに近づく人物に怪しい者はいないかと、彼女の周りの人物の顔は忘れず覚えるようにしていた。

それだけ聞くと怖い話だが、それもこのかを思う刹那だからこそなせる業であった。

なので彼女の周りにいるのは図書館探検部の人物である事がわかる。

だが、一人だけ探検部には在籍していないのが、その青年である。

正直、刹那はその青年が誰であるか知っていた。

麻帆良学園で生活する、それも裏に関わりのある魔法生徒の中では、ある意味有名な人物であった。

魔法生徒であるにもかかわらず、修行もせず、学園のために仕事をしない人物。

それがあそこにいる松井　一樹。

ここで言われる仕事と言うのは、学園の警備など、いわゆる生徒たちが学園を守るために参加している行為のことで、実際には学園長の頼まれごとを聞いているのだが、そんなことは魔法生徒たちの知ったことではない。

彼らにとっては、魔法を使って学園を守るという点が、仕事をしていると自分を誇れる行いであって、それ以外は正直あまり気にしていないのだ。

刹那としては、戦えないのなら戦場に出てこないのは、何の悪い事とも思っていないので、その点についてはあまり気にもかけていなかった。

だからこそ、この場に彼がいるのは不自然であった。

建物の陰に隠れながら、気で聴力を強化することに集中し、何とか会話を聞き取る。

途切れ途切れながらも、このちゃんを助けたのは彼であるということと、これから学園長室に向かうと言うことは聞き取った。

何故このちゃんを助けるのが自分ではなかった

何故私ではなくあの男がこのちゃんの横に立っているのか

そんな想いばかりが頭のそこから沸いてきて、このかの横に立つ彼を見つめる視線には、隠す事の出来ない想いが殺気のように混じっていた。

その後、彼に連れられ学園長室へと向かうこのかの後を、気づかれない距離から見守った。

そして二人が学園長室に入っていくのを確認すると、刹那はようやくいつもの自分を取り戻すことが出来た。

そして真名にお礼も言わず電話を切ったことや、周りの声も気にせず黙って剣道場から出てきたことを思い出した。

真名には呆れられながらも、甘いものをおごることで解決し、剣道部の皆には黙って出て言った事に怒れれながらも心配されていた事を聞いて、ただただ謝るのであった。

そして学園長室から出て来るこのかを待っていたのだが、その後学園長室から出てきたのは松井　一樹ひとりだけで、彼は一人でその場を去っていった。

彼が何故あの場にいたのかは気になるところだが、今はこのかの護衛につくために、彼に接触することは二の次。

ただひたすらその場でこのかが出てくるのを待っているしかなかった。

そんな彼女の携帯に一本の連絡が入る。

刹那は携帯に表示されたその人物の名前を見て、全身の血が凍りつ

いたような錯覚を覚えた。

携帯に表示された名は学園長、このかの祖父であり、刹那にこのかの護衛を任せている人物のひとりでもある。

その人物からこのタイミングでの連絡

まさか護衛を解任されるのでは・・・

その思いが頭をよぎると、目の前は突然真っ黒になるような錯覚に襲われ、携帯を持つ手が重くなり、指が動かせなくなる。

全身を襲う恐怖により呼吸が乱れ、体中を気持ちの悪い汗が包み込む。

そんな状況の中、やっとの想いで携帯の通話ボタンを押して、携帯の受話口に耳を近づける。

「は、はい・・・桜咲で・・す」

手や声が震えながらも、そう話しはじめる刹那。

「刹那君かの、今何処に居るんじゃ？」

来た、やっぱり護衛失格を言い渡されるのか。

「学園長室の・・・近く・・・です」

不安と絶望に押しつぶされそうになりながら、何とかそう答える。

「やはりそうじゃったか、実はの、このかは今日ワシの家に泊まることになったから、刹那君も今日は護衛の任は気にせず、ゆっくり休んでくれて構わんわい」

今日は・・・か

「学園長、もう私は護衛の任から外すということですね」

もうこの学園にいる意味はない、このまま誰もいないどこか遠くへ・・・

はっ？

「誰がそんなことを言ったんじゃ、今日はと言っておるじゃろ」

「今日は休んでよいと言ったが、刹那君はこの仕事を辞めたいのかの？」

「そんなわけありませんっ！！」

学園長が相手であるにもかかわらず、大声でそう怒鳴りつけてしまう。

「かー、刹那君、声がでかいわ、ワシを気絶させるつもりかの？」

学園長のその言葉に、刹那は罪悪感を沸かせながらも、学園長の言葉を頭の中で何度も繰り返す。

このかは今日ワシの家に泊まることになったから、刹那君も今日は護衛の任は気にせず、ゆっくり休んでくれて構わんわい

刹那君も今日は護衛の任は気にせず、ゆっくり休んでくれて構わんわい

今日は護衛の任は気にせず

今日は

今日だけ・・・つまり！

「私は護衛の任から外されないのですか！？」

「別にワシはそんなこと一言も言っとらんわい」

「ですが今日お嬢様は！？」

「あれは完全な事故じゃ、松井君からもこのかからもそう話を聞いている。じゃから今回刹那君が傍におらんかったからと言って、罰する理由なんぞ何処にもないんじゃ」

学園長のその言葉に、刹那は全ての苦しみから解放させられた。

じぶんはまだこのちゃんの護衛でいられる。

それだけで先ほどまで感じていたあの不安や絶望が一気に霧散していった。

「それでは今日は護衛は構わんから、ゆっくり休むんじゃぞ」

「はい、ありがとうございます！」

そう元気よく挨拶した後、刹那はとても気分がよくなった。

今日は何ていい日なんだ、そうだ、真名にはお礼とは別に何は甘いものを買って帰ろう。

結局近くのケーキ屋でいくつかのケーキを買った刹那は、とても上機嫌な表情で寮へと帰っていくのであった。

翌日、登校して来たこのかに、昨日までとは違う変化があった。

こちらを見つめている

いや、それはいつものことであったが、今日はその視線がいつものものとは違うのだ。

いつもは寂しそうにこちらを見つめていたのだが、今日はそれが感じられない。

そして、これが昨日までと一番の変化なのだが、あのエヴァンジェリンさんの方に喋りかけに行き、驚くことにエヴァンジェリンさんがそれに受け答えしていたのだ。

私もだが、これにはクラス中の人が驚いている。

エヴァンジェリンさんはクラスの誰とも喋らず、そばについている

茶々丸さんと二人で行動している。

裏の世界では相当な有名人だが、このクラスでは誰とも喋りたがらない、浮いた生徒。

その彼女がこのかと会話している。

クラスメイトはこのかが一体どんな魔法を使ったのだと驚いている。

委員長である雪広　あやかは、実際このかにそのことを尋ねにいく。

このかは「特になんもしてないよ～」と答えている。

皆が視線をエヴァンジェリンさんの方に向けると、「フンッ」とそっぽを向いた。

一体私が知らない間に何があったのか、誰か教えてください。

やがてエヴァンジェリンは刹那の視線に気づくと、何かたくらんでいるような笑みを浮かべる。

「おい、近衛　このか、今日は我が家に招待してやろう」

エヴァンジェリンがそう言うと、このかは「行く行く～」とすぐに答える。

一体何の目的でお嬢様を・・・

そして放課後、事態は最悪の方向へ向かう。

このかとエヴァンジェリンは二人揃って下校して行き、刹那もその後を追うべく教室を出ようとする。

そんな刹那の前に一人の人物が立ちはだかる。

「桜咲さん、少しよろしいですか？」

エヴァンジェリンと共に行動する茶々丸である。

「なんですか？　急いでいるので手短にお願いします」

急いでこのちゃんのあとを追いかけないと

焦る刹那を尻目に、茶々丸は急いだ様子もない。

「マスターからの伝言をお伝えします」

エヴァンジェリンさんから？

「近衛　このかは預かった、返して欲しければ我が屋敷まで一人で来い、だそうです」

その言葉に、今度こそ刹那は目の前が真っ黒になった。

9話（後書き）

ということで、このか行方不明時の刹那と、次の話の布石となるお話でした。
学園の魔法生徒はほとんどが主人公によい印象を持っていませんので、大体あのような評価をされています。

１０話（前書き）

お待たせしました、最新話の更新です。

10話

時刻は午後6時を回ったころ、エヴァンジェリンが住むログハウスの前に、一つの人影が現れる。

その人影は扉の方に近づくと、恐る恐るドアを叩く。

それから数秒も経たないうちにドアが開き、中から一人の人物が現れる。

「お待ちしておりました、桜咲さん。マスター達がお待ちです」

ドアの中から現れたのは絡繰　茶々丸

魔法使いエヴァンジェリンの従者であり、その身体は科学と魔法を融合させたガイノイドである。

ドアを叩いた人物は桜咲　刹那

京都神鳴流の剣士であり、近衛　このかを命を懸けても守ると心に誓っている少女である。

そして彼女がこの場に現れた理由、それは茶々丸のマスターであるエヴァンジェリンに近衛　このかが拉致?されているからである。

刹那の目的は一つ、無事にここからこのかを連れだし、安全な場所まで連れて行くことである。

エヴァンジェリンと戦って勝利する

刹那も何度かその考えに辿り着いたが、すぐにその選択は却下される。

仮に自分が挑んだところで、このちゃんを守りながらあのエヴァンジェリンさんから逃げきれるだろうか？

いや、その作戦が成功する確率は万に一つもないのだろう。

たとえ呪いの力でその力が封印されているとしても、エヴァンジェリンにはそのようなハンデを物ともしないのではないか。

その考えが頭に浮かんで、刹那はエヴァンジェリンと戦うと言う選択を取ることは出来なかった。

実際は、満月の夜以外は身体年齢が同程度の人間とほとんど変わらないのだが、６００年生き続け、懸けられていた規格外の懸賞金が、エヴァンジェリンのイメージを過大に膨らませていった。

もちろんエヴァンジェリンもその程度のハンデを物ともしないのだろうが・・・

「それでは着いて来て下さい」

茶々丸はそう言うと、家の奥へと進んで行く。

これから中で何が起こるのか

刹那は不安になりそうな心を、このかへの愛で奮い立たせながら、茶々丸の後をついて行く。

茶々丸は刹那が後ろにいるのを確認すると、地下室へと足を進める。

刹那は地下室？　という疑問を浮かべながらもその後を追った。

地下室へと降りた茶々丸と刹那の前に現れたのは、台座の上に乗せられた一つの玉であった。

その中には塔のような建物のミニチュアがあり、その周りを囲うように砂浜と海のようなものが収まっている。

「この前にお立ちください、中でマスター達がお待ちです」

茶々丸はそう言うと、刹那を玉の前に立つよう促した。

刹那も茶々丸の言葉に疑問を持ちながらも、言われるがままにその言葉に従い、玉の前に近づいた。

その瞬間、刹那の足元に突然魔法陣が現れて、刹那はその場からいなくなる。

そしてそれを追うように、茶々丸も玉の前に近づく。

すると、茶々丸も先ほどの刹那と同様に、足元に魔法陣が現れ、次の瞬間にはその姿を消していた。

エヴァンジェリンの家から姿を消した刹那は、現在混乱していた。

刹那が立っているのは円筒状の場所で、その前には先ほど見た塔のミニチュアそっくりの建物とこちらを繋ぐ通路が伸びている。

先ほどまで地下室にいたはずなのに、ここは一体?

まさか何処か異境に転移させられた!?

先ほど自身の周りに現れた魔法陣が転移の術式であるのは刹那にも想像がついていた。

しかし、わかっていても人は混乱するものである。

刹那は辺りを見回して、現在自分が置かれている状況を把握しようと努める。

そして刹那はある事に気づく。

「ここは先ほどの玉の中・・・なのか?」

ほとんど独り言のように呟いたその言葉に、返事を返すものがいた。

「その通りです」

何時の間に現れたのか、刹那の後ろには茶々丸が立っていた。

「マスター達は下でお待ちです、では行きましょう」

それだけ言うと、茶々丸は刹那を後ろから羽交い絞めにする。

「なっ！？」

突然の事に驚きの声を上げるのだが、本当に驚くのはその後であった。

「失礼します」

その言葉を告げると、茶々丸は刹那を羽交い絞めにしたまま、塔の下へと飛び降りた。

「なぁあああーーーーー！！！？？？」

突然のことに、刹那は叫び声をあげる。

それはそうだろう、今彼女達は海面めがけて真っ逆さまに落ちているのだから・・・

叫び続けている間にも海面は刻一刻と迫ってきており、二人に残された時間はどんどん減って行く。

海面まであと１００ｍ

刹那は迷っていた、自分はこの窮地から逃れるすべがある。

しかしそれは刹那の忌み嫌う力。

更にそれを使うには後ろにいる茶々丸が邪魔なのだ。

だが、そんな事を考えている間に海面まで３０ｍを切った。
もはや一刻の猶予もない、茶々丸を突き飛ばしてでも・・・
そう考えた瞬間、刹那の視界は再び１８０度回転する。
「・・・・・あれ？」
自分はまだ力を使っていない
だが海面は自分の眼下にあり、現在は海面と一定の高さを保って浮いている。
「失礼しました、マスターがやれと言うので」
そう言う茶々丸の背中と足から火が吹き出し、その場でホバリングをしている。
その言葉を聞き、刹那はしばらく固まった。
それもそうだろう、このような恐怖体験をさせられ、それが悪ふざけだと言うのだ。
恐らく今現在もどこかでこの光景を見ている、そして笑っているのだろう。
その光景を想像し、刹那の怒りは爆発的に増していく。
「あの、桜咲さん？」

何の反応もない刹那に、心配そうに声をかける茶々丸。

それが刹那の我慢していた怒りを解き放つきっかけになったのだろう。

「がぁあああああ！！！！！」

吼えた。

それはこの空間全体に広がるような大声で。

だからこの後のことに茶々丸は責任はないだろう。

ドボーーンッ

驚いて刹那を掴んでいた手を離してしまい、刹那が海面に落とされてしまったことに・・・

茶々丸が刹那を拾い上げ、砂浜まで連れて行くとそこには大爆笑しているエヴァンジェリンと、同様に爆笑している松井　一樹の姿があった。

目の前で大爆笑しているエヴァンジェリンと松井　一樹には腹が立

ったが、その怒りは腹の中に押さえ込む。

「お嬢様は何処です！？」

刹那は顔を赤くしながらそう叫ぶ。

それは怒りか羞恥心によるものかは、さて置いておこう。

だがエヴァンジェリンは未だ爆笑しており、横に居る一樹も同じように腹を抱えている。

「お前は本当に私を笑わせてくれる」

ようやく笑う事を止めたエヴァンジェリンは、そう言って刹那の方に顔を向ける。

「うるさいっ！　お嬢様をどうしたんです！？」

刹那は更に顔を赤くしながらそう叫ぶ。

「お前の大事なお嬢様ならこの中で眠っている」

その言葉に刹那は安堵の表情を浮かべる。

「何を安心している、私は眠っていると言っただけだ」

その言葉に刹那ははっとした表情になる。

エヴァンジェリンは眠っていると言っただけ、このかがどのような状態なのかはまだ一言も喋っていない。

「エヴァンジェリンさん、今すぐお嬢様を返してください」

その言葉を聞いたエヴァンジェリンは、刹那に馬鹿にした視線を向ける。

「そう言われて、はいそうですか。何て答えるわけないだろう」

そう言ってやれやれといったしぐさを取るエヴァンジェリン。

「だがお前にもチャンスをやろう、一樹、お前刹那と戦え」

エヴァンジェリンのその言葉に、刹那と一樹が同時に驚きの声を上げる。

「いやいや、突然呼び出して、面白い物を見せてやるっていっといて、何でいきなり戦えと？」

一樹は困惑した表情でエヴァンジェリンに問いかける。

だがエヴァンジェリンはそのことをめんどくさそうに、ただ「やれ」とだけ答える。

結局一樹が先に折れる。

一樹は左手の中指にはめられた指輪に右手を添えると、右手には魔本が現れる。

その指輪はエヴァンジェリンが弟子入りした一樹に渡した魔法具の一種で、その効果は中に物を収納することが出来ると言うものであ

る。

魔本の持ち運びの不便さを考えていた時、それを聞いたエヴァンジェリンが持ってきて渡してくれたのだ。

ちなみに左手の人差し指には、魔法を発動させるための触媒としている指輪がはめられている。

その二つの指輪は、どちらもシンプルだが、意匠のこらしたデザインである。

魔本を取り出すとだるそうな表情でその場に立つ。

「おい」

エヴァンジェリンがそう声をかける。

「手を抜くなよ」

「はいはい」

それだけ言うと、一樹は数歩前に出てきた。

エヴァンジェリンはそれを確認すると、茶々丸をこの場に残して自身は塔の中へと戻って行く。

「気は乗らないけど、相手をしてもらうよ」

一樹はそう言って刹那が準備するのを待つ。

その言葉に刹那も背に背負った竹刀袋から一本の刀を抜く。

野太刀ー夕凪ー

刹那が愛用する刀で、それはかつてこのかの父、詠春が使っていた刀であった。

夕凪を鞘から出し、それを正眼に構える。

そして二人は睨み合い、何の合図もなくその戦いの火蓋は開かれた。

先手を取ったのは刹那

相手は魔法使い、呪文を詠唱される前にと一気に切りかかる。

だがこの時点で刹那には二つの過ちがあった。

一つは相手がエヴァンジェリンではなく、一樹であったと言うこと。

エヴァンジェリンとの戦いは避けたかったが、この男なら・・・

本来実力がわからない未知数の相手、それを相手にする時は決して油断してはならない。

だが、普段一切戦場に出てこない一樹、それが刹那に油断を生ませた。

そしてもう一つ、それは・・・

正面から切りかかった刹那は、一樹に刀を叩きつける前に吹き飛ば

された。

この時刹那は上段から刀を振り下ろそうとしていた。

上段に構えて開いたその腹に、一樹から黒い球体が飛んできて吹き飛ばされたのだ。

飛ばされた刹那は片手を刀から放し、腹を押さえながら咳き込んでいる。

「貴様っ！　先に呪文を詠唱していたなっ！？」

刹那は怒りの表情でそう叫ぶ。

「いいえ、一樹さんはあなたが仕掛けるまで何もしておりません」

しかし、その言葉は茶々丸によって否定される。

「仕切り直しついでに教えてあげるよ、俺は呪文を詠唱していないんじゃない、する必要がないんだ」

もう一つの過ち、それは一樹の魔法の特異性を知らなかったことだ。

本来、魔法使いは魔法を使うためにいくつかの工程を踏まなければならない。

まず、その魔法使い固有の始動キーというパスワードのようなものを唱える。

これは簡単な呪文なら省略もできるのだが、一般的には唱えなけれ

ばならないものである。

そして行使する魔法の呪文。

どのような魔法にも、それを発動させるために必要な呪文が存在し、それを唱えないと魔法は発動しない。

さらに威力が高い、高レベルの呪文になればなるほど、その長さは長くなっていく。

そこまでして自身の魔力を消費し、ようやく呪文が発動する。

その間に一つでも邪魔が入れば、その魔法は発動しない。

そのため本来魔法使いは自身の詠唱中、詠唱の邪魔が入らないようにするため前衛の従者に守ってもらう必要がある。

だが、一樹はその工程のほとんどをすっ飛ばして魔法が使えるのだ。

使う魔法名を唱えれば、その魔法が発動する。

つまり今起こった事を説明すると、自身目掛けて突っ込んできた刹那に向けて、カウンターのようにレイスを唱えただけなのだ。

一樹の言葉に、刹那は驚愕の表情を浮かべる。

それはそうだろう、魔法使いと剣士の戦いにおけるアドバンテージ、それが目の前の一樹には関係ないと言うのだ。

刹那は思った、それなんていうチート？

「だが、そんな事で負けられないんだー！」

そう言って刹那は再び一樹に接近する。

だが、今度は先ほどのように一気に飛びかかるようなことはせず、一樹の手を見て魔法が飛んできそうなら、横に飛んでその動きを牽制する。

その動きに一樹は困惑させられる・・・と言うことはなかった。

下手な鉄砲数撃ちゃ当たる

そう言わんばかりにレイスを連発させる。

何発も飛んでくる魔弾に、刹那は走り回ることでそれを回避するが、足元は砂場、それが刹那のスタミナをどんどん削って行く。

何発かは刹那に直撃し、そのたびに刹那は吹き飛ばされるのこらえながら、次の攻撃を回避していく。

だが刹那も反撃する。

大きく跳ぶことで一樹から距離をとると、刀身に気を篭めて夕凪を振る。

「神鳴流秘剣、斬空閃」

すると、刀身に篭められた気が一樹目掛けて飛んでいく。

一樹は呪文を唱えるのを中断して、その攻撃を回避する。

回避したその斬撃は、そのまま塔にぶつかりその傷跡を残す。

刹那は回避した一樹に再度接近し、今度は横から夕凪を振るう。

こともあろうに、一樹は先ほどの斬撃の傷跡の方に目を向けており、刹那の接近に気づくのがワンテンポ遅れる。

だが刀身は一樹の身体に触れることはなく、空振りに終わる。

「ディゴウ・グラビルク」

身体強化の術を唱え、一樹は後ろに下がることでその刀を紙一重でかわしたのだ。

しかし刹那はこれがチャンスと更に切りかかっていく。

刀を振ってはすぐに切り返して、再び刀を振るう。

しかし、一樹も身体をわずかに動かすことでかわしていく。

一樹は反撃しようと刹那の方に手をむけると、刹那はその手を狙って切りかかる。

そのため反撃が出来なかった。

刹那が下からの切り上げを放つ瞬間を狙って、一樹は夕凪の根元の部分に足の裏をかける。

切り上げと言うのは、振り下ろすよりもはるかにスピードが乗りにくく、振り切る前なので威力を消されてしまう。

ただ、普通にそれをやれば斬られていたであろう一樹の足だが、ディゴウ・グラビルクによる身体強化がその無茶を支えていた。

そのせいで刹那は刀を振り切ることが出来ず、無防備になったところに一樹の回し蹴りが飛んでくる。

かわしきることの出来なかった刹那はそれを喰らうと、波打ち際まで蹴り飛ばされた。

刹那はすぐに立ち上がってその場を逃れると、その場所には黒い魔弾が何発も突き刺さっていく。

刹那は再び接近してくる。

再びディゴウ・グラビルクを唱え、刹那の攻撃を回避する。

しかし今度は刀に触れるのはためらわれた。

「神鳴流奥義　雷鳴剣」

剣先に電気エネルギーを帯電させているその剣は、触れるだけで一樹にダメージが通ってしまう。

そのため先ほどのような手が取れなくなってしまった。

何度も切りかかる刹那。

疲れた様子もなく、何度も刀を振るう。

このままかわし続けるしかない状況では、そのうちどこかに追い詰められる。

「ギガノレイス」

一樹は呪文を放った。

ただし刹那にではなく、地面に向けて。

一樹と刹那の間の地面に放たれたその魔法は、一樹と刹那の両方を吹き飛ばす。

刹那は地面に膝をつきながら着地した。

その身体に大きな傷はないが、先ほど吹き飛ばされた時に一緒に飛ばされた砂が、刹那の身体に多数付着している。

口の中にも砂が入ったのか、刹那は砂を吐き出している。

それをすぐに終えると、刹那は一樹の姿を探す。

刹那の目に映ったのはすでに立ち上がり、手に持つ魔本は大きく光りを上げており、こちらに向けて魔法を放つ寸前の一樹の姿だった。

「ディオガ・グラビドン」

無情にも唱えられたその呪文は、刹那の身の何倍もの巨大な魔弾となって刹那に迫る。

もはや交わすことは不可能、刹那は最後の力を振り絞って夕凪の柄を握る。

「百烈桜華斬（ひゃくれつおうかざん）！」

夕凪を円のように何度も振って、ディオガ・グラビドンに切りかかる。

その剣はディオガ・グラビドンの威力を幾らか落とすが、全てをそぎ落とすことは出来ず、爆風とともに刹那を飲み込んだ。

爆風が止み、刹那の姿が浮かび上がってくる。

来ていた服はところどころ破れ、サイドテールにしていた髪はゴムが吹き飛びボサボサになっている。

だが夕凪を杖にしながらも、刹那はまだ立ち上がろうとしている。

「まだやるつもり？、これ以上やったら君は無事じゃすまないよ？」

一樹はそう言って刹那に諦めるよう求める。

何とか立ち上がった刹那は、刀身を震わせながらも一樹に刀を向ける。

「お嬢様は、このちゃんはうちの大事な友達やっ！　絶対にうちが助けるんやー！」

刹那は大きくそう叫ぶ。

そんな刹那の元に、何処かから現れ、走り寄る一人の人物。

「せっちゃんっ！！」

刹那の死角からこのかが刹那に飛びついた。

「グフッ」

悲しいかな、ボロボロの刹那はそれに気づく事ができず、思いっきり走ってきたこのかを受け止めることも出来なかった。

二人して地面に倒れると、刹那はそのまま気を失うのだった。

１０話（後書き）

とりあえず、この話で重要視したのはグラビレイを使わないこと。
すぐ終わっちゃいますしね。
その中で考えた戦闘ですので、まぁこんなものになると思います。
勝敗：刹那のＫＯ負け
決まり手：このかによる体当たり
次回はこの話の裏側、１０．５話を公開する予定です
２月８日加筆

１０．５話（前書き）

１０話を少し書き加えました。
具体的には戦闘シーンをちょっとだけ書き足しました。
本当にちょっとですよ・・・

１０．５話

エヴァに連れられて、このかはエヴァの自宅へとやってきていた。

「ここがエヴァちゃんのお家か～」

目の前のログハウスを眺めながら、このかはそう言ってエヴァの自宅の感想を述べている。

「そんなところで止まってないで、さっさと中に入れ」

エヴァはそう言うと、自分はさっさと家の中へ入っていってしまう。

このかも急いでその後を追って家の中に入る。

するとこのかの目に入ったのは、彼女の心をくすぐる可愛らしい人形の数々であった。

「いや～ん、かわいい」

言うが速いか、このかは人形達の元へ駆け寄っていく。

並んでいる人形を手に取っては、それぞれの感想を話しながら、次々と新しい人形へと手を伸ばして行く。

そしてその光景を見ているエヴァも、褒められる自身の人形達にまんざらでもない表情を浮かべていた。

やがてこのかが一通り人形を見終わると、エヴァも待ち構えていた

ようにこのかに話しかける。

「ひとまずそれぐらいにしておけ、これから大事な用があるんだからな」

意味ありげな表情を浮かべるエヴァだが、その意味がわからないこのかは頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

「種は蒔いてやった、後はあいつがどうするかだな」

それから一時間もしないうちに茶々丸が帰宅する。

「ただいま戻りました、マスター」

そう言って家の中に入ってくる茶々丸に、エヴァは「あぁ」と一言返す。

客人であるこのかは「お邪魔してます」と挨拶をすると、茶々丸もそれに礼を返す。

「一樹を呼び出せ、今すぐだ」

エヴァがそう言うと、茶々丸は「かしこまりました」と答えて、一樹の携帯に電話をかける。

「もしもし、一樹さんですか？　マスターがお呼びです。今すぐ来てください」

「え？　ちょ」

ブチッ！　プー　プー　プー

茶々丸は一樹が何かを話そうとしているにもかかわらず、通話を終了した。

更にあろうことか電源まで落とした。

その光景を見ていたこのかは、電話の向こうで困惑しているであろう一樹に、気の毒なあまり手を合わせた。

「私はこいつを連れて先に下に行っておく、お前は一樹が来たらすぐ下に来るように伝えろ。あれなら１５分もしないうちにやってくるだろう」

一樹が何処にいるかはわからないが、まだ男子高等部にいるとすれば、１５分でここに辿り着くのは至難の技である。

「そしてもう一人のお客人が来たら、指示どおり丁重にお迎えしてやれ」

わかったなと確認すると、茶々丸は了解しましたと答える。

エヴァが何を伝えてあるのかはおいおいわかるであろう。

「近衛　このか、お前は私について来い」

エヴァは茶々丸にいくつかの指示を伝えると、そう言って家の奥へと歩き出す。

このかは茶々丸に視線を送るが、茶々丸は私に気にせずマスターに

ついていってくださいというポーズをとる。

それを見てこのかもエヴァの後へとついていった。

エヴァの後を追って地下室に降りると、そこには台座の上に乗せられた一つの玉があった。

中には塔のような建物のミニチュアが入っていて、その周りを砂浜と海が囲い込むように玉の中に収まっている。

それを見たこのかはその不思議な玉をもっと近くで見ようとそれに駆け寄っていく。

その玉まで後数歩、その瞬間このかの視界はフッと入れ替わった。

目の前に先ほどの玉はなく、目の前に広がるのは先ほどまで玉の中にあった塔の建物。

「あれ？」

このかが不思議そうに周りを見渡すと、先ほどまでその場にいなかったエヴァが、突然このかの横に現れる。

あまりに突然のことに、このかは思わずその場で尻餅をついた。

「きゃっ」

「何をしている、そんなところで座ってないで早く行くぞ」

尻餅をついているこのかを放置して、エヴァはさっさと塔へとつな

がる通路へと歩いて行く。

「待ってよ、エヴァちゃん」

このかも急いで立ち上がると、すぐにエヴァの後を追いかけて行く。

塔の方に辿り着くと、エヴァはこのかを無造作に掴む。

「近衛　このか、しっかり掴まれ」

このかが返事をする前に、エヴァは塔の中の一室に転移した。

このかは再び目の前の景色が変わった事に驚きの声を上げる。

そしてエヴァは掴んでいた手を離すと、部屋の中を物色し始める。

「あった、これをお前にやろう」

そう言って、エヴァが手に持っているのは、上に星型のデザインがついた木の棒である。

「昔適当に集めていた物の中にあったとは思ったが、本当に出てくるとはな」

そう言いながら頷いているエヴァに、このかはまたしてもクエスチョンマークを浮かべる。

「いいか、これは初心者用の魔法の杖だ。とりあえずしばらくはそれを使ってもらう」

エヴァからそれを受け取ったが、その言葉にこのかは不信感を隠せない。

それもそうだろう。

このかの中の魔法使いのイメージは、ローブを身に纏って大きな杖を持っているおじいさんみたいな人物なのである。

それがこのおもちゃっぽい杖が本当に魔法の杖であるなんてすぐには信用できない。

「エヴァちゃん、ほんまにこれで魔法使えるん？」

エヴァの方を疑いの目で見つめるこのかに、むっと来たエヴァは強引にそれを奪いとる。

「よく見ていろ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　火よ灯れ（アールデスカット）」

その直後、杖の先端から火が出てくる。

「おぉー！」

その光景にこのかは心の底から感心していた。

エヴァは杖をこのかに投げ返す。

「エヴァちゃん、さっきのどうやるんっ！？」

興奮気味に尋ねて来るこのかに、エヴァは得意顔でこのかの前に立つ。

「慌てるな、まずは魔法について詳しく説明してやる。それを聞いてからにしろ」

このかはその場に体育座りし、エヴァは何処から持ってきたのか、ホワイトボードを用意していた。

「これからお前に教えるのはいわゆる西洋魔法、ジジイからその話ぐらいは聞いているだろう？」

エヴァのその問いかけにこのかは「うん」と答える。

「西洋魔法を使う上で必要になる物は2つ、魔法発動体と始動キー、始動キーと言うのは呪文を詠唱する前に唱えるパスワードのようなものと思ってくれていい」

ホワイトボードに人の絵を書き込み、その手には杖を持たせる。

「まず、魔法使いが魔法を使うにはこの絵のように杖などの魔法発動体が必要になる。魔法発動体は杖以外にも色々あるが、とにかくその何かを持っていないと、一部の例外を除き、魔法は発動しない」

その一部の例外でもあるエヴァ本人であるが、それはまた後で話せばいいのでそこは置いておく。

「次に魔法を使うためには呪文を唱えなければならないが、ただ呪文を唱えればいいと言うわけでもない。そこで必要になるのが始動キーだ」

そう言いながらホワイトボードに書かれた始動キーと言う言葉の周

りを大きく丸づける。

「この始動キーと言うのは、人それぞれ自分だけの物を持っている。お前もいずれは自分専用の始動キーを考えればいいが、まずは初心者用の物を教えてやる。プラクテ・ビギ・ナル、そのあとに呪文を唱えればいい」

それを聞くとこのかはすぐさま杖を構える。

「プラクテ・ビギ・ナル　火よ灯れ（アールデスカット）」

勢いよくそう唱えるが、杖の先には何も反応は起こらない。

「そんなすぐに魔法が使えるわけあるか、話は最後まで聞け。西洋魔法は自分の魔力を消費して発動する。当然自身の魔力には限界があるから魔力が切れれば魔法は発動しないし、無理に限界を越えれば術者は気絶する」

「魔力切れを起こさんように注意せなあかんてこと？」

「まあそういうことだ、訓練中は切らしてもかまわんが実戦になれば致命的だと思え」

エヴァはこのかにそう注意した。

「まずはおまえ自身が魔力を感じ取るところからだ」

とりあえずそこで瞑想でもしてろ、そう言ってエヴァは近くの椅子に腰掛けた。

それから数時間、このかは言われたとおり瞑想を続けたが、そもそも魔力を感じろといわれても魔力がどのようなものかわからない。

とりあえずそのことをエヴァに聞こうと思って立ち上がると、エヴァから先に声がかかる。

「お前が何時になれば聞いてくるかと待っていたが、お前は少し素直すぎる、いや、馬鹿正直だな」

呆れ顔でそう言うエヴァに、このかはむっとした表情になる。

「とりあえず一時的にお前との間にパスをつなぐ、動くなよ」

そう言ってエヴァはこのかの背に手をつける。

すると、今まで感じられなかった何かが体の中にあるのがわかる。

「感じているか、それが魔力だ。杖を構えて呪文を唱えてみろ」

言われるがままに杖を手に取って呪文を唱える。

すると、体の法から杖の方に何かが流れて行くのが感じ取れ、それが杖の先に火となって現れる。

「うわぁー！」

初めての魔法の成功にこのかは言いようのない喜びが沸いてくる。

だがそれもエヴァが背から手を離すと、火が消え、感じられた何かも感じ取れなくなった。

「まずは今の感覚を自分で感じ取れるようになることだ、感じとしてはそうだな「自分の中に深く入って行くのをイメージすればいい」・・・私のセリフをとるな！」

エヴァの言葉を遮ったのは、部屋の中に入ってきた一樹であった。

「いきなりあんな呼び出し方をしたんだから、これぐらいで気にするなよ。こっちは急いできたんだぞ」

エヴァは一樹の言葉に不満そうな表情を浮かべる。

「急いだと言ってもこちらはもう何時間も待たされているんだ。外での時間などしらん」

エヴァの言葉に理不尽を感じながらも、一樹は諦める。

この恨みはからかって晴らせばいい、あとでチャチャゼロと作戦会議だ。

そう考えて、一樹はこの場ではエヴァに逆らわない事にした。

「俺も魔法を習いはじめた時は全然わからなかったよ。その時は、自分の奥深くに入って行くイメージで魔力を感じ取ったね。一応経験者の体験談として聞いてくれればいいよ」

それを聞くと、このかは早速そのイメージで瞑想を始める。

「うわぁー、これ懐かしいな。最初見た時はぜったい偽物だと思ったんだよな」

このかの傍らに置いてある魔法の杖を見て、笑いながらそう話す一樹。

瞑想中の自分の横で集中力を乱すようなことを言う一樹に、一瞬イラッとしたのはこのかだけの秘密である。

「この空間ではこちらの一日が外の世界の一時間だ。今は時間に気にせず瞑想しておけ」

エヴァがそう言うと、一樹と共に部屋から出ていった。

部屋の外から防音結界を張って・・・・・・

これで外で何をしようとも、中には聞こえない。

一樹の修行も同時並行で行われるのであった。

それから二日ほど経った。

しかしこのかはまだ自力で魔力を感じることが出来なかった。

あの時の感覚をイメージしながら瞑想するが、未だそれは感じられない。

一樹のアドバイスも実践してるが、そちらも上手くいっていない。

このかの頭の中には焦りと不安が渦巻いていた。

何故自分は魔力が感じられない

自分には才能がないのではないか？

そんなことが頭の中によぎって、彼女の集中力を奪っているのだ。

このかのその状態に、エヴァはもちろん気づいていたが、あえて放置していた。

これぐらい自分で克服できないようでは、このかがその程度の人間でしかない。

それぐらいの人間に教えてやる事など何もない、そう言って学園長に押し返しつけるつもりだった。

一方の一樹だが、現在は砂浜でくつろいでいた。

エヴァからしばらくしたら面白い物を見せてやると言われて、この場でくつろいでいるのだった。

その傍らにはチャチャゼロが座っており、ふたりはエヴァには聞かせられない内容の話をしているところだ。

「ダカラヨ、次ハ御主人ノ寝起キノワルイトコロデカラカッテヤレバイーンジャネーノカ」

「確かにエヴァは寝起きが悪いからな、しかしそれだと機嫌も悪いから難しくないか？」

「ケケケ、ソコハ目覚メノ一杯ニ適当ナ物ヲ用意シテ、カメラダケ設置シテ逃ゲレバイイ」

「なるほど、そのときの光景さえ抑えていれば、俺たちがいる必要もないのか」

チャチャゼロの言葉にそれは名案だと言う一樹。

お互い見つめあってその光景を想像すると笑いがこみ上げてくる。

「ケケケ」

「ははは」

「あはは」

「「・・・・・・」」

聞こえるはずのない第三者の笑い声に、一樹とチャチャゼロはその場で凍りつく。

「どうした、さぁ、もっと笑え」

後ろから聞こえるその言葉に、二人は身動きを取ることが出来ない。

これは先に喋ったほうが殺される。

そう思って二人とも言葉を発する事をためらいあう。

「もういい、お前達は何も言うな」

そう言って後ろから威圧感が増す。

二人は同時に駆けだした、後ろからは呪文を唱える声が聞こえている。

それもシャレにならないレベルの呪文が・・・

「オレノタメニ死ンデクレ」

チャチャゼロのまさかの足払いに、一樹はその場に転げ回る。

「チャチャゼロォーー!?」

「死ねーー!!」

一樹の叫び声とエヴァの叫び声はまったく同時で、裏切られた一樹は闇の吹雪に飲み込まれるのであった。

後日、一樹とチャチャゼロは割と本気の殺し合いを演じたと言う。

それから数時間後、彼らの前に刹那と茶々丸が現れる。

エヴァはその場を茶々丸に任せると、このかのいる部屋に転移する。

「外では今面白い物が見られる、お前にも見せてやろう」

そう言って、このかの前に一つの球体を浮かべる。
その球体には一樹と戦う刹那の姿が映っている。
「せっちゃん、なんで!?」
映像の中の刹那は、本物であろう刀を振るって一樹に切りかかっている。
「あれはな、お前が私にさらわれたと思ってお前を助けに来たんだ」
その言葉にこのかは驚きのあまり見開かれる。
目の前で行われているのは間違いなく本気の戦い、殺し合いといってもいい。
せっちゃんがそれを行うのがうちのため?
そう思うと、このかは嬉しさのあまり泣き出しそうになる。
「悪いが今のあいつでは間違いなく一樹に負けるぞ」
しかしエヴァの言葉に現実に戻される。
その言葉を証明するように最初に一樹に吹き飛ばされて以降、刹那は攻撃できていない。
逆に一樹の攻撃を何発かもらっている。

「せっちゃん！」

このかのその言葉が聞こえたのか、刹那は大きく跳ぶと反撃に出る。

斬撃を飛ばすと、一樹の方に肉迫して行く。

「あの場所にいきたいか？」

エヴァがそう尋ねる。

「いきたいのならこの部屋を出て下まで降りていけばあいつらのところに出る」

エヴァがそう言うと、このかはこの部屋からすぐに抜け出していった。

「ふん、世話がやけるやつだ」

実はこの部屋には一般人には破ることの出来ない結界が張ってあった。

そう、このかは今無意識のうちに己の魔力でそれを打ち破ったのである。

「まぁ、おまけで第一段階はクリアということにしてやろう」

このかは走る。

せっちゃんがうちのために・・・

そう思うと、止まりそうになる足を無理矢理動かして階段を駆け下りて行く。

そしてついに出口にさしかかる。

「お嬢様は、このちゃんはうちの大事な友達やっ！　絶対にうちが助けるんやー！」

フラフラになりながらも、刹那は大きくそう叫んでいた。

このかはもう堪える出来なかった。

「せっちゃんっ！！」

刹那に飛びついて、その想いに答える。

悲しいかな、気絶している刹那に気づくのは、それからもうしばらく後のことであった。

おまけ

「グハッ、なんだこれは！？」

寝起きのエヴァ、その手には眠気覚ましがわりの飲み物が。

そして部屋の中の人形、その一つの目玉がカメラにすりかえられていた

１０．５話（後書き）

エヴァが途中で転移したのは歩くのが面倒になったからです。
決して辻褄あわせではありませんよ。
嘘です、屋上で魔法の授業やったら刹那がきた時見えちゃうじゃんということで、塔の中にいってもらいました。
このかは正確には魔力を感じれていないですが、結界を打ち破れたのでおまけで合格ということにします。
エヴァは色々悪ぶるけど、結局はいい人

11話

気絶していた刹那が目を覚ましたのは、あの戦闘から2時間が経ったころだった。

目を開けると見覚えのない景色、寝起きの刹那でもその違和感は感じ取っていた。

「ここは、痛っ」

とりあえず身体を起こそうとしたところで、身体を走る痛みに顔をゆがめる。

辛うじて動く左手を動かし、顔の前に持ってくる。

するとその手には巻いた覚えのない包帯が巻かれていた。

それを見て、刹那は先ほどまでの出来事を思い出す。

そうだ、お嬢様は!?

そう思って激痛の走る身体を無理に身体を動かそうとする。

すると刹那の右手が何かに握られているのに気づく。

刹那は頭を右側に傾ける、するとそこには驚きの人物が。

「お嬢様!?」

刹那の右手を掴みながら、刹那の眠るベッドにもたれかかるようにして眠っている、このかの姿があった。

刹那のその大声に目が覚めたのか、このかは目をこすりながら身体を起こす。

「ん～、あ！　せっちゃん、目覚ましたん！？」

そう言ってこのかは刹那に抱きつく。

「うち、せっちゃんのことなんも知らんかってんな、せっちゃんはうちのことずっと守ってくれとったんやろ？」

このかのその言葉に刹那は言葉がつまる。

「せっちゃん、もう隠さんでいいで。うち、お父様とおじいちゃんから魔法の事はもう聞いてるんや」

その言葉にまさかとは思っていたが、刹那は驚愕の表情を浮かべる。

「お嬢様、それでは・・・」

「もう話は聞いてる、せっちゃん、うちのために神鳴流って言うところで辛い修行に耐えとったんやろ？」

確かに辛い思い出ではある、周りからはその出自ゆえに白い目で見られ、幼い刹那が受けるにはあまりに辛く厳しい修行の日々。

だがそれもこのちゃんを守るため、その一念の元に日々を過ごしてきた。

「なぁせっちゃん、うちはせっちゃんのこと好きやで。せっちゃんはうちのこと嫌いになったん？」

「そんなことない！　うちだってこのちゃんのこと！」

悲しそうな顔でそう聞くこのか、それを見た刹那は反射的にそう答える。

言って刹那は後悔する、自分はこのちゃんを陰から守ると決めたはず。

そのためにこのちゃんとの接触も可能な限り避けてきたのに・・・

「それじゃあ」

このかの顔には希望の色が見える。

「ですが私はお嬢様の護衛、それに今回もお嬢様のことを助け出すことが出来なかった」

そう言う刹那の表情はとても暗い。

このかはそんな刹那の様子に、そして今の言葉に違和感を覚える。

「せっちゃん、”今回も”って、もしかしてうちが川でおぼれかけた時のことまだ気にしてるん？」

その言葉に刹那は更に顔を俯ける。

「私はお嬢様の護衛失格です。あの時も、そして今回もお嬢様を助けることが出来なかった」

目に涙を浮かべ、悔しそうな表情の刹那。

「そんな私がお嬢様の傍にいる資格など・・・」

そこまで言おうとして、刹那の頬が叩かれる。

刹那が驚いた表情で前を見ると、そこには刹那と同じように目に涙を浮かべるこのか。

「せっちゃんのバカ、アホ、バカホワイト！！」

刹那の胸を叩きながら、泣きつづけるこのか。

最後の言葉は刹那にとって聞き捨てならない言葉だが、この場ではスルーする。

「そんなん資格なんて誰が認めるんや！　うちはせっちゃんに隣にいて欲しいんや！」

その言葉に刹那の心は大きく揺さぶられる。

「せっちゃん！！」

大きな声で名前を呼ばれ、刹那は思わず身を正す。

「せっちゃんが許可がいるっていうんやったら、うちが許可を出す。せっちゃんはこれからはうちの傍におること、ええな！？」

「は、はい！」

このかのあまりの迫力に刹那は思わずそう返事をしてしまう。

「せっちゃん、もうこれからはうちの傍を離れたあかんで、そんで今度こそうちの事ちゃんと守ってな」

その言葉に刹那は抑えていた感情が爆発する。

目からは止まることなく涙が溢れ、嗚咽が漏れる。

「このちゃん、うち・・・」

「せっちゃん、絶対やで」

そう言ってこのかと刹那は泣きながら抱擁する。

ここに、長らく続いていた二人の仲違いは解消されるのであった。

ここで終われば美談として・・・

「あれ、茶々丸ちゃん何してるの？」

そんな声が聞こえて、このかと刹那はドアの方に目を向ける。

そこには少し開いたドアと、その向こうに一樹と茶々丸の姿があった。

「いえ、一樹さん。刹那さんの容態を確認しに来たのですが、ドア

を開けようとしたら二人が抱き合っていたもので。これが俗に言う「家政婦は見た」と言う状況なんでしょうか？」

それを聞いて刹那とこのかは赤面する。

どこから見られていたのかは知らないが、今のはあまり人に見られたくない光景だ。

さらに外では予想外の方向に話が進む。

「・・・あぁ、茶々丸ちゃん、そう言う時は何事もなかったかのようにその場を離れて、二人をそっとして置いてあげるんだ。いずれ二人がその関係を俺達に話してくれる時がきっと来るはずだから」

「なるほど、勉強になります」

「それじゃあ、俺たちは向こうに行っていよう」

「かしこまりました」

そう言って二人は部屋の前から歩き去って行く。

二人の関係？

このかと刹那は一樹の言葉から想像されるであろうニュアンスを想像する。

そして同時に顔をさらに真っ赤に変化させる。

完全に誤解されている、それもかなり間違った方向に・・・

このかと刹那はその場から立ち上がると、急いで誤解を解くべく、一樹達の後を追うのだった。

あの後一樹達の誤解を解くのに、このかと刹那は苦労した。

なにせこちらがなんと言っても、一樹は達観した目で「わかっているから」としか言わない。

「それは何もわかっていない」と言っても、話はループするだけで、2時間近く話し続けて「じゃあそう言うことにしておこう」と、わかったのかわかっていないのか曖昧なままに話を終了させられた。

現在刹那は茶々丸によって体の包帯を交換してもらっている。

最初はこのかがその役を願い出たが、その手際はあまり褒められたものではなく、結局茶々丸と交代した。

その間このかは別室で待機していた一樹の元にいき、一樹に説教をしていた。

いわく「女のこの身体に傷はつけたらアカン」、「お嫁に行けなく

なったらどうする」など、今回の件について怒られていた。

一樹としては嫌々戦わされたのだが、確かに女の子の身体に傷をつけたことには罪悪感を抱いていたので、黙ってその説教を聴いていた。

やがて刹那の包帯も取り替えられ、４人は塔の屋上へと向かう。

刹那は辛そうにしているが、この塔の主がそこにいるためにそこに向かうしかなかった。

時間をかけながらも屋上へとたどり着くと、そこには塔の主、エヴァンジェリンが寛いでいた。

「ようやくお出ましか、ずいぶん時間がかかったな」

うんざりした表情でそう話すエヴァは、立ち上がると一樹達３人を近くのテーブルに座らせ、茶々丸には人数分のお茶を用意するよう申しつけた。

茶々丸もその言葉に、何の文句も言わず、お茶の準備を開始する。

そして４人の前にお茶が配られると、それを一口飲んだエヴァが口を開く。

「さて、では今回のことで聞きたい事があるなら答えてやる」

そう言うエヴァの態度はかなり横柄である。

刹那がこのかと一樹の顔を見てから、手を上げる。

「それじゃあエヴァンジェリンさん、どうして誘拐などされたのですか？」

刹那のその言葉にこのかは首を横に傾けながら刹那の方を見る。

「せっちゃん、誘拐ってなんなん？」

「私がこいつにそう言ったのだ、そうでも言えばこいつは間違いなくお前のために飛んでくるだろうからな」

エヴァは鼻で笑いながら、面白そうに刹那を眺める。

「そもそもこいつは普通に我が家に招待されたとしか思っていない、あれはただお前を呼びつけるための口実だ」

その言葉に刹那は若干の怒りを覚えるが、深呼吸することで心を落ち着ける。

「そ、それでは、何故お嬢、このちゃんを招待されたのです？　お二人はそれほど仲がよいわけではなかったはずです」

お嬢と言ったところで、このかの視線を感じて、慌てて言いなおした刹那。

「そいつは私が魔法を教える事になった、だから家に連れてきただけだ」

「おじいちゃんがエヴァちゃんにそう頼んだんや、だからうちはここで魔法について話を聞いとっただけやで」

その言葉に理解できないところはこのかがフォローを加える。

「そもそもはそいつがお前と仲直りをしたいと言うから、私が一計案じてやっただけだ。お前はそれに見事に乗っかってくれただけだ」

あそこまで予想通りとは思わなかったがな、そう言うエヴァは刹那を見てニヤッと笑う。

そう言われて、刹那は怒りにプルプルと身体を震わせるが、何とか堪える。

その時、今まで黙っていた一樹が口を開く。

「俺なんで呼ばれたの？」

「暇つぶしだ」

「ひどっ！？」

エヴァがあっさりそう答えたので、一樹もそう叫んだ。

「冗談だ、お前を読んだのはこのかにお前の魔法の特殊性を見せておこうと思ったからだ。こいつを見てどう思った」

このかの方を見ながらエヴァはそう問いかける。

「うーんと、聞いた話とは違うなと思ったわ」

「ほう、例えば？」

続きを話せと促すエヴァ。

「まず発動体はあの魔本なんやろうけど、始動キーみたいなんも、呪文もなんもなくて、すぐに魔法が使えとった」

「その通り、こいつの最大の特徴はそこだ。あれが一般の魔法使いなら3秒かからず真っ二つだぞ」

もしくは首が飛んでる、そう言いながら首の前で手刀を横切らせるエヴァ。

「この話はもう少し経ってから詳しくするが、魔法使いには2つのタイプが存在する。だがこいつはそのうちの一つでありながら、相手の前衛に苦労しない。相手からしたら詐欺同然だろうな」

そう言って刹那を見つめる。

「確かにあれは知らぬものからすれば、絶対の脅威です。私もそれに苦戦しました」

そう言って刹那は悔しそうな表情を浮かべる。

「その言い方ではお前が勝ったみたいだな」

そう言われて、さらに悔しそうな表情を浮かべる。

「それにもう一度戦えば勝てるみたいな言い方だな、刹那?」

「勝てるとはいいませんが、今回よりは善戦するとは思いますが・・

・」

エヴァの小馬鹿にしたような問いかけに、刹那はむっとした表情で答える。

「はっきり言ってやろう、お前は次も一樹に負ける」

その言葉に、「それは聞き捨てなりません」と刹那は机を叩く。

エヴァはカップを持っており、一樹はとっさにカップを持ち上げたが、刹那とこのかのカップからはお茶がこぼれる。

「理由を説明してください」

刹那はそう言ってエヴァを睨む。

「一樹は手加減はしていないが、全力など出していない」

その言葉に刹那は驚愕の表情で一樹を見つめる。

「一樹がその気になれば始まった瞬間に終わっていた、お前は接近する暇さえ与えられずに地面に押しつぶされていただろうな」

エヴァは一樹の方を見て、あれを潰せと指差しながら言う。

その指が向かう先は、視界に広がる一面の海。

めんどくさそうな表情で魔本を取り出すと、呪文を唱える。

「アイアン・グラビレイ」

海に手をむけてそう唱えると、目の前の海の一部が陥没する。
その場所にだけ周りの水面との高さに変化が現れており、その光景は誰が見ても異常であった。

「こいつの力は重力、つまりその気になれば、スタート時点でお前をあのように潰せていたんだ」

その言葉に刹那は唇をかむ。

今見せられた光景を考慮すると、間違いなく刹那は負ける。

「それにこいつはまだまだ呪文を温存している、最後に使ったあの呪文だってこいつの中では真ん中ぐらいの呪文でしかない」

それを聞いて刹那は驚くのを止めた。

なんだ、最初から私が勝てる要素などなかったではないか・・・

「松井さんはどうやってそんな力を手に入れたんですか?」

刹那はそう一樹に問いかける。

「魔本を手に入れたのはは偶然だけど、呪文はエヴァと力比べしていたからだな」

「力比べ?」

一樹の言葉に刹那は意味がわからないと言う表情を見せる。

「そう、俺が放つ呪文より少し大きな力を篭めてエヴァが魔法を放ってくる、それを越えなければ俺の負けだし、乗り越えればエヴァはまた少し力を上げてくる。ただそれの繰り返し、そんなことをもう何日も繰り返してきたんだ」

要は自分の限界を越え続けろって言うスパルタだよ。

何処か諦めた表情でそう話す一樹、だが刹那にはそれが希望のように見えた。

「一樹さん、時間がある時で構いません。私にもその方法で鍛錬してもらえませんか！？」

そう言って一樹の方に詰め寄ってくる。

「は？」

「私にはまだこのちゃんを守る力が足りません、ですので私も強くなりたいのです」

真剣な表情でそう言う刹那。

「いや、そもそもこれは剣士には向かないんじゃないのか？」

「そうでもあるまい、そいつは神鳴流の剣士。剣の腕を磨くことにはならんが、技を磨くと言う点では別に間違ってはいない」

エヴァがそう言って刹那のフォローをする。

「一樹さん、うちからもお願い」

一樹の前に来て、刹那と共に頭を下げるこのか。

ここで断れるわけもない、一樹はしぶしぶ了承するのであった。

11話（後書き）

ということでせつこのの仲直り。
そして主人公のスペックの一部公開と言う話でした。
主人公はどの呪文までつかえるかと言うのは、まだ内緒。
でてきた順に設定にもアップします。
これからの感じとしては、エヴァがこのかに魔法を教えている間、
主人公・刹那・チャチャゼロ・茶々丸の４人で何かしていると言う
風にしようと思ってます。
その描写はいずれ、次は何を書こうかな・・・

１２話（前書き）

今回は日常を描きました、結構短いです。

12話

このかと刹那が仲直りしたあの日から2週間が経った。

あの日以来このかの傍には刹那がついており、二人の間には以前のようなぎすぎすとした空気は微塵も感じられなくなっていた。

周りから見ればその関係の変化に驚きはあったが、仲良く笑う二人の顔を見て、わけを聞くのは無粋とそのまま二人を見守っている。

そしてこの二人以外にも、このクラスでは話題にのぼることがあった。

それは図書館探検部のメンバーが男子と、それも高校生という自分達より年上の人物と関係が噂されているのであった。

ここで言う関係とは男女の交際関係と言う意味ではなく、単純にその人物と会っているのが目撃されていると言うことである。

だが彼女達とて年頃の女の子、それも何でもかんでもお祭り騒ぎに変えてしまえる2－Aの生徒たちにとっては、それは騒ぐには格好の餌であった。

「ねーねー、だからさ、ちょこーっとお話を聞かせてくれるだけでいいんだってば」

笑顔でそう問いかけるのは2－Aの一員である朝倉　和美

彼女は新聞部に所属しており、自称「麻帆良のパパラッチ」

その類まれなる行動力で日夜スクープを追い求める女の子である。
そんな彼女が両手にペンとメモ帳を持って、グイグイと強引に迫ってくる。
そんな和美に、質問をされていた宮崎　のどかは困惑していた。
「あのー、えーっと」
落ち着かない様子で何かを考えている。
そんなのどかの前に一人の少女が立ち塞がる。
「朝倉さん、その辺にしておいてください。のどかも困っているです」
のどかの親友である綾瀬　夕映である。
「あの人はこれからの図書館探検部の活動において、重要な情報を持っている人物、それだけです」
夕映はそう言って話をそこで終わらせようとする。
しかしそこで引き下がらないのが朝倉クオリティ、このぐらいで引き下がっているようではスクープは取れない。
「それだけじゃないでしょ。結構な頻度であってるそうだし、やっぱり何かあるんじゃないの～？」

そう言ってペンをマイクのように二人の方に向ける。

実際彼女達は出会ったあの日以来、何度か連絡を取って件の人物と会っている。

「そんなことはありません。私達は別に何の疚しい事もしていないですし、ねぇのどか？」

「う、うん」

だが二人はそう言って和美の質問を否定する。

ただ、のどかはやや答えにくそうに、そう返事をした。

「うちは一樹さんの事結構好きやで」

それまで話には参加していなかったこのかがその場に爆弾を投入する。

その言葉にその話を聞いていた者は驚きの声を上げる。

そしてのどかも前髪で隠れた目に驚愕の色が伺えた。

水を得た魚のように、和美は生き生きとして目でこのかの方に身体を向ける。

「おーっと、そこんとこもっと詳しくお願いします！」

ペンをこのかの方に向けて、続きを促す。

「一樹さんってなんていうか面倒見がいいし」

「あー、それわかる。私達が急に連絡しても結局は嫌な顔せず来てくれるもんね」

このかの言葉に続くように、早乙女　ハルナもそう言う。

「ほうほう、それで？」

和美は話を聞きながら、真剣な表情でメモを書き取る。

「それに一樹さんって目つきは悪いけど、それを除いたら結構イケメンだしね」

その情報を待っていましたと言う表情で更にメモを取っていく。

「でさ、結局あんた達がその人と知り合ったのはどう言うきっかけなの？」

和美やクラスの誰もが聞きたがっていたそのことを質問する。

「それがさ、これはもう運命としかいいようがないのよ！　ちょっと前にこのかが図書館島で一時行方不明になったって言うのは知ってる人もいるでしょ？」

ハルナのその言葉に初耳と言う人もいれば、そう言えばとその時のことを思い出す人もいる。

「その時よ！　私達がこのかを見つけられずに焦っていた時、彼がこのかを救い出したのよ！」

それを聞いて、周りで話を聞いていた人達も「おぉー」と歓声を上げる。

「その時はこのかをお姫様抱っこ、さながらお姫様のピンチを救った白馬の王子様って感じよ！」

身体を使ってそう説明するハルナに、周りも大いに盛り上がる。

彼女達の中からは「羨ましい」とか「かっこいい」と言う感想が飛び出している。

そう言って余韻に浸っているハルナの頭に、パシコーンっとハリセンが叩きこまれる。

それを行ったのは夕映、何処からハリセンを取り出したのかはわからないが、呆れた顔でハルナを見ている。

「そんなのだれも見てないです。私達がこのかの元に駆けつけたのは、このかたちがすでに地上に戻ってきたところです。勝手に話を作らないでください」

ハルナには話を大きくする悪癖があるので、夕映がそれを正しく説明しなおす。

それを聞いてがっかりした表情になる者もいたが、それでもこのかを救ったと言う点で感心するものが大半である。

「お話ありがとう、これは言い記事が書けそうだ」

そう言うと、和美は一言お礼を述べてから、その場から飛ぶように去って行ったのだった。

「と言うことがあったです」

目の前の夕映にそう言われて、俺は苦笑いを浮かべる。

校内新聞にその話が乗っていたのがそう言う理由だったとは。

さすがに実名は伏せられていたが、それを読んだ俺は開いた口が塞がらなくなるほど呆れたぞ。

「そんなことがあったのに、また俺に会いに来たんだ」

そんなことがあったのなら、俺に会いに来るのを控えればいいのに。

そう思ったが、目の前にいる夕映は首を横に振る。

「それはそれです、これは私達探検部の活動における重要な任務なのです」

そう言って彼女は力強く拳を握る。

「私達が一樹さんから情報を得ることによって、今後の我々の活動には大きな進歩があるでしょう。そのためにはそんなこと些細なものです」

「それに一樹さんも私達みたいなピチピチの女の子達と会えてうれしいんでしょ？」

自分の胸を強調するかのように見せつけながら、ハルナがそう言って俺をからかってくる。

なるほど、中学生の平均をはるかに越えるであろうその巨乳は、たしかに大きな武器だろう。

年頃の男子高校生ならそれを食い入るように見つめてしまうかも知れない。

しかし彼女のその魂胆は俺には見えている、そんな手には引っかからない。

「そうだな、嬉しいよ。どれ、お兄さんといいところに行かないか？」

そう言ってハルナの腰に手をまわして、人影のない方向を指差す。

「なっ！？」

予想外の行動だったのか、ハルナも他の3人も声を上げて驚く。

ハルナの目を見つめて、顔をゆっくりと近づけて行く。

突然の行動にハルナは驚きながらも、何の行動も起こせない。
俺とハルナの顔があと５０ｃｍと近づくと、ハルナは目をつぶる。
３人も顔を手で覆いながらも、隙間からこちらをしっかりと見ている。
俺はハルナの額に向けてゆっくりと・・・・・デコピンをかました。
「痛ー！？」
突然の激痛にハルナはしゃがみこんで額をさする。
「はは、人をからかうのは慣れてそうだけど、自分がからかわれるのは慣れてないみたいだね」
俺はそう言ってハルナを見下ろす。
「確かにいい身体をしているけど、色仕掛けするなら後２年早いね。中学生は対象外なんだ」
そう言うと、ハルナは悔しそうに立ち上がる。
「悔しー！　こうなったら意地でも一樹さんを慌てさせてやるんだから！」
そう言って、ハルナは何事かを呟きながら俺の前から去って行く。
他の３人も今日は解散と言うことか、俺に一礼するとハルナの後を

追っていった。

さて、今日はクウネルさんの所に行く日だったかな。

とりあえず新たにエヴァをからかった話を話して、今後の相談をしにいこうかな。

今度はチャチャゼロもクウネルさんのところに連れていこう。

チャチャゼロも加われば更に面白いアイデアが生まれるかもしれない。

そう考えながら、俺は図書館島の奥へと足を進めて行くのであった。

12話（後書き）

噂好きのこのクラスなら話題にのぼっても可笑しくないですよね？
現時点で、のどかは主人公に恋心までは行かなくとも、他の男の子とは違い話しやすく、怖いと言う気持ちが沸いてこない、という思いを抱いています。

13話（前書き）

今回も日常、何時になれば本編に入れるのやら。
正直書きたい話はいくらでもあるので、ネギが来るのは本当に何時になるのでしょうね。

13話

全ては学園長のこの一言から始まった。

「松井君、寮から引っ越してもらえんかの？」

学園長室に呼ばれ、話を聞きに行くと、突然そう告げられた。

「いや・・・言っている意味がよくわからないのですが？」

目の前の老人が告げてきたのは、この学園で過ごす学生にとっては驚きの話だ。

麻帆良学園で生活を送る学生は基本的に寮の中で生活を送らなければならない。

一部の例外は存在するが、これがこの学園に入学した時に決められている、ルールの一つである。

「本来、学生は寮で生活をすると言うのが決まりじゃ。しかし君には図書館島の司書見習いを任せておるじゃろう、だが図書館島と男子寮はかなり離れておる。今までも仕事を頼んでおったが、これからは更にその仕事も増えるじゃろう。じゃからこの際、君の部屋を図書館島の近くに用意しようと思うんじゃ」

そう言って学園長は俺の前に部屋の候補であろう資料を3枚並べる。

俺としても、図書館島と男子寮はたしかに距離が離れていて、いつも不便だとは思っていた。

あいにく今の寮は一人部屋だし、別に転校するわけでもないので、学校の友達に会えなくなるわけでもない。

なのでこの機会に引越しをするのも悪い選択ではないと思う。

そう考えて俺は目の前の資料を手に取り、目を通しはじめる。

1枚目、2枚目と目を通し、最後に3枚目にも目を通す。

「決めました」

全てに目を通すと、そう言って3枚目の資料だけを机の上におくと、残りの資料を一つに纏める。

その2つの資料を破り捨てると、俺は机の上に置いた資料を指差して「これにします」と告げる。

学園長は残念そうな表情で破られたその2枚の資料を見ているが、俺は絶対に突っ込まない。

「それじゃあこの部屋でお願いします」

そう言うと俺は学園長室からさっさと出て言った。

「はぁ、少しは年寄りの冗談に付き合ってくれてもよいじゃないか」

寂しそうにそう呟きながら、学園長は破られた資料を手に取る。

1枚目の資料

学園長推薦！
可愛い同居人が美味しい料理を振舞ってくれる！
部屋の掃除もしてくれる！
ドッキリな展開も期待出来ちゃう！
場所：中等部女子寮　○階　○○○号室（このかの部屋）

2枚目の資料

1番目のお部屋がお気に召さないあなたへ
それならこんな部屋をお薦め！
建物は純和風の屋敷の一部屋を間借り出来ます！
古き良き邸宅で落ち着いた生活を楽しめます。
家事も家主と分担で！
場所：××町　△ー□□（家主：近衛　近右衛門）

ちなみに3枚目の資料は図書館島から徒歩5分程度の距離にある建物の一室であった。

学校が終わり、寮に戻ってきた俺は早速引越しの準備のために荷物の整理を開始する。

念のためエヴァ達には引越しすることを連絡し、その準備のために修行は2，3日休むと伝えてある。

言わないと後がめんどくさいし・・・

茶々丸ちゃんが「お手伝いしましょうか」と確認してきたが、俺はそれを断った。

茶々丸ちゃんにも予定があるだろうし、申し訳ないと思ったからだ。

そんな事を考えながら荷物を整理していると、部屋のチャイムが鳴った。

誰だ、この忙しい時に？　そう思いながら、荷物をまとめる手を止め玄関に向かう。

「はい、誰ですか？」

そう言いながらドアを開ける。

「こんにちわ～」

「こんにちわです」

「こ、こんにちわ」

「ヤッホー、遊びに来ました！」

ドアを開いたその先には、図書館探検部の４人が立っていた。

「・・・・・・」

とりあえず彼女達を部屋の中に招き入れると、俺はすぐにドアを閉める。

周りに女の子を連れ込んでいると噂になるかもしれない。

ちょうど部屋の近くには誰もいなかったと言うのは幸運だったのかもしれない。

「で、君達は俺の部屋に何しに来たの？」

とりあえず彼女達の話を聞くことにする。

「一樹さん図書館島の近くに引っ越すんやろ？うちがおじいちゃんからその話聞いて、そしたら皆が引越しの準備を手伝ってあげようっていうことになったんよ」

要は学園長がなにやら手をうったらしい、彼女達は俺の引越しの手伝いに来てくれたようだ。

ちなみに何度か会ううちに、さすがに何時までも他人行儀なのもあれと言うことで、お互いのことは下の名前で呼びあうことになった。

「あのー、どうして突然引っ越すんですか？」

のどかちゃんが俺に引越しの理由を聞いてくる。

そう言えばだけど、のどかちゃんって男性恐怖症じゃなかったっけ？

なのにこんなとこ（男子寮の中）に来るなんて大丈夫なのだろうか？

この部屋の外には他の男子達もいるであろうに。

そう考えながらも、言えばのどかちゃんもそのことを意識してしまうだろうから口にはしないでおく。

「引っ越す理由は図書館島の仕事のためだよ。俺が司書見習いになったのは覚えてるよね、それで仕事が忙しくなって、帰る時間が遅くなったら、この場所じゃ帰るのが更に遅くなるでしょ？　だから学園長の方から俺にそう打診してきたんだ」

俺がそう言うと、のどかちゃんやゆえちゃん、そしてこのかちゃんが納得そうに頷いている。

ゴソゴソ

唯一その場で頷いていないハルナはというと、あろうことか俺のベッドの下を覗き込みながら、手でその中を漁っていた。

俺は無言でそのそばに近づくと、ゴンッと彼女の頭に拳骨を落とす。

俺の拳骨を食らったハルナはその場を転げ回った。

ハルナには、もはや名前の後ろにちゃんをつける気すら起こらない。

会うたびいらんことを仕掛けてくるからな。

「痛ったーい！？」

起き上がったハルナは瞳に涙を浮かべてこちらを睨む。

だが、俺たちはそんなハルナの方を冷たい目で見つめ返す。

「自業自得でしょ」

「自業自得やわ」

「自業自得です」

俺、このかちゃん、ゆえちゃんの3人にそう言われ、ハルナは最後の希望とばかりにのどかちゃんに目を向ける。

のどかちゃんはその視線に目を合わせることなく、顔を逸らした。

「のどか～！？」

誰からも見捨てられたハルナは、泣きまねをしながら部屋の隅でいじけ始める。

「それじゃあ手伝いをお願いするよ。とは言っても、服ならともかく下着を触らせるわけにもいかないからなぁ。とりあえず本棚の中の本でも片付けてもらおうかな」

そういって本棚の方を指さす。

俺の部屋にはマンガ以外にも色々なジャンルの本が並んでいる。
最初は本に興味などなかったのだが、図書館島で仕事をしているうちに本を読む楽しさを知ることになった。
それ以来自分で本を買ったり、時には学園長から仕事のお礼と言って、学生ではなかなか手に入れることのできない高価な本を何冊も貰っていた。
なので俺の部屋は図書館島にははるかに及ばないが、そこらへんの本好きとは比べ物にならないぐらい本を持っている。
「ほわ～、本がいっぱいあるわ～。これ全部一樹さんの本なん？」
このかちゃん同様、のどかちゃんやゆえちゃんも驚きの声を上げている。
ゆえちゃんに至っては目が輝いている。
「そうだよ、数が多くて大変かも知れないけどやってくれる？」
俺は確認の言葉を投げかける。
「わかった、これ片付けたらええんよね？」
そう言って、腕まくりをしながら本棚へと近づいて行く。
「そうそう、ケースがないからそこにおいてあるダンボールに詰めておいて」

俺は近くの商店からもらってきたダンボールの山を指差して指示を伝える。

「木を隠すなら森の中っていうわけね！」

いつの間にか元に戻っていたハルナはそう言うと、本棚に突っ込んでいった。

うん、お前もういいから帰れ

バカなことばっかり考えているハルナに、そう思いながらも俺も本棚のことは彼女達に任せて、引越しの準備を開始する事にした。

しばらくの間、服などを整理して箱に詰めていると、俺の方に近づいてくる人影が・・・

「あの、一樹さん？」

数冊の本を抱えながら、ゆえちゃんとのどかちゃんが俺に声をかけてきた。

「どうかした？」

「この本棚の中の本なのですが、何冊か借りていってもいいですか？　読んだ事のない本がいくつもありますので」

「あの、出来れば私も借りたいです」

二人はそう言って俺の前に持っていた本を差し出す。

俺はその本のタイトルを確認する、それらは別に持ち出されて困る本でもない。

読みたいと言うのなら貸してあげよう。

「ああ、いいよ。好きな本を持っていくといいよ、何時でも好きな時に返してくれたらいいし」

「本当ですか！！　ありがとうございますです」

「あ、ありがとうございます」

俺のその言葉に、二人は声を上げて喜ぶ。

「このかちゃんは借りたい本はないの？」

俺は本棚の前で立ち尽くしているこのかちゃんにも声をかける。

「う～ん、ウチは占いの本があったら借りたいんやけど、男の人って持ってないやろうし。一樹さんは持ってる？」

「さすがに占いの本は持ってないな、それなら今度図書館島の地下から占い関係の本を探して持ってきて図書館島内でなら読めるようにしてあげるよ。」

「え～、ほんまにええの？　めっちゃ嬉しいわ～」

俺の言葉にそう喜びをあげるこのかちゃん。

「あまり貴重なのは許可が出ないからそこまで珍しいのは持って来れないよ？」

「それでもええよ～」

図書館島の地下から占いの本を持ってくることでこのかちゃんも満足してくれるようだ。

「それはそれで羨ましいです、このか」

俺とこのかちゃんの会話を聞いていたゆえちゃんは図書館島の地下の本が見れるという事で羨ましいようだ。

のどかちゃんも同様である。

「はは、二人にも何か探して持ってくるよ、あとで読みたい本の種類を教えてくれ」

そういうとゆえちゃんとのどかちゃんも嬉しそうな笑顔になった。

「う～ん、やっぱり見つからない」

こいつはもう無視だ！

それから2時間ほど作業を続け、窓の外が暗くなってきた。

時計を見ると午後6時を過ぎている。

そろそろ彼女達を寮に戻さないといけない時間である

このかちゃん達の方を見ると、本棚の本は一度全部出されて、大きさ別に分けられている。

それから箱に詰めているみたいで、まだ全体の3分の1程度しか終わってないようだ。

ダンボールに目をやるとかなり丁寧に詰められていて、真剣に仕事をしてくれていた事がわかる。

「4人とも、そろそろ暗くなってきたから今日はもう帰らないと」

「あ、ほんまや。何時の間にかこんなに時間経っとったんや、ぜんぜん気づかんかったわ～」

「ホントです、早く帰らないと」

「でもまだ片付けが終わっていません」

「それにまだ目当ての物も見つけてないし」

4人はそう言ってこのあとの心配をしてくれる。

っていうかハルナは真面目に作業してくれてるのかと思っていたら、まだそんなことを考えていたのか。

「後は自分でやるから気にしないでいいよ、それよりも早く帰らないと。送っていくから寮の外で待っててくれる？」

「いえ、そんなの悪いです」

「そうやよ、一樹さんに悪いし・・・」

彼女達はそう言って申し訳なさそうな態度をとる。

「みんなが俺のために手伝ってくれたんだ、送るのは当然だよ。それに、ここから女子寮までは少し距離があるから心配だしね。こんなにかわいい３人をこのまま帰したら、変な奴に襲われるかも知れないしね」

そういうと３人の顔は少し赤くなった、かわいいと言われて照れたのだろう。

「はは、ゆえ、あんたは含まれてないみたいだよ」

ハルナが茶化すようにそう言う。

「それはパルのことです」

ゆえちゃんの言葉に頷く俺と他の二人。

その場にｏｒｚと膝をつくハルナ。

「じゃあすぐに準備をするからちゃんと待っててくれよ」

そんなハルナは放り出して、３人に外に出てもらい、着替えて準備

をする。

3分ほどで準備を整え、寮の外に出て4人を探す。

4人は寮の玄関を少し出たところで待っていた。

「ごめんごめん、じゃあ行こうか？　あ、ゆえちゃんとのどかちゃんは本が重いだろうから俺が持ってあげるよ」

2人から本を少し強引に受け取ると、女子寮の方へと歩き出す。

その後、暴漢が出てくると言うこともなく、無事に女子寮の前まで4人を送り届ける。

「今日はありがとう、引っ越したらまた招待するよ」

俺がそう言うと、彼女達も「絶対やで」と言って、寮の中へ戻っていった。

俺もそれを確認すると、男子寮へと帰って行くのであった。

13話（後書き）

ということで、主人公が引越しをすると言う話でした。
見ている人がいるかわかりませんが、活動報告で言った通り、16日からスキー旅行に行きます。
そのため、たぶんこの更新の次は、かなり時間が空くと思います。
（準備が早く終われば、もう一話書くかもしれませんが・・・）
皆さん広い心で、次の更新をお待ちください。

p.s. 総文字数が77777という縁起のいい数字になりました。
若干狙ってやりました（笑）

１４話（前書き）

お待たせしました、最新話の更新です。
あとがき追記があります。

１４話

太陽はすでに沈み、街灯が街を照らす。

空には三日月が昇り、夜空の中で眩く光り続けている。

人影もまばらになった学園内。

その一角である世界樹広場に、大勢の人間が集結していた。

彼らはこの学園内で生活している魔法使いやその関係者たち。

学校の教師をしている者もいれば、大学で自分の研究に没頭している者。

街の中で自分の店を経営している者もいれば、普段は学園内では生活していない者の姿もある。

更に学園の生徒の証である制服を着ている者の姿もところどころに見られ、その中には桜咲　刹那や龍宮　真名といった２－Ａの生徒の姿もあった。

現在はそれぞれ親しい者達で作ったコミュニティで集まって会話をしている。

その中の一つ、学生が二人と教師が一人というグループ

「学園長から大事なお話ということで集められましたが、一向に来られませんわね」

そう愚痴をこぼすのは、麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校に在籍する魔法生徒、高音・Ｄ・グッドマン

「お姉さま、学園長もお仕事があるのですからもう少し待ちましょう」

高音の愚痴に、そう返すのは麻帆良学園女子中等部に在学する佐倉愛衣、ちなみに彼女も魔法生徒である。

「そんなことはわかっていますわ。ですが、学園長がおっしゃられた集合時間はもう１５分も過ぎています。だから私は学園長の心配をしているんです！」

注意されるのが心外と言う表情でそう言われて、愛衣はビクッと身体を震わせる。

「高音くん、それぐらいにしておきなさい。君の言うこともわかるが、それで後輩に当たるのはよくない」

それまで無言を貫いていた黒人の男性、魔法先生であるガンドルフィーニが高音にそう言葉をかける。

「・・・・・そうですね。ごめんなさい、愛衣」

ガンドルフィーニにそう言われ、自分でも自らの行いに思うところのあったのか、すぐに愛衣に謝意を伝えて頭を下げる。

「いえ、お姉さま。気にしないでください」

そう言って高音に頭を上げるように言うと、二人は笑いあって仲直りした。

それを見たガンドルフィーニも、表情をわずかに崩した。

「遅れてしまってすまんかったの」

その広場の一番高所から、遅れていた学園長の声が聞こえ、一同は揃ってそちらに目を向ける。

そこには学園長とその孫であるこのか、さらにこの場には滅多に姿を見せない松井　一樹の姿があった。

学園長の近くに立つこのかとは対象的に、一樹はその場から少し離れて、人のいない方へと歩いていった。

「ずいぶん待たせてしまったの、今日は皆に大事な報告が二つある。まずは一つ、ワシの孫であるこのかがこちら側の世界を知り、正式に魔法使いとなることになった」

学園長がそう言うと、一同はこのかに視線を集める。

彼女は学園長の孫であり、その身に宿す魔力もこの場にいる誰よりも多い。

これからの彼女の未来を想像する。

魔法使いとして、もっと言えば立派な魔法使い（マギステル・マギ）として、彼女の将来は眩く光る宝石のように光り輝くものだろう。

そう考えて、彼らはこのかを羨望の目で見つめていた。

そして一同は大きな拍手をもって、彼女のことを歓迎した。

このかは軽く頭を下げると、学園長に隠れるように後ろに下がってしまった。

「驚いたな、お前は知っていたのか、刹那？」

そう言って刹那に問いかける真名、その表情は本当に驚いているようである。

「ああ、お嬢様はつい先日こちら側のことを知られたんだ」

「それはエヴァンジェリンさんが関係しているのかい？」

真名が想像する範囲内で、このかが魔法を知るきっかけとなるであろうこと、それも最近となると、心当たりは一つしかなかった。

最近になってこのかとエヴァンジェリンの仲が急激に近づいたことである。

龍宮自身もそうであるが、エヴァンジェリンはクラスでそれほど人付き合いのあるほうではない。

それが突然親密になったのだから、そこが怪しいと思うのは、ある意味当然であろう。

「・・・・・・そうだな」

刹那は結果的にこのかと仲直りできたが、刹那自身かなり酷い目にあった。

それを思い出したのか、苦々しい表情でそう答える刹那に、真名はポカンとした表情を浮かべるしかなかった。

他の者達もそれぞれ会話をしていたが、学園長の咳払いに気がつくと、改めて学園長の方に視線を送る。

「話したい事はそれぞれあるじゃろうが、そろそろ次の報告に移っても構わんかの？」

周りにそう問うと、全員話を聞く準備を整えた。

「すでに話を聞いているものもおるかもしれんが、英雄ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールド君の修行の地が此処、麻帆良学園に決定した」

学園長のことばに、一同は言葉を失った。

ナギ・スプリングフィールドといえば魔法を知る者達にとって、その名を知らないものはいないと言われるほどの有名人。

紅き翼（アラルブラ）と呼ばれる、かつて魔法世界で起きた大戦で活躍し世界を救ったことで一躍有名となったまさに現代の英雄。

千の魔法を使いこなすということから、「千の呪文の男（サウザンド・マスター）」と謳われる最強の魔法使い。

そんな彼が１０年前に死亡し、世界は大きな悲しみを受けたが、彼

は死してなお希望を遺していった。

それがナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドの存在である。

父譲りの膨大な魔力と、わずか9歳でありながら飛び級をしてメルディアナ魔法学校を主席で卒業したと言うことは、風の噂で誰もが聞いていた。

そんな彼の修行地が自分達の生活するこの麻帆良に決まった。

次代の英雄候補であるネギ・スプリングフィールドがこの麻帆良にやってくる。

それを聞いて、涙を流すものさえ現れ、この場は歓喜の声で盛り上がっていった。

このかや一樹のように魔法世界について詳しくない者や、刹那や真名のように大して興味を持っていない一部の者以外は、その場で近くの者達と感動を分かち合った。

「ワシからの報告は以上じゃ、といっても聞こえておらんの」

学園長はそう言って周りの盛り上がりを見回すと、しばらくはこの場が収まらないであろう事を予想し、ため息を吐く。

「仕方がないわい、この場は解散とするから帰りたいものは帰ってもかまわんぞ」

学園長がそう言うと、刹那はこのかの方に近づいて行き、真名はこ

の場に用が無くなったのでその場を後にして行く。

一樹もさっさとこの場から離れようとすると、彼に近づいてくる人影が二つ。

「あなたがこの場に現れるなんて珍しい事もあるもんですわね？」

高音・D・グッドマンと佐倉愛衣である。

高音が一樹の前に立ち、愛衣はその後ろについてくるように立っている。

「普段は一切このような場に現れないあなたが、今回は一体どんな風の吹き回しですか？」

高圧的な態度で話しかけてくる高音に、一樹はいらっとしながらも、高音を無視するようにその脇を通り過ぎようとした。

しかし高音に腕を捕まれ、一樹はその場を離れることが出来なかった。

「はぁ、この手離してくれない？」

一樹はため息を吐きながら、高音にそう言う。

「私が質問しているのですから、答えてくださってもいいんじゃないですの？」

そう言ってお互い睨み合う。

そもそもこの二人、こんな風にもめるのは始めての事ではない。

二人の初めての出会いは中学校1年のことである。

この時麻帆良学園にやってきた高音は、他の生徒よりも魔法の腕が一枚も二枚も上手で、やって来てすぐにこの学園に馴染んでいった。

それから少し経ったころ、魔法生徒であるにもかかわらず、修行も仕事もしない生徒がいるということを聞きつけ、持ち前の正義感からその人物に魔法生徒の義務を教えるためにと、その人物の元に向かったのだ。

もちろんその人物とは一樹のことであり、当時は修行などする気もなかった時期であったので、二人はもめに揉めた。

魔法使いの理想を語る高音に、そんなことなど一切興味のない一樹。

この時から二人は顔を合わせれば何かしらの口論を繰り広げることになり、時には高音がきれて魔法を発動させることもあった。

それ以来一樹はなるべく高音と顔を合わせない事にした。

一樹が魔法使いの集会に現れないのも、これが理由の一つである。

まぁ理由の大半はただ出る気がないだけなのだが・・・・・

「学園長が今日はどうしても出て欲しいって言うから、出てきただけだけど」

高音に掴まれた手をやや強引に振り払って、そう答える。

「私があれほど出なさいと行っても来なかったのに、学園長に言われたら出てくるんですか？」

高音は手で顔を伏せながら、一樹の行動を非難する。

「そうだよ」

あまりにもあっさりと答える一樹に、高音の額の筋がぴくっと動く。

「あなたはふざけているんですか！？」

大声で叫ぶ高音に、一樹はあらかじめ耳を閉じて対策していた。

この展開は過去に何度も経験済みである。

それまで周りで思い思いに語り合っていた者達も、そちらに目をやり、またかといった表情になる。

これまで似たようなやり取りは何度もあったので、彼らもこの状況は慣れっこである。

ほとんどは魔法使いの理想を語る高音を支持し、一樹を蔑んだ目で見つめている。

魔法使い達にとっては高音が正しく、一樹が異端なのである。

なので誰も一樹を庇うものなどいない、強いて言えば高音が暴走しそうになると、静止をかけるぐらいである。

「もう今日と言う今日は怒りました、あなたのその曲がってしまっている考えを、私が矯正して差し上げます」

そう言って、高音は魔法を唱える。

すると彼女の背後に、突然影が現れ、人の形を成して行く。

顔には覆面を付け、全身を黒い装束で覆った姿の使い魔が現れる。

これは高音の得意魔法、操影術で作られた影で出来た使い魔である。

現れた使い魔は3体、それが一斉に一樹の方に向かっていった。

「はぁ、はぁ」

あれからどれほどの時間が経ったのだろうか。

本来すぐに終わると思われてたこのやり取りも、いまだに終わりが見えてこない。

それを見ていた全ての者達も現状に言葉を失っていた。

彼らの予想では5分もしないうちに一樹が捕まって、高音のお説教が始まると思っていた。

少なくとも過去のやり取りでは必ずそうなっていた。

ところが現状はどうだろうか。

高音は魔力の使いすぎで息を乱し、対する一樹は大して疲れを見せていない。

だが、それはおかしいことなのだ、高音の出している使い魔の数は17体、高音の出せる全力である。

この17体を自由に動かし一樹を捕まえようとしたのに、一樹はそれを全てかわしているのだ。

それも大して苦労した様子も見せずに・・・・・・

一方の高音はもはや当初の考えなど忘れて、完全にむきになっていた。

こちらは全力で一樹を捕まえに言っているのに、一樹は見るからにやる気がなさそうである。

こうなったら意地でも捕まえて見せる。

そう考えて高音は己の操っていた使い魔を全て消した。

そして彼女の全力である最強モード黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）を発動させる。

すると彼女の背後に先ほどの使い魔が彼女を覆うように展開される。
彼女の言う最強奥義、黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）は攻防を一体にすることが出来る。

そして一樹を捕らえるために、帯状の影を多数、一樹の方に伸ばしていった。

対する一樹はその影をかわしながら、現状を嘆いていた。

どうしてこうなった。

高音に絡まれるのも、こうして魔法を使ってこちらを捕らえようとしてくるのもいつもの事だ。

最初の間違いはその場からさっさと逃げなかったことだ。

いくら高音でも家まで辿り着けば、さすがに諦めて帰っていった。

そして二つ目の間違いはさっさと捕まればよかった。

高音のお説教なんていつも馬の耳に念仏状態で聞いていたのだ、今回もそうすればよかったのに。

そして最後に、一樹自身は気づいてないが、これが高音を一番怒らせているのだ。

現在一樹は何の魔法も使っていない、魔力でわずかにブーストされただけの状態で、高音の攻撃を避けているのである。

普段から突然切りかかってくるチャチャゼロや、複雑で高度な動きをするエヴァの魔法を相手にしてきたのだ。

それに慣れてしまって、一樹は現在の状態でも何とか対応できてしまっているのだ。

「いい加減に捕まりなさい！」

一樹に肉薄してきて、大きく振りかぶって拳を振り下ろす。

それを後ろに飛んで回避する。

「そこです！」

それを待っていたかのように、高音は再び帯状の影を多数伸ばした。

さすがの一樹もこれは悪手だったか、その影をかわしきれず、影が身体に巻きついて行く。

「フッフッフッ、ついにやりましたわ」

そう笑いながら、達成感に浸っている高音。

一樹はこのまま捕まっていようかと考えるが、自分の師匠にこのことが知れたらどうなるだろうか。

・・・・・死ぬな。

このあとにあるであろう修行メニューを考えて、一樹はその中から

離脱することを決めた。

指輪に魔力を篭めて魔本を取り出す。

「ディゴウ・グラビルク」

身体強化の呪文を唱え、全身を縛る影を強引に引き千切る。

「なっ！？」

高音は突然のことに驚きの声をあげる。

しかしそれでもすぐに気を取り直し、一樹に向けて影を伸ばす。

伸びてきた影に対し、今度は避ける動作をとろうとせず、本を持っていない左手を大きく振りかぶる。

「ザング・マレイス」

そう呪文を唱えると、一樹の左手は重力を帯びる。

そして腕を振り下ろすと、重力波となって向かってくる影を切り裂いていった。

そのまま高音の方に向かって行くが、高音は使い魔のマントで防御する。

しかしそれで全てが防ぎきれたわけでもなく、マントは幾らか切り裂かれていた。

高音はそれに驚愕の表情を浮かべていたが、それは周りも同様だった。

あの一樹が魔法を使ったのである。

周りが驚きで固まっているのを見て、一樹はさっさとその場から離脱していった。

「・・・・・っは！　今のは一体どういうことですの、っていない！？　逃げられた！？」

目の前にいたはずの一樹が何時の間にか消えていて、高音は地団太を踏む。

ぽんっと高音の肩が叩かれる。

高音が振り返ると、ガンドルフィーニが立っている。

「先生、私が次こそはあの方を導いてみせますわ」

「そうだな、だがその前にここをしっかりと直しておくように」

ガンドルフィーニが指さすのは、二人が先ほどまでいた地面。

そこは高音の魔法によって荒らされていた。

高音は助けを求めようと周りを見渡すが、彼女の知り合いの魔法使いはその場をそそくさと去っていった。

「ふ、不幸ですわー！」

結局高音と愛衣の二人でこの場を直したのだった。

おまけ：高音脱げ女バージョン

一樹は呆けている高音にむけて更に追い討ちをかける。

「グラビレイ」

高音のように防御も出来る相手には、レイスなどよりグラビレイの方が有効である。

重力に押しつぶされ、高音は地面に叩きつけられる。

更に呆けていたことにより、頭を地面にぶつけてしまい、気絶してしまう。

ここで一樹に誤算が生じる。

高音が気絶したことにより、魔法が解除される。

彼女の魔法である黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）は彼女の服も形成しているのだ。

一樹が魔法を解き、巨大な使い魔の姿が消えると、そこにいたのは全裸になっていた高音。

「・・・・・は？」

「見ちゃダメです！」

そう言って愛衣は一樹に飛びかかって目をふさぐ。

周りの男性人も高音の方から目を逸らす。

「フォフォ」

「おじいちゃん？」

「フォ！？」

視線をさらさなかった学園長だが、このかの底冷えする声に驚いて慌てて別の方を向く。

「う、うん」

高音が目を覚ますと、周りが全員そっぽを向いていることに気づき、自身の姿を確認する。

「あ・・ひっ・・・せ、責任取ってくださーい！」

自身の身体を手で隠しながら、そう言ってどこかに走り去っていった。

「お姉さま、せめて服を作ってから走ってくださーい！」

愛衣もそんな高音を慌てて追いかけていった。

一樹もその場を離脱しようとするが、さっきがこちらに飛んでくる。

そちらを見ると笑っているのに笑っていないこのかと刹那。

「一樹さん、やっちゃいけないことってあるんと思うんよ」

「女性の衣服を剥ぎ取るなんて・・・最低です！」

そう言って一樹を非難する二人。

「え、あれ、俺関係ないんだけど？」

「「問答無用！」」

そう言って一樹は二人にお仕置きされた。

結局この誤解を解くのにはかなりの時間を要するのであった。

なんでこんなことに、と涙を流しそうになりながら帰ろうとすると、後ろから肩を叩かれる。

振り返る学園長が立っていた。

「ここは松井君が直しておくように」

そう言うと学園長は帰っていき、他の魔法先生達もその場を後にしていった。

「ふ、不幸だ」

結局一人で夜明けまでかかったのだった。

１４話（後書き）

ということでネギ来るよフラグと、一樹が学園の魔法使いの前で魔法を使う話でした。
書きたい話もあるけれど、とりあえずそろそろ原作の方にも入っていこうと思います。

追記：レイアウトを変更してみました。
見づらいと言う意見が多ければ元に戻します。

１５話（前書き）

１４話でも書きましたが、レイアウトを変更してみました。
黒の魔本と言うタイトルにあわせて、バックを黒くしました。
見難いとかそう言う意見が多ければ、元に戻すつもりです。

15話

空は青く澄みわたり、眼前には地平線を海面が埋め尽くしている。

ここはエヴァンジェリンの別荘の中、その中でこのかが魔法を知って以来続けられている光景が広がっていた。

塔の屋上部分を見てみよう。

そこには魔法を教わっているこのかと、それを教えているエヴァンジェリンの二人の姿。

このかはおもちゃのような魔法の杖を片手にひたすら呪文を唱えている。

「プラクテ・ビギ・ナル　光の精霊三柱（トレース・スピリトゥス・ルーキヌエウンテース）　集い来りて　敵を射て（サギエント・イニミクム）　魔法の射手（サギタ・マギカ）　光の3矢（セりエル・ルーギス）」

するとこのかの持つ杖の先から、光り輝く3本の光弾が飛び出す。

その光弾はエヴァの方に向かってとんでいく。

「ふんっ」

それに対し、エヴァは大して表情も変えずに同数の魔法の射手を、それも無詠唱で発動させて打ち落としてしまう。

この辺りでこのかとエヴァの実力の違いが浮き彫りになってくる。

このかが詠唱を終えるまでに約7秒かかるのに対し、エヴァはノータイムで同様の魔法が使えるのである。

エヴァのその態度にムカッと感じたこのかは、今度はより多くの精霊を召喚して魔法の射手を放つ。

9矢、17矢、29矢、召喚する精霊をどんどん増やし、このかは己の持てる技術で最高の力をぶつけて行く。

しかし、エヴァは先ほどと同様に、何の問題もない、いつもどおりの表情でこのかと同数の魔法の射手で迎え撃つ。

やがてこのかの方が先に息を上がらせ、地面に膝をついたことでその訓練は一時中断する。

額には玉のような汗をかき、大きく呼吸を乱しているこのか、その表情は相当苦しそうである。

「やはりお前は攻撃系の魔法はそこまで才能がないな、これなら回復系を極めていったほうがまだ希望がある」

そう言いながらエヴァは苦しげなこのかに近づいていく。

そんなこのかを見ながらエヴァは頭の中でこのかを評価する。

このかの攻撃魔法の才能はせいぜい魔法使いとしては中位程度、頑張って上位に食い込めるぐらい。それも一般の魔法使いの中での話である。

しかし、回復系にについては別である。回復系のことを希望がある

と言っているが、エヴァは回復系魔法でのこのかの才能を高く評価している。

それこそこのかが後数年修行を続ければ、回復系ではエヴァを大きく越える魔法を使えることになるだろう。

このかの魔法の才能を端的に表すと、完全な後衛タイプ、それも戦闘に出るようなタイプではない回復役である。

これならもう戦場に出ると言うのは諦めてもらい、そちらの修行に専念してもらうほうが、魔法使いとして大成するのにどれだけ時間が変わってくるだろうか。

そう考えながらも、エヴァはその事をこのかに言うつもりはない。

自分が魔法を教えるのだから、そんな普通の魔法使いとしてこのかを育てるつもりはない。

回復系は戦場に出ず、後方に居ればいいと言うのが世間の常識というなら、その常識を塗り替えてしまえばいい。

何もこのかが攻撃のために前に出る必要はないのだ、その役目は下で馬鹿弟子や自身の従者と戦っているやつに任せればいい。

敵と戦うのは前衛に任せ、自分は前衛を盾にして後方で支援する。

その盾が傷つけば自身の魔法で回復させ、隙あらば自身も魔法で攻撃に参加する。

何も全てを一人でこのさせようとは考えていない、それができるの

ならそもそもパートナーなんていらないのだから。

そう言えば仮契約をすればこいつらはどんなアーティファクトを持つ事になるのだろうか。

一樹は嫌がるだろうから、このかと刹那で仮契約させてしまえばいい。

このかへの愛であふれる刹那ならまず断ることなどないだろう。

これは後が楽しみだ、ふっふっふ。

このかをこれからどう育てて行くか考えながら、そんな不穏なことも考えている・

呼吸を整え終わったこのかをみて、エヴァはひとまず修行を再開させるのであった。

一方の塔の下に目を向けてみよう。

一面砂と海で囲われたその場所には、一樹と刹那、チャチャゼロと茶々丸という４人？の姿があった。

現在は茶々丸と刹那が戦闘訓練を行っており、そこから少しはなれ

た場所で一樹とチャチャゼロはなにやら話し合っている。

話し合いといってもどうせ悪巧みである。

こちらの方は置いていて、刹那と茶々丸に注目してみよう。

刹那は自身の愛刀、夕凪を握っている。

このかを守るために、このかの父・詠春から譲り受けたこの大太刀を訓練で使うのはどうかと思うが、ここでの訓練は真剣、まさに命がけの戦いが繰り広げられるので、もはや刹那も気にしていない。

対する茶々丸は素手、その状態で刹那と対峙している。

大型銃器も扱いこなせる茶々丸であるが、空も飛べる茶々丸がそのような物を持てば、あまり戦闘訓練にならないので今回は所持していない。

（当然訓練なので、あらゆる場面を想定してそのような訓練も行う事もある）

しかし科学と魔法の融合により生まれた茶々丸は、そんなことで苦労するような存在ではなかった。

刹那が斬りかかって行くが、茶々丸はそれを腕でガードする。

「（硬い、気で強化しているのに刃が通らない）」

刹那は内心焦りながらも剣を振るって行く。

エヴァの魔力で強化されている茶々丸の身体は、刹那の気で強化された刀よりも硬かったのだ。

それでも巧みに刀を振るい、何とか斬れるところはないかと、茶々丸の腕、胴、更には頭を狙って行くが、茶々丸はそれを回避、できない場合はガードすることで防いでいる。

このままでは埒が明かない、そう考えた刹那は刀に篭める気の量を更に多くする。

「はぁーっ！　斬岩剣！」

斬岩剣、一振りで岩をも真っ二つにすることの出来る神鳴流の奥義。

その奥義を用いて、気合を篭めて茶々丸に切りかかる刹那。

茶々丸もそれをガードするのは危ないと感じたのか、回避に専念する。

茶々丸の回避した地面は刹那の剣圧により、大きな割れ目が出来ている。

茶々丸がガードしようとして、止めたのを見て、これならいけると確信を持った。

先ほどの茶々丸の行動に自信をもった刹那はこれ幸いと猛攻を仕掛けていく。

袈裟斬り、突き、胴払い、それ以外にも手を変え茶々丸へと斬りかかる。

刹那の剣は茶々丸に襲いかかって行くが、茶々丸もそれをかわして行く。

「（クソ、当たらない）」

茶々丸に自身の攻撃をことごとくかわされ、刹那も奥歯をグッとかみ締める。

先ほどの斬岩剣、それに加え、剣先に電気エネルギーを帯電させて斬りかかる雷光剣。

それらを上手く使い分けて茶々丸を追い詰めて行く。

しかしなかなか茶々丸の隙を生み出すことは出来ず、未だに有効な攻撃が一発も当てられない。

だが、猛攻を仕掛けていた刹那に絶好のチャンスが訪れる。

回避に専念していた茶々丸が、足元の砂場に足を取られ、わずかに体勢を崩す。

そのわずかな隙を刹那は見逃さず、茶々丸の袈裟懸けに刀を振り下ろす。

「もらった、斬岩剣！」

これは当たる、そう確信を持って刹那は刀を振るう。

その刀を回避することの出来なかった茶々丸は両腕をクロスさせる

ようにガードするが、その威力に耐え切れず、吹き飛ばされる。

茶々丸の吹き飛ばされたほうでは土埃が舞い上がり、刹那の方からは茶々丸の姿が目視できない。

刹那は油断して刀を下ろそうとするが、それで以前失敗したことを思い出す。

油断することなく、茶々丸の奇襲に備えて刀を構え直す刹那。

その行動に間違いはなく、土煙の中から刹那目掛けて、もの凄い勢いで飛来する何か。

刹那は刀でそれを横に弾きながら、それを目視して確認する。

「腕？」

思わずそう疑問を口にしてしまう。刹那目掛けて飛んできたのは、拳から肘辺りまでの腕。

その後ろにはワイヤーのような物もついている。

ギュイーンと何かを巻き戻す音に気づいた刹那がそちらを向くと、さきほどの腕は茶々丸の放ったものであった。

茶々丸は前腕部を有線式であるが射出することが出来る、いわゆるロケットパンチである。

そして今、茶々丸は刹那の方に右腕を飛ばしてきていたのだ。

その茶々丸は腕を戻しながらも刹那の目の前まで肉薄して来ていた。

「ぐはっ！」

刹那は慌てて防御の体勢に入るが、わずかに間に合わず、茶々丸の蹴りを腹部に喰らってしまう。

吹き飛ばされたところから飛んできた茶々丸の突進力が加わったその蹴りは、刹那の細身の身体に耐えうるものではなく、先ほどの茶々丸同様に吹き飛ばされる。

まるでボールのように地面を転がる刹那に、茶々丸は容赦なく追撃を加える。

ようやく止まることの出来た刹那はすぐに立ち上がろうとすると、すでに５ｍ前に茶々丸が迫っていた。

茶々丸は刹那を踏み砕かんといわんばかりに、地面を踏みつける。

茶々丸の足は刹那に当たることなく、地面の砂を大きく吹き飛ばすこととなった。

刹那は茶々丸の踏みつけを横に転がって回避すると、急いで立ち上がろうとしていた。

しかし、茶々丸がまたしても肉薄してきており、今度は回し蹴りを放ってくる。

刀でガードするが、茶々丸の蹴りに耐え切れず、刀を手放してしまう。

刹那の手から離れた刀はポーンと刹那の後ろに飛んでいき、地面に突き刺さる。

刹那は何とか顔面だけは守ろうと両腕で顔をガードしようとする。

だが刹那に出来たのはそこまでで、刹那の眼前にはすでに茶々丸が迫っていて、刹那の眼前で拳が止められていた。

「どうやらここまでのようですね」

刹那がそういって「降参です」と両手を挙げると、茶々丸も拳を下げる。

「参りました茶々丸さん。ってその手大丈夫ですか!?」

刹那はそういって茶々丸の方を心配そうに見つめる。

茶々丸の左手は刹那の斬岩剣をうけて、大きな傷が残っており、中の配線がわずかに見えていて、ところどころショートしているのか、パチパチと火花を上げている。

「左手の機能が３５％低下していますがそれ以外は問題ありません。心配ありがとうございます、刹那さん」

茶々丸はそういって刹那に深々と頭を下げる。

刹那としてはこの傷を負わせたのは自分なのに、それを一切とがめない茶々丸に複雑な気分になっていた。

「私はハカセの元に向かいますので先に失礼します」

そう言うと茶々丸は背中のブースターを使って空へと飛び上がっていった。

色々なことを考えながら飛んで行く茶々丸を見送っていた刹那であったが、それを見送ると、夕凪を拾いに行く。

わずかに歩いた位置に夕凪は刺さっており、刹那は刀身を確認する。

「よかった、何処も刃毀れはしてないな」

そんな彼女にしのび寄る不吉な影。

「ケケケ、ソイツハヨカッタナ。ソレジャ、ラウンド2ー、イッテミヨウゼ！」

そういって刹那に斬りかかったのは茶々丸の姉であるチャチャゼロ。

手には2本のナイフが握られており、刹那は問答無用のままチャチャゼロとの戦いが始められるのであった。

15話（後書き）

と言うことで何時か書くと言っていた、別荘内での修行風景でした。
って言うか主人公修行してねぇ（笑）
そろそろ時間飛ばしてネギが出てくると思います。

16話

それから時は流れてついに1月になった。

学生にとって短かった冬休みが終わり、今日からまた学園生活が再スタートする。

それは高等部に通う一樹や中等部に通うこのかたち2－Aも同様のことであった。

そしてこの新たなスタートに合わせて、麻帆良学園に新たな来訪者がやってくる。

そう、今日はいよいよネギ・スプリングフィールドこと子供先生が麻帆良学園へとやってくる日なのである。

ここ数日、魔法関係者、特に立派な魔法使い(マギステル・マギ)に深い想いを持つ者達は、落ち着かない日々を過ごしてきていた。

そんな浮かれ気味の人々を、一樹はしらけた目で見つめていた。

昨日の夜には、子供先生が来る前に、注意事項の確認を行う集会も催された。

基本的に学園の魔法使いは自分から接触を測るのは禁止され、魔法使いである事を子供先生に明かしてはいけないということになっている。

これは基本方針で、もし正体がばれたときは子供先生のことを助け

るようにということも言われていた。

もちろんわざとばれるようなことをすれば、学園長直々に罰が下ると言っていたので、そんなことをするやつは居ないのだろう。

まぁ、俺は不干渉を貫くつもりなので、このかちゃんから話を聞くぐらいだろうな。

自分から子供先生に関わって行く？

そんなことするわけない、どれだけ子供先生が人懐っこく、俺も気に入るような可愛い少年だったとしても、立派な魔法使い（マギステル・マギ）の考えを否定している俺とは、必ずどこかで意見が食い違い、揉めることになるだろう。

それなら極力関わらないほうがマシである。

ところで話は変わるが、学園長の話では子供先生は今日やって来て、早速クラスに顔合わせをさせるといっていた。

それを聞いて、事前にこちらに来させておいて、準備とかさせなくていいのかと思ったが、それは子供先生と学園長達の問題。

俺には関係ないのでまぁいいとしておこう。

このかちゃんが学園長から子供先生を迎えに行くように頼まれていたようだが、今頃はもう出会っているのだろうか？

ただ、麻帆良学園の朝は凄い、何がすごいと言うと、予鈴十分前の通学ラッシュである。

子供先生がもしもあの通学ラッシュに巻き込まれていたら、見つけるのは困難になるんではないだろうか。

ついついそんなことを心配してしまう辺り、一樹も結構お人よしなところがあるのだが、本人はそれを自覚していない。

このかちゃんが子供先生を迎える場所が女子エリアなので、男子学生である俺は、しばらく子供先生の姿を見る事はないだろう。

放課後ならともかく、今の時間に女子エリアに入ったら不審者扱い間違いない。

出来るならばその姿を一目見ておきたいという思いもあったが、こればかりはどうしようもないのであきらめよう。

放課後に学園長のところに行って、子供先生の顔写真でも見せてもらおう。

顔がわからないと困るからな・・・・・いや待てよ、そもそもまだ１０歳の子供なんだから見れば一目ですぐわかるか。

少し考えて見れば、それがすぐに見分けられる方法じゃないか。

そんな事を考えながら俺は高等部の自分の教室へと向かった。

時は変わって昼休み、学生達は始業式を終えて、各々己の教室で担任の話を聞いた後、まさかの始業と同時に授業が開始され、現在はそれが一段落し、ショックを味わっているところであった。

俺はそのショックからいち早く抜け出し、現在は食堂にやってきていた。

うどんを注文し、それを受け取ると、俺は適当に空いていた席につく。

さぁ食べようと箸を割ったところで、不意に俺の携帯が鳴る。

ポケットの中でメロディを流し続ける携帯を取り出し、電話がかかって来ている事を確認する。

画面に表示される名前を見て、よく見知った人物である事を確認すると、俺はその電話に出る。

「もしもし、一樹さん？　うちやけど、今電話しても大丈夫？」

電話をかけてきたのはこのかちゃん。

「ああ、すぐに掛けなおすからちょっと待っててくれる？」

食堂で電話をするのは周りの人に迷惑だろう、それに早く食べないとうどんが伸びてしまう。

「わかった、待ってるわ！」

そう言って俺は電話を切る、おそらくだが、話の内容は子供先生の

ことだろう。

俺が何かあったら教えて欲しいとお願いしていたから、きっと何か話すことが出来たんだろう。

俺は目の前にあったうどんを急いでかきこむと、残った食器を返却口に返し、食堂を後にする。

そして、電話をかけても問題のなさそうな、人気の少ない所へと移動する。

校舎内をぶらぶらと歩いているうちに、誰もいない空いていた教室を見つけ、その中に入り、このかちゃんへ電話を掛けなおす。

それから数コールもしない間にこのかちゃんは俺の電話にでた。

「もしもしこのかちゃん？　さっきはごめん。今はこのかちゃんも話せる？」

「うん、大丈夫やで。それでネギ君のことなんやけど・・・」

俺の確認にそう返事をすると、すぐに話に入る。

「ネギ君・・・あぁ、子供先生のことね。子供先生がどうしたの？まさか早速問題でも起こしたの？」

もしそうだとしたら早過ぎだ、麻帆良に来てまだ半日も経っていないだろう。

慣れない土地だからトラブルを起こすこともあるだろうけど、それ

がまさか魔法関係だということは・・・

「う～ん、問題って言うたら問題なんやけど・・・朝迎えに行った時な、うちともう一人の子で迎えに行ったんよ、その時武装解除の魔法を暴発したんか知らんけど、くしゃみして友達の服を脱がしたんよ」

このかちゃんの言葉に俺は言葉を失ってしまう。

仮にも魔法学校を主席卒業した天才が、そんなことをやらかすのか？

「幸いその時は何事もなかってんけど、今度は教室に入って来るとき、落ちてくる黒板消しを、魔法使って空中で止めたんよ。それでその光景をその子に見られて今は完璧に疑われてるんよ」

黒板消しって小学校の嫌がらせか？　いや、噂に名高い２－Ａなら本当にありえるのだろう。まあそれは置いておくとして、何で来た早々正体がバレかかっているんだ、その子供先生は？

「それ以外にも何か怪しまれるようなことはあったの？」

もしも一般人に魔法がバレたらオコジョ決定だろうが、来たその日にそのことがバレたなら、自業自得、子供先生には立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる素質がなかったと言うことだろう。

と言うかなんでオコジョなんだろう、普通に幽閉とかでいいんじゃないのか？

魔法使いの世界の慣習はよくわからないものが多くあるよな。

「今の所は何も起こってないねんけど、その・・・」

このかちゃんは突然言葉に詰まる、何か他に問題があるのだろうか？

「どうしたの？　何か言い難い問題が発生したとか？」

俺は心配なのでそう尋ねる。

「問題っていったら問題やけど、ネギ君はうちの部屋で預かるってことになっとるやん？　それでその怪しんでいる子がうちと同室なんよ」

俺は思わず身体の力が抜けて、座っていた机に頭をぶつけた。

ああ、そういえばこのかちゃんの部屋で子供先生を預かるんだったっけ？

ぶつけた頭をさすりながら、俺は子供先生の運の悪さを哀れむ。

でもこれで終わったな、子供先生。話に聞く限り、一緒に住んでいたら、その子の前で必ずボロを出してしまうに違いない。

「何とかその子の気を紛らわせることは出来ないの？」

一応聞くだけ聞いて見る、それだけ疑っているのなら無駄だとは思うけど。

「うん、そんなわけないやんとは言ってるねんけど、聞く耳もたずの状態やねん」

ほらやっぱり、どうするつもりなんだろうか？

「学園長にはそのことを報告してあるの？　学園長の指示を仰いで、最悪今日の記憶を消してもらわなければならないよ？」

魔法を知ってしまったら、その記憶を消さなければならない。

その子をこちら側に巻き込まないためだ、俺の嫌いな押し付けの正義だけど、その子の為を思えば仕方ないという感じもある。

「アスナの記憶を消さんとあかんのっ！？」

アスナと言うのはその友達の名前だろうか？　このかちゃんは俺の言葉に酷く驚いている。

「その子をこちら側に巻き込まないためにはね。このかちゃんは何とかその子の気を紛らわせて、こちら側のことを知られないようにして」

俺はそう言ってこのかちゃんを落ち着かせる。

「わかった」

そろそろ時間も少ないので、俺は電話を切った。

面倒だけど、学園長がどう言う考えなのか聞きにいかないとな。

俺は放課後に学園長の元へ訪れることにした。

そして放課後になった、俺は女子中等部にいるはずの学園長のところへと向かう。

女子中等部に行くには当然女子エリアを横切らなければならない。

今までも何度か来たことはあるが、それは生徒が少なくなる時間帯だった。

だが今はまだ授業が終わってそんなに時間が経っていない、なので周りには見渡す限り女の子がいる。

はっきり言って俺は見世物小屋の珍しい動物よりも見られているだろう、ただし怪しげな視線で。

俺は少しでも早く学園長室に辿り着くため歩くスピードをあげることにした。

周りの視線を耐えながら、5分ほどで女子中等部の校舎に辿り着く。

さっさと学園長室に行って、要件を済ませてしまおう。

「ちょっとあんた!!　こんなところで何してんのよっ!?」

学園長室に向かうため校舎の中に入ると、後ろから肩を掴まれそう言われる。

振り返るとツインテールで頭に鈴をつけている女の子が俺の肩を掴

んでいる。

「なんでこんなところに男子が入り込んで来てるのよ！！　早く出て行かないと先生を呼ぶわよっ！！」

そう言って学園の外を指差す女の子、どうやら俺は完全に不審者と思われているようだ。

女子エリアの中を歩くだけなら、部活のために通らなければならない生徒もいる（数は非常に少ないが）ので通報されることはない。

だが校舎内まで入ってきたら確かに不審者扱いされてもおかしくないだろう。

俺は深くため息をつく。

「あ～待って、待って。別に怪しい者じゃないよ、学園長に話があってここまで来たんだ」

ここに来た理由を話してさっさと解放してもらおう。

「そんなこと言ってホントはやましいことするつもりなんじゃないの！？」

そう言って俺のことを厳しい目で睨みつけてくる。

駄目だ、これは完璧に信じてくれていない目だ。

さてどうしようか、先生を呼んでもらって、先生に学園長室まで連れて行ってもらうのもいいが、それだと俺は一時的に不審者として

扱われてしまう。

それだけは嫌だ、何でやましい事をしていないのにそんな扱いをされねばならないのか？

それでは俺が変なレッテルを張られるではないか。

では学園長に電話する、これなら納得されるだろうが今は俺は肩を掴まれていて、手を動かすことが出来ない。

電話さしてくれと言っても今この子の常態じゃ聞く耳を持たないだろう。

どうすべきか考えていると、救いの手が差し伸べられた。

「あれ？　一樹さんじゃん。こんなところで何してんの？」

「ほんとうです、こんなところでアスナさんと何しているのですか？」

そう言って俺達に声をかけてきたのは、ハルナとゆえちゃん。

これなら何とか助かりそうだ。

それにしてもこの子の名前はアスナ？　まさかとは思うがこのかちゃんの同室の子ではないだろうな。

「何？　パルにゆえちゃん、この不審者と知り合い？」

アスナと呼ばれた子は未だに俺を怪しげな目で見つめながら、二人

にそう尋ねる。

「知り合いと言うか、まぁ良くしてもらっている先輩かな？　ねえ、ゆえ？」

「はい、私達は一樹さんにいつも良くしてもらっています。ところで一樹さんはこんな所で何してるんですか？」

俺と知り合いである事を証明し、俺に何をしているのか尋ねてくる2人。

「学園長に話があってここまで来たんだけど、この子に止められていたんだ」

俺は2人に事情を説明する、早くこの場を切り抜けたい。

結構周りが俺たちのことを見ているからだ。

「アスナ、松井さんは学園長に話があるのは本当みたいだよ。なんせいつも仕事を頼まれているみたいだし」

ハルナがそう言って俺の弁護をしてくれる。

「そうです、一樹さんは学園長から図書館島の仕事を任されているのは、私たち図書館探検部が保証します」

ゆえちゃんもそう言って俺のことを説明してくれる。

「うっ、そうなの」

アスナと呼ばれる子は事実を告げられバツが悪そうな顔をする。

「えっと、話も聞かず勝手に誤解してスイマセンでした」

そういって自分の非を認める彼女、どうやら正義感が強いだけで悪い子ではなさそうだ。

「いいよ、俺を知らない君から見たら当然の事だし。でも忠告するとしたら、もう少し人の話も聞いた方がいいよ」

俺はそう言って女のこの謝罪を受ける。

「俺の名前は松井　一樹、君の名前は？」

「私は神楽坂　アスナって言います」

「じゃあ神楽坂さんでいいかな？　俺は好きに呼んでくれればいいから。はい、仲直りの握手をしよう」

そう言って俺は右手をアスナちゃんの前へ差し出す。

「あ、私のことはアスナでいいです、私は一樹さんって呼ばせてもらいます」

アスナちゃんは俺の手をとって仲直りの握手をする。

「これでもうさっきのことは忘れよう、いいね？」

「はい」と答えるアスナちゃんは警戒心をなくしてくれて、ようやく笑顔になってくれた。

「じゃあ俺は学園長室に行くから、またね3人とも」

俺は3人にそう別れを告げて、学園長室へと向かう事にするのだった。

１６話（後書き）

ネギが麻帆良にやってきました。
ネギ自身が話に出てくるのは次になりますが、とりあえず原作に突入です。

17話

放課後、学生達は学業を終え、それぞれ自分なりの行動を開始する時間である。

そんな中一樹はと言うと、学園長室にやって来ていた。

学園長室のドアをノックすると、中から入室の許可がでる。

その声に従い、部屋の中に入ると、学園長が自身の机で書類と格闘しながら仕事をしていた。

「おぉ、松井君か。少しだけ待っといてくれるかの。これだけ終わらせれば一息つけるんじゃ」

学園長は俺の方を見てそう告げると、そのまま書類を処理する作業を続けて行く。

俺は特に手伝えることもないので、おとなしくソファに座って待っておくことにする。

それから十数分ほど待つと、学園長は最後の一枚に判を押して、背凭れに身体を預ける。

一息つくと、学園長は俺の待つソファの方に歩いてきた。

「待たせてすまんかったの。それで今日はどうしたんじゃ？」

学園長は俺の前に座ると、俺に謝辞を述べながら、早速話を促して

くる。

「このかちゃんから子供先生について話を聞いたんですけど、・・・どうやら早速バレかかっているみたいですよ？」

何がとは言わない。

壁に耳あり、障子に目あり。

何処で誰が聞いているかわからない、それに学園長はこれだけ言えば何のことかすぐに理解できる。

「・・・・・速すぎんかの？」

学園長もいささか驚いたと言う表情で、俺にそう尋ねてくる。

「そうですね、だから俺はこの事を学園がどう受け止めるのか聞きたいんです」

俺の言葉に学園長は腕を組んで考える。

「彼の修行の継続は最優先じゃ、これは変えられん」

しばらく考え込んだ後、学園長は俺にそう告げる。

「このかちゃんのルームメイトが魔法について知ってしまってもですか？」

伝えていなかった事実を告げる。すると、学園長は俺にある事を説明し始める。

「このかのルームメイト、アスナちゃんじゃの。これはここだけの話にしてくれるかの？」

念を押して俺にそう告げてくる学園長に、俺もただ事ではないと気を引き締める。

「アスナちゃんはもともとこちら側の人間なんじゃ。今は記憶を失っていて、そのことをまったく覚えておらんがの。ただアスナちゃんには特殊な能力が備わっていて、いずれその力を求めて良からぬ考えを持った輩が彼女を狙うかもしれない。だから彼女にはこの機会に魔法のことを知ってもらいたいと思っておる」

学園長の言いたいことは大体理解できた。

「学園で彼女の事を守り続けると言うことは？」

俺はそう問いかける。

「彼女がこれから先、麻帆良で生活を続けるなら何とかなるかもしれんが、いずれはここを出て行くことになるじゃろう」

学園長の言うことは正しい、それこそ学園都市であるこの場所で一生生活を続けて行く人間なんて、ほんの一握りの人間だけだろう。

俺は自分の中の情報を整理して、学園長に最後の質問をする。

「学園長の考えはわかりました。そう言うことなら俺は口を挟めませんし、魔法を知ってからのことは彼女の人生、俺は口出しできません。ただ一つ、魔法協会は子供先生に何の処罰も与えないのです

か？」

学園長の考えは、それイコール関東魔法協会の考えと思いがちだが、これは学園長の独断で決めていい問題ではない。

協会には何千と言う魔法使いが存在し、それぞれ決められたルールに則って生活を送っている。

それならこの学園にやってきた子供先生もそのルールに則って然るべきであり、それを破れば他と同様に厳罰に処されなければならない。

それを学園長が独断で許せば、このルールをトップが蔑ろにしていることであり、それに属する者達は不満が生じ、いずれはグループの崩壊を招くことになるだろう。

「今回は初犯と言うことで厳重注意に留める、それで皆も納得してくれるはずじゃ」

その程度が落としどころだろう。

一樹は聞きたい事は全て聞けたので、学園長にお礼を言うと、部屋から出ていく。

残された学園長は、ある人物に連絡を取る。

その人物とは２－Ａの前担任、高畑・Ｔ・タカミチ。

彼は現在ネギの近くで行動しているはずである。

近くにネギがいるならば、彼に学園長室に来るよう伝言を頼もう。

そう思い、学園長は部屋に備え付けられた電話の受話器を上げたのであった。

学園長室をあとにした俺は、図書館島に向かっていた。

図書館島司書としての仕事があるからである。

この時期は冬休みに本を借りていった生徒が、一斉に返却に図書館島に訪れるため、仕事は山のようにあるのである。

図書館島に向かう途中に大きな階段の前に辿り着く。

確かこの階段の上は女子エリアにある図書館があったはずである。

この学園の中には、学校ごとに図書室はあるし、エリアごとに大きめの図書館もある。

さらに図書館島という巨大な蔵書施設まである、この学園を作った人物はどれだけ本が好きだったのだろうか？

俺も本が好きだから嫌なことではないが、本を読まない人から見ればこれは多すぎと言ってもなんらおかしくないと思う。

そんな事を考えながら階段の方に視線を向けて見ると、階段の上の方から見知った顔が現れる。

図書館探検部の宮崎　のどかである。

階段の上に現れたのどかちゃんは、両手に何冊もの本を抱えた状態で階段を降りようとしていた。

あんな量の本を抱えながら、この長い階段を降りるのは危険なことである。

それこそ転んで大怪我が起きてもなんら不思議なことでもない。

彼女が危険な目にあう前に、手伝ってあげよう。

そう考えて階段を上がろうとしたその瞬間、視線の先ののどかちゃんは、階段を踏み外して、階段から落下してしまう。

やばっ！！　あの高さから落ちたらのどかちゃんは死んでしまう。

俺は持っていた荷物をその場に投げ捨て、のどかちゃんの落下するであろう地点にかけだす。

のどかちゃんの落下地点に全力で駆け込み、のどかちゃんの下に滑りこむ。

周りは静寂に包まれる。

階段から落ちたのどかは自分が死んだと思い、目をつぶっていた。

だが何時までも地面にぶつかった衝撃は来ず、身体は何かに抱かれている感触もある。

閉じていた目を開くと、そこは先ほど自分が落ちた階段の下、周りには本が散乱しているが、のどかの身体はどこにも痛みを感じない。

「痛つつ、のどかちゃん、何処も痛くない？」

その声は自分の下から聞こえる、その声には聞き覚えがある。

そして自分の腰の辺りを見ると、誰かの腕が巻きついている。

背中には地面の冷たく固い感触ではなく、何か温かくやわらかい感じがする。

「ふう、どうやら大丈夫そうだね、無事でよかった」

のどかはその場から慌てて起き上がる、そして自分の元いた所を見ると、自分の下にいたのは一樹であった。

一樹は身体を払いながら、その場から立ち上がる。

目の前の一樹を見ながら、のどかは混乱していた、現状に追いつけていないこともあるが、助けるためとはいえ、男性に抱きつかれた。

いくら一樹は慣れていたからと言って、さすがののどかもこれには思考回路がショート寸前。

のどかはそのまま気絶してしまうのだった。

一方、突然目の前でのどかちゃんに気絶され、俺はどう対処するべきか判断に困ってしまう。

とりあえず周りを見て、誰かいるか探す、気絶したのどかちゃんをそのままにしてはおけないから、手を貸してもらわないといけない。

左側を見ても誰もいない、右側を見ると・・・・・明らかに１０歳位の男の子が杖を構えた状態で固まっていた。

その少し後方には、先ほど別れたばかりのアスナちゃんの姿もあった。

俺の視線に動くことも出来ずその場で固まっている子供。

また、同様に固まっているアスナちゃん。

「えっと？　とりあえずアスナちゃん、今の光景見た？」

前方にいるのはおそらく子供先生だろうが、ここはアスナちゃんに話しかけておこう。

「は、はい！！　えっと、本屋ちゃんを助けてくれてありがとうございますっ！！」

俺の言葉に、固まっていたアスナちゃんもようやく動き出す。

そう返事とお礼を言いながら、アスナちゃんは俺のほうへと駆け寄ってくる。

「騒ぎにしたくないからこの事は黙っていてくれる？」

そう言ってアスナちゃんに今のことを口止めしておく。

「はい！　わかりました。でも本屋ちゃんは大丈夫なんですか？」

アスナちゃんは眠っているのどかちゃんの方を見ながら、心配そうにそう問いかけてくる。

「ああ、何とか間に合ったからね。今は気絶しているけど、身体はどこも怪我していないよ」

俺がそう言うと、アスナちゃんは安心したのかホッと息を吐く。

ところで依然として杖を構えたままで固まっている子供先生にも触れるべきだろうか？

「え～と、そこの君はそんな杖を構えて何してるの？」

俺の声にようやく反応して杖を下げる子供先生。

「いや、これは、その、あの」

かなり焦った様子で、ワタワタとしながら何とか弁解をしようとしている子供先生。

「ああっっ！！！　すいません一樹さん、私達ちょっと用事があるのでこれで失礼します！！」

そう言うと、アスナちゃんは子供先生を抱えて走り去っていってしまった。

ちょっと、のどかちゃんはどうするんだよ！！　介抱を頼もうと思っていたのに。

しかたない、何時までも地べたに眠らせておくわけにもいかないので、とりあえずベンチにでも寝かせるか。

俺はのどかちゃんを抱き抱えると、一番近くにあったベンチまで運び、そこにのどかちゃんを寝かせて、目が覚めるまではそばで介抱する事にした。

一方、一樹の前からネギを引っ張り去っていったアスナはというと、現在近くの林の中に飛び込んでいた。

掴んでいたネギを木にぶつけると、ネギの胸倉を掴みあげる。

「あんた、さっきはやっぱりなんかしようとしてたわね。あの杖構えて何しようとしてたのよ！？」

アスナの剣幕に、ネギは脅えながらも弁解を図ろうとする。

「あ、その「ごまかそうとしたってダメよ、あんた現にさっき杖を構えていたじゃない」あう～」

だがそれもアスナの捲し立てる言葉に遮られ、何も話すことが出来ない。

「あああ、あんたやっぱり本当は超能力者かなんかなんでしょ！！」

「い、いえ、違います、僕は魔法使いで「どっちだって一緒よ！！」

アスナはついに真相を掴んだ、やはり今朝からのおかしなことの原因は目の前のこの子供なのである。

朝から服は吹き飛び、そのせいであこがれの高畑先生の前で熊パンまで見られた。

「他の人にはどうかこのことは内緒に、でないと僕が大変なことに～」

ネギは本当に困った表情でアスナにそう頼みこむ。

「んなのよ知らないわよ！！」

だが怒りで頭が一杯のアスナには、その言葉は届かない。

「うう、では仕方ないですね、秘密を知られたからには記憶を消させていただきます」

ネギはそういって先ほどまで抱えていた杖をアスナに向ける。

「ええっ！！」

アスナはネギの突然の行動に驚きの声を上げるが、ネギは何かを唱え続けている。

「ちょっとパーになるかもしれませんが許してくださいね？」

そう言って杖を振り下ろそうとする。

「ギャー、ちょっと待ってーー！！」

アスナはその場から動いて、何とかネギを止めようとするが、それも間に合わない。

「消えろ！」

ネギがそう言って杖を振り下ろすと、消えた。

・・・・・アスナの制服が。

正確にはスカートとパンツ、それにカッターシャツとブラジャー、残ったのは学園の制服の上着だけであった。

「いやーーー！！」

突然来ていた制服がほとんど消えて、アスナはショックのあまり叫び声をあげる。

ネギは記憶を消す魔法を使ったのに、制服が消えたことを不思議に思い、首をかしげている。

アスナはまたも自身の服を消したネギを怒鳴りつけようとする。

しかし悪いことは重なるものである。

・・・

学園長からの連絡を受けた高畑・T・タカミチはネギの姿を探していた。

幸い近くにいることはわかっているのだが、ネギと分かれて少し時間が経っている。

その姿を見つけるのに時間がかかると思っていた。

だが、林の中から聞き覚えのある叫び声が聞こえてきた。

その声は彼が保護者を務めているアスナの声であり、そこから探し人であるネギの声も聞こえてくる。

これは都合のいいことだ、何せ二人とも探していたのだから。

タカミチは林の中に近づいて行き、二人に声をかけた。

・・・

「おーい、そこの2人、何やっているんだ?」

アスナ達の目の前に、なんとタカミチがやってきたのだ。

今朝は熊パンを見られ、今度はアスナが隠しておきたかった最大のコンプレックス、パイパンを見られてしまった。

「い、いやーーーー！！！！！！！！！！」

アスナはもう叫ぶことしか出来ないのであった。

のどかちゃんをベンチに寝かせてから１０分、ようやく目を覚ましてくれた。

「あれ？　ここは？」

目覚めたばかりで現状がわかってないのか、辺りを見回して情報を収集しているのどかちゃん。

「おはよう、のどかちゃん。いきなりで悪いけどさっきの事覚えている？」

そんな彼女に俺は声をかける。

「え、私は、え～と、図書館で本を借りて、それで、あっ！」

俺の言葉に俺に気づいたのどかちゃんは、先ほどの記憶を思い出そうとする。

そして思い出せたのか、声を上げてこちらを見る。

「まあ落ちたのどかちゃんを助けたまではいいけど、すぐに気絶しちゃってね。まああれから１０分ぐらいしか経ってないからいいんだけどね」

「その、ごめんなさい、・・・それとありがとうございました」

俺がそう言って説明すると、のどかちゃんは非常に申し訳なさそうな表情になって俺に謝ってくる。

そしてその後に、少し顔を赤くしながらお礼をいう、また恥ずかしがりな性格が出てきたんだろうか？

「気にしなくていいよ、それより怪我はない？」

「は、はい、大丈夫です」

そう言うのどかちゃんの顔はまだ少し赤い、最近は俺の前ではマシになっていたのに。

「よし、じゃあこの本はどこに持って行くの？　運ぶの手伝うよ」

「え、だ、大丈夫ですから・・・・・・」

俺がそう言って立ち上がると、のどかちゃんはそう言って、俺の言葉を断ろうとする。

「俺はさっきみたいな事になられるほうが怖いよ、さ、だから行こ

う」

そう言って、俺はのどかちゃんが寝ている間に集めておいた本の３分の２を持って、女子寮の方角へ歩き出す。

「あ、あの、一樹さん、こっちです」

のどかちゃんはそう言って俺の反対側、女子中等部の方を指差す。

どうやら俺はもう１回あそこに行かなければならないらしい、方向を転換して、ずっと顔を赤くしたのどかちゃんと共に、女子中等部へと向かって歩いていくのだった。

１７話（後書き）

５０万ＰＶに達したら記念に何か書こうと思っているんですが、次の選択肢なら皆さんはどれが読みたいですか？

Ａもしもガッシュのあのキャラがネギまに登場したら

Ｂこの作品の設定のまま、主人公を別の世界に突っ込んでみる

Ｃそんなことしてないでさっさと続きを書け

Ｄその他

Ａ～Ｄのうち読みたいものがあれば、感想にお願いします。

一応５０万ＰＶに達しそうになるまでは、続けると思います。

Ｃの意見が多ければ、途中で打ち切ることもあります。

18話

場所は再び学園長室の前。

そこに今度は二人の人物がやってきていた。

神楽坂アスナ、中等部２－Ａに所属している生徒であり、今回の被害者。

ネギ・スプリングフィールド、今日この学園にやってきて、アスナの所属する２－Ａの担任に就任した、数えでわずか１０歳の少年、ちなみに今回の加害者である。

ネギが普通の人間ではないと疑っていたアスナだったが、先ほどついにその証拠といえる物を掴まれてしまった。

それに困ったネギは、アスナの記憶を魔法で消そうとして、何故か服を消してしまう。

更に災難は続き、その現場を同じく先生である高畑に見られてしまい、ネギとアスナの間には気まずい雰囲気が流れている。

ネギが学園長室のドアをノックすると、学園長の返事をする声が聞こえる。

それに従うようにネギは部屋の中に入り、アスナもその後に続く。

部屋に入ると、中には学園長が一人待ち構えていた。

「2人ともよく来たの、そこに座りなさい」

学園長の様子がいつもと違う。

普段は万人に優しい好々爺のような学園長であるが、今日はその雰囲気がまったく感じられない。

その表情は笑っているのだが、まるで作られた笑顔。

様子のおかしい学園長に戸惑いながらも。学園長の言葉に従って、ネギとアスナは学園長が座る机の前に並べてあった椅子に座った。

「アスナちゃん、今日はネギ君が大変迷惑を掛けてすまんかった、ワシから詫びさせてもらう」

そう言って学園長は頭を深々と下げる。しかしアスナは学園長がアスナに頭を下げる理由がピンと来なかった。

確かに今朝からネギには迷惑掛け続けられてるが、それを学園長に謝られてもとアスナは思う。

「いや学園長、私迷惑なんてべつに・・・」

アスナはそう言って学園長に頭を上げてもらおうとするが、次の言葉でアスナの表情が変化する。

「掛けられておったじゃろう、ネギ君の魔法の力で？」

「「えっ！！」」

2人しか知りえない今日一日の出来事を学園長から指摘され、ネギとアスナは驚愕の表情を浮かべ、声を出して驚いている。

学園長はネギの前までやって来て、ネギに声をかける。

「ネギ君？　ワシが朝なんて言っておったか、頭のいい君なら覚えておるの？」

学園長の問いかけに、ネギはビクッと身体を振るわせる。

「は、はい、2度とチャンスはない、ダメだったら故郷に帰らなければならない・・・です」

ネギは自分の失敗をすでに知られていることがショックであったのか、その顔はこの世の終わりと言ってもおかしくない表情に変化する。

「ちょ、ちょっと待ってください学園長！！　いくらなんでもここに来て1日で帰らせるなんてっ！！」

アスナが何故かネギをかばうために、学園長とネギの会話に割り込む。

その表情は自身が迷惑を掛けられたことなどすでに忘れているようだった。

「アスナちゃん、今回ネギ君は自分の修行に失敗した、これはもう変わらん事実じゃ。」

学園長がアスナの方に顔を向け、そう諭す。

「で、でも・・・」

アスナは何とかネギを助ける考えはないかと、知恵を振り絞るが、そんなものすぐには出てこない。

悔しそうに唇を噛み締めながら、黙ってしまう。

「じゃが一つだけ方法がないこともない」

「なんですかっ!?　その方法って!?」

学園長のその言葉に、アスナは藁にも縋る勢いで学園長に問いかける。

「このことを知っているのはワシら3人のみ、ならワシらが黙っていれば誰にもバレんわい」

そう言って、学園長は今日の出来事をなかったことにしてくれないかとアスナに提案する。

「もちろんアスナ君が質問したいことはちゃんと説明するし、こちら側のことを最低限教えるつもりじゃ」

「それなら!!」

「ただし、ワシはまだそれを認めるわけにはいかん。ネギ君何故かわかるかの?」

アスナがその言葉に飛びつきそうになるが、学園長はそう言って、

ネギに問いかける。

「・・・すいません、わかりません」

ネギは俯きながら、搾り出すようにそう答える。

アスナはその答えをネギに教えたいが、あいにく自分もわからない。

その悔しさに悶々とした気持ちになる。

「ネギ君、顔を上げなさい」

学園長にそう言われ、ネギはゆっくりと顔を上げる。

その瞳にはうっすらと涙が浮かんでいる。

それは修行を続けられなくなることに対してか、それとも学園長の問いかけがわからないことに対する悔し涙なのか。

そんなネギの頭に学園長は手を伸ばす。

ネギは叩かれると思ったのか、ぎゅっと目を閉じて歯を食いしばる。

だが、学園長がそんなことをするはずもなく、ぽんと頭の上に手を乗せると、そのままネギの頭を撫ではじめる。

しばらく撫でられ落ち着いたのか、ネギも硬く閉じていた目を開ける。

「ネギ君、それはな、簡単な事なんじゃよ。悪いことをしたら、き

ちんと謝る。もちろん相手が許してくれるまでじゃ」

そう話す学園長の顔は、自分の孫に言い聞かせるような、そんな優しい表情だった。

学園長の言葉を聞き、ネギは目に浮かんでいた涙をぬぐい、席から立ち上がって、アスナの前に立つ。

「アスナさん、その、朝から色々迷惑かけてすいませんでした。たくさん迷惑を掛けてしまったんですけど、それでも僕のこと、許してくれますか？」

そう言ってアスナの方へ深く頭を下げる。

アスナはそんなネギの姿を見て、自身も立ち上がる。

「今回だけだからね、次にあんなことしたらただじゃ済まさないわよ」

そう言ってネギの頭をクシャクシャとなで回す。

ただし気恥ずかしいのか、そっぽを向きながらではあるが・・・

「ネギ君、アスナちゃんがこう言ってくれておるから、今回だけは不問とする。ただし今度こそチャンスはないと思っておくんじゃぞ」

学園長はそう言ってネギの処分を終わらせる、それを聞いたネギはホッとした表情で頭を上げる。

「アスナさん、今日は本当にごめんなさい、それとありがとうござ

いました」

そう言ってもう一度、ネギは頭を下げる。

「いいわよもう、それより教室に行きましょう。みんな待っているわよ」

アスナはそう言ってネギの手を掴み、学園長室から連れ出そうとする。

「え？　教室？　それにみんなって？」

ネギはわけがわからないので、戸惑った表情を浮かべる。

「いいから早く来なさい、それじゃあ学園長先生、失礼しました！！」

アスナは学園長に挨拶すると、ネギを学園長室から連れ出していく。

その場に残された学園長は、ただ嬉しそうに笑っているのだった。

「ところで、あんたなんでこんなところで先生なんかしてるのよ？
魔法使いなんじゃないの？」

教室へと向かうと中の道で、アスナはふと気になっていたことを口にした。

「それは今がマギステル・マギになるための修行期間だからなんです」

ネギはそう答えたが、アスナはそもそも魔法使いのことなど何も知らない。

なのでマギステル・マギと言われても何のことだかわけがわからない。

「マギスなんとかって何？」

アスナはそうネギに問いかける。

「え～と、マギステル・マギと言うのは世のため人のために陰ながらその力を使う、魔法使いの中でも最も尊敬される人のことなんです。それで今は仮免期間といいますか、この修行をクリアしないことには僕は一人前の魔法使いと認められないんです」

ネギはそう言ってアスナに説明していくが、アスナはイマイチよくわかっていない。

「ふ～ん、で、バレたら故郷に帰されるってわけ？」

なので生返事をしながら、先ほど学園長室で聞いた情報を適当に口にして行く

「それだけじゃありません、仮免没収の上に、ひ、酷い時はオコジョにされてしまうんです！！」

ネギはパニックに陥った表情でアスナにそう告げる。

オコジョ、なにそれ。

魔法使いのよくわからない掟に、アスナは言葉を失う。

「まあ今回だけは黙っててあげるから気をつけなさいよ。それよりあんた魔法使いだったらどんな魔法が使えるのよ？」

その話はもう終わり、っとアスナはネギに別の質問を告げる。

「ありがとうございます、僕が使える魔法ですか？　修行中の身なのであまり多くありませんが・・・」

ネギはアスナの忠告にお礼を告げると、指を顎の下に当てて考え込む。

「惚れ薬とかは！？」

アスナの想像の中で、彼女が欲しい魔法関係の物を口にする。

「・・・ありません」

が、ネギは困った表情でそう答える。

「ううっ！　ならお金のなる木とかは！？」

「あの・・・意味がわからないんですけど・・・」

他に思いついたことを口にするが、ネギにそう言われ、アスナもが

っかりと言う表情になる。

「ん～、いまいち使えないわねあんた」

「すいません、他に使えるとしたら読心術ぐらいしか」

アスナのその言葉に、ネギは落ち込んだ様子でそう呟く。

しかしそれはアスナにとって聞き捨てならない情報だった。

「あんた読心術なんて本当に使えんのっ!?」

驚いた表情でそう尋ねるアスナ。

「は、はい。一応使えますが「ならそれを使って私に少し協力しなさい、いいわね!?」わかりました!!」

アスナはネギの身体を揺らしながらそう約束させる。

ある企みを胸に秘めながら、アスナはネギを引っ張って教室へと急ぐのであった。

さて、一樹とのどかの二人は共に２－Ａの教室の前にやってきた。

ところで、教室に異様な雰囲気が漂っている。

と言うのも、人の気配は感じるのだが、一切物音がせず、教室内が静まりかえっているのである。

「のどかちゃん、中には誰かいるようだけど何でこんなに静かなの？」

そんな雰囲気を不審に感じた一樹は、このクラスの一員であり、理由を知っていそうなのどかに理由を尋ねる。

「たぶん新しくきた先生の歓迎会のために準備してるんだと思います」

のどかはそう言ってクラスの状況を説明する。

それを聞いた一樹は、それなら自分は退散しようと心に決める。

「じゃあ俺はそろそろ帰らせてもらおうかな？ここまで来れば帰りは誰かに本を運ぶの手伝ってもらえばいいよね？」

この本は図書館から借りてきたものらしいので、帰りは誰かに手伝ってもらえば問題ないだろう。

一樹はそう言って帰ろうとする。

「え、でも、まだ何のお礼もしていませんし・・・」

のどかはそういって一樹を引きとめようとする。

しかし、一樹は別にお礼してもらいたくて手伝ったわけじゃないので、その言葉に困った表情を浮かべる。

一樹はそう考えて断ろうとすると、不意に２－Ａの教室の扉が開かれる。

「も～ネギ君、早く入って来なよ～！！　ってあれ？　ネギ君じゃない、本屋に・・・誰ですか？」

中から現れた女の子は明らかに不審な目で一樹を見てくる。

「どうしたのまき絵、ネギ君は？」

そう言って中から他の女の子達も続々と現れる。

「あなた一体誰ですの？　ここは女子中等部の校舎ですわよ！！」

そう言いながら、クラスのリーダー格っぽい金髪の女の子が、一樹とのどかの間に割り込んでくる。

「あ、あの、いいんちょさん、その人は」

のどかはそう言って一樹のことを説明しようとするが、金髪の少女はそれが言い終わる前に次の言葉を述べ始める。

「大丈夫ですわよのどかさん、このストーカーはこのクラスの委員

長でもある私、雪広　あやかが追い払ってあげますわ」

そう言うと、目の前の女の子、委員長さんは一樹を追い払おうと、立ち向かってくる。

周りの子達も一樹のことを完全にストーカーと勘違いして、委員長さんを応援している。

はあ、やっぱりこういうことになるのか、一樹は今の状況にため息をつく。

唯一事情を知るのどかちゃんも教室内に連れ込まれ、一樹には弁解の余地もないだろう。

「あれ、一樹さん、こんなところで何してるんですか？　それにいいんちょも？」

そんな俺を助けるように、後ろから声をかけてくるのは、先ほど一樹とのどかをおいて何処かへ行ってしまったアスナとネギであった。

・
・
・

「申し訳ありませんでした」

そう言って委員長こと雪広あやかは一樹に頭を下げる。

一樹の後ろからやってきたアスナに事情を説明すると、アスナが一

樹を弁護するように、ここにいる理由を説明してくれた。

仕方がないのでのどかが階段から落ちたことも話して、心配なのでここまでついてきたという真実半分嘘半分の理由を一樹が後付けする。

そこまで話すとあやかも自分の勘違いに気づいて、一樹に謝罪をしたのだ。

周りの子は「委員長の早とちり～」といって囃し立てる。

あやかは「あなた達もでしょ！」と反論するが、数が違い過ぎるため、周りの子達が優勢だった。

「じゃあ俺はもう帰らせてもらうよ、これ以上ここにいても仕方ないし」

そう言って一樹は次こそ帰ろうとする。

「いえ、なにもお詫びせずにこのまま帰すわけにも行きません、せめてネギ先生のお祝いパーティーに参加していってください」

だが、あやかは一樹の腕をつかんで放さない、それどころかここに残れと言う。

「皆さん、よろしいですか？」

「「「「「いいよ～！！！」」」」」

あやかの問いかけに、クラス全員がそう言って了承した。

ここで帰ると言うことは気まずいのか、一樹も折れる。

「じゃあ少しだけお邪魔させてもらうよ、用事もあるからあまり長くいられないけどね」

「わかりました、では楽しんでいってくださいませ。では皆さん、あまりネギ先生をお待たせしてはいけません。はじめましょう」

一樹の了承の言葉を聴くと、あやかはパンパンと手を叩いてクラスメイトに指示を送っていく。

主賓のネギはこちらが合図するまで、教室の外で待っていた。

あやかは外にいるネギに合図を出して準備を整える。

ネギが教室に入ってくると、皆はいっせいにクラッカーを鳴らして

「「「「「ようこそ!!　ネギ先生ーッ!!」」」」」と歓迎の言葉を告げた。

そして女の子達はネギの方に集まっていき、ネギに用のない一樹は教室の端っこでジュースをちびちびと飲むことにした。

「一樹君、災難やったな」

そう言ってこのか、のどか、ゆえ、ハルナ、刹那の五人が近づいてきた。

「みんな、俺を助けてくれても良かったじゃないか？」

一樹はそう言って5人に愚痴をこぼす。

「うちらは教室の奥の方におったから来てたんが一樹君やってわからんかったんよ」

「そうです、助けられなかったのはすいませんが、今回はしかたなかったです」

このかとゆえはそう言って、助けられなかった理由を説明する。

「私も出ようと思ったのですが、委員長さんが行ったので教室で待機していました。すいません」

刹那ちゃんも助けられなくて申し訳ないと謝ってくる。

「パルはドアの近くにいたのではなかったですか?」

ゆえがハルナにそう尋ねる。

「いや〜、ちょっと面白い展開になりそうだったから止めるに止められなくって」

はははと笑いながらそう弁解するハルナ。

バッシーン!

「ぐはっ!!」

一樹のデコピンがハルナに火を噴き、ハルナは痛みに地に伏してい

る。

「パルのせいでいらぬ騒ぎが起こったです、反省しろです」

そう言ってハルナに説教をするゆえ、その表情はゴミ虫を見るような冷たい瞳であった。

「あの、私のせいで、ごめんなさい」

のどかも騒ぎの原因だったので一樹に謝ってくる。

「いいよ、気にしなくて」

「それにしてものどかの危機に颯爽と現れて救出するなんて、のどか、あんたもしかして一樹さんに惚れちゃったんじゃないの～？」

ハルナがそう言ってのどかを茶化しはじめる。

するとのどかは顔を一気に真っ赤にしてしまった。

「「「「「嘘ぉ～！！！」」」」」

いつのまにか他の子達も周りに集まって来ていて、真っ赤になったのどかを囃し立てる。

「いいな～、なんか王子様見たいじゃん！！」

「私もそんな助けられ方されてみた～い！！」

「頑張れ、本屋ちゃん！！」

みんないろんな事を言っているので、のどか本人もさらに真っ赤になっている。

そんな状況になれば、当然一樹も恥ずかしくなってくる。

「さて、俺はそろそろお暇させてもらおうかな」

一樹はこの場からの一刻も早い脱出を試みる。

「ええ～、まだいいじゃん」

「そうそう、もう少し残りなよ～」

が、女の子達は一樹の腕を掴み、帰るのを引き止めてくる。

その顔には好奇心といったものを多数含ませて・・・

「まあまあ、みんなここは私に任せて、私は朝倉　和美って言います。お兄さんは私の質問に答えれば帰っていいですよ?」

そう言いながら、一人の女の子がメモ帳を持って一樹の前に出てくる。

さっさと帰りたいが答えないと帰れないだろう、なら答えれる質問だけに答えてさっさと帰らしてもらうか。

そう考えた一樹はその子に少しだけ付き合う事にした。

「少しだけね、俺もこのあと用があるから」

「では早速、まずはお兄さんのお名前と年齢は？」

「松井　一樹、歳は１６歳、麻帆良学園の男子高等部の一年だよ」

一樹が答えると、和美はメモを取りながら一樹の話を聞いている。

「ではこのかさんやゆえっち達と知り合いのようですが何故ですか？」

「俺が図書館島で司書の仕事をしているから、それで知り合ったんだよ」

「ええっ！！　もしかしてこのかが行方不明になった時に助けた人って！？」

和美はそう大声をあげる。

その言葉につられるように、話を聞いていた子達も盛り上がって行く。

この話はクラスでも一時話題になった、その人物が目の前にいるのである。

このクラスが盛り上がらないわけがない。

「あー！みんな静かに。次の質問行くよー」

和美がそう大声をあげると、皆も話を聞くために静かになる。

「本屋ちゃんのことどう思っていますか？」

一樹は本屋という人物を連想して、のどかであると予想する。

そしてのどか本人も「私本屋じゃないですー」と言っているので間違いないだろう。

「十分可愛いと思うよ、でも前髪を上げればもっとかわいくなると思うよ」

そう言うと周りはまた騒がしくなる、一樹はもう勘弁して欲しいと嫌気がさしていた。

もうここから撤退する以外、一樹に選択肢は残されていない。

一樹は逃走経路を捜索中に、ある人物と目があう。

その目はざまあみろと言わんばかりだ。

くそ、ここはお前にも撤退を手伝ってもらおうじゃないか？

そう考えた一樹は、この場に爆弾を投入する。

「みんなここで1つ面白いことを教えてあげよう。あそこで踏ん反り返っているエヴァンジェリン。ミドルネームはキティちゃんって言うんだ」

一樹がそう言うと、テンションが上がりきっている女の子達は、一斉にエヴァの方を見て驚きの声を上げる。

エヴァは何てことを言ってくれたと言う目で一樹の方を睨んでいるが、一樹はその間に教室から脱出して行ったのであった。

18話（後書き）

学園長ー！？

書いた文を読み直して、自分で悶えてしまいました（笑）

前との大きな変更点として、最後のこのかの部分がなくなりましたね。

これは前回と違い、まだ仮契約もしてませんし、このかの気持ちももっとはっきりさせてからでもいいかと言うことで変更しました。

なので、このかがヒロインじゃなくなったというわけではありませんよ。

19話（前書き）

ヤバイ、何がと言うと花粉がです。
昨日辺りから症状が出てきました、何が「あれ、今年結構楽かも？」だよ。
前日までそんなこと言っていた自分が憎い。
まぁとりあえず頑張ります、では最新話をお楽しみください。

19話

外はまだ日も昇っておらず。時刻は5時を回った頃合いである。

ネギが麻帆良学園にやってきた翌日、女子寮にあるアスナとこのかの部屋からは大絶叫が響いてた。

二段ベッドの上の方に寝ていたアスナは、シーツで身体を身体を隠しながら、同じくベッドの中にいたネギに怒鳴り声を上げている。

「ちょっとあんた、なんで私のベッドで寝ているのよ！」

昨日の様々な出来事をアスナに謝罪し、それをアスナに許してもらたネギ。

そして何とかこの部屋に置いてもらえるようになったネギであったが、またもや問題を起こした。

昨日はベッドも用意できていないので、ネギには仮のベッドとしてソファが提供された。

そして就寝した時はたしかにソファで眠っていたのだが、何故か今はアスナのベッドの中で眠っていた。

寝ぼけた様子で目を擦るネギは、アスナのことを自身の姉と勘違いするが、意識が覚醒すると共に目の前の人物がアスナである事に気づいた。

「ア、アスナさん、すいません。僕いつもお姉ちゃんと一緒に眠っ

ていたのでつい・・・」

ネギはそう言ってアスナに必死に謝罪する。

「な、何よそれ!?　まったく子供なんだから」

ちゃんとソファを貸したげたでしょと、ソファを指差すアスナだが、時計に刻まれた時刻を見て焦る。

慌てて身支度を整えると、部屋から出ていってしまった。

ネギは謝罪もすんでいないのに、アスナが出ていったことで、ネギは不思議そうにアスナの出ていったドアの方を見つめている。

「アスナさんは何処へ？」

独り言のように呟いたのだが、それに答える人物がいた。

「アスナはバイトやで」

エプロンを身につけたこのかである。

先ほどのアスナの絶叫で起きたこのかは、これから朝食の準備に入るところであった。

「ネギ君、後でアスナにちゃんと謝っときな、アスナもちゃんと謝れば許してくれるはずやから」

このかの言葉に、ネギは昨日のアスナとのことを思い出す。

たしかにアスナはちゃんと謝れば許してくれた。

ネギはアスナが帰ってきたらちゃんと謝ろうと心に決める。

「はい」っと元気よく答えるネギに、このかはネギに笑顔を向ける。

「ネギ君、朝ご飯作ってあげる。目玉焼きとスクランブルエッグ、どっちがいい？」

このかは手に卵を握りながら、ネギにそう尋ねる。

「それじゃあ、卵焼きでお願いします」

ネギは控えめにそう答える。

それから朝ご飯が出来るまで、ネギは窓から外の風景を眺める。

物思いにふけっている間に、このかが朝食の準備を整えた。

このかはネギに声をかけると、二人きりでの朝食を始めるのであった。

朝食も終わり、それからしばらくするとアスナが帰ってきた。

アスナが帰ってきて、すぐにネギはアスナに頭を下げた。

帰ってきて早々に頭を下げられアスナは戸惑ったが、朝の事を謝れていることがわかると、ネギの頬をつねりながらも、最終的にはこのかのいう通りネギのことを許した。

それからアスナも朝食を食べ、今日の準備をしていたのだが、朝のごたごたで時間を取った事で、アスナ、このか、ネギの3人は現在学園までの道のりを走っていた。

周りには同様に学園に向けて走る生徒が多数、つまり彼女達は遅刻しそうなのである。

「全くもー、バイトも遅刻しちゃったし、やっぱあんた泊めるんじゃなかったわよ」

アスナはそう言ってネギに悪態をつく。

その言葉にネギはうぅっと俯いてしまう。

「アスナ、そんなんいったら可哀想やろ。ネギ君もそんな落ち込まんと」

このかがそう言うと、アスナは子声で謝り、ネギも顔を上げる。

アスナはネギの耳をつまむと、ネギに聞こえるぐらいの声で話しかける。

「いい、あんたが魔法使いってばれたらいけないんでしょ。絶対に学園内で魔法使っちゃダメよ」

アスナはそう言ってネギに忠告をする。

ネギもこれ以上魔法のことがばれると学園にいられなくなるので、素直にアスナの忠告に頷いた。

それからはネギはなるべく魔法の力を使わないようにした。

色々な問題も起こったが、なるべく自分の力で２－Ａを導いていき、時は学年末試験直前まで過ぎていた。

学園の雰囲気はテスト前と言うこともあり、ピリピリとした空気があちらこちらで漂っていた。

それは明石祐奈、椎名桜子と共に学園内の廊下を歩いていたネギも感じていた。

「何か他のクラスの方々はピリピリしていますね？」

「あーそうだね」

ネギが二人にそう問いかけると、二人は笑いながらそう答える。

「そろそろ期末テストが近いからね」

「来週の月曜からなんだよ」

二人がそう教えると、ネギもそうなんですかと他のクラスの人々に感心する。

だが、すぐにある事に気づく。

「って、それはうちのクラスもじゃないですか！？」

叫ぶようにそういったネギを見て、二人は困った顔をする。

「うちの学校はエスカレーター式だからあんまり関係ないんだ」

「それに２－Ａは毎回学年最下位なんだよ」

照れるように笑いながらそう話す二人に、ネギはこのクラスの将来を心配する。

そんなネギの耳に、自身の名を呼ぶ声が聞こえる。

「ネギ先生、ネギ先生。至急学園長室までお越しください」

それはネギの呼び出しを告げる放送であった。

「すいません、呼ばれているのでちょっと行って来ますね」

「「いってらっしゃい」」

二人に挨拶をして、ネギは学園長室に向かっていった。

学園長室に到着したネギは、机に座っている学園長の前に立っていた。

「あの、学園長、お話って？」

学園長に呼ばれるのはアスナに魔法がばれたあの日以来である。

そのためネギは自分がまた何かやってしまったのではないかと、不安げな表情になっている。

「ふぉふぉ、そんなに緊張せんでもよいぞネギ君。今日は別に怒るために呼んだわけではない」

学園長はそう言ってネギに落ち着くように諭す。

ネギはその言葉を聞いて安心したようにため息をつく。

「今日呼んだのは、ネギ君をこの学園の教師として本採用するための最終試験を伝えるためじゃ」

学園長はそう言って机の上に一枚の紙を置く。

「そこに書かれていることを達成できたら、ネギ君をこの学園の教師として正式に採用する。頑張るんじゃよ」

学園長のその言葉に、ネギはその紙を受け取ると、一礼をして学園長室をあとにした。

学園長室から出ると、ネギは早速その紙に書かれた内容を確認する。

ドラゴンの討伐、それとも攻撃魔法を２００個習得！？

ネギは最終課題と書かれたその紙を見ながら、そんなことを想像する。

その紙を開くと、そこにはネギの想像とはかけ離れた内容が書かれていた。

ネギ君へ

次の試験で２－Ａを学年最下位から脱出させたら正式な先生にしてあげる

麻帆良学園学園長　近衛　近右衛門

その内容を確認して、ネギはホッとした表情を見せる。

そもそもここは普通の学校なのだから、そんな無茶な課題が出るはずもない。

しかし、ネギは先ほどの会話を思い出す。

「うちの学校はエスカレーター式だからあんまり関係ないんだ」

「それに２－Ａは毎回学年最下位なんだよ」

この試験、そんなに簡単なものではないのかもしれない。

そう思ったネギは、とりあえず一番親しいアスナに相談することにした。

「短い付き合いだったけど、あんた向こうに帰っても元気でね」

話を持ち懸けて、すぐに帰ってきたのがその言葉である。

ネギは膝をついて絶望した。

アスナはそんなネギの姿を見て、悪い事をしたという表情になる。

「ちょっと、冗談よ。でもその課題は本当に難しいかもね」

急いでネギを立たせると、アスナはそう言って話を続ける。

「うちのクラスって基本的に勉強にやる気がないのよ。それこそ一部の天才を除いて、ほとんどが似たような学力のはずよ」

「はい、そうなんです」

アスナの言葉に、ネギはアスナに見せないように自身で作った２－Ａの学力分布図に目を向ける。

そこにはわずかな学年上位組と、３００位から６００位の間で固まっている大半の生徒、そしてクラスの中でも特に学力の低い、アスナもその一員であるバカレンジャーの５人。

ネギはこれを見ながら、どうやって生徒たちにやる気を出してもらうか考える。

自身の試験のことを伝えるわけにもいかない。

アスナにはその事を相談してしまっているのだが、ネギも結構テンパっていたのでそれは仕方がない。

「よし、とりあえず今日はＨＲで勉強会をしましょう」

とりあえず何とか勉強をさせて、すこしでも学力を上げてもらおう。

そう思ったネギはこの後起こる事を想像もせず、そう決めてしまったのだった。

その後、ＨＲを終えたネギの頭には大きなたんこぶが出来ていた。

ＨＲで大・勉強会の開催を宣言したネギであったが、そこでクラスメイトの一人である桜子がある提案をする。

その名も英単語野球拳、要は答えられなかったら服を脱がされる遊びである。

しかし、そのことを知らないネギは生徒の自主性を重んじて、その提案を受け入れる。

そして見事にひん剥かれたアスナに、怒りの拳骨を落とされたのであった。

頭に出来たこぶをさすりながら、ネギは今後どうやって２－Ａを指導して行くべきか、悩むのであった。

時刻は夕方、乙女達は寮の中にある浴場に集まっていた。

すでに学校は終わり、乙女達は一日の汗を浴場で流している。

その乙女達の中には、２－Ａの生徒の姿もあった。

神楽坂　アスナ、長瀬　楓、佐々木　まき絵、クーフェイのバカレンジャー４人、、それに楓と行動を共にする鳴滝風香、史伽姉妹の姿があった。

そこに図書館探検部の近衛　このか、宮崎のどか、早乙女ハルナ、そしてバカレンジャー最後の一人でもある綾瀬　ゆえが近づいてくる。

「アスナー、大変やー」

そういってこのかがアスナの方に近づいてくる。

「実はな、噂やねんけど、次の試験で学年最下位やったら、２－Ａはクラス解散になるかも知れへんねん」

このかのその言葉に、その場に居た全員が信じられないという表情を見せる。

「おじいちゃんに聞いても否定もせいへんし、結構本気で怒っとるみたいやねん。だからもしかしたらってこともあるやろ」

実際はそんな話あるわけないし、義務教育期間である中学生にそんな事できるわけもない。

そもそもこれは学園長がこのかを通じて２－Ａに危機感を持たせようとしたのである。

そしてネギのためでもある、表立って助けてあげることの出来ない学園長からの、ささやかな支援のつもりであった。

そう、このあと話が思わぬ方向に飛び火してしまうまでは・・・

たまたまその話を聞いていた別のクラスの生徒の耳にも入って、噂は拡大していき、ついには学年全体が知ってしまう事態に陥ったのである。

最下位のクラスは退学、最終的にはそんな噂に発展してしまったのである。

それも生徒間だけで広まったので、誰も学園側に問い合わせることもなく。

これによって、２－Ａが最下位を脱出するのに、学園長は大きな壁を作ってしまったのであった。

１９話（後書き）

惚れ薬とかドッチボールの話はありません。
図書館島の話まで飛びました、さて果たして２－Ａは最下位を脱出できるのか！？
次回「ネギ、故郷に帰る」をお楽しみください（アレ？
冗談です（笑）
アンケートの方も継続中なので、まだまだ意見お待ちしております。

20話

さて、話は戻って、浴場のアスナ達はどうやってこの危機を乗り越えるか話し合っていた。

「でもどうやったら学年最下位を免れるのよ？」

アスナはその場に居る全員にそう問いかける。

「「「うーん」」」

その場に居る全員がどうすればいいか考えるが、誰もよいアイデアを思いつかない。

「まずいね、はっきり言ってクラスの足を引っ張るのは私達だし」

目に涙を浮かべながら、まき絵がそう話し

「今から死ぬ気で勉強しても、月曜には間に合わないアル」

それを引き継ぐように、困った顔をしたクーフェイがそう嘆く。

アスナ自身も自分が一番足を引っ張るのを自覚しており、どうやっても月曜の試験までに頭がよくなるはずもない。

一同がその難題に苦しんでいる中、ゆえが思いつめた顔で話しはじめる。

「こうなったら、アレを探すしかないですね」

ゆえのその言葉に、その場に居た全員がゆえに注目する。

「ゆえ！？」

「なんかいい方法があるの！？」

ハルナが驚いた声をあげて、アスナがそう問いかける。

そうしてゆえが説明するのは図書館島、その最深部にあると言われている魔法の本のうわさ。

その話に皆は期待を膨らませるが、所詮はうわさ。

最初はその話に盛り上がるが、今は全員が半信半疑と言った表情になっている。

「それなら一樹さんに聞いたらいいんじゃないですか」

のどかはそういって、図書館島を詳しく知る人物の事を持ち出す。

「おぉー、たしかに一樹さんは図書館島の何処でも歩きまわっているんだから、その本について何か知っているかも」

名案だと言わんばかりに、ハルナがそう盛り立てる。

アスナは頭の中で考える、ネギと言う魔法使いがいるのだから、本当に魔法の本もあるのかもしれない。

もしその本が存在しないとしても、それはそれで諦めればいい。

「それじゃあ一樹さんに聞きにいきましょう！」

「「「おぉー！？」」」

アスナのその一言で、その場に居た全員が一樹の元を尋ねることを決める。

そうと決まれば、彼女達は急いで浴場を出て着替えはじめる。

そして一旦部屋に戻って、再び全員が準備を整えて集合すると、一樹の元へ向かうのであった。

一樹は部屋でテスト勉強をしていた。

机に座りながら、今は数学の問題を解き進めているところである。

ピンポーン

そんな音が一樹の部屋の中に鳴り響き、来客を告げたのである。

その音を聞いた一樹は、やや不機嫌そうな表情で玄関に向かう。

無言のまま扉を少し開くと、扉の前には大勢の人物が立っていた。

「ヤッホー、一樹さん、ちょっと聞きた「バタン！」ってちょっと！？話も聞かずに扉を閉めないでよ！？」

気さくに手を上げながら、そう挨拶をしたハルナを見て、一樹は無言で扉を閉める。

ハルナはその扉をドンドンと叩きながら、一樹に抗議の声を上げる。

ハルナと一樹の普段のやり取りを知らないメンバーは、きょとんとした顔をする。

が、それを知る図書館探検部が説明すると、なるほどと全員が納得した。

「うるさいな、今忙しいんだけど」

再びドアを開いた一樹がそう文句を言うが、ハルナはお構いなしにドアを開いて中に入って行く。

「ちょっと聞きたい事があるだけだからさ。さ、みんなも中に入って」

そう言って、家主の許可もとらずに他のメンバーも中に誘導する。

楓やクーフェイ、まき絵にゆえと言ったメンバーは、挨拶をしながらさっさと中に入っていき、それにやや遅れてこのかやのどかが入って行く。

「アスナちゃん達もとりあえず入れば」

はぁっと大きなため息をつくと、一樹はその場に残っていたアスナと少年、ネギに声をかける。

何故この場にネギがいるのかと言うと、簡単に言えばアスナが連れてきたからである。

この中で唯一魔法に関する知識を有し、噂の魔法の本の真偽を見極められる人物だからである。

仮に一樹が魔法の本じゃないと思っていても、実はそれは本当に魔法の本でした、そんな展開があるかもしれないので、こうしてネギを連れてきたのだった。

一樹の後をついて部屋の中に入ると、部屋の真ん中にコタツが置いてあり、その上にはみかんが置かれている。

更にコタツの正面には結構高そうなテレビが置いてあり、男の子が好きそうなゲームが並んでいる。

そして部屋の奥にはもう一部屋あるであろう空間があるので、そこが寝室となっているのだろう。

アスナは思った、一樹さんって結構金持ち？

この部屋の間取りは１ＬＤＫで学生である一樹が住むには結構贅沢な部屋ではある。

ただしこれは学園長が一樹のために用意した部屋なので、一樹は家賃を払っていない。

もちろん光熱費などは自己負担で支払っているが、それも実際は学園長に頼まれる仕事、ほとんど雑用のようなものにたいして支払われる報酬で払っているので、ほとんど学園長が負担していると言ってよい。

テレビなどは一樹が今までの仕事で貯めたお金で買った物である。

さて、アスナ達がその部屋に入ってきた時、他のメンバーはすでにコタツの中に足を突っ込んでいた。

「うぅ、寒いでござる」

「全然温くないアルな」

楓とクーフェイがそう言って身震いをしており

「わーい、私みかん大好き！」

そう言ってまき絵はみかんの皮をむき始める。

「やっぱ冬はコタツでみかんだよねー」

「・・・」

ハルナも同様にみかんの皮をむき始め、ゆえはハルナを呆れた顔で見つめている。

ただしその手には一つのみかんを握りしめて。

一樹はもう一度大きくため息をつくと、コタツのコンセントを差し

込んで、自分も空いているところに座る。

「アスナちゃんとネギ先生だっけ？　とりあえずコタツに入りなよ」

一樹のその言葉で、その場に突っ立ったままであったアスナとネギもコタツの中に入り込む。

「お待たせー」

そう言いながら、このかとのどかがお盆に温かい飲み物をのせて戻ってきた。

それを配ると、二人もコタツの中に入る。

ここで彼女らがどう座っているのか説明すると、まずこたつの一つの面を一樹が一人で座っている。

その左側をハルナ、ゆえ、のどか、一樹の正面に楓、クーフェイ、まき絵、そして右側にアスナ、ネギ、このかという風に座っている。

やや窮屈そうではあるが、誰も文句言わずに座っているのである。

さて、アスナ達の前に配られたのは温かい紅茶

しかしアスナやネギ、それにゆえを除くバカレンジャーのカップは似たようなカップであるのに対し、一樹や図書館探検部のメンバーのカップはそれぞれ違ったものが使われている。

単純に数が足りないと言うわけでもなく、それぞれの好みに沿ったカップなのである。

「あんた達まさかそれって？」

アスナがまさかと言った表情で問いかける。

「へっへー、マイカップでーす」

ハルナがそう言って見せつけるようにカップを天高く持ち上げる。

「「「おぉー！？」」」

そして、お約束のように楓、クーフェイ、まき絵の3人が驚いた声を上げるのであった。

一樹はそれを冷めた目で見つめるが、その後は黙ってカップに口をつける。

そして紅茶の旨味に気分を落ち着ける。

「ここは私達図書館探検部の憩いの場なんだよ」

「家主未公認だけどな」

ハルナがそう言ってみんなに説明するが、一樹は認めていないという表情でそう呟く。

「もう、そんなこと言ってー、私達が来て嬉しいくせに」

「知るか」

そう言って一樹とハルナが漫才のようなやり取りをかわし、周りを笑わせることでその場を和やかな雰囲気に持ち込んで行く。

全員の体が温まるまでは、そうしたやり取りを行う。

「それで話って？　俺もテスト勉強があるんだけど」

そして数十分ほどが経ち、一樹はようやく話を聞きに入る。

基本的に学園内の学校はほぼ同時期にテストを行う、なので中等部と同様に、一樹もテスト期間中なのである。

一樹にそう聞かれるが、彼女達は誰も話し始めない。

話の内容が内容だけに、誰も最初に口を開きたいとは思わないのである。

「魔法の本はありますか」なんて、一樹なら確実に白い目で見るだろう。

「一樹さん、図書館島の中に、頭がよくなる魔法の本があるって聞いたんだけど？」

そんな中、ハルナがついに話しはじめる。

その場にいた一樹以外の全員が心の中で言ったーと叫んだ。

そして案の定、一樹はハルナを白い目で見つめる。

「・・・」

何も語らず、ただ白い目で見つめ続ける一樹の視線に、ハルナはまるで視線が刃物のように感じた。

「はぁ、あるわけないだろ」

やがて一樹が今日何度目かわからないため息を吐くと、そう答える。

その言葉に、ハルナは燃え尽きた表情でコタツに倒れかかる。

そして魔法の本に期待を持っていたもの全員がため息をついた。

「図書館島の奥にあるのは、君達が読んでも理解できない難しい古文書や、基調の資料が保管されてるだけだよ」

一樹がそう答えると、アスナ達もがっかりとした表情でコタツに倒れかかる。

ただしネギはそんな一樹の話を聞かず、一樹のある一点だけを見つめていた。

それからはもうその話は終わり、３０分ほど雑談をすると、アスナ達は女子寮へと帰っていった。

一樹はこれでようやく勉強を再開できると思ったが、その前にやることが残っていた。

「これの後片付け、誰がやるんだよ」

コタツの上には、全て食べられてしまい、その残骸となっているみ

かんの皮と、全員が飲んでいたカップが残されていたのである。

結局、カップを洗ってゴミを片付けて、一樹が勉強を再開できたのは、それから更に３０分後のことなのであった。

その翌日からアスナ達にとっては地獄の日々が始まった。

さすがに学園全体に流れたあの噂を聞いて、２－Ａの生徒もようやく本気になったのである。

そこでアスナ達の学力を少しでも底上げするため、委員長であるあやかの号令の元、バカレンジャー達を対象に、付きっきりの勉強の日々がスタートしたのである。

１日中勉強が付きまとい、彼女達に心の休まる時はなかった。

朝から参考書の問題を解かされ、授業中は居眠りすることも許されず、貴重な休憩時間も勉強からは解放されない。

トイレに行く時も、問題を解かないと行かせてもらえないという徹底したものだった。

放課後にはそれこそ地獄に行ったほうがましと思えるほどの問題を

解かされ、魂が天に昇ることさえ許されない。

むしろ迎えに来た天使を睨みで追い返す勢いだった。

そして眠りに着くころには彼女達は目がぐるぐると回っており、ベッドに辿り着くと、まるで死人のように深い眠りにつくのであった。

そんな日々を過ごし、テストを迎えたわけなのだが、そのころにはアスナ達の様子も最高におかしくなっていた。

バカレンジャーは昭和のアニメのようなビン底眼鏡をかけ、頭には必勝と書かれた鉢巻を巻いていた。

これを見たある魔法生徒は後に語る。

「いやー、私は超とハカセあたりがバカレンジャーを洗脳したんじゃないかと思うんすよー。いやマジで。じゃないとアスナ達があんな点数取れませんって」

テストの結果が発表され、先生はもちろん、他の学年を大いに驚かす結果が発表された。

女子中等部2年の学年平均が８０点を越え、２－Ａは８６．３点と学年で3位に入る好成績を修めたのであった。

これは麻帆良学園始まって以来、歴史の残る一大事件として後世語り継がれていくのであった。

長瀬楓８１点

クーフェイ７９点

佐々木まき絵７６点

綾瀬ゆえ８２点

神楽坂アスナ８５点

この時はバカレンジャーの称号を返還した５人である。

しかし、それから3日もたたないうちに、覚えた内容を全て忘れてしまったのは委員長以下、クラスメイトの誰もががっかりとため息をついたのであった。

「やはりにわか知識じゃこれが限界だたネ」

そんなことを呟いた生徒が居たかどうかは定かではない。

「よくやったの、ネギ・スプリングフィールド君。試験は合格じゃ、これからは更に精進するんじゃぞ」

「はい！」

そんな会話があったのはテストが終わった翌日のこと、アスナ達も正気に戻り、ようやくゆっくりとした時間が過ごせるようになったころである。

ネギはアスナを呼び出した。

それも大事な話があると告げて。

ネギに呼び出されたアスナは、学園の屋上にやってきていた。

屋上には誰もおらず、アスナが屋上のドアをしめると隠れていたネギが姿を表す・

「こんなところに呼び出しておいて、一体何の用よ。つまんないことだったらただじゃ置かないからね」

アスナはそう言ってネギにきつい言葉をかけるが、本人にそんなことをする意思はまったくない。

要は少しでも場の空気を軽くしようとしたアスナなりの優しさである。

そしてネギは硬く閉ざしていた口を開く。

「実は一樹さんなんですが・・・僕と同じ魔法使いかもしれないんです」

びゅうっと寒い風が吹く屋上に、ネギは衝撃的な言葉を発するので

あった。

２０話（後書き）

後半はほとんど無理矢理ですね・・・
最後のネギのくだりがやりたかったんです。
何故ネギがその事に気づいたのかは次回明らかに。

それとアンケートの件ですが、普通に更新を続けて、気晴らしに番外編を書こうと思います。
何時やるかは不明、とりあえずは更新を続けます。
以上報告でした。

21話

肌寒さを感じさせる冷たい風が、屋上に居るアスナとネギの二人を襲う。

しかし、アスナはそんなことなどお構いなしに、ネギの言葉に耳を疑っていた。

「一樹さんが魔法使いって・・・冗談でしょう?」

アスナは信じられないといった表情でネギにそう問いかける。

アスナと一樹、この二人はまだ出会って間もない、それこそ、出会った日がネギが麻帆良学園にやって来たその日である。

図書館探検部のメンバーと仲が良く、出会った時は失礼だった自分のことも、あまり気にせず許してくれた。

つい数日前にあった時も、お金持ちという疑問は浮かんだが、それ以外は何処にでもいそうな普通の先輩と言う印象しか持たなかった。

そんな一樹さんが目の前にいるネギと同じ魔法使いであるなんて、アスナには信じられなかった。

確かにネギ以外に、この学園の中に魔法使いがいることはアスナも知っている。

以前ネギがアスナに魔法がばれた時、学園長が最低限の情報とアスナが問いかけた質問に答えてくれたことで、アスナはこの学園の裏

の顔を知ることになった。

この時アスナは記憶を消すこともできると言われていたが、それは自分を否定してしまうような気持ちになり断っていた。

そして、誰が魔法使いであると言う話は聞かなかったが、学園長は多くの魔法使いやその関係者が存在すると言っていた。

だが、アスナ自身、自分の知り合いの中に魔法使いがいると言うことは、まるで隠し事をされているようで、心の中で否定したがっているのだ。

だが、ネギはそんなアスナの望みを打ち砕く。

「僕も最初は信じられませんでした、アレを見るまでは」

そう言って、ネギは一冊の本を取り出し、あるページをアスナに見えるように開く。

そこには、アスナには理解のできない、何処の言葉なのかわからない言葉で書かれた文章と、一枚の写真が載っている。

どうやらその文章はその写真に写るものを説明する文章のようだ。

そして、写真には指輪が一つ写っている。

ただその指輪には、説明文章であろう文章と同様の文字が指輪に掘り込まれており、何故か指輪の写真は大きな×マークで消されており、色もモノクロになっている。

「これは僕がイギリスから持ってきた本の一冊なんですが、この本がなんだかわかりますか？」

「そんなもん、私がわかるわけないでしょ」

ネギの問いかけに、アスナは意味がわからないといった表情でそう答える。

「これは僕の趣味の一つである、骨董魔法具の紹介がされている本なんです。それも、この本には僕程度の魔法使いには到底手に入れることの出来ないような、とても貴重な物ばかりが集められている本なんです」

そう言ってネギはこの本のページを羨ましそうに捲っていく。

ネギは骨董魔法具のコレクターであった、それもかなりのマニアであり、自身のお小遣いをこつこつと貯めては、骨董魔法具を買い集めていた。

そして今は本当に羨ましそうにページを捲っている。

その表情は、まるで好きなアイドルの写真を眺めているときのように、うっとりとしている。

「で、でも、それと一樹さんに、どう関係が有るのよ？」

目の前のネギの姿に、ちょっと引きながらもそう尋ねる。

「大有りなんです！？　もう一度このページを見てください！？」

ネギは興奮気味にそう言って、先ほどのページを再度開き、アスナの鼻先まで近づけてくる。

「ちょ、近いわよ」

「あ、すいません」

アスナの焦った言葉に、興奮気味だったネギも少し冷静さを取り戻す。

「この×マークは現在所在不明、もしくは失われてしまった本当に貴重な魔法具なんです。これは今から数百年前に何者かに盗まれ、その後行方知れずの指輪です」

「それと一樹さんって・・・・・・まさか!?」

アスナは少し考えた後、その答えにたどり着く。

「そうなんです。一樹さんの左手に、この指輪が嵌められていたんです」

ネギはアスナが考えていた通りの答えを口にする、そしてアスナはそれを聞いて、ネギの答えを否定するように首を振る。

「そ、そんなの、ただ似てるだけで、一樹さんの指輪がその指輪だって言う証拠がないじゃない」

アスナは信じてくない一心で、何とかその言葉を否定しようとする。

だがネギは、そんなアスナのことばを更に否定する。

「僕もあの時は気のせいだろうと思いました。いえ、そう思いこみたかったんです。ですが記憶の中にある一樹さんの指輪と、この写真を何度見比べても、二つが同一のものにしか思えないんです。それに・・・・・・」

そこまで言って、ネギは言葉を止める。

「そ、それにって何よ？」

アスナもそれ以上聞きたくないのに、続きを促してしまう。

「一樹さんが嵌めていたもう一つの指輪、あれも魔法具の一種だと思うんです」

そう言ってネギはアスナに魔法使いに必要な発動体の説明をする。

発動体といってもいくつかの種類がある。

魔法使いに主流なのはやはり杖であるが、中には指輪やそれ以外の何かを触媒としている者もいる。

そして一樹の指輪は、その魔法を使うための触媒であるというのだ。

アスナは信じられないと言った表情でネギの顔を見る。

「なんで」

ぼそりとアスナが呟く。

「なんでそんなこと言うのよ！？」

パーンッという音が屋上に響き渡る。

アスナの右手がネギの頬を振りぬいた音だ。

ネギの頬は赤く腫れ、アスナも思わず叩いてしまった手をじっと見つめる。

「ゴメン！？」

そう言うと、アスナは屋上から逃げるように走り去っていった。

屋上に一人残されてネギは、打たれて痛む頬を押さえながら、こんなはずじゃなかったのにと呟く。

ネギは魔法使いかも知れない一樹が現れたことで、新しい相談相手が出来るかも知れないと喜んでいた。

そして、アスナを魔法とは関係がない元の生活に戻せるかもしれないと言う期待も抱いていた。

だが、結果はこうなってしまった。

何処で間違ったのだろう？

そう思うネギの頬には、腫れた頬を冷やすように、一筋の涙が流れ落ち、冷たい風がネギの身体に吹きつける。

この後、ネギとアスナの間にはギクシャクとした空気が流れ、二人

が以前の関係を取り戻すまで、時間がかかるのであった。

学園長室には多くの魔法使いが詰めかけていた。

「学園長、一体どう言うおつもりです！？　あの闇の福音を麻帆良の外に出そうとするなど、気でも触れてしまわれたのですか！？」

学園長室の中では、怒号が響き渡り、多くの者がその声に賛同している。

詰め寄られる学園長は黙して何も語らない。

じっと腕を組み、目を閉じてその言葉を聞いている。

いや、実際は考え事をしていたので、本当に話を聞いていたかは定かではない。

学園長はこのかの件で結んだエヴァとの約定を、この時期に果たそうと内密に準備を進めていた。

エヴァとの約定、それは彼女にかけられた呪いのうち、登校地獄の

改変。

少なくとも麻帆良学園の中に縛り続けるという部分を改変し、エヴァに自由に外に出られるようにすることがエヴァの望みである。

もちろん外出の際は学園長に許可をもらうようにして、最低限の監視をつけるつもりであったが、学園長もそこが妥協点であると考えていた。

そのようにエヴァとの話し合いを行い、双方が合意に至ったので学園長は準備を進めていたのだ。

いや、話しあいだけなら数ヶ月も前に終わっていた。

それなのに何故この時期にそれを行うのか、それには学園長のある思惑があった。

もちろん準備に時間がかかっていたのもあるが、これ以上時間をかけるとエヴァがある行動に出る恐れがあるからである。

それはもちろん彼の血縁に関係している。

エヴァに登校地獄の呪いをかけた人物、ナギ・スプリングフィールド。

彼が死んだとされてから早１０年、この世に彼女にかけられた呪いを解ける人物はいなくなった。

だが、そんな彼女に希望の光が差し込む。

それがナギ・スプリングフィールドの実の息子であるネギの存在である。

もはやナギ・スプリングフィールドはこの世にいないが、その血が流れるネギはエヴァにとって唯一の希望。

その血は彼女を縛る呪いを解除する、最後の鍵。

エヴァが暴走してネギを襲う、これだけはなんとしても避けたいのが学園長の想い。

そこまで考えて、エヴァの我慢が限界に陥りそうなこの時期まで時間を引き延ばしていたのだ。

だが、その考えは最終段階に入ったこの時期に、予想だにしていなかった事態に陥る。

それが現在の状況、何故か学園長の考えが学園の魔法使いに漏れていて、学園長のところへ抗議のために集まっているのである。

そして学園長はついに重い口を開く。

「これは呪いがかけられる時にナギ・スプリングフィールドが決めていた事じゃ。エヴァンジェリンが何の問題も起こさず学園内で過ごしていたら、呪いを解く。これはワシ、ナギ、エヴァンジェリンの三者で合意した約定じゃ。だが、ナギが死んで以来、彼女の呪いを解けるものはいなくなり、彼女もそのことに絶望しながらも、ナギとの約定を守り続けた。ワシは彼女のために出来ることをやってやりたいと思っておる」

学園長が自身の考えを述べるが、魔法使いたちはそのことに納得しようとせず、何とか学園長に考え直すように、しつこく食い下がる。

「学園長、闇の福音を世間に出せば、必ず関係のない一般人に危害を加えるに決まっています。考え直してください」

学園で生活する魔法使いにとって、闇の福音の名は子供のころから聞かされ続けてきた、悪の代名詞である。

そんな彼らにして見れば、彼女がこの学園の外に出ることになれば、何か悪さをするに違いない。

またある者は、今までのことに煮え湯を飲まされていたエヴァが、この学園に牙を向くかもしれない、そう考えているのである。

そんな固定観念にも似た考えを持つ魔法使いと学園長の意見は平行線のままである。

「これはネギ君の安全のためでもある」

学園長が不意に告げたこの言葉に、それまで意見を述べるだけであった魔法使い達も口を閉じて黙る。

「彼はナギの最後の忘れ形見でもある、エヴァがその血を狙うかもしれん。じゃからこれはネギ君を守るための、学園がとれる唯一の手段なのじゃ」

学園長のその言葉に、魔法使いも押し黙る。

英雄ナギ・スプリングフィールドの息子であり、自身もその才能を

多大に受け継ぎ、次代の英雄候補とまでされているネギ。

それがここで潰されてしまう可能性がある、しかしそれを回避する方法もある。

結局この場では、学園長の考えに異を唱えるものはいなくなり、その場は収まった。

しかし、彼らは心の中で期待していた。

次代の英雄が悪の代名詞のこの地で打ち破ることを。

春休みに入り、平穏な時が流れていた学園の中に、新たな騒動の渦はすぐ其処まで迫って来ているのだった。

21話（後書き）

ネギとアスナが仲違いをしてしまいました。
この話のアスナの心情を解説すると、人がいいと思っていた知人が、別の知人によってまったく違う一面を見せられ、それを信じたくはないが、裏づけする証拠もある。そうしたことでパニックに陥っているという状態ですね。
それからネギには骨董魔法具のコレクターという設定もあったので、これでおかしくないと思います。

そして、エヴァンジェリン編へとつながる序章。
これからどう展開して行くのか、作者もわかりません（オイ！

次の更新はちょっと忙しいので遅くなると思います。
それではまた次回、お楽しみに。

22話（前書き）

さぁ、エヴァンジェリン編のスタート・・・の前に、春休みのひとコマです。

22話

麻帆良学園の全ての学校に春休みが訪れ、生徒たちは短い休みを満喫していた。

それは高等部に所属する一樹にも同じことで、この春休み中、一樹は用事がある時以外はほとんど布団の中で寝て過ごしていた。

布団は自分の嫁と公言し、三度の飯より寝ているほうが好きな彼は、こういう長期休暇に入ると、一日の大半は寝て過ごす。

それが麻帆良に来て以来、彼の習慣となっていたのだ。

今日もいつもと同様に昼過ぎまで寝ていた一樹であったが、体の方が空腹を訴えてきたので仕方なく布団に短い別れを告げる。

今まで寝ていたせいでボサボサになっている髪を掻きながら、一樹はキッチンに向かうために寝室のドアを開く。

「おはよー」

「って言うかもう3時だけどね」

「おはようです」

「おはようございます」

寝室からでてきた一樹を待っていたのは、図書館探検部の面々。

それぞれが一樹の方に顔を向けると、そう挨拶を交わす。

どうやって部屋に入ったのかはわからないが、コタツに入って談笑していたようだ。

「・・・・・戸締りはしたはずだけど、どうやって入ったの？」

昨日は確かに戸締りを確認してから眠ったはず、何故部屋の中にいるか理解できない。

そう考えながら、一樹は４人に尋ねる。

「何度もチャイムを鳴らしたんやけど・・・」

「一樹さんが出てこなかったので」

「一樹さん、鍵の隠し場所変えたほうがいいよ。ありきたり過ぎてすぐに見つかったよ」

一樹の疑問に、このかとゆえが訪れた時の状況を説明し、ハルナがそう言って一樹に注意を促す。

発言をしなかったのどかは、罪悪感があるのか一人申し訳なさそうな表情で俯いてる。

「はぁ」

そもそも相鍵で勝手に侵入するなと怒りたいが、一樹は大きくため息をつく。

「もういいよ、それで今日は何の用？」

何だかんだで今までの付き合いもあり、もはや気にすることもなくなってきた。

一樹はそのことは諦めて、今日の目的を尋ねる。

「その、一樹さんって普段あまりいい物を食べていないみたいなんで」

のどかちゃんはそう言いながらキッチンの方に目を向ける。

そこにはすでに食されたカップ麺の容器がゴミ箱にあふれており、キッチンの戸棚の中にはこれから食されるであろうカップ麺が積まれている。

休みの日は基本的に一日を寝て過ごしており、一人暮らしのみである一樹にとって、カップ麺は非常に重宝される食品である。

「それでうちらが美味しい物を作ってあげようという話になって、皆で一樹さんのところで夕食を食べようってことになったんや」

このかちゃんはそう言うと、買って来ていたであろう食品が入った袋を目の前に取り出す。

「痛みそうな食品は冷蔵庫の中に入れさせてもらってるです」

「ずばり今日はお鍋様よ！」

ゆえちゃんが勝手に冷蔵庫を使ってることを報告し、ハルナはやけ

にハイテンションで今日のメニューを教えてくる。

鍋か、一人じゃ食う機会もないし、久しぶりだなー

一樹はそう考えると、自然におなかが減ってくる。

ぐーー

一樹のお腹はすでに鍋モードに入ったのか、食事を要求している。

4人は一樹のおなかの音を聞いて盛大に笑う。

だがこんな事で羞恥心を感じない一樹は、とりあえず腹ごなしにカップ麺を一つ食す。

ズルズル

一樹のラーメンを食べる音は、思わず聞くものがラーメンを食べたくなるような見事な音。

ハルナが一樹に一口食べさせてとせがむので、仕方なしにカップ麺を渡す。

するとハルナは何も気にすることなく、一樹の箸をそのまま使う。

「んー、美味しい！」

はるながそう言ってカップ麺を机に置いたので、一樹がそれを取って再びズルズルと食べ始める。

「ちょっとはなんか反応しろよ！？」

ハルナは一樹を動揺させようとして同じ箸を使った、はっきり言えば間接キスなのだが、一樹はまったくの無反応。

そんな一樹に、ついにハルナのほうから突っ込みを入れてくる。

「ハルナのする事を一々気にしてたら、キリがない」

ラーメンをすすりながら、ハルナに冷たくそう返す。

ハルナはまたしても一樹を動揺させることが出来ず、悔しそうに自分の太ももを叩く。

そんなハルナを無視して食べ続ける一樹だったが、なにやら視線を感じる。

その視線の主を探ると、自分も欲しいと言う表情で一樹の方を見つめている４つの目。

このかとゆえの二人であり、のどかは恥ずかしそうに顔を赤くして俯いていた。

「はぁ」

またもやため息をつくと、一樹は３人の前にカップ麺を差し出した。

彼女達はさすがにハルナのマネはできないのか。新しい割り箸を使って食べた。

結局４人にカップ麺を奪われた形になり、一樹は０．７人前ぐらいしか食べられず、小腹の空いた状態になったが、それで諦める事にした。

それからしばらく経った後、一樹はハルナと二人で街に繰り出していた。

二人が街にやって来ている理由は、カップ麺を食べ終わった後の会話までさかのぼる。

「ところで肝心の鍋は用意して来たの？」

一樹のその問いかけに、４人は一斉にきょとんとした顔をする。

「うちらは一樹さんの所にあると思ってたんやけど」

「そう聞くと言うことはないようですね」

「鍋がないと言うことは・・・」

「お鍋様ができないじゃんかー！？」

互いが顔を見合わせてそう言いあう。

「ハルナうるさい」

一人だけ叫ぶように大声を上げたハルナに対し、一樹は疲れた表情を見せる。

もともと食事を取ったらすぐに眠るつもりだった一樹のテンションは未だに低い。

「でもどうする？　鍋がなければどうする事もできひんよ」

このかが残念そうな表情でそう告げると、ゆえとのどかも顔を下に向ける。

「こうなったら私がひとっ走り行って来るか」

そう言ってハルナが席を立ち上がると、他の3人もハルナの決断に賞賛の声を上げる。

「ということで一樹さんもほら、早く準備する、する！」

自分はまったく関係ないとその光景を見ていた一樹だったが、ハルナが一樹の腕を強引に引っ張るので、立たされてしまった。

「ほら、その格好じゃ外に出らんないでしょ、早く着替えてきて」

そのままハルナに自分の寝室に放り込まれ、一樹はしぶしぶ着替えることにする。

ダラダラと着替えている一樹は置いておいて、４人の会話は進む。

「それで買いに行くのは私と一樹さんでオッケーでしょ。３人はその間に食材の下ごしらえよろしく」

「わかった、何か必要になったら連絡するわ～」

このかがそう言うと、ハルナはうんうんと頷く。

「気をつけて行って来てね」

「わかっているってば～」

のどかの心配そうな言葉には、笑顔でそう答える。

「・・・・・・」

「ってなんか言うことないの！？」

無言でじっと見つめてくるゆえには、思わず突っ込みを入れてしまう。

「あまり一樹さんの迷惑にならないようにするですよ」

「お母さんみたいなこと言うな～、わかってるって」

やがてゆえの口からでてきた言葉にも突っ込みを入れるが、笑って

いるので本人はこのやり取りが楽しいのだろう。

ガチャっと寝室のドアが開くと、先ほどまで寝巻き姿であった一樹が、着替えて出てきた。

「それじゃあ行ってくるねー」

そう言って一樹の部屋を出たのが３０分前、そして話は冒頭に戻る。

「はぁあ」

一樹が手で口を隠しながら大きなあくびをすると、横に立っていたハルナはむっとした表情になる。

この男、仮にも女の子といるのにあくびなんかしやがって

ハルナは自分が女の子として認識されていないのではないかと腹を立てる。

実際に一樹はハルナのことを一切意識していないので、間違いではない所は知らぬが仏。

ハルナは一樹に近づくと、一樹の腕に抱きつく。

周りから見ればカップルのようにも見えるその光景だが、繰り広げられる会話を聞けばそんな考えも吹き飛ぶだろう。

「邪魔、歩きにくい」

「えーいいじゃん。一樹さんだって嬉しいくせに」

一樹が腕を振るってハルナを引き剥がそうとするが、ハルナもその動きに合わせて何とか振り払われないようにしっかりと腕を掴む。

「中学生には興味ないって言っただろ、離れろ」

「それじゃあ、来年になったら相手してくれるのかなー？」

一樹の言葉の揚げ足を取るように、ハルナはそう言って一樹の顔を下から覗き込む。

「はっ・・・ないな」

しかし一樹は鼻で笑うと、本当に興味のない目でハルナを見つめ返す。

「何よー、もう知らない」

そう言うとハルナは一樹の腕を放し、一人で走って行ってしまう。

そんなハルナの後を一樹は・・・・・・追わずに変わらぬペースで歩き続けた。

「ちょっとちょっと、ここはちゃんと追っかけて来てくんないとー！」

つい先ほど走り去っていったハルナが文句を言いながら戻ってくる。

その光景を見ていた人は、想定外のハルナの帰還に、皆一斉に突っ込みを入れる。

カップルの痴話げんかと思ったら、全然そんな感じじゃなかったので当然といえば当然の反応だろう。

「そう言うのはいいからさっさと鍋を買いに行くぞ」

一樹はそう言って文句を言っているハルナの横を通り過ぎると、目的地へと歩いて行く。

ハルナも文句を言い続けながらも一樹の後を追って行く。

結局ハルナは目的地に辿り着くまで文句を言い続けるのだが、目的地に辿り着くとその口を閉じる。

「おぉー、ここで鍋を見つけるのね」

一樹とハルナが立つ場所は学園都市内に存在するショッピングモール、ここでは様々なものが買える他、映画館やボーリング場など様々な娯楽施設も充実している空間である。

ハルナも、鍋を買いにきたはずだが、その目は周りの施設に奪われている。

「鍋見に行くぞー」

少し前の方に歩いていた一樹が声をかけるまで、ハルナはその状態であった。

しかし一樹の声を聞いて正気に戻り、慌てて一樹の後を追う。

「今度は皆でここに来て遊ぼ、ね？」

一樹に追いついてきたハルナが一樹にそう問いかけると、一樹も首を縦に振って答える。

それからはいつの間にか文具屋を見つけそこで画材を眺めていたり、本屋を見つけその場で立ち読みをはじめてみたり、へんな形の鍋を選んできたり

結局、鍋は一樹の独断で買い、ついでにカセットコンロも買って、部屋に戻ってきた。

ハルナは、ついていった意味があったのかと、部屋に残っていたゆえに問われていたが、一樹がまったくフォローを入れなかったので、しばらくゆえに説教された。

「みんなー、出来たでー」

このかがそう言いながら鍋を持ってくる。

その中には一煮立ちさせた具材が、ぎっしりと詰まっていた。

その鍋をコタツの上に置いてあったカセットコンロの上に載せると、スイッチを入れて再び鍋を火にかける。

後からやってきたのどかの手には、後から鍋に入れるであろう残りの具材が乗った皿を持っている。

ハルナが炊飯器を抱えて来て、ゆえが食器を載せたお盆を運んでくる。

最初は一樹も手伝おうとしたが、男性はキッチンに立ち入り禁止といわれて、仕方なくコタツに入ってテレビに映る適当なチャンネルを眺めていた。

食器が全員分配られ、盛り付けられたご飯もそれぞれの前に並ぶ。

このかの横には炊飯器が置かれており、まるでこのグループのお母さんである。

「それじゃあみんな手ー合わせて、いただきます」

「「「いただきます！」」」

このかの掛け声で他の3人も食事の挨拶をする。

「いただきます」

それから少し遅れるようにして、一樹も手を合わせてそう言う。

「美味しー」

ハルナが肉を一切れ食べると、そう声をあげる。

ゆえは白菜、のどかは椎茸、このかは豆腐

それぞれが好きな物を口に運び、同様の声をあげた。

一樹も鶏のツミレを口に運び、その味を噛み締める。

そこからはそれぞれが好きなように鍋を楽しむ。

一樹とハルナの狙う獲物が重なって睨み合いに陥ったり、その得物をゆえが掻っ攫っていったり、のどかがどれを食べようか迷ってみんなにどんどん食材をとられていったり、再び一樹とハルナの・・・

そしてこのかはそんな光景をニコニコしながら眺めていた。

楽しい食事はこの後もまだまだ続くのであった。

22話（後書き）

鍋を食べたい、そう思ったからこの話を書きました。
前回は主人公一切出番がなかったので、ここで一回出しておこうと思っただけです。
次こそは、エヴァンジェリン編に入るはず。
今日からバイトが4連勤入っているので、次の投稿まで確実に時間がかかりますが、何とか気合で頑張ります。

23話（前書き）

心配してくれている人がいるのかはわかりませんが、作者は無事です。
東日本は本当に大変なことになっていますね、作者は関西の人間なので直接的な被害は受けていませんが、テレビで流れるニュースを見ると、辛い思いを感じます。
作者に出来るのはこの作品を続ける事だけ、ということでこれからも頑張ります。

エヴァンジェリン編、ついに開幕。

23話

麻帆良学園にも春が訪れ、今日からついに新学期が始まる。

今年から新たに麻帆良学園にやってきた者、学年が一つ上がる者、そして麻帆良学園最後の一年を過ごす者

人それぞれ境遇は違うが、今日という日をもって、新しい生活が幕を開けるのだ。

それは2－A、いや、今日からは3－Aの生徒たちもかわりなく、教室のプレートは3－Aに入れ替えられる。

そして、教室の中には去年と同じメンバーが、誰一人欠けることなく揃っていた。

「「「3年！　A組！！」」」

鳴滝姉妹と椎名桜子が大きな声でそう声を上げる。

「「「「「ネギ先生！！」」」」」

すると、その声に合わせるように、周りの生徒も大きな声でこのクラスの担任、ネギの名前を呼んだ。

先日、正式に教師として採用されたネギであったが、やはりこう言うことは照れくさいのか、恥ずかしそうに頭を掻いている。

生徒たちにひとまず静かにするように言うと、教室はネギの言葉を

期待するように、シーンと静かになった。

それを確認すると、ネギは生徒たちに語りだす。

「えと・・・改めまして、３年Ａ組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の３月までの１年間、よろしくお願いします」

ネギがそう言うと、生徒たちも声に出して担任であるネギの事を歓迎する。

ネギはクラスの中を見回しながら、全員の顔を確認する。

そしてある生徒がこちらを見ていない事に気づく。

「（アスナさん）」

クラスの皆がネギの方を見ているか、もしくは隣の者と話し合っている。

だが、アスナ一人だけは教室の外を眺めており、誰とも話そうとしない。

ネギがアスナと仲違いしたあの日から、この二人の仲は未だに修復されていない。

ネギはあの日以来アスナに積極的に話しかけていこうとしたのだが、アスナはネギの事を避ける。

アスナが誰かと話している時に近づいていっても、ネギが来た途端、

アスナは用事ができたと言ってその場を立ち去ってしまう。

部屋の中でもアスナはネギのことを極力避けるので、さすがに様子がおかしいと思ったこのかがアスナに問いただしたが、アスナは何も語らず、あまりの様子のおかしさにネギに尋ねても、ネギも僕が悪いんですと答えるだけ。

このかも事情もよくわからず、これは二人の問題だからと深くは関わらなかったため、ついに今日この日までその状態が続いているのだった。

ネギは何をどう謝れば、アスナに許してもらえるのかがわからない。

アスナもあの日以来ネギのことを避けるようになって、どうネギと関係を修復すれば良いのかがわからなくなっていた。

結局はアスナが歩み寄れば、話し合いで解決するかも知れない問題なのだが、あの時のネギの言葉がアスナの中で葛藤を生み、それを不可能にしているのだった。

そんなことを考えているネギであったが、ふと視線を感じる。

生徒たちが見つめているのだから当たり前なのだが、それとは感じの違う視線なのだ。

ネギがその視線を送る人物に目を向ける。

そこにはふてぶてしい態度でネギを見つめている生徒が一人。

だが、ネギがこちらを向いたとわかると、プイッと顔を背ける。

「（あの娘は・・・出席番号２６番　エヴァンジェリンさん）」

生徒名簿を確認しながら、エヴァンジェリンをちらちらと確認するネギ。

そんな風にネギがエヴァンジェリンのことを考えはじめた瞬間、教室の扉が突然開く。

「ネギ先生、それに３－Ａの皆さん、今日は身体測定の日ですよ。すぐに準備してくださいね」

教室の扉を開いたのはしずな先生、彼女がそう言うと、ネギも今考えていたことなどすぐに忘れてしまい、慌てて生徒たちに着替えるように促す。

そんなことで、生徒たちにエッチとからかわれる事になり、ネギは慌てて教室から飛び出して行くのだった。

さて、生徒たちは身体測定を行いながらも、それぞれ好き好きにお喋りに興じている。

そんな中、生徒の一人、柿崎　美砂が寮で流れていると言う噂話を話しだす。

桜通りの吸血鬼

彼女がそれについて語りだすと、３－Ａの生徒たちは興味深そうに場を盛り上げる。

それは満月の夜になると現れると言う黒いボロ布を纏った血まみれの吸血鬼の噂。

それを聞いて、怖がりな生徒は振るえ上がり、そうでない生徒は興味津々そうにその姿を想像する。

「でも、本当に吸血鬼なんているわけないよね。だって私昨日桜通りを通ったけど何にも起こらなかったもん」

まき絵のその声に、生徒たちの中では吸血鬼の存在肯定派と否定派で激しい議論が始まる。

３－Ａは今日も平和な空気を醸し出していたのであった。

「こんな噂が俺のところまで流れてきてるんだけど、そこんところどうなの？　吸血鬼さん」

「知らん、それは私ではない」

「ここのところマスターは花粉症がひどくなるため、家からは一歩も出ておりません」

ここはエヴァの家の中、学校が終わり、すでに家に戻ってきていたエヴァの元に、一樹がそんな話を引っさげてやってきていた。

しかし、エヴァはめんどくさそうな態度でそう答えるだけで、その話には興味がなさそうである。

実際、エヴァは話の通り何も知らないし、やってもいない。

茶々丸のいう通り、ここのところは花粉症が酷くなって来ているので、ほとんど家から出ておらず、学校が始まったことにすら文句をつけている。

一樹はさらっと引きこもりと呟くが、エヴァに鋭い目で睨まれると、何事もなかったかのように顔を背ける。

だが、この学園の中に吸血鬼と呼ばれる存在はエヴァしかおらず、それ以外など聞いた事もない。

火のない所に煙は立たぬとは良く言うが、それなら何故このような噂が流れているのだろうか。

そう考えながらも、これ以上話しても無駄と思い、一樹は別の話題を振ることにする。

「呪いの方はどうなの？　アレから学園長はなんか言ってきたの？」

一樹がそう尋ねると、エヴァは不機嫌そうな顔になり、目の前に置いてあった紅茶をぐいっと一気に飲み干す。

「学園の魔法使いどもが私の呪いを解くのに反対しているそうで、

時間がかかっていただと。その声を何とか説き伏せたら、次は桜通りの吸血鬼は私の仕業じゃないのかだと！　ふざけるな！　人がおとなしくしていると思っていい気になりおって」

そう言って、エヴァはわなわなと振るえて怒りをあらわにした。

「マスターへの噂の容疑で、呪いの解除に反対する声が再発したそうです。そのため学園長もマスターに謝られたのですが、マスターは我慢できないようです」

茶々丸がそう言って状況を説明してくれるが、エヴァは怒りが収まらないようである。

顔を真っ赤にして、怒りの矛先を探している。

「当たり前だ！　何が復讐で坊やを襲うんじゃないだろうな、だ！　呪いの解除の最後の砦である坊やを、そんな事で襲うわけないだろうが！」

エヴァの呪いを解くには、呪いをかけた本人であるナギ・スプリングフィールドが必要である。

しかし、彼が死んだとされ、残っているのは彼の息子であるネギ一人、そんな彼を今襲えば、ネギがこの学園から去ってしまうかも知れない。

そうなれば、エヴァは呪いを解く手立てを一生失ってしまうのである。

本来なら短慮になって行っていたかも知れないそれを、学園長との

密約と一樹の指摘が、エヴァを冷静にさせていたのであった。

「あー、それはお気の毒様」

一樹はそう言って、気の毒そうににエヴァを見つめる。

ただエヴァはそれが気に食わなかったのであろう。

「今日は特別に本気で稽古をつけてやろう。なに、殺しはせん。ただちょっと綺麗な川を見せてやろうというだけだ」

そう言うと、エヴァは一樹の襟首を強引に掴み、別荘の方へと歩みを進める。

その力は普段のエヴァとは比べものにならない、それこそ別荘の中のエヴァと同じように感じるほどであった。

それは三途の川だ！

心の中でそう叫びながらも、一樹はエヴァにずるずると引きずられて、別荘の中に連れて行かれるのであった。

桜の木が何本も並び立つ大通り、通称桜通り。

普段はその桜が綺麗な情景を見せてくれる。

だが、すっかり日も暮れ、辺りには月の光りと街灯の光りのみ。

わずかに道を照らすその光り達は、怪しく桜を照らし、その場に気味の悪い空気を漂わせている。

そんな桜通りに、ある人物が歩きまわっていた。

赤い髪に小さな体、そしてその身体よりもはるかに大きい杖を背に携えた少年、ネギ・スプリングフィールドである。

生徒たちの噂話を聞いたネギは、その噂の真相を確かめるべく、ここ桜通りへと足を運んでいるのだ。

その場を歩くネギは、不安な気持ちを抑えながら桜通りを歩き続ける。

風が吹き、桜の枝を大きく揺らす、その音にネギは敏感に反応してしまう。

辺りをちらちらと見回しては、ため息をついて歩くことを再開する。

いかにネギとて、一人でこんな場所を歩くのは怖い、普段はそれを持ち前の勇気で隠しているだけなのだ

また風が吹き、桜を揺らし、木々達が大きなざわめきを起こす。

そのほんの一瞬後、空気は一変する。

ピンと張り詰めた緊張感、言葉にできないその空気は、今までネギが感じたことがないものである。

それを感じたネギは不安げに辺りを見回す。

その手には杖を構え、何かあった時すぐに対応できるようにしている。

だが、ネギの周りには誰もいない、何もない。

そのおかしな情景に、ネギの緊張の糸が切れかけたその瞬間、何処からか何かが飛来し、ネギの頬をその何かが掠める。

慌ててネギが頬に手を当てると、その手には血がついており、再度手を当てると、頬から血が流れているのが確認できた。

ネギはまた何かが飛んでくるのではと警戒を強めるが、その時には先ほどの緊張感は消え去っていた。

いつの間にか空気は元に戻っており、今度こそ緊張の糸がきれてしまったのか、ネギはその場に尻もちをつく。

やがて落ち着き、正気を取り戻したネギは慌ててその場を探し回る。

しかし、３０分以上かけて捜索したが、すでにその場には何の痕跡も残っていなかった。

ネギはとうとう諦めて、この日は桜通りから撤退する。

桜通りは無人となった、道の端に小さな小さな水溜りだけを残して。

23話（後書き）

とりあえず話の導入部分でした。
エヴァンジェリンは関わっていない。しかし、桜通りでネギは襲われた。
いったい麻帆良に何が起こっているのか
そしてついにやつも麻帆良も現れる
次回、お楽しみに。

２４話（前書き）

最近は一日おきの更新が出来なくなってます。
もうすぐ学校も再開するし、何処までこの更新速度を保てるのやら・・・

24話

「ネギ先生！　それはどうなされたのですか！？」

朝のＨＲ、ネギが教室に入ると、委員長である雪広あやかの叫び声が３－Ａの教室内に響き渡った。

昨日、吸血鬼の噂の真相を確かめるべく、桜通りのパトロールを行っていたネギであったが、その際何者かに襲撃され、頬に傷を負っていた。

そして現在はその傷を隠すために、ガーゼで傷口を覆っているのだ。

あやかはそれを見て悲鳴を上げているのである。

「これはその・・・ちょっと転んでしまって」

ネギはそう言って苦笑いを浮かべて言い訳をする。

本当のことを言ってしまえば、怖い物見たさで桜通りに足を運ぶ生徒が現れるかもしれない。

もしそんなことになれば、その生徒の身に何かがおこるかも知れない。

昨日のこともあり、ネギは桜通りには何かがあると確信している。

周りの生徒たちに心配され、あやかには抱きしめられながらも、ネギは昨日のことは絶対に他言はしないと心に決めていた。

それからはネギはいつも通りの学園生活を送っていく。

授業があればそのクラスにいって授業を行い、休み時間は誰かと共に昼食をとる。

そして放課後を迎える。

「それじゃあ、皆さん。明日も元気に登校して来てくださいね」

ネギがＨＲの締めくくりの言葉を告げると、日直の号令でクラスの生徒たちは挨拶を告げると解散していく。

生徒たちが次々と教室から出て行こうと準備をしている、その間をさっと通り過ぎてネギはある人物に声をかける。

「エヴァンジェリンさん、お話したいことがあるのですが」

ネギが声ををかけたのは、エヴァンジェリン。

声をかけられたほうのエヴァンジェリンはめんどくさそうな表情でネギの方を見ている。

「私はこれから茶道部に行くんですが？」

エヴァはそう言うと、さっさと教室から出ていこうとする。

そのエヴァの態度に、ネギは慌てた様子でエヴァを引きとめにかかる。

「わー、待ってください！　タカミチにいわれたんです。困ったことがあったらエヴァンジェリンさんに相談しなさいって」

タカミチ、それはこのクラスの元担任、高畑・T・タカミチのことである。

ネギは魔法のことを相談出来る相手が少ない、ほとんどいないと言っていい。

そんな中でも彼が相談できる人物と言うのが、タカミチであった。

彼がいれば、ネギは迷わず彼に相談するつもりだったのだが、彼は現在出張中であり、この麻帆良にはいない。

彼の不在を知り、途方にくれていたネギであったが、３－Ａの名簿をぱらぱらと捲っていると、ある部分に目が止まる。

それはエヴァンジェリンと言う生徒の顔写真の下、タカミチ直筆のメモが残っており、そこには困ったら相談しなさいと書き残されている。

タカミチが言うのだから、当然魔法関係のことをさしているのだろう。

ネギは自身のクラスの生徒にも魔法関係者がいることに驚きを隠せなかったが、それは今は関係ない。

ネギはタカミチのメモどおり、エヴァに昨日の件を相談することにした。

また、ネギのその言葉にビクッと反応した少女がいたが、それは別の話。

「タカミチが？　ちっ、しょうがない」

エヴァはしぶしぶと言った表情で振り返る。

「それで話とは？」

「あの、ここではちょっと。場所を移しませんか？」

相談する内容は、ここにいるほかの生徒には聞かれたくない。

ネギはそう言ってエヴァと共に教室から出ていった。

「キャー、ネギ先生とエヴァンジェリンさんってそう言う関係なの！？」

「普段はほとんど喋らないエヴァンジェリンさんと、あのネギ先生がー！？」

教室に残された生徒たちはそう言って騒ぎ出す。

そのあまりの五月蝿さに、学年主任の新田が怒鳴り込んでくるのは、時間の問題であった。

一方、教室から出ていったネギとエヴァは屋上へとやってきていた。

ネギは屋上に誰もいない事を確認すると、エヴァンジェリンの方に振り向く。

「それで・・・って！どうしてカラクリさんが此処に！？」

ネギが話を切り出そうとすると、エヴァの後ろにはいつの間にか、同じく３－Ａの生徒である絡繰　茶々丸が立っていた。

ネギとしてはエヴァを呼んだのであって、それ以外の人にはこの話は聞かれたくない。

よって、この場に茶々丸がいるのは困るのである。

「すいません、出来れば絡繰さんは離れていてくれませんか」

申し訳ないという表情でネギがそう告げると、茶々丸も困った表情になる。

彼女としてはマスターであるエヴァの傍を離れられないが、かといってネギの言葉を無視するわけにもいかない。

その二律背反する考えに、どう動くべきか茶々丸は悩む。

だが、エヴァの一言でその問題はすぐに解決することになる。

「茶々丸は此処にいろ。こいつも関係者だ、この場にいて問題はない。それと、此処ではあれについての話だろう、それなら私が敬語を使う必要もあるまい」

エヴァがそう言うと、茶々丸は短く了承の返事を返し、ネギも関係者という事を聞いて、茶々丸の同席とエヴァの口調を了承する。

「それで話とはなんだ、言っておくがタカミチの願いで話を聞くんだ。つまらん事だったら張り倒すぞ」

エヴァがそう凄むとネギは後ずさるが、すぐに気を取り直して話しはじめる。

「実は桜通りの話なんですが、エヴァンジェリンさんは聞いた事がありますか？」

ネギがそう問いかけると、エヴァはさっきよりもいっそうめんどくさそうな態度を見せる。

「その話か、噂だけなら私も聞いている。桜通りに吸血鬼が出るんだろう」

「満月の夜、桜通りに現れると言うボロ布を纏った吸血鬼の話ですね」

エヴァが噂について話すと、それを補足するように茶々丸が詳細な情報を述べる。

「その通りです、そして昨日がちょうど満月の夜でした。噂を確かめるために僕は桜通りに行ったんですが、その場所で今まで感じたことのないプレッシャーを感じたんです」

「それで」

「突然何かが飛来して来て、この傷はその時についたものです」

そう言いながら、ネギは頬の傷を押さえる。

エヴァはその様子を黙って見つめてるが、茶々丸は心配そうにネギを見つめている。

「この傷を受けた後、その気配はすぐに消えてしまって、何の手がかりもないんです。そこでタカミチが言っていたように、エヴァンジェリンさんに相談したんですが・・・」

エヴァは話を聞き終わると黙り込んでしまい、ネギはその様子を伺っている。

また、ネギの中には一つの疑問が生じていた。

タカミチが言うようにエヴァが関係者というなら、魔法使い、もしくはそれに準ずる気配というものを感じるはずなのだが、目の前のエヴァからは魔力やその他の力は一切感じられない。

そんな彼女が本当にこちら側の関係者なのかという疑問を持っていたのだ。

しかし、タカミチが言うのだから、本当なんだろうと自己完結をしたのだが・・・

やがてエヴァは口を開く。

「結論から言うと、私にはどうすることも出来んな」

エヴァのその言葉に、ネギはがっかりと肩を落とす。

「まず初めに情報が少なすぎる、それでは判断しようがない。それ

に此処は魔法使いが治める土地だ、その中を吸血鬼が闊歩しているなど、ありえると思うか？」

本物の吸血鬼が何を言っているのかと思うが、目の前にいるネギはその事実を知らないので、素直に頷く。

「とりあえずはその情報を集めろ、としか言い様がない。話はそれからだ」

ぶっきらぼうにそう告げると、エヴァと茶々丸は屋上から去っていった。

屋上に一人残されたネギは、とりあえずエヴァの言うとおり情報を集めようと動き出した。

一樹は走っていた。

後ろから迫ってくる理不尽と言う存在から逃げるように。

一樹は走っていた。

自由を求めるように、前へ、前へ。

一樹は走っていた。

あと少しで、一樹は真の自由を掴みとる。

「へんなモノローグはお止めなさい！」

後ろから追いかけてきていた高音に怒られながらも、一樹は足を止めない。

「いい加減に諦めて、大人しく私と共に来てください！」

高音は更にそう叫んでいるが、やはり一樹の足は止まることはなかった。

そもそも何故この二人が追いかけっこをしているのかというと、それは３０分前までさかのぼる。

～～～

高校からの帰宅中、一樹は特に予定もなかったのでまっすぐと家を目指していた。

しかし、その足取りは重く、周りを歩くほかの生徒に次々と抜かされて行く。

何故足取りが重いのかと言うと、たいした理由はない。

ただ歩くのも面倒と言うだけである。

だが、一樹の前に更なる面倒事が足を運んできた。

その面倒事は麻帆良学園の高等学校の一つ、聖ウルスラ女子高等学校の制服を身に纏い、自信に満ち溢れて表情で一樹の前に立ち塞がる。

「松井さん、ちょっとお話があるのですが」

面倒事、高音・D・グッドマンは一樹にそう告げる。

スタスタスタ

一樹はそんな高音のことなどまるで存在しないかのように無視し、その横を通り抜けて行く。

「ってちょっと、お待ちなさい！」

高音のその大きな声に、しぶしぶ一樹は振り返る。

振り返った先には今にも噴火しそうな高音の姿。

「あなたと言う人は！　どうして人の話をこうも無視できるのですかっ！？」

訂正、すでに噴火はしているようだ。

高音の怒りの言葉は留まるところを知らない。

「大体あなたと言う人はいつもそうです、人の話など聞こうともせず、いつも勝手に居なくなっている。そんなことだからあなたは周

りの人に」

「そんなことはいいから、要件は何？」

一樹は高音の説教など聞きたくないので、高音の言葉を遮り、用件を聞きだす。

「まったくもう！　此処ではちょっと、こちらに来てください」

そう言って、高音は人通りの少ない路地を指差す。

「告白はちょっと勘弁「そんなわけないでしょっ！？」

一樹のちょっとした冗談にも、高音は鋭く突っ込みを入れてくる。

二人が路地の方に入って行くと、高音は周りに人影がない事を確認して、話を切り出す。

「話とは桜通りのことです、あなたも噂は聞いているでしょう」

高音が切り出してきた話とは、桜通りの吸血鬼の話であった。

「話だけなら知っているけど、それが？」

一樹がやる気のなさそうな表情で応えると、高音は一息ついて落ち着いてから話を続ける。

「今はあくまで噂ですが、火のない所に煙は立ちません。これは私達魔法生徒が調査するべきではないでしょうか」

高音のその言葉に、やる気のなかった一樹の顔が、更にめんどくさそうに変化する。

「そんなこと、教師である魔法先生に任せるべきだろう。未熟な生徒が出ていったも話にならないんじゃないの」

一樹の言うように、吸血鬼は本来魔法生徒の実力で相手に出来るレベルの相手ではない。

それこそ一流の魔法使いでやっと相手になれる存在であり、真祖の吸血鬼となれば最強クラスの化け物、相手に出来るのは世界でも数は限られてくる。

過去、エヴァンジェリンに懸けられていた破格とも言える懸賞金が、それを端的に示している。

だが、高音は一樹の言葉など関係なしに話しを続ける。

「あくまでもこれは調査です、噂の是非を確かめるだけですので問題ありませんわ。それに、この学園には居るじゃありませんの、一人」

高音はその続きは言えなかった。

一樹に肩を押さえられ、壁に押し付けられたのである。

「高音、一つだけ言っておく。おとなしくしている獣を無理に起こそうとするなよ」

今まで見た事のないような一樹の表情に、高音は思わずひるんでい

る。

「エヴァンジェリンと争いなんて起こしてみろ、この学園に彼女を止められる人物が居ると思うか」

「が、学園長がいらっしゃるじゃありませんの」

一樹の言葉に、高音は振り絞るようにそう答える。

一樹は本気になったエヴァなら、たとえ魔力が封じられていようとも、本当に学園長を殺してしまうのではないか、そう思っている。

普段のエヴァは大人しい、それこそ本当に眠っている猫のように。

だが、別荘で彼女の力の一部を垣間見ている一樹には、その考えがどうしても否定しきれない。

実際に昨日別荘に連れ込まれた一樹の身体には今も傷が残っていて、服の下にはそれを隠すように包帯が幾重にも巻かれているのである。

エヴァの中に眠る獣が目を覚ませば、彼女の真の怒りに触れれば、その後のことは想像もしたくない。

高音の顔の前にびしっと指を伸ばす。

「この事にエヴァンジェリンは関係ない、これは学園長も知っている。だから余計な事はしないでくれよな」

一樹はそう言い残すと、その場に高音を置いて路地から出て行く。

このまま家に帰るつもりであった一樹であったが、此処で一樹の思惑とは裏腹に、高音が一樹を追いかけてきた。

「あなたの言いたいことはわかりました、それならなおのこと、この事件を調査するべきでしょう！」

何かを決意するように腕を力強く握っている高音は、使命感に燃えている。

やる気のない一樹はその場を逃げ出し、高音がそれを追いかける。

そして話は冒頭に戻る。

幸い一樹の家は、高音にはわれていないので、ここで撒いてしまえば一樹の勝ち。

一樹は建物の間をスルスルとかけていき、高音の一瞬の隙をついて建物の陰に隠れる。

「待ちなさーい！」

そのすぐ傍を高音が走り去っていき、その姿が見えなくなるのをしっかりと確認してから、一樹は家の方へと足を進める。

そして家の前に辿り着いた一樹の前に、思いも寄らぬ人物が現れたのだった。

麻帆良学園を目指しかけているものがいた。

「はぁはぁ、もうすぐネギの兄貴がいる麻帆良学園、なんとしても辿りつかねえと」

悲壮な表情でそう決意を口にし、その足を麻帆良へと進めるのであった。

２４話（後書き）

嘘予告
カモは魔法使いに捕らえられ、立派な魔法使いの使い魔、ＫＡＭＯに改造させられていた。
ネギを将来立派な魔法使いにするため、ＫＡＭＯは今日も彼の傍でサポートを続ける。
己の明日を切り開くため！！

って言うのをやろうかと考えた時期もありました（笑）
まぁ、あまり改変はしたくないのでやりませんけど・・・

25話

部屋の中にはキッチンで皿を洗う音が聞こえてきている。

現在午後七時、夕食を食べ終わった一樹は皿洗いをしていた・・・

エヴァの家で。

皿を洗う一樹の横には、このかとのどか、ゆえの3人も並んでいて、

このかは共に皿洗い、のどかは食器を拭く係、その拭いた食器をゆえが戸棚に直して行くというリレーが完成していた。

そしてリビングには、不機嫌そうな顔でソファに腰掛けるエヴァと、

エヴァの目の前でリビングを物色しているハルナの姿もあった。

そしてネギとアスナも、それぞれ席を離しているが、リビングに座っていた。

エヴァは心の中で自問自答する、どうしてこうなった。

そもそも何故一樹と図書館探検部の４人、そしてネギとアスナがエヴァの家にいるのか、それは一樹が家に戻ったころまでさかのぼる。

～～～

高音から逃れた一樹が家の前に戻ってくると、部屋の前にある人物が立っていた。

それは一樹も良く知る人物で、ぶっちゃけ週3ぐらいのペースで会っている。

３－Ａの生徒であり、エヴァンジェリンの従者でもある茶々丸であった。

ドアの前でボーっと立っていた茶々丸であったが、一樹が戻ってきたのを確認すると、会釈して一樹を迎える。

茶々丸の一礼に手をあげて答えるが、一樹は茶々丸の来訪を不思議に思っていた。

一樹がエヴァの家に行くことは何度もあったが、茶々丸が一樹の家を尋ねてくることなど今の今まで一度もなかった。

そんな茶々丸が今目の前に立っているからこそ、一樹は不思議そうな顔で茶々丸の方を見ていた。

「お待ちしておりました、お帰りなさいませ」

「あ、あぁ、ただいま。茶々丸ちゃんがこんなところに来るなんて、何か用事でもあるの」

一樹のその問いかけに、短くはいと答える茶々丸。

それならと一樹は家の中に茶々丸を上がるよう誘うが、茶々丸はそれを断る。

一樹の誘いを断って、申し訳ないと何度も謝る茶々丸だったが、一樹はそれでは話は進まないと茶々丸に注意して、何とか茶々丸も今日の用件を話しはじめる。

「実は一樹さんにお願いしたいことがあるのですが、今日一日だけでいいので、マスターのお世話をお願いできないでしょうか」

茶々丸のその言葉に、一樹の顔から表情と言うものが抜け落ちる。

これがキティと言うかわいい子猫の世話なら、一樹は何の戸惑いもなく、喜んで引き受けていただろう。

（注：絵が欲しいと言う方は、猫耳・猫尻尾をつけたエヴァが、照れながらも可愛らしくニャーと鳴いている絵を想像してください）

それがあのエヴァンジェリンである。

自分はソファにどかっと座り、こちらに命令してくる姿が目に浮かぶ。

本当ならこんな役目、受けたくない。

しかし、一樹はまだ断れない。

なぜならあの茶々丸が自らお願いに来たのである。

茶々丸は基本的にエヴァの傍に控えている。

四六時中とまではいかないが、出来る限りはエヴァの傍にいるようにしている。

例えば茶々丸がエヴァの傍を離れるのは、買い物やどこかに用事がある時など

そのほかと言えば最近は猫の餌やりに毎日赴くようになったが、基本的にそれは放課後、エヴァが帰宅してからのことである。

「何か理由があるの？」

一樹がそう問いかけると、茶々丸がその理由を話しはじめる。

「実はハカセが、一度私の身体を徹底的にチェックしたいとおっしゃるので、今日一日かけてメンテナンスが行われる予定なんです」

茶々丸のボディは魔法と科学の融合の結晶とも言うべき、精密なものである。

なので時期を見ては、こうして定期的にチェックを行い、何処かに異常がないかを調べなければならない。

そのチェックを行う日が、今日になっていると言うことである。

どうですか、と茶々丸が尋ねてくる。

「一つだけ聞いてもいいかな」

一樹の問いかけに、茶々丸は何なりと、と答える。

「一般の男性が作る料理で、あのエヴァが満足すると思う確率は？」

「ほぼゼロです」

一樹が聞いた次の瞬間には、茶々丸の口からその言葉が返ってきた。

一樹の困った顔に、茶々丸は断られるのかとオロオロとする。

「はぁ、とりあえず何とかしてみるよ」

大きくため息をついて、一樹はそう答えるのだった。

一樹のその言葉を聞き、茶々丸は深々と頭を下げてお礼を述べると、一樹の家から去っていった。

困ったのはエヴァの世話を引き受けてしまった一樹である。

茶々丸には引き受けると答えたが、先ほど茶々丸が答えたように、一般的な男性が作る料理しかできない一樹には、舌の肥えに肥えたエヴァを満足させるような、美味しい料理など用意できるわけがない。

そこで一樹がとった手段と言えば、他力本願、助っ人を呼ぶことだった。

カランコロン

家の中に来客を告げるベルが鳴り響く。

「茶々丸・・・は今日はいないと言っていたな」

家主であるエヴァは、自身の従者に応対を命じようとするが、その従者が今日は不在ということを思い出し、めんどくさそうにソファから腰を上げる。

カランコロンカランコロンカランコロンカランコロン

ドアの向こうにいる人物は、何度もベルを鳴らし、出てくることを急かす。

だが何度も鳴り響くベルの音が、エヴァの機嫌を急降下させ、エヴァの額には怒りマークが浮かんでいる。

ドスドスと足音を鳴らしながら、急いでドアの方へと近づいて行く。

「うるさいわーっ！？」

そしてドアをバンっと開け放ち、来客者に対してそう怒鳴りつける。

そんなドアの向こう側にいたのは、この家に何度も訪れた事のある一樹、一樹ほどではないがやはり来た事のあるこのか

そしてなぜかこのかの横に立っているのどかとゆえ、アスナ、ネギ、そして一樹に首根っこを掴まれているハルナの姿があった。

何故ハルナが一樹に首根っこを掴まれているのか、理由は簡単、ベルを何度も鳴らしていたからである。

エヴァの性格を熟知している一樹は、この後ドアが乱暴に開けられることを予測していて、ベルの傍にいれば確実に顔を打っていただろう。

ハルナなら、そうも思ったが、さすがに顔を打つのは、一応女の子ということで、かわいそうと言うことで、首根っこを掴んで後ろに引っ張ったのだ。

そのおかげで顔を打つことはなかったが、ハルナの首が一瞬絞まったことは、一樹は気にしない方向で進めることにした。

そもそも何故こんな大人数でエヴァの家に来ているか、そのはじまりは一本の電話からだった。

エヴァの満足行く料理など用意できるはずもない一樹、そこで一樹はこのかに助けを求めることにした。

一樹から話を聞いたこのかだったが、今日はアスナもネギもいるため、この二人を置いて自分だけ外に出る事は出来ない。

この二人も一樹と同様に料理が出来ないのである。

このかがそう言うと、一樹から返ってきた言葉は「じゃあ一緒に連れてくれれば」

なかなか無理なことを言っているのだが、一樹も切羽詰っていて、仕方がないのかもしれない。

このかはそれを聞いて、アスナとネギにその話をして見ると、二人とも拒否はしなかった。

それどころか、ネギはなかなかに乗り気である。

そう言うことで話は決まり、3人はエヴァンジェリン宅へ向かうため寮を出た。

そして出たところでハルナに見つかり、事情を聞きだされる。

仕方なく事情を説明すると、ちょっと待っててと寮に走っていったかと思えば、ゆえとのどかを引っ張ってきて、「じゃ行こうか」と自分達も同行すると言い出した。

いきなり引っ張ってこられ、事情が飲み篭めてないゆえとのどかは説明を求め、事情を説明。

すると二人も同行すると言い出したので、仕方なく6人で一樹の待つ場所まで向かう。

そしてやってきた6人、いや、ハルナだけを見て「帰れ」と一樹が言い、ハルナが文句を言うのだったが、このようなやり取りはもはや毎度のことなので、ネギとアスナ以外は黙って見ていた。

英国紳士を自負するネギは一樹を注意して、ハルナがざまぁと笑って、一樹に睨まれる。

アスナは一樹を黙って見ていたが、その目はどこか遠くを見つめているようだった。

そんなこんながあったが、エヴァの家までやって来て、そして今に至るのである。

エヴァは一樹の方を睨むように見て、何しにきたと尋ねる。

「茶々丸に頼まれたんだよ、世話係」

自身を指差してそう言う一樹、そしてこのかを指差し料理担当、そのほか5人を付き添いと紹介する。

「とりあえずわかった、帰れ」

そう言ってドアを閉めようとするエヴァ、だが一樹が足を滑りこませ、ドアは閉まらなかった。

茶々丸に頼まれ、この面子を集め、このまま帰ることなど一樹の気が治まらない。

このままでは、やって来てくれた6人に申し訳ない。

そのためならエヴァにも協力いただこう、そう思った一樹はエヴァがドアを閉めることを許さなかった。

エヴァの実力に危機感を抱いたり、かと思えばこうしてエヴァも巻き添えにする。

こうした面から見ても、一樹はエヴァのことを嫌いではないのだろう、嫌いでは・・・

一樹達が押し入り、もといエヴァの家に入ると、彼らの目に映るのはたくさんの人形が置かれた、ファンシーな部屋。

見慣れている一樹やこのかはともかく、初めての5人には衝撃的だったらしい。

それもクラスメイトの知られざる一面、4人はそれぞれ部屋の中を見回しながら感想を述べ、ネギは驚いてはいるが、そこまで興味はなさそうだった。

自身の人形を褒められ気分を良くしたエヴァは、ついついこの家にいていいと言う許可を出してしまう。

それからこのかは夕食の準備にとりかかり、のどかもそれを手伝う。

料理できない組はリビングに残って雑談、この際一樹はエヴァに呼び出され、5分ほど消えていたのだが、戻ってきたころには一樹は腹を押さえ、苦しそうだった。

はっきり言うと、奥で絞められた。

エヴァ的には巻き込まれたのがむかついたらしい。

自分が認めただろと言う言葉には、それはそれ、これはこれ、となんとも言い様のない返事が返された。

なお、ハルナなどは興味深々だったが、エヴァに睨まれ、さらに一樹の様子を見ると、明らかに想像とは違う事が起こっただろうと予想でき、さすがに聞くに聞けなかった。

それからこのかとのどかが用意した夕食を皆で食べ、現在は片付けも終わり、全員で食後のお茶を楽しんでいた。

のどかがなんとなしに抱き上げた人形がチャチャゼロで、こいつ喋りださないだろうなと怪しんでいた一樹であったが、その人形の口元が意味ありげにニヤッと笑ったかどうかは定かではない。

そんな中、一樹の携帯が鳴る。

仕方なしに一樹は席を立ち、電話に出るため家の外に出て行く。

家から少し歩いた所で電話に出る、その相手は学園長だった。

「もしもし、松井君かの、ちょっと明日時間作れんかの？　お願いしたいことがあるんじゃ」

「わかりました、いいですよ」

学園長の言葉に、一樹は軽はずみの答えたことを後に後悔する。

学園長からの用件はそれだけだったので、一樹は家の方へと歩き出す。

「一樹さん」

ふとその声に気づき、そちらに目を向けると、そこには部屋の中にいるはずのアスナちゃんが立っていたのだった。

25話（後書き）

前回の話で最後の人物はアスナだと予想していた人、見事作者の思惑にはまりましたね（笑）
そしてキティ、自分で書いておいて、自分で萌えてしまった。
ちょっとどこかで休んで落ち着いてきます。
今度こそアスナが一樹に接触、さぁどうなりますかね。
ん？カモ？まだ麻帆良についてませんよ。
原作ではネギが襲われた翌日、つまりこの話でも今日ついているはずですが、都合上一日遅らしています。
次々話ぐらいに現れるんじゃないですかね、多分。

26話

学園長からの電話を切った一樹が家の中に戻ろうとすると、アスナが声をかけてきた。

二人は人に話を聞かれないよう、近くの茂みの中に足を運んでいた。

周りに二人を照らす明かりはなく、月の光も木々が邪魔をしてわずかに届くばかり。

目が闇に慣れなければ、お互いの顔が見えないぐらいである。

「それでアスナちゃん、話って？」

一樹がそう聞きだすと、アスナはすぐには答えなかった。

自分の言いたい言葉が上手く口に出せないのか、何度も口を動かそうとするが、声には出てこない。

やがて、考えがまとまったのか、それとも考えることを諦めたのか、アスナはついに口を開く。

「一樹さん、これから話すことを笑わずに聞いてくれますか？」

アスナのその問いかけに、一樹は躊躇なく「うん」と答える。

その言葉を聞いてアスナはホッとしたのか、少し表情を和らげて語りはじめる。

「もしも・・・ですよ、もしも一樹さんの知り合いに魔法使いがいたとしたらどうします？」

アスナの問いかけに、一樹はきょとんとした顔を見せる。

まぁ、突然そんな事を聞かれたら、誰でもそんな顔をするのかもしれないが、アスナの表情は至って真剣、そんなアスナの顔を見ると一樹もふざけた答えは消せないなと感じた。

「そうだね、まずは素直に驚くと思うよ。それからはちょっとわからないかな・・・羨ましいと思うかもしれないし、もしくは恐ろしいと思うかもしれないしね」

一樹の言葉を、アスナは身動き一つとらず、黙って聞いていた。

「結局はその魔法を使う人の印象次第で、感じ方なんて変わるもんじゃないの？」

一樹からの問いかけに、アスナもそう感じたのか頷き返している。

アスナは次の言葉を選んでいるが、一樹から思わぬ言葉が飛んでくる。

「遠まわしな言葉はいいよ、俺が魔法使いかって聞きたいんでしょ？」

一樹のその言葉に、今度はアスナが驚いた表情を浮かべることになる。

思わず「どうしてそれを・・・」と口にしてしまっているくらいだ。

「アスナちゃんの態度と言葉を見ていればなんとなく想像はついたよ、それに子供先生の事もあるしね」

この場にはいないネギの名が出てくると、アスナはわずかに表情を曇らせるが、幸い辺りが暗いために一樹にはそれが見えなかった。

「魔法使いって言うのは、本来隠すべき事。まぁ、子供先生はまだ小さくてそのことがよくわかってないのかもしれないけど、少なくとも一般人には知られてはいけない事さ」

一樹が語るように、魔法は隠匿するもの。

それを守らせるために、オコジョ刑と言うものがあり、魔法使い達はそれを守っている。

「じゃあやっぱり一樹さんも魔法使いって言うことなんですか?」

アスナは恐る恐ると言った顔で一樹にそう問いかける。

「それを言ったら、俺がオコジョになっちゃうよ」

笑いながらそう話す一樹に、アスナは「結局どっちなの!?」と思わず叫んでしまう。

一樹は暗に魔法使いだと言ったのだが、そこは理解出来なかったらしい。

「魔法使い?それとも違うの・・・でもでも」

苦笑いを浮かべながら、「そうだよ」と一樹が答えるまで、アスナはずっとどちらかということを呟き続けていた。

「学園長から魔法使いのことは説明受けたよね？」

一樹がそう尋ねると、アスナは少し前のことを思い出す。

あれはネギと仲違いをする前、あれはまだテスト期間に入るほんの少し前のことだった。

学園長室に呼び出されたアスナは、そこで学園長から魔法使いとその世界についての大まかな説明を受けた。

思えばあの時から、ネギの様子は少しおかしかったのかもしれない、と今更ながらに思うアスナであったが、本当に今更である。

わずか9歳の少年が、単身異国にやって来ているのである。

周りからは期待する声ばかり、それでいてある先生達はどこかネギではなく、その先にある何かを見つめているような目。

そして、２－Ａという、普通の教師にも纏めることが困難だといわれている大変なクラス。

そんな中で、アスナだけがネギに対して注意を与えていた。

学園長も怒ったといえば間違いではないが、普段の関わりがほとんどないので、これは外れてしまう。

そんな自分のことを注意してくれる、本当のネギを見てくれている。

そんな風に思えるアスナが、ネギにとっては身近に相談できる人物であったのだろう。

アスナがそんな風に考え事をしていると、一樹が不意に先ほどの続きを語りだす。

「魔法を知ってしまったものは記憶を消さなければいけない。それを逃れるのは関係者のみ」

アスナはその言葉を聞いて、一樹が自分の記憶を消そうとしているのではと、とっさに身構える。

だが、一樹はそんな様子をおかしそうに笑う。

「ちょっと、何がおかしいんですか？」

思わずアスナが文句を呟いてしまうほどに・・・

「言ったでしょ、関係者は逃れるって。だからそれがアスナちゃんが関係者だって言う証明だよ」

その言葉に、アスナはそう言うことかと理解するが、先ほどから一樹にからかわれている気がしてならない。

アスナ自身気づいていないが、先ほど一樹に話しかけたときのあの深刻そうな表情は何処かに消え去ってしまっている。

「それで他に聞きたい事は？」

一樹がそう問いかけると、アスナは一番大事なことを思い出す。

アスナとネギが仲違いするきっかけになった話。

ネギに見せられた骨董魔法具の本、その本に載っていた盗まれたはずの指輪。

それを何故一樹が所有しているのかということ。

「その、怒らないで聞いてもらえます・・・？」

アスナこちらを伺うような問いかけに、首をかしげながらも了承する。

「ここまで話したからもう正直に言いますけど、私もちょっと前に一樹さんが魔法使いかもっていう話は聞いていたんです。それでその時に聞いた事でちょっとケンカみたいになって・・・私は信じていないんですよ、一樹さんが泥棒をしたなんて」

「・・・は？」

アスナの言葉が理解できない一樹は、目を丸くして驚いている。

頭に手を当て、どういう話でそうなったのかと一樹は考えるが、まったく心当たりがない。

そんな様子の一樹を見て、アスナもオロオロとしてしまう。

「ゴメン、話がつかめない。詳しく話してくれない」

一樹のその言葉に、アスナは慌ててその時のことを語りだす。

「一樹さんに魔法の本のことを尋ねにいったとき、ネギが一樹さんの着けているその指輪を見たそうなんです」

そう言いながら、アスナは一樹の左手を指差す。

一樹も「これ？」っと左手を顔の前に持ってくると、アスナは「それです」と答える。

「その日はそれで終わったんですけど、後日ネギに呼び出されて、骨董魔法具？っていうものの本を見せられたんです。そこで一樹さんが着けているその指輪が載っていて、それはもう何百年も行方が知れないっていうものなんです」

「それで俺が泥棒かもしれない・・・そう言うことになったわけか？」

アスナがはいと答えると、一樹は困ったような表情で頭を押さえる。

そんな一樹の様子を見て、アスナはまさか本当のことでは、という思いがわずかに浮かんでくる。

「話を一つづつ整理しようか。まず俺が泥棒かと聞かれたら、それはありえない」

その言葉に、アスナはホッと息をつく。

「そもそも数百年前に無くなったものを、今年１７の俺が盗めるわけないじゃん」

笑いながらそう話す一樹に、「ですよね～」とアスナも笑いながら返す。

アスナとしては一樹がやはり泥棒ではないとわかった時点で満足だった。

今日はこれで気分良く眠れる、ネギとも仲直りしよう。

そんなことを考えていたアスナは完全に安心していた、一樹がこの後言う一言を聞くまでは・・・

「まぁこの指輪が本物かと言われたら・・・たぶん本物なんだろうけどね」

そう呟いた一樹の方を、まるでさび付いたブリキのおもちゃのように、ぎこちない動きで見つめなおすアスナ。

その目は信じられないモノを見たような目だ。

「まぁ、これ貰い物だからね、前の持ち主は・・・あれだからね」

一樹はそう言って、遠くを見つめる。

アスナはその言葉にひとまず安心するが、好奇心が勝ったのか、ついその人物のことが知りたくなった。

「前の持ち主って？」

「エヴァ」

「エヴァって・・・エヴァンジェリンさん!?」

アスナは色々な意味で衝撃の事実を聞かされ、大きな声で叫んでしまう。

そもそもクラスメイトにも魔法使いがいると言うことが驚きであり、更に指輪の前の所持者と言う点もある。

「今はあんなんらしいけど、もともとかなり名の通った魔法使い・・・らしい。俺もそれを知ったのは最近だけどね」

苦笑いを浮かべる一樹に、アスナはもう驚くことが一杯で処理しきれない。

「あ、もう言いです・・・聞きたい事は聞けましたし」

そう言うアスナの頭からは、わずかに煙が噴いていた。

「そうか」

一樹はそう言うと、エヴァの家に戻ろうと足を動かす。

「あ、そうだ」

だが、わずかに進むと、何かを思い出したようにアスナの方に振り返る。

「子供先生、いや、ネギ君と、はやく仲直りできるといいね」

それだけ告げると、一樹は先に家へと戻っていった。

残されたアスナは一樹の言葉を噛み締める。

とりあえず、ネギに謝ろう。

でもその前に一発だけ殴っても文句はないはず、ネギのせいで話がややこしくなったんだから。

とりあえず、謝ろう・・・明日になったら

何だかんだで自分から謝るのは何か恥ずかしいアスナなのであった。

結局その日は遅くまでエヴァの家で過ごし、寮の門限ギリギリまで過ごしていたアスナやこのか達は、慌てて寮へと戻っていった。

もちろん一樹はそれを送っていったのだが、エヴァの家を出る直前

「お前は戻って来い」

そう告げられ、あぁ、この後は別荘に連れ込まれるのか・・・

戻っても死ぬ、逃げても死ぬ、どちらにしても逃れられぬ運命。

憂鬱そうな表情で、エヴァの家と女子寮を往復した一樹だった。

リビングで死んでいた一樹だが、何か腹の方に重みを感じて目を覚ます。

「ケケケ、ヨウヤクオ目覚メカ」

動かぬ殺人人形、もといチャチャゼロが、一樹の上に乗っかって、笑っている。

「一つ聞いていいか」

「ナンダ？」

「何で乗ってる？」

「ケケケケケ」

ただ笑って何も答えないチャチャゼロ、見方によってはかなりホラーな光景である。

そんな一樹に声をかけるものが一人。

「おはようございます、一樹さん」

一樹の後ろで直立しており、一樹も寝ぼけながらもその姿を確認した。

「もう少しで朝食の準備が整いますので、目を覚ますために顔を洗

われて来てはどうでしょう」

茶々丸の言葉に、断る要素がないのでそれに従う。

チャチャゼロを掴み

「ハナセ」

ポィっと放り投げる

「オイ」

ことはせずにその場にそっと置いた。

立ち上がると、顔を洗うために洗面所へ歩いて行く。

ドアを開き、一樹は扉の向こうへと消えていった。

・・・・・タッタッタタドドドドッ

洗面所からものすごい勢いで走ってくる音が聞こえ、ガチャっと乱暴にドアが開かれる。

「えっ？　いや、えっ！？」

一樹は茶々丸を見て、とても驚いている。

一樹は茶々丸の方に近づくと、まるでオバケでも見るように茶々丸を見回す。

「どこかおかしいでしょうか？」

茶々丸は一樹の行動を不思議そうに見ながら、そう尋ねる。

「ドコガオカシイカッテ・・・」

チャチャゼロはおかしそうに笑う。

「おかしいも何も、昨日と体が違うくない？」

茶々丸は一樹の行動を理解したと言うように、ぽんと拳を叩く。

茶々丸の体、昨日までのそれは人型というものの、球体の間接など何処か人形という雰囲気を隠せなかった。

それがかなり人に近づいている、いや、もはや人となんら変わりは見られないほどに。

「これまで取れた戦闘データを元に、ボディの改良が行われたのです」

一樹がエヴァの元で修行を始めてから、茶々丸も戦闘を行う回数が爆発的に増加した。

それに伴い、茶々丸に蓄積される戦闘データも比例するように増加していった。

その戦闘データをもとに、博士が解析を進め、ついに昨日そのボディが完成し、新ボディへと交換が果たされたのである。

茶々丸は淡々と話すが、一樹はまだ驚きを隠せない。

「改良というか・・・もういいや」

ほとんど身体が変わっているのだが、それはもう突っ込むべきではないだろう。

一樹は黙って朝食を取り、茶々丸の入れた日本茶を飲みながらくつろいでいた。

だが、ふと時計を見て慌てだす。

今から家に戻って、学校へ行く。

言葉にすれば数秒かからないが、行動にすると数十分の時間がかかり、学校が始まる時間から逆算すれば、結構ギリギリの時間である。

むしろそんな時間になっても、エヴァが降りてこないことに突っ込みを入れるべきだが、そんな余裕は今の一樹にはない。

一樹は慌ててエヴァの家を飛び出すと、風のように走って行くのだった。

２６話（後書き）

アスナの誤解を解きました。
とりあえずこんな感じで問題ないかと・・・
茶々丸は進化しました、原作１９巻ボディですね。

ところで話は変わりますが、いつの間にか５０万どころか６０万ＰＶ越えてました。
ここまで見てくれている人がいると言うのは、作者の励みになります。
この場でお礼を言わせて貰います、ありがとうございます。

27話

麻帆良学園には、外部から悪意を持つものが入り込まぬよう、一般人には気づけない、結界が張られている。

それは人はもちろん、魔力を持つものなら、魔物であろうと、妖精であろうと、なんにでも反応するようになっている。

これを越えれば、学園の者に知られ即座に追っ手がかかる。

学園はこれを一つの策敵機能として用いていた。

だから、魔力を持ったある小動物が学園内に侵入した事に気づかなかったのは、結界の不具合か、それとも・・・

放課後の屋上、そこにはあの日と同様にネギとアスナが立っていた。

あの時と違うのは、前回はネギがアスナをこの場に呼んだ事で、今回は反対にアスナがネギを呼んだ事である。

さて、アスナの前に立つネギは緊張していた。

あの日以来まともに口を利いていなかったアスナからの、突然の呼び出しである。

もしかしたら、また何か怒らせるような事をしたのかもしれない。

そう考えると、体が動かなくなり、口を動かすことが出来なくなっていた。

対するアスナも緊張していた。

こちらもあの日以来会話をしていないことを気にしており、なかなか口を開けない。

要するに、お互いが口を開けない状態のまま、時間だけが過ぎているのだ。

「ネギ！」

「アスナさん！」

二人がやっとの思いで口を開くが、まるで図ったように同時に声を出してしまい、気まずい空気が流れる。

「えっと、アスナさんからどうぞ」

「いいわよ、あんたが先に言いなさいよ」

二人はそう言い、お互いに譲り合う。

だがそれでは話が先に進まない、アスナは意を決して話を始める事

にした。

「その、あんたに言いたいことがあるのよ」

アスナのその言葉に、ネギは身を強張らせる。

額には冷や汗を浮かべ、呼吸もわずかに乱れている。

ネギの方へ、一歩二歩と近づいてくるアスナ。

アスナが近づいてくるほどに、ネギの恐怖心はどんどん膨れ上がって行く。

そしてネギとアスナの距離はあと一歩でぶつかると言うところまで近づく。

アスナがそこまで来ると、ネギは目をつぶる。

「ネギ・・・ゴメン!?」

目をつぶっていたネギがその大きな声に驚き、目を開けると、そこには自分に向けて深々と頭を下げているアスナの姿。

突然のことに、ネギは慌てる。

「ア、ア、アスナさん!?　どうしたんですか突然!?」

そう言うと、ネギはすぐにアスナの頭を上げさせようと動き出す。

ネギの言葉に、ようやく頭を上げたアスナ、だがその表情は未だ暗

いままだ。

「あんたを無視するようなことして、本当に悪かったと思ってるのよ。だから・・・ごめん」

アスナのその言葉に、ネギはアスナの思いを理解する。

自分と同様、アスナも謝罪がしたかったのだと、その事を理解した途端、先ほどまで抱いていた恐怖心など霧散していった。

「アスナさん、僕もアスナさんの気持ちを考えないで、アスナさんを傷つけるような事をしてしまったみたいで、だからごめんなさい！」

二人して頭を下げている、その様子が面白くなってきて、どちらからと言わずに笑いが起きる。

「あははは、二人して謝りあってバカみたいじゃん」

「そうですね、でも・・・アスナさんとこうして話してると、僕嬉しいです」

そう言うネギの瞳には、うっすらと涙が浮かんでいる。

そんなネギを見て、アスナは更に笑う。

「あんたバカみたい、なに泣いてるのよ」

アスナのその言葉に、ネギは慌てて涙をぬぐう。

「な、泣いてなんかいませんよ！」

この時、二人はようやく長かった仲違いの時を終わらせたのであった。

「あんた一樹さんが泥棒かもって言ってたじゃない！？」

「えー！　僕そんな事一言も言ってませんよ！」

はずが、何故かまたアスナはネギを怒鳴っている。

「あんた確かに本を見せて、これは盗まれたものなんですとか言ったじゃない」

そう言ってネギの首を掴んでいる。

「そんな！　僕ちゃんと言いましたよ、これは数百年前の話だって」

ネギはそう言って、アスナに反論して行く。

「ま、紛らわしいのよ！！」

アスナの火山がついに噴火した。

「大体あんたの言葉が足りないから、私はこんなに悩んで、この前なんかそれを聞きに行って、一樹さんに笑われたのよ」

アスナはそう言ってネギの頭を前後に揺する。

「それはアスナさんの早とちりじゃないですか～」

頭を揺らされながらも、そう反論するネギ。

そう、結局はアスナの早とちりとネギの言葉足らずが原因なのである。

本当にこの二人は仲直りをしたのか、屋上には二人の口げんかの声が響き渡っていたのだった。

やがて口げんかも収まり、二人は落ち着いた様子で話を再開する。

「それじゃあ、一樹さんはやっぱり魔法使いだったんですね」

ネギは自分の予想があっていて嬉しいのか、わずかに誇らしげである。

そんなネギを見て苦笑いを浮かべるアスナ、だがその目は嬉しそう。

「そうそう、一樹さんから聞いたんだけど、うちのクラスのエヴァンジェリンさんも魔法使いなの？」

アスナがそう言うと、ネギは嬉しそうな表情に変化する。

「はい！　アスナさんに話が出来ない時に相談に乗ってもらえて、ちょっと冷たい感じもしますけど、それでもすごくいい人でした」

ネギの中でのエヴァはすごく好印象、ぶっきらぼうではあったが、次にするべき事を的確に教えてくれたエヴァに、ネギはとても好感を持っているのだ。

「そう言えばあの指輪、もともとはエヴァンジェリンさんが持っていたらしいわよ」

アスナのその一言に、ネギは大きく反応をする。

「エヴァンジェリンさんが！？　どうしてなんだろう」

ネギはどうしてエヴァンジェリンが行方不明の指輪を持っているのかと、不思議そうに首をかしげる。

「兄貴、お困りのようですな」

屋上に、アスナでも、ネギでもない、第三者の声が響き渡った。

一樹は不機嫌であった。

出来ることなら昨日の自分を呪ってやりたいと思うほどに。

それ以前にあんな内容を読めない電話をかけてきた学園長をこそ呪ってやろうか、そんな危ない事まで考え始めている。

一樹が此処まで黒くなっている原因、それは・・・

「ほら、ぼさっとしてないであなたもちゃんと調査してください」

一樹は高音に引っ張られ、桜通りの調査をさせられていたのであった。

～～～

学園長に呼ばれた一樹は、学校が終わると、その足で学園長の元に訪れていた。

そこで待っていたのは、心なしか申し訳なさそうな様子の学園長、そして刹那、真名、同じく３－Ａの生徒であり、協会でシスターの見習いをしている春日美空、それに高音や佐倉愛衣など、その他にも数名、麻帆良に所属する魔法生徒が集まっていた。

一樹がやってきたのを確認すると、学園長は全員に声をかけてから話し始める。

「今日呼んだのは他でもない、近頃桜通りで吸血鬼の噂がたってお

るらしい、そこでじゃ」

学園長はそこまで言うと一旦言葉を区切る。

この時点で一樹の頭にはこの後の言葉が思い浮かんでいた、そしてそれは非常にめんどくさいことである。

「おぬし達には桜通りの調査を命じる」

予想通りの言葉が出てきて、一樹は心の中でため息を吐いた。

学園長としてはそんな事を学生にやらせたくないのだが、この地の長である者として、噂をそのままにしておくわけにもいかない。

生徒たちの声にそう形で、学園長が取った行動の結果がこれであった。

「お任せください、学園長！　私達が見事解決させて見せますわ」

使命感に燃える高音が高らかにそう宣言し、拳を強く握っている。

そんな高音を尊敬した目で見つめる愛衣、他の生徒も高音のように使命感に燃えているか、愛衣のようにそんな強気な人を羨ましそうに見つめている。

刹那は興味なし、一樹、真名、美空はその光景を冷めた目で見つめていた。

刹那、最近はこのかの傍を離れることもしばしば。

一樹にコテンパンにやられて以来、己の未熟さを恥じた彼女は、別荘での修行には参加しながらも、それ以外の時でもどこかで修行に明け暮れている。

全てはこのちゃんを守りぬけるようになるため、そしてこのちゃんの隣りを堂々と歩くため、刹那は更に強くなるため日々を過ごしているのだ。

それでも以前よりはこのかと触れ合う機会が増えたため、刹那にはその生活が一切苦ではなくなっていた。

刹那、愛ゆえの行動力である。

その話は横に置いておくとして、話は学園長室に戻る。

「此処に呼ばれていない生徒はどうするんですか」

真名がそう尋ねると、学園長はあらかじめ答えを用意していたのか、あっさりと答えが返ってくる。

「あまり大人数でやると目立つからの、この人数が許容できる最大の人数じゃろう」

「それじゃあ希望者に替わって貰ってもいいですか」

こんなめんどくさいことはお断りっと、美空は学園長に尋ねる。

一樹も出来るなら適当なやつにこの仕事を押しつけようと考えていたため、この答えには耳を傾けていた。

だが、その答えは学園長が答える前に、ある人物の一言で塗り替えられてしまう。

「もちろん替わってもらうなんてありえません、これは私達が選ばれたのですから、私達で解決するべき、そうでしょう学園長」

ある人物、もとい高音のその一言に、他の生徒のテンションも上がって行く。

「私は報酬さえ貰えれば仕事はするよ」

真名のその言葉に、場の流れは完全に決まる。

報酬を求めるべきではないと考える生徒も当然いるが、真名のように働けば常に物資を消費するものも中にはいる。

そんな人達は失った物資、真名なら銃に使う弾を補充しなければならないし、整備も必要。

なかなかお金がかかると言うことも彼らは理解している、だから思っていてもそれは口にしないようにしていた。

一樹はＫＹと呼ばれようとも、この場から逃げ出すことを考えていた。

何が楽しくて自分を嫌っている魔法生徒たちと働かなければいけない、そう思っている。

気づかれないように学園長室から消えようと、足をわずかに動かす。

その動かした足は何かにぶつかる、はて、自分の後ろには何もなかったはず。

恐る恐る振り返ると、そこにはとてもいい笑顔をした高音が立っていた。

「黙って雲隠れしようなど、そうはさせません」

いつの間にか、高音は一樹の後ろにまわりこんでいたのだ。

「さぁ、それでは早速桜通りに向かいましょう」

一樹の手を強引に掴み、高音は学園長室から出て行く。

それに続くように、他の生徒も全員出ていった。

学園長は思う、部屋を出る直前一樹と目があった。

あの目はまるで市場に売られて行く子牛の目、頭の中にはあのメロディが響き渡る。

学園長は心の中で、深く一樹にお詫びを申し上げているのだった。

〜〜〜

桜通りを何人もの生徒が調べているが、一向に手がかりは見つからない。

そもそも噂では現れるのは満月の夜、今は夕方、それに満月はつい先日過ぎてしまった。

そもそもこの調査事態に意味があるのかと問いたい一樹であったが、もはや口を開く事さえしなかった。

結局この日は夜まで色々調べたが、手がかりは一つも見つからないのであった。

27話（後書き）

作者としてはこういう風に意図してました。
アスナは早とちり、ネギは言葉足らずなだけ、ですので別にネギはおバカじゃないですよといっておきます。
高音さんがちょっとあれな感じ、でも魔法使いって少なからず選民思想のようなものがあるように感じるので、おかしくはないはず・・・
・
それにしても戦闘シーンまで道のりが遠い、次に戦闘が入ってくるのは、果たしてあと何話先になるのやら・・・

28話

麻帆良学園の屋上、ネギとアスナはその場に響いた謎の声の主を探して辺りを見回す。

しかしこの屋上には二人以外の人の姿はない。

まさか幽霊と考えたが、そんなことあるはずがないと更に周囲を見回す。

「こっちですよ、こっち」

その声はどうも二人の足元から聞こえてくる。

ネギとアスナが自身の足元に目を向けると、そこには体が白く、尾の長い小動物。

イタチのような動物がネギとアスナ、二人の足元にいた。

「へへ、お久しぶりです。ネギの兄貴」

尻尾を振りながら、そう声をかけてくる小動物。

「き、君は・・・カモ君!?」

ネギは驚いた表情で小動物の名を叫ぶ、すると名を呼ばれた小動物は嬉しそうに跳ね上がる。

「そうだぜ。兄貴、恩返しに来ましたぜ」

再会を喜ぶように、ネギとカモの二人は抱き合っている。

その様子を、この二人の関係をまったくわかっていないアスナは、その横で訳がわからず見守っていた。

「あ、アスナさんスイマセン」

そんなアスナに気がついたネギがアスナに声をかけると、カモもアスナの方に顔を向ける。

「おっとこいつはすまねぇな、俺っちの名はアルベール・カモミール、よろしくな」

そう言ってカモが自己紹介すると、アスナも自分の名を告げる。

そこでようやくアスナは気になっていたことに突っ込みを入れる。

「っていうかなんでこの動物普通に喋ってんのよ!?　おかしいじゃない!?」

そう叫ぶアスナに、ネギは首をかしげている。

「なんでと言われましても・・・カモ君はカモ君ですし」

「兄貴、それじゃわからないですって。俺っちは普通の動物じゃないんです。オコジョ妖精である俺っちは人間の言葉も理解できるんすよ」

カモのその説明に、アスナはなんとなく理解したが、魔法世界の新

たな事実を知り、言葉を失っているのが現状だった。

「それにしてもカモ君、如何してこんなところに？」

ネギがそう尋ねると、カモは思い出したように話しだす。

「それっすよ、兄貴。俺っちは兄貴の修行の手助けのためにやってきたんすよ。兄貴、パートナー探しの方はどうなってるんっすか？」

カモのその言葉に、ネギとアスナは話が良くわかっていないと言う顔をする。

「なにやってるんすか、兄貴。一人前の魔法使いになるためには、パートナーの一人や二人、パートナーがいないと立派な魔法使い（マギステル・マギ）としてカッコがつきませんよ」

そう言われると、ネギは困った表情になった。

「それはそうなんだけど・・・」

「しょうがないっすね兄貴、でも俺っちが来たからにはもう安心してくれ」

そう言うと、カモは早速パートナー探しにいきましょうとネギに声をかける。

「ネギ、あんた関係のない子を巻き込んじゃダメってわかってるわよね」

明日ながそう声をかけると、ネギはわかっていますとこたえる。

「カモ君、この学園にいるのはほとんど魔法を知らない一般人だよ。その中からパートナーは探せないよ」

ネギのその言葉に、カモはショックを受けた顔を見せる。

「なんでっすか～、兄貴」

「しょうがないよ、だって今度魔法をばらしてしまったら、僕の修行は即終了なんだよ」

ネギがそう言うと、カモははっとひらめいた表情を見せる。

「兄貴、それなら問題ないですぜ。パートナーになれば関係者、問題は解決ですぜ！」

ビシッと指を突き出すカモに、ネギも思わずその言葉を信じそうになる。

だが、そんな二人に待ったをかけるものがいた。

「バカか！　あんた達は！？」

ネギの頭をバシッと叩き、そう突っ込みを入れる。

「そんなの駄目に決まってるでしょ。あんた本気でそんなことしたら、私が学園長に通報するわよ」

アスナの怒った表情に、慌ててそんな事やりませんと否定するネギ。

カモはちっと舌打ちをしているが、怒ったアスナに睨まれるとスイマセンと土下座をして謝った。

「あんた達、変なことしてたら容赦しないからね」

そう告げると、アスナは屋上から出ていった。

「あ、待ってください。アスナさん」

そう言ってネギもアスナの後を追いかける。

その場に残されたカモ、ネギの背中を見つめるその目は、どこか罪悪感を含んでいた。

ネギとアスナ、そしてカモは女子寮に戻ってきていた。

あの後アスナはネギの言い訳を聞きながらも、黙って女子寮まで歩いてきていた。

そうしてカモもネギの後をついてきたわけであるが、此処で問題が発生した。

「あんた何処で生活するつもりなのよ」

「俺っちですか？　そりゃもちろん兄貴の所に「それはダメよ」なんでっすか！？」

アスナの否定する言葉に、カモは驚いた顔をして叫ぶ。

「だって女子寮の中は基本的にペット禁止だもん」

アスナのその言葉に、カモは固まってしまった。

「そ、そんなー！　それじゃあ・・・俺っちはどうすれば？」

カモの絶望した表情に、アスナは罪悪感を感じるが、そもそもそれはアスナの責任ではない。

「アスナさん、どうしても無理なんですか」

ネギも何とかカモの力になりたいとアスナに問いかける。

二人の様子を見て、アスナも何とかしたいと言う気持ちがあるが、これればっかりはアスナにはどうしようもない。

そんな時に、部屋の扉が開く。

「ただいまー、ってそれ何？　可愛いー」

出かけていたこのかが帰宅すると、机の上に乗っていたカモを見つけて抱き上げる。

「この子どうしたん！？　ネギ君のペット！？」

カモを可愛がりながら、そう問いかけるこのか。

「そ、そうなんですけど、カモ君を飼えないときいて困っていたんです」

ネギはとりあえずこのかの話に合わせる事にして、話を進める。

「そんならうちがおじいちゃんに頼んだるわ！」

後にこのかはこの軽はずみの行為を後悔することになるが、この時はまだそれを知る由もなかった。

このかは携帯を取り出すと、部屋の外に出て何処かに電話をかけはじめる。

「あの、兄貴。どういうことっすか？」

このかが一旦部屋を出たことで、カモが小声でネギにそう問いかける。

「このかさんのおじいさんがこの学園で一番偉い人なんだよ、カモ君」

その言葉を聞いて、カモの目が光ったとか、光らなかったとか。

「ネギ君、飼ってもいいよやって」

部屋の戻ってきたこのかがそう言うと、ネギとカモは抱き合って喜んだ。

「世話は自分ですることと、他の寮生に迷惑かけんこと、これだけはちゃんと守りなさい、やって」

「わかりました、このかさん、それにアスナさん、カモ君を此処に置いてもいいですか？」

このかは二つ返事で、アスナも先ほどのやり取りから、仕方ないと置いてやることを許可してしまう。

カモの本性を知らない二人は、とんだエロオコジョを部屋に置いてしまったことを、この時はまだ理解していなかったのであった。

「ネギ、あんたお風呂入ってきなさいよ」

それからしばらくたって、アスナはネギにそう声をかけた。

アスナのその言葉に、ネギはあからさまに動揺した。

ネギ・スプリングフィールド、大のお風呂嫌いである。

麻帆良に来たころは、アスナにそれを知られて風呂場で洗われていたが、最近はネギがそれを恥ずかしがるので一人で入らせるようになった。

しかし、一人だとなかなか入ろうとしないネギなので、時々はアスナに風呂に連れ込まれては丸洗いされている。

今日もそう言うやり取りが行われるのだろう・・・いつもどおりであったならば。

「兄貴、男たるもの身だしなみには気をつけないと。俺っちも行きますんで一緒に行きましょう！」

カモがやや興奮しながら、ネギをそう急かす。

ちなみにこのかは今部屋にはいない、図書館探検部のメンバーと共に大浴場で入浴中である。

アスナも誘われたが、ネギを風呂に入れなければならないので、先に行ってもらってるのだ。

「さぁ、行きましょう、兄貴、さぁ！」

どこかテンションのおかしいカモに、何かおかしいと感じ出したアスナはカモに問いかけることにした。

「あんたなんでそんなに急いでるのよ」

「そりゃそうっすよ、お風呂と言えばなにも身に纏っていない女の子達がわんさか！　まさにおっぱいパラダイス・・・って、あ！」

テンションが上がりすぎて、つい本心を口にしてしまったカモ、やってしまったと体全身から冷や汗があふれ出してくる。

「へー、ふーん、そうなんだ」

自身の後ろから、アスナの声が聞こえてカモは慌てて振り返る。

「違うんすよ、アスナの姉さん。今のはつい口が滑った・・・じゃ

なくて、そんな邪なことを考える奴もいるだろうなっていう」

「それがあんたって言うことでしょ」

ゴンッ！

アスナに引っ張られてネギは大浴場へと向かって行った。

「助けてくれー」

カモは頭に大きなこぶを作り、尻尾に紐をつけられて、窓から吊るされているのだった。

「あんたのペット、次は本気で追い出すからね」

風呂から戻ってきたアスナは、隣に歩くネギにそう忠告する。

「そんなカモ君は僕のペットじゃなくて、友達です。それにカモ君はちょっとあれですけど、本当はいい子なんです」

ネギが必死にカモのフォローを入れるが、アスナは信用ならないと言う表情を崩さない。

なお、隣りを歩くこのかには、カモがアスナの下着を咥えて駆け回ったということにしておいた。

さすがに、関係者ではない（とこの二人は思っている）このかに、妖精であるカモの真実など話せるわけもない。

このかも妖精が存在するということなど知りもしないので、カモは本当にただのネギのペットだと思い込んでいる。

お互いが相手のことを知らないのだが、なかなか上手く話が通っているものである。

「とりあえず、この扉を開けた時にあいつがなんかしていたとしなさい。あたしは今度こそ窓からあいつを放り投げるわよ」

アスナが怒った顔でそう告げると、ネギはまさかと苦笑いを浮かべて扉を開く。

「ヤッホーイ！」

そこには何処から取り出したのか、むしろどうやって紐から抜け出したのか。

女性の下着に囲まれながら、その中を楽しそうに跳ね回っているカモのすがたが・・・

バタン

ネギは慌てて扉を閉める。

「ネギ君、急にドアを閉めてどないしたん？」

「そうよ、早く開けなさい」

このかとアスナは部屋に入りたいので、ネギに早くドアを開けるように急かす。

しかし、ここでドアを開けてしまっては、ネギの友達に死の危機が迫る。

「あ、そうだ！　お二人とも、何か飲みたくありませんか！？　一緒に買いに行きましょうよ！？」

とりあえず二人をこの部屋から遠ざけようと試みる。

「そうやなー、言われれば何か飲みたい気もするわー」

「あたしも、でも財布は部屋の中だし」

「それなら僕がおごりますから、お二人は先に行って待っててください。僕は財布を取ってからいきますんで」

ネギはそう言うと、二人を強引に部屋から遠ざけようとする。

「でもやっぱ悪いわ」

「そうよ、別に今はお金に余裕もあるし」

そう言って、二人はネギの言葉をやんわりと断ろうとする。

「ほ、ほら！　カモ君を此処に置いてくれるお礼なんですよ、だから・・・ね！」

ネギが慌てた様子でそう告げると、そこまで言うならと二人は先に自動販売機方へ歩いて行った。

その様子をしっかり確認すると、ネギは急いで部屋の中に入る。

「カモ君、何してるの！」

ネギが帰ってきたことに気づいたカモは、幸せそうな表情でネギの方に振り返る。

「あ、兄貴、ほら、見てくれ。ここは夢の世界だぜ」

手近にあったパンツを一つ咥えながら、そうネギに語りかけてくるカモ。

「ダメだよカモ君！　ほら早くそれを片付けて」

ネギは急いで目の前の光景を隠蔽しようと努力するが、当のカモはのんきに下着の上で跳ね回っている。

「カモ君急いで、じゃないと」

ガチャ

「ネギ、やっぱりあんたにおごって貰うのも悪いか・・ら・・・」

突然部屋に戻ってきたアスナは、その光景を見て言葉を無くす。

「ち、違うんです、アスナさん。これはその・・・とにかく落ち着いてください」

ネギの言葉が届いているのか、アスナはプルプルと振るえていて、顔は俯いているので表情は読めない。

「えぇ、あたしは落ち着いているわ。とりあえずネギ、あんたは後で話があるから、外で待ってなさい」

アスナのその言葉に、ネギは反論しようとするが、わずかに見えたアスナの瞳を見て言葉を無くす。

そして素直にアスナの言葉に従い、部屋の外へと出て行った。

「カモ君、短い間だったけど君にもう一度あえて嬉しかったよ。さよなら」

部屋を出たネギがそうつぶやいたかと思うと、部屋の中からは聞いた事のないような断末魔が、部屋の外まで漏れてきていたのだった。

「アスナとネギ君遅いなー」

そして一人自動販売機のところで待つこのか。

財布を持ってきていない彼女も、ずっと待ちぼうけを食らわされるのであった。

28話（後書き）

カモ終了のお知らせ。
次回からはまたネギとアスナの二人でお送りしたいと思います。
嘘ですが・・・
とりあえずカモがやってきました、余計な事を始めるのは次回からかな
まぁ、きっと彼の悪事はアスナが防いでくれるはず・・・

閑話（前書き）

申し訳ありませんが本編は1回休み。
この後の展開を纏めるのに時間がかかりそうです。

閑話

「ふふふ、皆さんお久しぶりです」

「・・・誰に話しかけてるんですか？　クウネルさん」

此処は図書館島の奥深く、地底図書室よりも更に下にある、クウネル・サンダースの居城である。

「いえ、前回出て以来、実に二十数話放置されてきたわけですが、そんなことは一切気にしていませんよ」

ニコニコとした表情でそう喋っているクウネルだが、一樹は一体何のことを話しているのか理解できず、頭を傾げるばかりだ。

毎週一回は必ず此処に訪れていたし、クウネル直々に重力魔法を教わっているのである。

エヴァの元での修行は、どちらかと言うと実際に戦闘に直結する術（すべ）を学ぶのに対し、クウネルからは純粋に重力魔法の指南を受けている。

～～～

「重力魔法を使う上で心がける事とはなんでしょう？」

クウネルさんの所にやってきて修行を始めるとき、最初にそう聞かれた。

「心がけることですか？　う～んなんですか？」

突然聞かれたのでなかなか思い浮かばない、一樹は首をひねって考える。

「言い方を変えましょう、重力魔法を使う時にどのようなイメージをしていますか？」

「重力魔法を使う時のイメージですか、強いて言うなら相手を上から押し潰すと言うようなイメージですかね」

実際、グラビレイなどを使う時はそう考えながら、一樹は魔法を使っている。

「なるほど、君はそう考えているのですか。それならまだまだですね、せいぜい４０点ぐらいです」

クウネルは残念そうに、しかも器用なことに４０点と魔法で宙に文字を書きあげ、それを一樹の方に飛ばしてみせた

「・・・４０点ですか？　まあ俺はまだまだ力を使いこなせていませんがそこまで低いですか？」

クウネルの言葉に、一樹は少し落ち込みながらそう尋ねる。

「逆に言えばまだ６０点分伸びれると言う事なのでそう落ち込まなくてもいいでしょう。むしろ喜ぶべきですね」

クウネルがそうフォローを入れるが、一樹はそう言う考えがあるかと思いながらも、やはり低い点数へこんでいる。

「まあ今は話を戻します、重力魔法のイメージですが、そもそも重力とはなんですか？」

「重力は地球が物体を引っ張る力ですよね、でもそれと何の関係があるんです？」

一樹は自分の頭の中にある知識を答えるが、その意味がわからない。

「意味は一樹君の言ったとおりです。重力とは地球が引っ張る力、つまり一樹君のイメージどおりにやるとその本質が上手くいきません」

「本質ですか？」

クウネルの説明が未だに理解できず、一樹は首をかしげながらもその意味を考え続けている。

「えぇ、一樹君のやり方だと相手を押しつぶす、つまり自分の魔力だけで魔法をイメージして使っています。一度実践してみましょう」

そう言うとクウネルは一樹に無詠唱の重力魔法をかける。

不意に魔法をかけられた一樹はそれに抗う事敵わず、地面に押しつぶされる。

「これが君のイメージで魔法を使用した場合です、感想はどうですか？」

どこか笑顔に含みがある感じで、クウネルは楽しそうにそう尋ねて

くる。

「なかなか・・・きつ・・いで・・・す」

身体が動かしにくいし、息苦しい、そして何より話しづらい。

やっとの声で声を出す一樹だが、クウネルが魔法を解除するとそれは全て解消される。

魔法を解除されて息苦しさもなくなり、一樹は息を大きく吸い込んで呼吸をする。

一樹の呼吸が落ち着いたのをみて、クウネルは話しかけてくる。

「では今度はイメージの仕方を変えて見ます」

そう言ってクウネルは一樹に再度魔法をかける。

しかし、その魔法は先ほどかけられた魔法とは、明らかに違いがあった。

また地面に押しつけられるが先ほどとは違う。一寸も身体が動かないし、これはまるで地面に縛り付けられているよう。

先ほどは上からの押さえつける力だけを感じていたが、今は上から押さえつけられるだけではなく、下からも引っ張られるような感じである。

身動き一つ出来ず、言葉も発せられない現状に、本当に先ほどと同じ魔力量でやっているのか疑いたくなる一樹。

魔法が解除されてもなかなか動けず、身体全体を何かで絞めつけられたようなダメージが一樹に残っている。

「これが正しい重力魔法のイメージです、先ほどとどう違いましたか？」

クウネルがそう語りかけると、一樹は感じたことを素直に口に出して行く。

「さっきは上から押しつぶすだけでしたけど、クウネルさんの方は下から引っ張られるような力を感じましたし、全方向から押しつぶされる力も感じました」

そう答える一樹の身体は今も先ほどの感覚が残っていて、冷や汗がとまらない。

「そうです、重力は地球が引っ張る力です。この大地の上ではどこにでも重力があります。ですから地球の力を少し借りるという風にイメージすればそれだけで威力が上がります。それに上から押し付けると言う風にするのではなく全方向から圧縮すると言うイメージを持つといいです」

クウネルは己が持っている重力魔法のイメージを、簡潔に言葉にして伝えた。

地球の力を借りる、そんなこと今まで一度も考えたことはなく、一樹はその話を熱心に聞いている。

「重力魔法の根源は地球のもつエネルギーを借りると言うことです。

ですがその力はとても強大です、借りる力を大きくすればするほど術者の身体はその力に蝕まれます」

クウネルはそう言って一樹に手を見せる、その手は所々出血しており、痛々しさが一目で伝わってくる。

クウネルは回復魔法を唱えて手を治療して、傷がふさがったことを確認すると話を続ける。

「このように少しでも力加減を間違えれば大怪我へとつながります、これから私が教える事はしっかり守ってくださいね」

微笑みながら話すクウネルに、感動する一樹。

「それでは修行を始めましょう」

～～～

このようにスタートしたクウネルの魔法講座であったが、いまでは一樹の中にその教えが染み渡っている。

エヴァとの修行とクウネルとの修行。

今の一樹にはそのどちらもが役に立つものとなり、魔本を手に入れたころとは（新たに出現した呪文のおかげと言うこともあるが）格別な実力を手に入れていた。

「それでクウネルさん、急に呼び出して、話ってなんです？」

目の前に用意されていたお茶を一口飲みながら、一樹はそう尋ねる。

「いえ、たいした事はありません。ただあなたとお茶がしたかっただけですよ」

依然表情を崩さぬクウネルに、その態度を怪しんでいる一樹。

「ふふ、わかりました。お話しましょう」

そう言うと、クウネルは少し真剣な表情へと変化を見せる。

「あなたから見て、ネギ・スプリングフィールドとはどのような人間ですか？」

「は？」

クウネルの突然の質問に、一樹は思わず何を言っているのかと聞き返してしまう。

だが、クウネルは微笑みを絶やさず、話を続ける。

「そう言えば一樹君にはお話したことがありませんでしたか？　実は私は彼、ネギ・スプリングフィールド君の父の、古い友人なんです」

クウネルのその話に、一樹はネギの父の話を思い出す。

聞いた話では、千の呪文の男（サウザンド・マスター）と呼ばれるほどの有名な魔法使いで、現代の英雄と呼ばれるほどのすごい魔法使い。

目の前にいるクウネルさんが、そんな人物の古い友人と言われて、一樹は驚いている反面、やはりそうなのかと言うことも感じている。

クウネルに魔法を教わって行く上で、自身と彼の間にある大きな差は、時間を増すごとに深く感じていた。

そんなクウネルだからこそ、そんな有名人の知り合いだから、本人も有名な魔法使いなのかもしれない、と納得のいく話でもある。

一樹がもう少し魔法使いのことに興味を持って、せめて赤き翼（アラ・ルブラ）のことなどを知っていれば、目の前の人物の正体など一発でわかるのだが・・・

ただクウネルも自身の正体を公表するつもりはないので、この二人は当分はこの調子なのだろう。

一樹は顎に手を置き、数瞬考える時間を取ったあと、おもむろに話しだす。

「俺の知っている限りで、ですが・・・普通に見れば大変な仕事を頑張っているんだなと思いますね」

「ほぅ、と言うと？」

一樹の意見が気になるのか、クウネルは先を促す。

「これは聞いた話ですので、彼の受け持つクラスの生徒に何人か知り合いがいますが、みんな彼のことを悪くいう人はいないですね。あ、小言とか文句は別ですよ。真面目で一生懸命に頑張っている、彼女達もそれを見ているから、彼のことを本気で嫌っている子はいないそうです」

クウネルはそれを聞いて面白そうに笑っているので、一樹は何かおかしなことを言ったのか不思議に思う。

「あぁ、すいません。彼の父はネギ君と真反対な人間で、不真面目で自分勝手な人間だったんです。まぁそれでも人をひきつける魅力があったんで、彼の周りにはいつもその魅力に轢かれた仲間がいたんですが・・・そんな彼からそんな子が生まれたと聞くと、どうもおかしくて」

そう語りながらも、やはりおかしいのが我慢できないのか、手で口を隠して笑っているようだ。

一樹は普段は見ないクウネルの一面を見れて新鮮だったが、クウネルはすぐに普段の様子を取り戻して話を続ける。

「それで、他にはどのようなことを感じたのでしょう」

「魔法の秘匿については少し脇が甘いようですね、それも最近では気をつけるようにしているみたいですけど。それ以外には・・・特にないですね。あまり彼と会う機会もないですし、聞いた話ではこれぐらいですかね」

一樹自身、積極的にネギと関わる気がないので、このぐらいがネギについて話せる限界である。

一樹がそこまで語ると、クウネルも満足そうに頷いている。

「なるほど、わかりました。話に聞けば聞くほど彼には興味がそそられますね。やはり私も彼と直に会ってみたいですね。まぁそれはまだ先の話になりますが・・・楽しみに取っておきましょう」

クウネルはそう話すと、先ほどまでとは違った表情を見せる。

「それでは楽しいお話はこれぐらいにしておきまして、今日もはじめましょう」

クウネルのその言葉に、一樹も真剣なまなざしになる。

「はい！」

これから魔法の修業が開始されるのだろうか？

否

「あれは私とエヴァが出会って7度目のことです」

クウネルが過去に行ってきた、エヴァをからかってきた話。

そして一樹がエヴァをどのようにからかえば面白い反応が見られるかを真剣に話し合う場が開かれたのであった。

閑話（後書き）

ということで、クウネルと重力魔法についての話と、一樹がネギをどう評価しているのかと言う話でした。
実際何もしていないのにどんどん強くなって行くのはまずいですからね。
一樹がレベルアップした要因だけでもと、この話を入れました。
エヴァとの修行も、いずれ過去の話として入れるつもりです。
まぁ、今までも修行はしてると言っていても、その内容はほとんど書いていなかったので、ちゃんとやらないと。

この後の展開を纏めるのに、時間がかかっています。
そしてリアルも忙しくなってきた。
なので更新遅くなるかも・・・いや、なります。

29話（前書き）

エイプリルフール、でもこれはネタじゃないよ。

29話

カモは授業中のネギについてきて、教室の片隅でクラスを眺めていた。

昨日はアスナにボコボコにお仕置きされ、今度こそ抜けられないように頑丈に紐で縛られた。

それからアスナは寮の中を探し回り、今は使われていなかった大きめの水槽を見つけてきて、それをカモの簡易的なゲージとすることにした。

カモは脱走を試みるが、自身を縛る紐の先には、寮の外から拾ってきたであろう大きな石がくくりつけられており、それがカモには重すぎて脱走ができない状態だった。

さすがのネギも、あの光景を見られた以上カモをかばうことはできず、このことには口出しせず、むしろカモを叱りつけていた。

結局、昨日は一日その状態ですごし、今日は部屋に置いていくと（出られないように細工しているとは言え）何をされるかわからないので学校に連れてきていた。

連れてきた時、教室内で一悶着あったが、カモには損なことなど何もなかったので、今は機嫌がよさそうである。

「（さて、このクラスの中で兄貴のパートナー候補は）」

そう考えながら、クラス全体を見回して行く。

その姿は生徒たちから見れば、可愛らしくきょろきょろ周りを見回している小動物なのだが、考えていることは未だネギのパートナーの事。

彼は結局懲りていないのだ。

「（それにしてもこのクラスはレベルが高いぜ、アスナの姉さんも見所はあるが、それ以外にも見所のある生徒がウジャウジャいるぜ）」

真名や楓、刹那にクーフェイの麻帆良四天王と呼ばれている実力者や、それ以外にもあやかやまき絵、裕奈など、一般人だが見所のありそうな人物を次々に見つけていく。

そんなカモもある部分は見つめなかった、いや、意図的に避けたといってもいい。

「（今は魔法のことを知らないみたいだが、このかの姉さんも間違いなくこちら側に進むであろう人間みたいだし、兄貴の周りは宝の山だな）」

カモはそう言っているが、実際はこのかはすでに魔法のことを知っている。

カモのことには気づいていないようだが、彼女がネギと共に歩む事はあるのか、果たしてカモの思惑通りに事は動くのか・・・

カモがそんなことを考えていると、教室には授業の終了を告げるベルが鳴り響く。

「はーい、それでは皆さん、今日はここまでにしておきますので、復習はしっかりしていてくださいね」

ネギがそう声をあげると、カモはネギの元に走って行き、彼の肩へと駆け登った。

ネギが教室を出て行くと、教室はいつもどおりの騒がしさが広がるのだった。

それから時間は経ち、放課後、ネギは再び桜通りにやってきていた。昨日は来ることが出来なかったが、あの時の事を調べるために、再びこの場所を訪れたのだ。

「兄貴、こんな場所に来て何をするんです？」

事情を知らないカモがネギにそう尋ねる。

周りに人がいない事を確認すると、ネギはカモの言葉に答える。

「実はここには吸血鬼が出るって言う噂があったんだ。それで先日僕はここに来ていたんだけど、確かに何かは出たんだ。でもそれが何かわからないまま、その日は手がかりも得られなかったんだ」

ネギの言葉を聞いたカモは、なるほどと考え込む。

「それでここに手がかりを探しに来たってわけっすね。さすが兄貴、魔法使いの鑑だぜ！」

カモにそう言われ、ネギも頬を赤く染め、手で後ろ髪を掻き均し、まんざらでもない態度で照れている。

そんなネギの表情を見て、カモはある事を呟く。

「それにしても吸血鬼・・・っすか」

カモのその話し方に、ネギは何か心当たりがあるのかと期待を寄せる。

「カモ君、もしかして何か心当たりでもあるの!?」

「心当たりも何も、ここには兄貴の父親が封じた吸血鬼が、今も暮らしているじゃないっすか」

カモの言葉に、ネギは二重の意味で驚かされる。

父がこの地に来ていたと言うこと、これは行方不明の父を探したいと言うネギにとって、今まで知る事のなかった新たな情報である。

そして父が封じた吸血鬼がいると言うこと、つまりその吸血鬼が今回の犯人なのではないか、少なくとも今得た情報からではそう推測されてしまう。

「兄貴、これを見てくだせぇ」

そう言うと、カモは何処から取り出したのか、ハンディサイズのパソコンを開き、あるページをネギに見せる。

そこにはネギにとって信じたくない事実が記載されていた。

事実それを見たネギの顔も真っ青になっている。

「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル、１５年前まで魔法世界で６００万ドルの懸賞金を懸けられた大悪党だぜ」

その言葉を聞いたネギは、それまで信じてきた自分を見失ってしまうのだった。

「茶々丸、今日の夕食はなんだ」

学校からの帰り道、茶道部での部活を終えたエヴァと茶々丸は二人で通りを歩いていた。

周りには人の姿はなく、エヴァの家までかなり近づいている所まで、彼女らは歩いて来ているのだ。

「そうですね、今日は気分を変えて蕎麦などどうでしょうか」

答える茶々丸は、己のマスターが最近洋食ばかり食べていたことを考え、サッパリした物を提案する。

「ふむ、蕎麦か・・・まぁいいだろう」

言葉ではしぶしぶと言った感じでそう言うエヴァだが、内心はすでに蕎麦を食べる気分になっており、一樹がそばにいれば確実にその事を指摘されていただろう。

そんな二人の前に、立ち塞がるようにある人物が舞い降りてきた。

その人物は自分の身長よりも大きな杖に跨っており、それから降りるとその杖をエヴァの方に向ける。

エヴァと茶々丸はその人物が何故そのような行動をとっているのか理解できず、だが茶々丸は己のマスターを守るために、エヴァの半歩前に立ち、エヴァを背中に守る。

「そんな物を私に向けて、一体どう言うつもりなんだ。ネギ先生？」

エヴァのその言葉に、ネギは答えることなくエヴァに杖を向け続ける。

何の返答もない事にエヴァはムッとくるが、同時にネギの様子を不審にも思っていた。

エヴァ自身ネギに杖を向けられるような理由など思いつかない。

それにあの様子はどう見ても普段のネギとはかけ離れている。

まるで誰かに操られている、そんな様子すら感じられた。

「エヴァンジェリンさん、僕にアドバイスをする影で、僕のことを笑ってたんですね」

突然話し出したネギに、その内容に心当たりのないエヴァはわけのわからぬ表情でネギを見ている。

「一体何のことだ、何が言いたい？」

「ふざけないでください！？　あなたが僕を襲った吸血鬼である事はもうわかっているんです！？」

ネギのその叫びに、今度こそエヴァは開いた口が塞がらなかった。

一体どう言う思考を辿ればその答えにたどり着いたのか。

ネギを観察し続けるエヴァの瞳に、その原因になり得るかもしれない異物の姿が映りこむ。

「（あのような動物など今まで見た事はない、それがネギの側にいると言うことは、あれがネギにいらぬことを吹き込んだのか）」

ネギの肩に乗るカモに目を向けて、そう結論を見出すエヴァ。

「あなたはここで捕らえて見せます、犠牲者が現れるその前に」

そこまで言うと、エヴァが何かを告げる前にネギは呪文を唱え始める。

「ラス・テル・マ・ステル・マギステル」

茶々丸はどう行動すればよいかとエヴァに視線を送る。

エヴァもこのまま呪文を唱えさせて、魔法を放たれるつもりはない。

くいっと顎でネギの方をさすと、茶々丸はそれに従うように動き出した。

「風の精霊（ウンデキム・スピリトゥス・アエリアーレス）１１人　縛鎖（ウィンクルム・ファクティ）となりて　敵を「バシン」うっ」

そこまで呪文を唱えていたが、接近して来た茶々丸にデコピンを喰らって詠唱を中断させられる。

「何をするんですか、茶々丸さん!?　そこをどいてください」

目の前に立つ茶々丸にそう告げるが、茶々丸はその場から動かない。

「申し訳ありません、ネギ先生。しかし、その指示には従えません」

「茶々丸は私の魔法使い（ミニステル・マギ）の従者だ、私を守るためなら何でもするぞ」

エヴァのその言葉に、ネギは驚愕の表情を浮かべるが、慌ててその場から飛び下がると再び呪文を唱えはじめる。

しかし、その動きを何処までも茶々丸が追いかけ、ネギの詠唱を邪魔するのでネギは呪文を唱えることが出来ない。

「卑怯ですよ、エヴァンジェリンさん。あなたはそこで高みの見物のつもりですか！」

実際ネギの言葉どおり、エヴァは一度もその場を動いておらず、全てを茶々丸に任せている。

ネギから見れば1対2と言う状況であるし、そう言う言葉が出てきてもおかしくはない。

「は、何を言うかと思えば。これが魔法使いの戦い方だ。従者が魔法使いを守り、その間に呪文を完成させる」

エヴァの言うことも最も、これが魔法使いの戦い方であるし、今はエヴァは手出ししてないだけ。

エヴァは現在魔法を使える状態ではなく、魔法を使うために必要な媒介となる魔法薬も今は持っていない。

そう言う理由でエヴァは何もしていないのだが、それがネギにとっては腹の立つことなのだろう。

「兄貴、この状況はこっちが不利だ。一旦引いて、策を練ってから反撃に出よう」

カモがネギにそうアドバイスを送ると、ネギは悔しそうにその場から退く。

「エヴァンジェリンさん、あなたは僕が必ず倒します。必ずです」

そう言うと、ネギは杖に跨り何処かへと飛び去っていった。

茶々丸がそれを追おうとするが、エヴァが声をかけてそれを止めさせる。

「マスター、追わなくてもよろしいのですか？」

「構わん、放っておけ」

エヴァのその言葉を聞いて、茶々丸はわずかに乱れた制服を整えると、再びエヴァの後ろを歩き出す。

「茶々丸、今日のことは学園には報告するなよ」

「かしこまりました」

後ろを歩く茶々丸にそう命令すると、茶々丸は素直に了承の意を返す。

「おかしな状況になってしまっているが、これはこれで面白い。一樹に言われて坊やを襲うことは諦めていたが、この展開なら私が手を出さずとも、向こうから勝手にやってきてくれる。奴の息子の実力も確かめられるし、面白い事だらけだ」

そう言うエヴァの顔は、普段の退屈そうな顔とは違い、愉悦に顔がゆがんでいる。

「何故こうなったのかはしらんが、相手になってやろう。ネギ・スプリングフィールド」

何処かのゲームに出てきそうな、魔王のようなセリフを呟きながら、高笑いをあげるエヴァとその後ろを歩く茶々丸。

麻帆良学園に新たな争いの火種が生まれた、これは今後どのように燃え上がるのか、誰も知るものはいないのだった。

部屋に戻ってきたネギとカモは、息をつく暇もなく話し合いを始めていた。

「兄貴、このままじゃどうやってもあの二人には勝てないぜ。やっぱりパートナーを見つけないと」

カモのその言葉に、ネギは考え込む。

魔法使いとして戦うには、一人ではあの二人に太刀打ち出来ない。

しかし、パートナーを見つけようにもその相手がいない、学園の生徒たちはこちらに巻き込むわけには行かないし、ネギは正直手詰まりだった。

「やっぱり生徒の中から「それはダメ！」・・・そうっすか」

カモの言葉に、ネギは強い否定の言葉を発すると、カモもしぶしぶと諦める。

ガチャ

「ただいま、ってネギあんたどうしたのよ」

部屋に帰宅したアスナが、ネギの様子を見てそう声をかける。

「アスナの姉さん、実は「カモ君！」・・・兄貴」

カモが事情を話そうとするが、ネギに怒鳴られておずおずと引き下がる。

「ネギ、あんた本当にどうしたの？　様子が変よ」

顔をこちらに見せないネギを不審に思うアスナ。

アスナが心配そうに、ネギの方に近づいてくる。

ネギの肩に触れようとした瞬間、アスナの手はパンと振り払われた。

「ネ、ネギ？」

手を払われたアスナは、驚いた様子でネギを見つめるが、そこである事に気づく。

「ネギ、もしかしてあんた・・・泣いてるの」

その言葉にビクッと肩を揺らし、慌ててアスナに背を向けるネギ。

そのことに確信を得たアスナは、少し考えると、優しくネギを抱きしめた。

「なんであんたが泣いてるかは知らないけど、私の胸を貸したげるから」

アスナのその言葉に、ネギはアスナの胸に飛び込む。

「アスナさん、ウ、ウワァーン」

ネギはアスナの胸を借り泣いた。

アスナはネギが泣き止むまで、ずっとネギのことを優しく抱き続けたのであった。

カモはその様子を見て、わずかな後悔の念を浮かべていた。

しかし自分にもやらなければならない事がある、そう考えて、その気持ちを心の奥に封じ込めるのだった。

29話（後書き）

話を一気に展開させました。

カモにより明かされた吸血鬼の存在
ネギの勘違いが生んだエヴァとの戦い
エヴァの元を逃れながらも、再戦を告げるネギ
そしてカモの言う、やらなければいけないこととは・・・
そして一樹はこれにどう関わって行くのか

それぞれの思いが交差する中、彼らの今後はどうなって行くのか
次話にご期待ください。

３０話（前書き）

前回話数を間違ってたみたいですね。
途中で気づいて修正しましたけど・・・
なろうはエイプリルフールネタでちょっとした変化がありましたね、
作者的には面白かったですけど
作者も何かネタが書きたいかも、でも今はエヴァンジェリン編を終わらせないと
ということで最新話、どうぞ

30話

あの後ネギは落ち着くと、アスナにこれまでのことを話した。

はじめは黙って聞いていたアスナであったが、ネギが襲われたと言う辺りからその顔には陰りが見えはじめる。

そして、吸血鬼の正体がクラスメイトであるエヴァンジェリン・・・かもしれないと言う話を聞くと、アスナはショックを隠しきれなかった。

「嘘でしょ、だってあの日、エヴァちゃんにそんな素振りは一つもなかったじゃない」

アスナのいうあの日とは、図書館探検部の面々や一樹と共に、エヴァンジェリン邸で食事を共にした時のことである。

アスナのいう通り、エヴァはめんどくさそうな表情はしていたが、ネギを襲うなんて考えている気配など、一寸も感じさせなかった。

それゆえにアスナはその話が未だに信じられなかった。

「それがあの吸血鬼の狙いだったかも知れねぇじゃないっすか！それにほら、エヴァンジェリンが大悪党だったって言う証拠はここに」

カモがそう言いながら、先ほどネギに見せたのとおなじページをアスナの前に開く。

そこには確かに、アスナのクラスメイトであるエヴァンジェリンの顔写真が載っており、彼女に懸賞金がかかっていたと言う事実が残っている。

「そんな・・・でも」

何とか反論をしたいが、その言葉が出てこずアスナは口をふさぐ。

「でも今はそんなことより、どうすれば兄貴があいつらに対抗できるかを考えないと」

カモがそう告げると、アスナもひとまずネギに目を向ける。

アスナの視線の先には、すでに泣き止んだネギが、何かよくわからない本を取り出して読みふけっている。

「ネギ・・・？」

「兄貴！　何してるんすか！？」

二人の声に気づいたネギは、本から視線を外すと苦笑いを浮かべながら二人と目を合わせる。

「どうすれば、従者のいる魔法使いに対抗できるか調べてたんだけど・・・」

そんな答えは見つからなかったのだろう、後半は言葉が出てこなかった。

「兄貴、そんなのこっちも従者がいれば、万事解決じゃないっすか」

鴨は何を今更なことを、とネギを囃し立てるが、ネギは黙って首を横に振る。

「カモ君、僕は一人で戦うよ。これ以上関係のない人を巻き込むわけにはいけないし、巻き込もうとしちゃいけないんだ」

そう言うネギの言葉には、今までの彼からは想像もできないような、深い決意を感じ取れた。

だが、カモはネギを信じられないと言う表情で見つめている。

「兄貴、この際だからはっきり言うぜ。今の兄貴じゃ、どうあがいてもエヴァンジェリンとあの従者は倒せない。1対1でようやく勝負になるかもしれないって言うレベルなんだぜ」

カモのいう通り、いくら封印状態とは言え、６００万ドルの懸賞額は伊達じゃない。

今のネギではその状態でも勝てるかは未知数である。

そこにエヴァのサポート役である茶々丸が加われば、ネギに勝ち目はまずないだろう。

そのことを言われると、ネギも反論する事はできない。

だが、ネギはその思いを変えるつもりもない。

そんなネギの頭に、アスナからの拳骨が叩き落ちた。

「痛い！　アスナさん、何するんですか！？」

涙目で頭を押さえながら、アスナに抗議の言葉を送るネギ。

しかし、ネギに拳骨を食らわせたアスナは、やれやれと言った様子で、ネギを呆れた目で見ている。

「ネギ、ずっとあんたに言わないといけないと思ってたことがあるのよ」

アスナの言葉にネギは何のことだとアスナを見る。

「あんた・・・バカでしょ」

バカでしょ・・・バカでしょ・・・バカでしょ

ネギの中で何度も繰り返されるその言葉を、ネギは最初理解できなかった。

「な、僕がバカって！」

その意味を理解したネギは、慌てて反論しようとするが、アスナに口を押さえられる。

「黙って聞きなさい。まずあんたは言葉が少ないのよ。そのせいでこの間みたいなすれ違いが起こるのよ」

アスナにそう言われ、思い当たる節しあるネギは、やや落ち込んだ様子を見せる。

「それに自分で解決しようとするのはいいけど、少しは周りの気持ちも考えなさい。こいつだってあんたを心配してるんでしょ」

カモを指差しながらそう言うアスナに、ネギは更に言葉を失う。

「心配なのは私もよ、正直あんたとは揉めてばっかだけど、それでもそんな話を聞いて心配しないわけないじゃない」

その言葉に、ネギは驚く。

正直、アスナに良く思われていないと覚悟していたのに、目の前のアスナからそんな言葉が聞けたのである。

しかし、ネギはアスナも巻き込みたくはない。

「でもこれは僕の問題なんです、だから僕が解決しないと・・・」

未だにそんなことを言うネギに、アスナはいい加減頭にきたのか、ネギの鼻っ面に思い切り指を差し向ける。

「いい、あんたに一ついい事を教えてあげる。困った時は誰かに助けを求める。側にいる人に、助けてって言えばいいのよ！」

アスナのその言葉に、ネギは思わず涙をこぼしていた。

周囲の人間からは父親の存在から、多少のことは甘やかされ、人に頼らなければならない困ったことなど、周りの大人が取り除き、ネギには降り掛からなかった。

そんなネギだったからこそ、人を頼るということを理解できていな

かったのかもしれない。

「それじゃあアスナさん、僕のことを助けてくれますか・・・？」

恐る恐る伺うネギの頭を抱きしめながら、当たり前じゃないと答えるアスナ。

こうしてネギはまた一つ大事な事を学んだのであった。

「二人とも・・・俺っちの事忘れちゃいねぇか？」

いい加減空気に耐えられなくなったカモがそう言うと、アスナは慌ててネギの頭をつき飛ばした。

その際ネギは頭をぶつけて小さなこぶを作ったのだが、それは置いておこう。

「とりあえず兄貴、アスナの姐さんに協力してもらう、これはいいっすね？」

カモの確認に、今度は首を縦に振るネギ。

「でも今のままじゃアスナの姐さんはたいした戦力にならねぇ」

その言葉に、アスナはむっとした表情を見せる。

「姐さん、これは本当のことだ。昨日まで一般人だった人間が、そう易々と戦力にはなれねぇぜ」

しかし、カモの落ち着いた言葉に、アスナもそうなのかと納得せざるを得ない。

「でも、それを何とかする方法が一つだけあるんすよ！」

「何ですって！？」

カモの言葉に、エサに喰らいつく獣のように、話に食いついたアスナ。

「兄貴と仮契約を結べばいいんだ。そうすれば、兄貴の魔力で姐さんを一気にパワーアップすることが出来る！」

「本当にそんなことが出来るの！？」

カモの言葉に、どんどん盛り上がって行くアスナ。

「その上、血行促進勢力倍増、お肌もツルツルになるときたもんだ！」

「ネギ、仮契約するわよ！！」

そこまで聞いて、アスナはネギとの仮契約を決めた。

「わかりました、アスナさん、仮契約しましょう！」

ネギもアスナとの仮契約を決意する。

「それじゃあ二人とも、この魔法陣の上に立ってくだせぇ」

カモが高速で動き回ると、足元には何らかの魔法陣が浮かび上がっている。

アスナとネギ、二人はその言葉に従って陣の中に立つ。

「それじゃあ」

「はい！」

アスナとネギ、それぞれが最後の確認とばかりに声をかけあう。

「それじゃあ、ブチューッとキスをすれば完了だぜ」

カモの言葉に従うように、二人は顔を寄せ合う。

そして唇が重なり合う・・・寸前にネギの横っ面に鋭い張り手が突き刺さった。

無防備にそれを受けたネギは、魔法陣の外に飛ばされ、頭をぶつけて気を失っている。

「キ、キ、キスなんて聞いてないわよ！？」

カモの首を掴みながら、アスナは問いただしている。

「だ、だってそれが一番な簡単な方法なんですって！　それに俺っ

ちじゃこの方法でしか出来ないんっすよ」

カモは必死に弁解するが、危うくファーストキスを流れで失うところだったアスナは、怒りを押さえられない。

言葉にならない声を発しながら、どうしようもないこの怒りを発散させている。

「それに姐さんは兄貴を助けてくれるんでしょう。そのためには・・・ほら、ここは一つ！」

アスナは頭を抱えて、悩み続ける。

そしてついに考えが決まったのか、気絶しているネギを陣のなかに引っ張り込む。

そしてネギに口をつけると、カモが仮契約を完成させ、二人の契約が成立する。

それを確認すると、アスナはネギを放り捨てる、

「今のはノーカン、今のはノーカン、今のはノーカン」

そう呟いて、自分に暗示をかけはじめた。

未だに気絶し続けるネギ、ひたすら自分に暗示をかけているアスナ。

せっかくのパクティオーカードが出来たのに、それを抱えながらも素直に喜べないカモなのであった。

「坊やと敵対することになりそうだ」

「は？」

エヴァに突然呼び出された一樹だったが、突然そう告げられて、一樹には訳がわからなかった。

「なに、お前には伝えておこうと思ってな。だが、学園には報告するなよ」

エヴァはそう言って話を進めようとするが、一樹から待ったがかかる。

せっかく面白くなってきたところに、一樹が水をさすのでむっとした表情を隠さないエヴァ。

だが、一樹も今の情報だけでは何がなんやら。

一樹はエヴァの側にいる茶々丸に助けを求めた。

「これまでの情報による推測ですが、桜通りの吸血鬼の噂と、マスター自身が吸血鬼であるという情報を手に入れたネギ先生が、勘違いしてマスターに勝負を挑まれたのです」

「それで坊やが泣いて逃げ出し、いずれ決着をつけると言う。このこと以外に何が面白いというのだ」

愉快そうな表情を浮かべるエヴァ、一樹自身こんな表情は見た事がないかもしれない。

「マスター、ネギ先生は泣いていませんでしたが・・・」

茶々丸が冷静に突っ込みを入れるが、エヴァはそれを無視して笑い続ける。

「状況は理解したけど・・・なんで俺にそれを？」

理由が理解できない一樹は、それをエヴァに尋ねる。

「どうせお前は関わるつもりはないのだろう。しかし、学園の魔法使いがイチャモンをつけてくるかもしれんから、お前には証人になってもらおうと思う」

エヴァのその言葉に、一樹は絶句する。

「学園長に頼めば・・・」

「止められるに決まってるだろう」

最悪だ、と一樹は地に手をつける。

そのポジションは最悪エヴァとの共犯を疑われ、ややこしくなること間違いない。

しかし、エヴァのいう通り、学園長に知られれば何らかの方法でストップがかけられるだろうし、それ以外ならエヴァが悪いと判断されるだろう。

「なんならお前が止めるのか？」

エヴァが面白そうな表情で一樹にそう問いかける。

一樹はその問いかけに黙って首を横に振った。

「闇の福音は女子供に手はかけない・・・んだろ？」

先日知りえた情報を確かめると、エヴァは更に表情を変える。

「相手は敵の息子だぞ・・・もしかしたら」

「それなら仕方がない、学園に通報して何とかして貰おう」

一樹がそう言うと、エヴァはつまらなさそうに笑う。

「は、そこは俺が止めてみせると言うところだろう」

呆れたようにそう言うエヴァだが、内心は、正義を語る魔法使いのような思考をしていない一樹を喜んでいる。

「冗談、それに案外子供先生がエヴァを倒しちゃったりするかもし

れないしな」

一樹のその言葉に、エヴァは額に筋を浮かべる。

「ほぅ、私が負けると言うのか。面白い冗談を言うようになったな」

「万が一、と言うこともあるしな。なんなら懸けてみるか？」

一樹のその挑発に、エヴァは軽く乗ってくる。

「いいだろう、万が一、私が負けることがあれば、お前のいう事を何でも聞いてやる。喜べ、そんなことなどないだろうから、特別に修行のメニューを倍にすることで勘弁してやろう」

「言ったな、後で知らん振りは許されないからな」

一樹のその言葉に、高笑いしながらエヴァは承諾する。

結局、今日の用はそれだけだったので、その話が終わると、一樹はエヴァの家をあとにした。

「よし、言質はとった」

エヴァの家を出る直前、一樹が怪しく笑いながら、そう呟いたとか、呟かなかったとか・・・

30話（後書き）

ということでアスナとネギが仮契約を結びましたとさ。
原作のようにウジウジしていてもしょうがないと、あえてちゃんと契約をさせました。
ネギは気絶中で覚えていませんし、後はアスナが忘れれば問題ないはず・・・
それと、主人公が何やら悪巧みを考えているようです。
まぁ、何かは想像つくかもしれませんが、それは本編でと言うことで・・・
ちなみに主人公は本当に今回何も関与していませんよ、と言う事だけはいっておきます。

明日から大学が再開だ・・・
今までどおりの更新は無理かも、とりあえず始まるまではわかりません。
頑張りたいですが、これぱっかりはどうしようもないです・・・

31話（前書き）

長らく時間を空けて申し訳ない、ようやく最新話を書き上げました。
学校が始まって忙しかった、というか今現在も進行形で忙しいです。
なので更新も出来て一週間に一度、GWは少し頑張りますが、それ以降はしばらくその速度になると思います。

31話

その日の放課後、学園の中のある裏路地。

そこにはある時から続く、いつもの光景が繰り広げられている。

周りには何処から現れたのか、両方の手で数え切れないほどのネコ・ネコ・ネコ。

野良ネコもいれば、中には他のネコとは違い、身だしなみの整ったネコの姿もある。

恐らくは誰かが世話をしているネコなのだろうが、それは少数で、やはりほとんどは野良ネコだろう。

そしてそのネコ達が集まる中心には、麻帆良学園の制服を身に纏っている。

その人物、茶々丸は日課であるネコの餌やりに来ているのだ。

ネコ達は何時ものように与えられた餌を食べている・・・のだったが、野性の本能が警戒心を呼んだのか、我先にとその場から立ち去って行く。

そしてその場に残されたのは茶々丸一人、否、新たな人物の登場によりその場は三人となった。

「茶々丸さん。申し訳ありませんが」

その場に現れた人物、ネギはそう告げると茶々丸に杖をむける。

その隣りにはアスナの姿もあり、彼女は武器こそ持っていないが、拳を茶々丸に向けている。

自分に向けられる敵意を、茶々丸は表情を変えることなく眺めている。

そもそもガイノイドである茶々丸に表情が出るかは疑問であるが、茶々丸はこの状況を何の感慨も泣く受け入れている。

現在自身の主人であるエヴァンジェリンと目の前にいるネギは、様々な誤解が生じているとは言え、てきたいしている状態である。

そのためにこの状況は容易に想像できることであり、実際エヴァンジェリンにはこのような状況が怒りうる事を注意しておけ、と忠告されていたのだ。

だが、自身の日課といえるネコの餌やりを放っておく事も出来ず、彼女はこの場にやって来ているのだ。

だからこそ、この状況に陥っているのは自己責任。

ゆえに

「・・・こんにちわネギ先生、神楽坂さん」

彼らの相手をすることを決断した。

「茶々丸さん、最後のお願いです。僕の敵はエヴァンジェリンさん、

あなたではありません。だからこの件から手を引いてください」

まるで役所の職員のように、あくまで感情を加えることなく事務的に用件を伝える。

ネギとて魔法世界を知るひとり、ゆえに魔法使いとその従者の間に築かれている絆を理解しているつもりだ。

このような言葉で簡単に崩れるような絆ではない。

だが、それを理解していても、ネギにはまだ甘さが残っている。

本当は戦いたくなどないのだ、だからこうして無駄ともわかっている問答を行っている。

無表情を装うネギの心の中は、理性と感情の狭間で鬩ぎあっているのだ。

だが、戦わなければ己はもちろん、学園の生徒にまで危害が加わるかもしれない。

相手は吸血鬼、それも常識外な懸賞金がつくほどの大悪党。

説得は不可能、ゆえにネギには戦うという選択肢以外残っていない。

その肩に圧し掛かっている重荷は、ネギを苦しめ続ける。

そんなネギを見つめるアスナは今この状況でもエヴァンジェリンと茶々丸と敵対することをどこか他人事のように考えている所がある。

いや、いまの表現が正しいかはわからないが、この状況が良い方向に転がるのではないかと心の奥で思っている。

この中で、唯一の一般人である彼女は、本質的なところで戦うということを理解できていない。

だからいまこの状況が良い方向に転換するのではと本気で考えている。

麻帆良という安全な土地で、一般人として生きていた彼女にとって、魔法世界のことなど理解している訳もない。

だからそのような理想が本当に起きるのではないかと、心の奥底で思っているのだ。

ありえない空想を描いたアスナは、未だ覚悟を持たずに拳を構えている。

だが、二人のその気持ちは叶うことなく、茶々丸がネギ達に向けて身を構えたことで泡と消える。

「申し訳ありませんネギ先生、私にとってマスターは絶対ですので」

そう言って頭を下げる茶々丸に、ネギは唇を噛み締める。

思いを反故にされ、だが、これ以上ネギはどうすることも出来ず、茶々丸に向けた杖を強く握り閉める。

無言のままアスナに視線を送り、アスナもそれに答えるように頷き返す。

アスナは好転しなかった状況に嫌気がさすが、それでもこの戦いが必ず良い結末を迎えると信じている。

「いきます」

ネギのその掛け声を合図に、アスナは茶々丸に向けて駆け出す。

ネギはアスナのために呪文を唱えはじめる。

「契約執行（シス・メア・パルス）　１０秒間（ペル・デケム・セクンダス）　ネギの従者（コニストラ・ネギィ）　神楽坂アスナ！！！」

駆け出したアスナは己の体の変化に驚きを隠せない。

体が羽根のように軽いのだ、本来なら何歩もかかったであろう茶々丸との距離は、その何分の一の動きで縮められ、アスナは茶々丸に肉薄する。

予想外のアスナの動きに、しかし慌てることなく茶々丸はその動きに対応する。

アスナの繰り出してきた右の拳を横に払い、勢いそのままに突進して来るアスナをすれ違い様に足を掛ける。

アスナは勢いを殺すことが出来ず、何とか倒れないように走り続ける。

だが、その背中は完全に無防備にさらけ出されており、ここで攻撃を加えられれば、アスナは間違いなくやられるだろう。

当然茶々丸もその隙を逃さず追撃を加えようとして、しかし自身に内蔵されたセンサーが危機を知らせるので、茶々丸はその場からすぐに離れる。

先ほどまで茶々丸が立っていた場所には、光弾が幾重も降りかかり、その場所は見るも無残な光景に。

光弾を放った主、ネギはかわされたことに驚くことなく、新たな呪文を唱え始める。

「ラス・テル・マ・ステル・マギ・・・っく!?」

呪文を唱えている最中に茶々丸が接近してくるのを確認して、ネギは詠唱を中断、茶々丸から逃れるように距離をとる。

体勢を整えなおしたアスナも、慌てて茶々丸の後を追う。

先に距離を縮めたのはアスナ。

契約執行の恩恵を受けるアスナと、素の状態の茶々丸では動きに差があるのだ。

ところが追いついたところで問題が発生、１０秒と言う効果時間が切れ、アスナの身体能力が元に戻る。

突然のその状況にアスナもネギも驚く。

あまりに突然のことで、二人とも足を止めてしまった。

唯一何の反応を示さなかった茶々丸は、アスナを置き去りにしてネ

ギを追いかける。

一瞬のことだが、その隙が茶々丸には十分なものだった。

人間ではない茶々丸は、人間には不可能な行動がとれる。

例えば自身の腕を伸ばすと言うことも・・・

射出された茶々丸の右手は、足を止めているネギの服を掴み、腕を戻すと同時に一気にその距離を詰めて行く。

ネギは慌てて腕を払おうとするが、茶々丸の握力は予想外に強く、その手を払うことが出来ない。

ついに接近して来た茶々丸の体当たりに、ネギは杖でガードをするが、その衝撃を殺すことも出来ず吹き飛ばされる。

壁に激突したネギは肺から空気を押し出され、呼吸が出来ず苦しむ。

アスナは慌ててネギの元に駆け寄ると、ネギの無事を確認してホッと息をつく。

その光景を、茶々丸はただ黙って見ており、追撃をかけるそぶりもない。

眼前の二人をじっと見つめ、これ以上の戦闘に意味はないと判断、そのまま飛び去ってしまう。

その場に残された二人は、飛んで行く茶々丸を目で追うことしか出来ず、茶々丸一人にすら相手にされていなかったと言う悔しい思い

だけがその場に残ったのだった。

エヴァと謎の賭けを始めた一樹だったが、特に勝算があるわけではなかった。

こう言ってはなんだが、賭けをしているのが自分以外だったら、その無謀さを鼻で笑うだろう。

なら何故そんな愚かともいえる賭けを持ちかけたのか、答えらしい答えはない。

だが、少なからずネギと言う少年を見ていて、何かとてつもないものに守られているのではと思う。

父は英雄、その才能を余すことなく受け継ぎ、常識ではありえないことでも、学園は彼の修行のために特例として彼を教師として招きいれた。

そしてほんの数回の接触だが、一樹は思ったのだ。

ネギはまるでこの世界の中心とも言えるのではないか・・・と。

普通に生活していれば現れるはずのない億を越える懸賞首、それも父と因縁がある吸血鬼。

はっきり言おう、ありえない。

ゆえに一樹はあの賭けを持ち出した。

もしこの戦いでネギが勝つのなら、世界はネギを中心に回っている。

まるで新たな英雄の誕生を記録する物語のように。

ゆえにそれを確かめる、自身がそれに巻き込まれないようにするために。

もしその思いが正しければ、ネギの側にいれば否応なく争いの渦に巻き込まれるだろう。

それならそれでネギに関わらなければいい。

一樹は別に戦いが好きなわけではない、己を鍛えるのはあくまで自分に危害を加えんとするものから身を守るため。

魔法使いとして世のため人のためと言う理由では決してない。

学園長に頼まれれば警備の仕事にも就く。

それは学園を守ると言えば聞こえがいいが、本音でいえば自分の生活が脅かされるからである。

力をつける事は楽しい、自分が強くなっていると言うことは心躍る。

だが、それと戦うのは別。

一樹は決して特別な人間ではなく、痛いことは嫌、楽をしたい、という普通の人間となんら変わらないのだ。

そんな一樹だがこれから先のことは具体的には考えていない。

先にも言った考えがあっているのなら、ネギと距離をとる。

違うのならば今までどおり、気ままに生きて行くだけ。

だから一樹は今は目先のことを考える。

「だからここはあえて垂れイヌ耳に首輪で屈服感を引き立てるべきでしょう！」

「それも面白い、しかしここはやはり基本に忠実に、ネコ耳、スク水、メガネで攻めるべきです」

一樹の目の前には様々なものが並んでいる。

ネコ耳、イヌ耳、その他各種の動物のつけ耳、スクール水着にメイド服、その他にも色々な衣装が、ぶっちゃけコスプレグッズの山である。

ここは地底図書室の更に奥、クウネルの居城である。

そこでは一樹とエヴァの賭けを耳にしたクウネルと共に、どうやっ

てエヴァをからかうべきか、今回の賭けではどのようなカッコをさせるかと言う話し合いが繰り広げられている。

一樹の手元にはイヌ耳、首輪、メイド服。

クウネルはネコ耳、尻尾、メガネ、スクール水着。

一樹の名誉のために訂正しておくが、一樹にそのような趣味はまったくない。

ただ、からかうなら徹底的に、と言う信念の元、どうすればエヴァを効率よく出来るか考えた末のチョイスである。

クウネルの提唱するスタイルは確かに面白い。

だが、今回は一樹に分が悪い賭けである、ハイリスクにはハイリターンを。

やるなら徹底的に、それこそエヴァの黒歴史に新たな一ページを。

だからこそ、妥協は許されない。

一樹とクウネルの議論はお互いが納得が行くまで続けられる、ただその先に何が残るのか・・・

何かとんでもない結論でも出てくるのではないだろうか、いずれにせよ負けられない戦いがそこにはあるのだろう。

関わるつもりはないが、心の中ではしっかりネギを応援している一樹なのだった。

31話（後書き）

スペックの上がっている茶々丸なら、今の二人は簡単にあしらってしまうはず・・・と言うことでした。
ネギ側はかなり厳しい状況ですが、どう打開して行くのか？

P．S．理想郷から完全撤退しました。詳細は活動報告に書いてあります。

32話（前書き）

ようやくレポート地獄から解放されました、作者です。
毎週3本、連続でレポートが出続けるとかマジであり得ん。
ということで長らくお待たせいたしましたが、最新話です。
※前回の更新から時間が空、話の流れでおかしいところがあれば教えてください

32話

「修行です！」

茶々丸にまともに相手にされず、その場に残されたネギは突然そう言い出すと、アスナを引っ張って学園の近くにある山の中にやってきた。

「アスナさん、僕たちがエヴァンジェリンさんと戦うには彼女の従者である茶々丸さんを止められないことには話になりません」

魔法使いの従者の仕事は二つ、パートナーである魔法使いが呪文を詠唱する時間を稼ぐこと、そしてもう一つが相手の魔法使いの呪文の詠唱を妨害することである。

二人がかりで茶々丸を止めることができなかった現状では、エヴァンジェリンに立ち向かうなどもってのほかである。

「でもどうすればいいのよ」

やらなければならないことが分かっていても、実際それができないから困っているのだ。

「とりあえず僕たちに何ができるのか、そこから考えてみましょう」

ネギはそういうと、自分ができることをアスナに説明し始める。

ネギは己の使える魔法を解説、実演し、アスナはネギが魔法使いであることを改めて認識させられる。

現状でネギの使える魔法は魔法の射手、武装解除、精霊召喚、白き雷、雷の暴風、眠りの風、風華　風塵乱舞そして防御として風楯や風華　旋風風障壁などがある。

他にも使えるものはあるが、まだ実戦に使えるレベルに達していない魔法や、そもそも戦闘用でない魔法はここでは除いておく。

ネギが一通りの魔法を使い終えると、額にはうっすらと汗が浮かべていた。

父親譲りの魔力を持つネギといえど、すべての魔法を使うと少し疲れを見せるようである。

「これが今僕が使える魔法です、はっきり言って現状ではエヴァンジェリンさんに対抗するのは難しいです」

「それじゃあどうするのよ、普通に戦って勝てないならほとんど勝ち目はないじゃない！」

ネギのその言葉にアスナはそう叫ぶが、ネギは何か考えがあるのか落ち着いた様子を崩さない。

「確かに正面から挑めば勝ち目はありません、ですので罠を使います」

ネギが考えているのは捕縛結界にエヴァンジェリンを誘い込み、彼女を行動不能にするというものである。

捕縛した後どうするとかそういうことは考えていない、捕まえてしまえばこちらの勝ち。

そう考えているネギはまだまだ未熟な魔法使いであるが、それは置いておこう。

しかしこの作戦には大きな問題が二つある。

一つはエヴァンジェリンがこちらの意図どおりに動く保証はないということ。

結界に閉じ込める前にそれに気付かれてしまう可能性もあるし、こちらが主導権を握らなければ難しい策であることに変わりはない。

そしてもう一つの問題が茶々丸の存在である。

相手は二人、その二人を同時に結界に閉じ込めるのは容易ではない、もし片方を取り逃がしたら外から結界を強引に解除される可能性もあるのである。

なので茶々丸にはエヴァンジェリンと付かず離れず、結界に閉じ込められる絶妙な距離をとらせなければいけない。

この二つの問題を解決するにはネギ一人では不可能、つまりアスナの協力が不可欠なのだ。

「僕はエヴァンジェリンさんに対抗するためにまだ習得できていない魔法を習得して見せます。アスナさんは僕が魔力を供給しますのでまずは強化された体で動くことに慣れてください」

アスナは契約執行によって強化されることにまだ慣れていない、自分が動こうとするイメージと実際に動く体が釣り合っていないといってもいい。

その齟齬が実戦では命取りになる、なのでまずはそれを取り払うことがアスナの課題となる。

するとここまで一度も口を挟まなかったカモが不意に口を挟む。

「兄貴、仮契約で得られるアーティファクトを忘れてるぜ」

カモのその言葉に、ネギは思い出したように手をたたく。

「アスナさん、仮契約カード持ってますよね、それを持って「アデアット」と唱えてください。アスナさん専用の魔法具が現れるはずです」

ネギの言葉に従うように、アスナは仮契約カードを取り出すと呪文を唱える。

「アデアット」

すると仮契約カードは光り輝き、アスナの手の中に彼女専用の魔法具・・・ハリセンへと変化した。

アスナもネギも、アーティファクトの話を持ち出したカモでさえ言葉を失う。

自分専用の魔法具が現れるという言葉に少なからず期待を膨らませ、その結果がハリセン。

寸分の狂いもなくネギの頭にヒットしたハリセンが、気持ちいいくらいに音を立て、その音は森全体に響くのだった。

頭の上のたんこぶをさすりながら、ネギは自身のお腹に目を向ける。

そのお腹からは空腹を訴えるようにぐぅぐぅと音が鳴り響いている。

既にアスナと森の中に入ってから3時間は経過しただろうか、陽は落ち始め、周囲をうす暗い闇が覆い始めている。

そろそろ寮に戻らなければならない時間であるが、自身の修行はまだ終わっていないし、アスナもさすがに動き疲れたのか今は木陰で休んでいる。

アスナは比較的早い段階で動きのずれを修正して見せた、その非凡な才能にはネギも驚きを隠せなかったが、アスナはすぐに次の課題を要求した。

そこでネギは風の精霊を召喚してそれを仮想茶々丸とし、精霊の行動を邪魔するという課題が与えられた。

ただここで問題が起こった、アスナのアーティファクトであるあのハリセンである。

正式名称をハマノツルギというこのアーティファクト、魔を破るというその名の通り精霊に触れた瞬間に送還してしまったのだ。

これではせっかく精霊を召喚しても意味はない、ということでアーティファクトはいったん封印して修行を再開した。

はじめはついて行くのがやっとだったアスナも、最後はバテバテになりながらもその動きにしっかりついていけるようになっていた。

そもそも何の準備もしてきておらず、無計画のままに山へとやってきていた二人は、現在空腹に襲われているのだが、修行はまだ終わっていないということで帰りづらい空気が流れている。

どちらとも帰ろうと言うに言えないのである。

そんなときどこからか香ばしい香りが漂ってくる、その匂いをたどると森の奥へと続いている。

ネギとアスナは無言のうちに頷くと、匂いの元へと足を進めていく。

5分ほど歩いただろうか、二人は川べりへとたどり着く。

こんな近くに川があったことに驚いている二人だが、匂いのもとであろう魚が串刺しにされて焼かれている。

そのそばにはテントが張られており、誰かがここで生活しているということが一目でわかる。

しかしテントの中にも近くにも人の気配は感じられず、あたりには焼き魚の香ばしい匂いだけが広がり続けている。

二人は空腹であった、山に入ってから動き続けてお腹ぺこぺこである。

目の前に存在する焼き魚、そんなものは存在しなかった。

きっと野生の獣が持って行ってしまったのだ、そうに違いない。

そう自己完結すると、二人は焼き魚のほうに手を伸ばす。

「こら！っでござる」

「きゃあ！　魚は私を食べてないわよ！？」

「うわ、ごめんなさい！　野生の動物が僕なんです！？」

不意にかけられた声に必要以上に動揺し、もはやわけのわからぬ言葉で弁明している。

「何を言ってるでござるか、アスナ殿、ネギ先生も？」

二人の目の前にはクラスメイトである長瀬　楓が立っていた。

「楓ちゃん、こんなところで何を！？」

「それはこちらのセリフでござるよ、拙者は時間を見つけてはこの山の中で修業をしているのでござるよ。なんの修行かは秘密でござる」

その言葉に二人は心の中で忍者だろうと呟いた。

「先ほどから森の中が騒がしいと感じてましたが、あれはひょっとするとネギ先生たちの仕業でござるか？」

楓の言葉にドキッとする二人、そもそも表情を隠せていないので一目でそうだと答えているようなものである。

「まぁそれはいいでござる、それよりも拙者の夕食を盗ろうとしたのは感心できんでござるな」

普段はのほほんとした楓の瞳がキリッっと二人の姿を刺し貫く。

「「ごめんなさい」」

二人は潔く自分の罪を認めて楓に頭を下げる。

「ふぅ、まぁいいでござるよ。お腹がすいて魔が差したというところでござろう。遠慮せずに食べるでござる」

そういうと楓は二人に焼き魚を一本ずつ差し出す。

空腹が限界に達していたのだろう、二人はお礼を述べるとすぐさま焼き魚にかぶりついた。

それ以外にも楓は山の中で見つけたという食べられる木の実や野草を二人に提供した。

そこらへんに生えてそうなのに食べてみれば結構いける味なのね、というのがアスナの感想である。

3人が満腹になるころには焼き魚は一本も残っておらず、楓はぱぱっと火の始末を終わらせる。

「結局アスナ殿たちは何をしていたのでござるか？」

楓の言葉にアスナはどこまで話していいのか悩む、正直に話すわけにもいかない。

ここは頭のいいネギに任せた、とアスナはネギに目で合図を送る。

そんな風に任せられたネギは少し考えながら、ついに話し始める。

「詳しくは話せないんですが、僕とアスナさんは今度ある人たちと勝負するんです。二人とも僕たちより格上なので少しでも差を縮めようと修行をしていたんです」

ネギの言葉に楓は興味深そうに目を向けている。

実は楓はこの二人が何をしていたかを知っている、その光景を見ていたのである。

だから魔法使いの存在は眉唾ものと思っていた楓も、ネギの正体が魔法使いであることには当然気付いている。

「なるほど、ちなみにその相手とはどれほどの差があるのでござるか？」

「大人と子供ですね」

興味本位で聞いた楓だが、帰ってきた言葉に思わず顔をひきつらせ

る。

「それでも僕たちは勝たなければならないので策を巡らせて、できる限りのことをやっているところなんです」

そう話すネギの顔を見て、楓はネギが決して死地に赴こうとしているのではないと感じ取る。

むしろ生きるために必死で抗おうとしている姿に己の使えるべき主としての片鱗さえ見えた気がした。

「ネギ先生、勝つためには汚いことでもしてみせるということでござるか」

「いえ、僕はあくまで勝つための努力をしているつもりです、その努力を汚いことにするつもりはありません」

僕は立派な魔法使いになるのだから、心の中でそう呟くネギ。

「ふむ、ネギ先生、それにアスナ殿。修行は二人より三人でやったほうが楽しいでござるよ」

唐突に楓はそんなことを言い出す、しかしネギとアスナはその言葉に秘められて意味を理解しておらず、首をかしげる。

そんな二人の様子に苦笑いを浮かべながら、楓は気を取り直して、伝えたかったことを言葉にする。

「拙者も二人の修行を手伝うでござる。拙者とて武道四天王と呼ばれる内の一人でござる、修行相手として不足はないでござるよ」

そんな楓の申し出を聞いてネギはうれしい半面、断らなければならないという衝動に駆られる。

長瀬さんは裏の生徒ではないのだからこちらに巻き込んではいけない。

そんなネギの思いをよそに、妥協案はアスナのほうから出される。

「楓ちゃん、こっちが条件を出すのもおかしな話なんだけどいくつか約束してもらえる？　まず私たちの相手が誰だか詮索しないこと、それと修行中にネギが変なことを言い出しても深く追求しないでもらいたいの」

アスナがそういうと、楓は特に詮索することもなく了承してくれる。

ネギはアスナが自分に対して配慮してくれていることに心の中で感動し、感謝した。

そして話が終わるころには楓はすべての支度を整えて、あとは寮に帰るだけとなった。

「それでは今日は寮に帰るでござる。二人とも、これからは放課後は可能な限りここで修業するでござるよ」

「「おぉー！」」

こうして新たな修行相手を見つけ、ネギとアスナは来たるエヴァンジェリンとの決戦に向けて己を磨いていくのだった。

32話（後書き）

久々の更新で一樹がひとコマも出てこないとか、まぁエヴァンジェリン編は空気のような存在ですので仕方ないといえばそこまでですが・・・

次は一樹ｓｉｄｅの話を書こうと思います、同時進行でネギたちの修行風景も出てくるかも。

ネギの使える魔法がいまいちわかりにくい、列挙している以外にこの時点で使えると断言できる魔法があれば教えてください。

それよりパルの人気が高いみたいですね、そんなに彼女のことを持ち上げたら、思わずいつの間にか魔法使いｓｉｄｅに混ざっている、なんてストーリーを書いてしまうかも（笑）

最後に作者からの提言、「罠をしかけるほうが卑怯なのではない、罠にかかるほうが間抜けなのである」作者の基本スタンスです。

33話（前書き）

今回は一言だけ、どうしてこうなった。

33話

それはほんの偶然の出来事だった。

部活動の途中で知り合いを見つけ、驚かせようとこっそりと後をつける。

これが未知の世界へと足を踏み入れるきっかけになろうとは、この時まだ誰も知らなかった。

「あ～つまんないなぁ、これなら買い物について行ったほうが良かったかも」

その日、ハルナはいつものように図書館探検部の活動を行っていた。

だが今日はいつもとは様子が異なっている。

同じ図書館探検部の部員であるこのかやゆえ、のどかの姿は彼女のそばになかった。

このかは彼女の祖父である学園長に呼び出しを受けて本日は欠席、ゆえとのどかは生活用品を買いに出かけている。

普段なら買い物についていくハルナだったが、今日は何となく気分が乗らず、それでも家にいるのもつまらないので、こうして図書館島に来ていたのだった。

とはいえ普段はワイワイと楽しく活動をしているため、一人で活動するのはどこかつまらない。

「あ！」

そんなハルナの視線の先に、見覚えのある人物の後ろ姿が映る。

その人物、一樹は周りの様子を気にすることもなく、スタスタと図書館島の中を進んでいく。

一樹を見つけたハルナの瞳は、先ほどまでのつまらなさなど一気に吹き飛ばす。

「お～ぃ・・・」

声をかけようと手をあげかけるが、それをすっと戻す。

向こうを向いている一樹はそれに気づくことなく歩き続けている。

「ふふ～ん！」

その様子にほっと息をつき、そして何かを思いついたか、目を光らせるとこっそりと一樹の後をつけ始める。

好奇心旺盛なハルナは普段はゆえというストッパーがいるから暴走しない、しかし今日はそのゆえがいない。

つまり、今日の彼女は自分の欲望に忠実に行動しているのだ。

一樹はハルナに気づくことなくどんどんと足を進めていく。

「うわ、こんなところに隠し通路があるなんて」

そしてハルナ達図書館探検部の誰もが気付いたこともないルートに入っていく。

「誰もいないよね～、それじゃあ、お邪魔しま～す」

ハルナは周りを見回して、周りに誰の姿もないことを確認すると、一樹の消えたルートへと入っていった。

その道は何の変哲もない一本道であった。

その道をひたすら直進していくと、これまた見覚えのない場所に出る。

「うわ、下が全然見えない」

下のほうがまるで見えない、壁の周りをらせん状に階段が設置された空間。

ハルナは下を覗き込むが、底の見えぬ恐怖からすぐに安全地帯へと後退する。

「一樹さんは～と・・・いないなぁ」

もう一度、今度は階段に目を向けるが一樹の姿はない、これ以外に道はないからおそらく一樹は下に向かっているのだろう。

一樹の向かう先、図書館の地下には何があるのだろうか。

湧き上がる好奇心にハルナの足は階段のほうへと向かう。

・・・

どれだけ下っただろうか、未だ下の見えぬ階段を下るハルナの顔には疲れの色が見え始める。

「一体どれだけ下ればいいのよ!!」

文句を言い続けるハルナだが、ここから引き返す気力もなく、下へと足を進め続ける。

それからどれほど歩いただろうか、長かった階段もようやく終わりが見える。

やっと下にたどり着いたハルナはあたりを見回す。

道は一つしかなく、その先にはかすかな光がこぼれている。

「これはこっちに進むしかないよね」

進んだ先にあった光景は、ハルナの想像を超えるものだった。

それはまるで魔法の世界、ここは確かに地下であるはず。

だが確かに辺りは光で照らされており、周りは無数の本棚が乱立している。

ボロボロだが、何らかの建物であっただろう建築物もあり、まるでここは遺跡のようである。

「もしかして・・・ここが幻の地底図書室!?」

ハルナの言葉通り、ここは図書館島に存在する地底図書室。

表の生徒では、辿り着くことのないと言われ、伝説になっていたこの場所にハルナは足を踏み入れたのだ。

「うひょー！　もしかして私すごいところに辿り着いちゃった!?」

あまりの感動にハルナはその場ではしゃぎ回る。

それから少しの間、ハルナはまるで小さな子供のように地底図書室を駆け回る。

適当な本棚から本を取り出してはパラパラと流し読みを行い、それを適当に放り出す。

後から片付けるものは悲鳴を上げるであろう散らかしぶりだった。

「いやー満足満足、ってあれ？　私何しに来たんだっけ？」

はしゃぎすぎて当初の目的すら忘れるのは、若さゆえの特権であろう。

そんなこんなで一樹の後をつけてたのを思い出したハルナは地底図書室の奥へ目を向ける。

この場に一樹がいないのだから一樹はさらに奥にいるはず、そう考えたハルナは奥へ奥へと足を進めていく。

「うわ、でか！」

そしてついに辿りつく、そこはまるで巨大な門。

この奥にはなにがあるのだろうか、ハルナは足を前に進めようとする。

だが、それは突然現れる。

「グオオオオオオオオ！！！！」

人生で一度も体験したことのない騒音、それがハルナの頭上で響き渡る。

根源からの恐怖とでも言うのだろうか、顔が上を向くことを拒んでいる。

それでも気力を振り絞って顔を上に向ける。

「はは、冗談でしょ」

ハルナの視線の先には、空想上の生物ドラゴンが飛翔していた。

体の力が抜け、その場に尻もちをつく。

逃げようと思っても体が言うことを聞かない。

目のまえのドラゴンはハルナに照準を合わせたのか、ハルナ目掛けて飛んでくる。

ハルナは死を覚悟して目を閉じる。

あぁ、死ぬ時は走馬灯を見るらしいけど、私にはそんな余裕もなかったんだ。

だが、いつまでも衝撃はハルナを襲うことはない。

「言いたいことはいろいろあるけど・・・ハルナ、大丈夫か?」

ハルナの目の前にはつい先ほどまで探していた一樹が立っているのだった。

時は少しさかのぼる。

一樹はここ最近足しげく通っているクウネルのところにいた。

ハルナは階段を下るしかなかったが、一樹は魔法で身体を強化することで大幅なショートカットで進んでいたのだ。

そしてクウネルのもとに通う理由、それは魔法の修行のため・・・ではなく、エヴァの罰ゲームの議論が続いているからだ、いや正確には選別といったほうがいい。

あれから長らくお互いの意見をぶつけ合った二人だが、二人はついに辿り着いた。

お互いの意志ばかり押し通そうとするから争いが起こるのだ、大事なのは歩み寄ること。

とどのつまり、なんでもさせることができるのだから、すべてやらせればいいじゃないか。

3日にわたる議論に終止符を打った名案だった。

そこからこの二人は早かった、それなら何も一つに絞ることはない。

むしろエヴァというかわいらしい幼女一（↑ここ重要）という素材があるのだ、それこそ可能性は無限に広がっていると。

それからはありとあらゆる可能性を検討し、ついには写真集まで作ってやろうと盛り上がった。

半分犯罪に足を突っ込んでいるのはスルーしてあげてほしい。

こうしてEvangeline's Photograph Collections plan 通称EPC計画は発足されたのだった。

今日もそんなことで盛り上がっていたのだが、地底図書室に現れた人物のためにそれは一時中断となる。

「おや、誰かが地底図書室に入り込んだようですね」

クウネルのその言葉に、一樹はとてもめんどくさそうな顔をする。

その人物を確認すると、しっかりと見覚えのある顔がそこにいた。

「ハルナの奴、後をつけてきたな」

溜息を吐きながら、ハルナの姿をクウネルの魔法を通して睨みつける。

「とりあえず上に連行してきます、続きはまたあとで」

一樹はそう言ってとぼとぼと上に向かって歩いていく、この時点で一樹は二つのことを失念していた。

一つはクウネルの住処から地底図書室まではそれなりに距離があるということ。

この移動時間の間でハルナがおとなしくしている保証はなかったのだ。

そしてもう一つ、地底図書室にはとても優秀な門番が隠れていると

いうことを・・・

上までやってきたとき、一樹の眼に映ったのは尻もちをつきおびえるハルナと優秀な門番であるドラゴンが侵入者を排除しようと攻撃しようとしている寸前だった。

一歩目で魔本を取り出す。

二歩目でドラゴンに手を向ける。

三歩目で呪文を唱える。

そしてハルナを背に守るように立ちふさがる。

「ディオガ・グラビドン！」

かつてはドラゴンをひるませることしかできなかったこの呪文、だが成長を遂げた一樹の放つこの呪文は今度は目の前のドラゴンを地に叩き伏せた。

ごめんドラゴン、恨むなら馬鹿な侵入者を恨んでくれ。

心の中で職務を全うしたに過ぎないドラゴンに謝罪しながら、一樹はハルナのほうへ振りかえる。

「言いたいことはいろいろあるけど・・・ハルナ、大丈夫か？」

そう言葉をかけると、ハルナは恐ろしかったのだろう。

「か、一樹さん！！」

緊張の糸が解けたのか、泣きながら一樹に飛びついた。

いろいろと小言を言いたかったが、とりあえずはハルナを落ち着いて話せる場所へ連れて行こう。

仕方なくクウネルの家に連れていくことにした。

クウネルの家にたどりつく頃にはハルナも泣きやんでおり、気まずいながらも一樹の後ろについてきていた。

「（どうぞこちらにお連れください）」

クウネルが音だけを飛ばす魔法でそう告げるのはテラス、一樹もそちらに足を運ぼうとする。

「な！今の何！？」

クウネルの声に反応したハルナは声の主を探そうときょろきょろしている。

テラスにたどり着くと、すでに準備を整えていたクウネルが手招きをしていた。

「ちょ、一樹さんあの人誰!?」

クウネルは普段はローブをかぶっている、見慣れないハルナには怪しげに映っても仕方ないのだろう。

「それも説明するからこっちに来い」

一樹はそういうと先に席に着く。

ハルナもそれに続くように一樹の隣の席に腰掛けると、クウネルはあえて魔法を使って彼女の前にお茶を用意する。

この人絶対俺を困らせようとしているだろう。

一樹は心の中でそう思っていたが、実際クウネルは嫌がらせでそれを行っていた。

これをどう対処するのかを見ものにするために・・・

「一樹さん！　やっぱこれって魔法なんだよね!?」

ハルナは興奮気味に俺に詰め寄ってくる。

その目はあふれる好奇心を満たすものに出会ったことへの充足感からか輝いている。

「そうだよ、世界には魔法使いはいるし、さっきのあれも夢じゃな

い」

「それじゃあ一樹さんもこの人も魔法使いなの!?」

「そうですよ、早乙女ハルナさん」

見ず知らずの男にフルネームで呼ばれ、驚きを隠せないハルナ。

だがクウネルは表情を変えることなくにこやかにほほ笑んでいる。

「あ～え～っと」

「私のことはクウネルとお呼びください。ハルナさん」

「それじゃあ次の質問ね、魔法って誰でも使えるの?」

「これればかりは才能が必要ですね」

「じゃあ私は！　才能ある?」

「一概には何とも、基本的に魔法使いは魔法使いの親を持たなければ生まれません。何事も例外はありますが」

例外である一樹のほうを見ながらそう告げるクウネル。

ハルナもそれにつられるように俺のほうを見つめる。

「俺はその例外で両親は普通の一般人だ、たまたま魔法を使える才能を持って生れて、その才能を魔法使いが見つけたんだ」

もっともその才能も大したものではなかったが・・・心の中でそう卑下する一樹。

「そっか～じゃあなんで魔法使いは存在を隠しているの」

存在するのなら世間に知られていてもおかしくはない、だが実際には知られていないのだからそこには何か理由があるはず。

「魔法使いの取り決めですね、正体は極力隠す。ばれたら重い罰を受けることになります」

クウネルのその言葉にハルナは何を思ったのか、顔を青ざめさせる。

「それって・・・」

「オコジョにされます」

ハルナはその言葉を理解するのに時間がかかる。

その間は静寂な時が流れる、しかしそれもすぐに終わる。

「オコジョって・・・オコジョって！」

ハルナは机をバンバンと叩きながら大爆笑し始める。

それもそうだろう、魔法使いのわけのわからない伝統には一樹も笑ってしまう。

「ヒー、ちょっと待って！　もう少しで落ち着くから！」

そう言いながらいまだに大笑いするハルナだったが、結局落ち着くまでにはもうしばらくの時が必要だった。

「あー久しぶりに大笑いしたわ、魔法使いって変なんですね」

ハルナのその言葉に否定できないところが悔しい、だがクウネルはほほ笑みを絶やさないまま、ハルナに対して爆弾を投下する。

「われわれもあなたに正体を知られたからには対処しなければなりません。私ももちろんオコジョになんてなりたくないですし、そこでハルナさん、あなたの記憶を消させてもらいます」

「え！　ちょっと、クウネルさん、冗談はやめてよ！」

ハルナはそう言ってこちらの意図を確かめるが、クウネルはただ黙ってほほ笑みを崩さない。

その様子にハルナもクウネルが本気で言っているのだと理解させられる。

「ちょ、一樹さん、冗談だよね」

ハルナはすがるように俺に問いかけるが、俺は首を横に振るしかない。

「これはお互いのためなんだ、こちらのことを知ればハルナは必ずこちらの世界に巻き込まれる。だからこれは必要なことなんだ」

一樹だって好き好んでハルナの記憶を消したいわけじゃない、だがこのかの時とは状況が違う。

ハルナは純粋な一般生徒なのだから。

「安心してください、記憶を消すと言っても今日何をしていたかを思い出せなくなるだけ。生活に何の支障もありません」

クウネルはそういうが、ハルナは不安をぬぐえない。

そして何より自身の好奇心を満たす魔法という存在を消されるのである。

「ただ一つだけ、抜け道があります」

クウネルは突然そんな事を語りだす。

ハルナはそんな方法があるならとクウネルに飛びかからん勢いである。

「その方法って!?」

「あなたがこちらの関係者であることが証明できればいいんです。なに、方法は簡単です」

この時点で一樹は嫌な予感が身体を駆け回っている。

「簡単な儀式を行えば、あなたはすぐにこちらの関係者です。私がお手伝いしますので、一樹君も手伝ってください」

そういうとクウネルは地面に魔法陣を書いていく。

「それでは二人ともこの陣の上で向かい合ってください」

「「な！」」

陣の直径は１ｍほど、つまり二人がその上に立つとほとんど間がなくなるのだ。

「早くしてください、この陣はスピードが命なんです」

まったくありもしないデマを言うあたり、この人は確実に今の状況を楽しんでいる。

しぶしぶ一樹とハルナは陣の上で向かい合わさる。

だがお互いさすがに距離が近すぎて顔を合わせようとしない。

ここであとひと押しすればハルナの悲願は達成されるのだろうが、本人もこの状況に照れているのでさすがに無理だろうか。

だがクウネルがすかさずアシストを送る。

「それでは・・・接吻をお願いします」

接吻・・・きす、キス！！

一樹はあわてて陣の外を出ようとするが時すでに遅し、クウネルの魔法によって身体を拘束されている。

さらにご丁寧に口まで動かない、金縛り状態に陥っている。

ハルナも突然の宣告に顔を赤くして俯いて、そしてブツブツと何かを呟いている。

そしてがばっと顔をあげたかと思うと、一樹の顔を手で支える。

ヤメロー！ショッ〇ー！！

とてつもなく古いネタを心の中で叫ぶ一樹、だがむしろこの場合ライダーはハルナのほうではないだろうか・・・頭についている触覚的な意味で。

「こ、これはしょうがなくなんだから、勘違いしないでよね」

ツンデレとしか思えないセリフを言い残し、ハルナの唇は一樹と合わさった。

二人の間に仮契約は成立し、ハルナの仮契約カードが二人の間に出現する。

こうしてまた一人、３－Ａの生徒が裏の世界に足を踏み入れたのだった。

33話（後書き）

作者暴走中、だって書いてて面白いんだもの。
主人公初めての仮契約、本当にどうしてこうなった。
そろそろエヴァンジェリン編も終わらせないと、あと数話でまとめます。
最後にもう一言、どうしてこうなった。

３４話（前書き）

今回は短いです。

34話

「一樹、うっとうしいからそんなところで落ち込んでいるな！　それになぜお前がここにいる！」

エヴァの家の中、部屋の隅っこでポツンと項垂れている一樹を鬱陶しがりながら、なぜか一樹と一緒に上がりこんできたハルナに怒声を上げているエヴァ。

以前一度エヴァの家にやって来たことのあるハルナだが、部屋の中を物色する光景はエヴァの堪忍袋の緒を刺激し続けている。

今は怒鳴り声で済んでいるが、我慢の限界に達すれば実力行使で部屋から追い出されるだろう。

「ふっふっふ・・・エヴァちゃん、これを見よ！！」

そんなエヴァの様子もお構いなしに、不気味な様子で笑いながら懐から一枚のカードを取り出す。

それは一樹とハルナが仮契約を交わしたことを証明する仮契約カード、心なしかそれを持つハルナの顔はうれしさが満ち溢れている。

「・・・・・」

そのカードを確認し、部屋の隅で落ち込んでいる一樹に目をやって事態を理解する。

そしてその顔は新たなおもちゃを見つけた子供のように面白そうに

歪む。

「なるほど、何があったのかは知らんがあの馬鹿があそこであああなっている理由はわかった。それで、お前はここに何しに来たんだ？」

「一樹さんはエヴァちゃんの弟子なんでしょ？　だから一樹さんのパートナーになった私もエヴァちゃんとは無関係とは言えないでしょ。そこでまずは挨拶をと思ってね」

そう言ってエヴァの手を取ってぶんぶんと振り回すハルナ、それを鬱陶しそうに振り払う。

だがハルナの腹の中はそんな殊勝な考えなど持ち合わせていない、どす黒い邪な考えが渦巻いている。

「（ふっふっふ、クウネルさんの話を聞いて面白いとは思っていたけど、確かに普段のエヴァンジェリンさんと違ってからかい甲斐があるわよね）」

一樹と仮契約を結んだあと、ショックのあまり潰れた一樹を放っておいて、クウネルから魔法使いとその世界に関する（かなり偏った）話を一通り聞かされた。

そもそもクウネルはハルナが仮契約を結ぶかどうかはたいして期待はしていなかった。

仮契約を結ばないのならばそのままハルナの記憶を消して一般人としての生活に戻らせればいい。それ以降のことはクウネルにとっては知った話ではない。

仮契約を結ぶならば、その後のハルナの人生は波乱万丈なものとなるだろう。それこそクウネルの望みであり、他人の人生収集を趣味とするクウネルの本懐である。

だから必要な情報は教えるし、手助けはする。

結局クウネルは現在の状況を判断して、誰も損しない結果を選び、なおかつ己の欲望も満たしたのだ。

「まぁそれでね、私も戦闘に関しては完全に素人なわけだし、かといってこのアーティファクト？っていうのもそこまで戦闘向きに思えないからさ、ここは一樹さんの師匠であるエヴァちゃんに一つアドバイスをもらいたいわけなのよ」

「断る、なぜ私がそんなことを」

心底めんどくさそうな表情で拒否の姿勢を貫くエヴァに対し、ハルナはクウネルから聞いた通りの対応を取る。

とりあえずエヴァンジェリンを持ち上げることから始めてください。

「そんなこと言わずにさ、私が頼れるのはエヴァちゃんだけなんだってば。私もまだ聞いたばかりの話なんだけどさ、エヴァちゃんって世界最強の魔法使いなんでしょ。そんな人に教えてもらえるってすごく名誉なことじゃん」

その言葉に、わずかにエヴァの身体が反応する。

次は立派な魔法使いの考えを否定しましょう、それでいてエヴァの心をくすぐる言葉を告げるのです。あくまでも自然にですよ

「それに魔法使いっていうのもちょっとねー、世のため人のためって言うけど私は実感わかないしね。魔法を私利私欲のために使うのはどうかと思うけど、そんなの三流の悪党がやるようなことだしねー」

だいぶ心が動いてきたのか、まんざらでもない態度に変化してきている。

そして最後にエヴァンジェリンの名声を持ち上げてください、これで彼女はあなたの願いを無為にできなくなっているでしょう。

「その点、闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）と呼ばれて、魔法界で名声を馳せたエヴァちゃんのもとでなら、最高の修行が積めるってもんでしょ！？」

「ふん、そこまで言われては仕方がない。お前もあそこでつぶれている奴同様に面倒を見てやろう」

恥ずかしさからか、エヴァはそっぽを向きながらも、そう言ってハルナの願いを承諾する。

こうしてハルナは魔法世界にどっぷりと足を突っ込んでいくことになる。ただこれが処刑執行書に自らサインをしていたということを、このときハルナは理解していなかった。

それから一週間後、学園全体が年に2回のメンテナンスで大停電を迎える前日、エヴァンジェリン宅に一通の手紙が届く。

「果たし状」

表にそう書かれたその手紙を開くと、中からネギ自身が書いたであろう手紙が出てくる。

「拝啓エヴァンジェリンさん
これまでの諍いを清算すべく決闘にて決着をつけましょう。つきましては明日午後、学園全体が大停電になる時間に学園外周部の橋の前でお待ちしております。
ネギ・スプリングフィールド」

手紙を読み終えると、その手紙を机の上に投げ捨てる。

「ついにこの時がやってきたか。思えばナギに呪いをかけられてから15年、この学園から出ていくこともできず、頭の固い魔法使いにこき使われることを我慢してきた。ジジイが重い腰をあげて呪いの改変に承諾したかと思えば、今度はわけもわからぬ噂でその話を引き伸ばされる。だが、ネギが自分から争ってくるというなら私には都合がよい。結果として自衛のために魔法を使い、その対価として奴の血をいただく」

エヴァは15年もの長い間雌伏の時を過ごしてきた。そのストレスは測り知ることはできず、実際エヴァはネギとの戦いで一切の手を抜くつもりはない。

「茶々丸、ネギ先生から果たし状が届いた。明日の夜決着をつけるそうだ、ハカセのところに行ってボディのメンテナンスを受けておけ」

「かしこまりました」

茶々丸は家事をする手をいったん止め、エヴァに了承の意を告げる。

「それと一樹たちにも話だけは通しておけ、あいつのことだから出しゃばってくることはまずないだろうが、つまらん横槍を入れられても困るからな。あいつにはそちらを注意させておけ」

一樹は本人の居ぬところで勝手に面倒な役割を押しつけられている。

「ふふふ、茶々丸の調査のおかげで私の魔力を縛っているのが学園を覆っている結界だったということはわかった。それもまさか電力を使って展開しているとは、坊やもなんと都合の悪い日を決闘の日に設定したのか。まぁそんなことは関係ない、私の前に立ちはだかるものは叩き潰す。あぁ、明日が楽しみだな」

それだけ言うと、エヴァは自室へと引きこもっていくのだった。

「楓さん、僕たちの修行に付き合ってくれてありがとうございました」

「いやいや、拙者も修行相手がいて楽しかったでござる。ネギ先生にアスナ殿、どんな相手かはわかりませんが修行は二人を裏切らぬ、自信を持つでござるよ」

「ありがとう楓ちゃん、結局最後まで事情は話せないけど、絶対に勝って見せるからね」

「あいあい、頑張るでござる」

楓に感謝の言葉を告げると、二人は明日の決戦に備えて、楓をおいて先に山を下りていく。

日中は学校に行きながら、少ない時間で果たして二人はどこまでエヴァとの差を縮めることができたのか。

決戦は明日、結果はまだ誰にもわからない・・・

３４話（後書き）

次回はついにエヴァとネギの決戦。

今は一週間程度で更新していますが、また大量のレポートが・・・

なるべく来週更新できるよう頑張ります。

34．5話

「・・・・・・・・」

一樹は一言もしゃべらず、ただ大人しく正座をしている。

一樹の目の前には、私怒っていますという態度を隠さないこのか、その横には同情の余地など一切排除した目で一樹を見つめている刹那の姿がある。

それをやや困った表情で見つめているのは、先日一樹と仮契約を果たしたハルナである。

ここはエヴァンジェリンの別荘の中、だがこの別荘の主であるエヴァンジェリンも、その従者である茶々丸の姿はこの場にはない。

そもそもなぜこのような状態になっているのか、それはもちろん一樹が一般人であるハルナと仮契約を結んだことが原因である。

「一樹さん、うちも色々言いたいことはあるんやけど、なんでパルと仮契約することになったん？」

正座する一樹の目の前に置かれた、ハルナの姿が描かれている仮契約カードを指さしながら、このかは尋ねる

このかの顔は笑っているが、内心は様々な思いが交差している状態で、表情通りの思いは抱いていない。

「一樹さんは言うとったやんな、一般人はこちらに巻き込んだらあ

かん、秘匿するものやって」

「どういう理由があったかはわかりませんが、まずは訳を話してもらいたいです」

刹那が一樹に理由を説明するよう求めるが、一樹はその答えを答えるべきか否か悩んでいる。

それもそうだろう、最初の原因はハルナが勝手に自分の後をつけてきたからなのだが、結局のところ仮契約を結んだ最大の原因はクウネルの暴走によるところだろう。

だが、そんなことを言って目の前の二人が納得するだろうか、このかはともかく、刹那はクウネルと面識すらない。

そんな状況で理由を話したところで二人が納得してくれるはずはないだろう。

しかしこのまま理由を話さないわけにもいかない、黙っていてもこの状況は解決しないのだ。

「二人ともさ、一樹さんが悪いわけじゃないんだよ」

そんな状況の中、ハルナが一樹をかばうように話に割り込んでくる。

このかと刹那は、今は一樹に聞いているのだから黙っていろという視線をハルナに向けるが、ハルナもそれにひるまず話を続ける。

「このかも魔法使いなんだよね、刹那さんも魔法使い・・・じゃなくて従者っていう奴だよね」

「そうやで」
「はい」

二人が答えるとハルナはその事実を確認するように頷きながら話を続ける。

「今回のことは、もとはと言えば私に原因があるっていうかさ、私が図書館島で一樹さんの後をつけていったせいなんだよね」

ハルナの言葉に刹那は話の流れをいまいち理解しきれないが、このかはその話を聞いてあることについて思い出す。

「二人ともあそこの地下に何があるか知ってるの？」

「いえ」
「うちは知ってるけど、まさか？」

このかの言葉に刹那は、このかの事で知らないことがあるということに驚きを隠せないというような悔しさを含んだ表情を見せる。

「地底図書室、あそこの守護者に見つかって・・・ね」

苦笑いを浮かべそう話すハルナ。

「このちゃん、守護者って？」

刹那は二人が知っているその”守護者”という存在を知らず、一人だけ話についていけないのでこのかに尋ねる。

「図書館島の地下にはな、侵入者を排除するように命じられているドラゴンがおるねん」

「ドラゴン！？」

「そうなんや、そのドラゴンはある人物が襲わないように命じないと何度でも襲ってくるんや。今のところ一樹さんがおればあの子も襲ってこうへんけど、それ以外じゃ絶対に襲ってくるようになってるんや」

このかの言葉に信じられないものを見るように、刹那は目の前の二人を見つめる。

「そこであたしがそこで襲われてね、一樹さんに助けてもらって。それから記憶を消されたくなかったからこちらに足を踏み入れる決心をしたわけ。その結果一樹さんと仮契約することになったんだけど、これも私が同意したことだからさ、一樹さんは何も悪くないの」

一樹は同意した覚えはないが、ここで口をはさんでも仕方ないので黙っている。

「だから私が悪いんだ、そんなに一樹さんを責めないであげてよ、ね」

ハルナはいつものおどけた様子でこのかと刹那の二人の肩をたたく。

「一樹さんもいつまでも座ってないでさ、ほら、立って立って」

そう言ってハルナは一樹の手を取って強引に立たせる。

「一樹さん、うちも詳しい事情はわかったからこのことはもう何も言わん、今度からは気をつけてな」

胸の内には様々な思いを抱きながらも、それを押し殺して一樹にそう告げる。

刹那も黙って頷いている。

「ありがとう、このかちゃん、刹那ちゃん。同じことが二度と無いよう気をつける」

そう言うと一樹は二人に頭を下げる。

「それじゃあさ、この話はもうお終い！　それよりも私魔法使いがどんなものかまだ詳しく知らないからさ、皆どんなことできるのか見せてほしいな！」

ハルナの言葉に、３人はお互いに顔を見合わせる。

魔法を見せると言っても、それぞれできることがバラバラである。

一樹は重力魔法を用いた後衛タイプ

このかは一応の手ほどきは受けているが、専門は回復役

刹那はバリバリの前衛タイプ

見せるだけなら一樹はできるが、後の二人は何か相手が必要になる。

「あれ、もしかしてあたし聞いちゃいけないこと聞いちゃった？」

三人の様子にハルナは困ったように尋ねる。

「そういうことじゃないんだけど、どうしようか」

「一樹さん、それでは私と手合わせ願いますか？」

刹那の問いかけに、断る理由もないので一樹がそれを了承する。

刹那と一樹が少し離れた位置まで歩いていき、その場にはこのかとハルナが残される。

歩いていく二人を見つめながら、ハルナはふと疑問に思ったことを尋ねる。

「このか、あの二人ってどっちが強いの？」

「う～ん、今までここで何度かああして戦ってるけど、せっちゃんが一樹さんに勝ったことはないなぁ。せっちゃんみたいに武器を持って戦うタイプの人は、呪文を唱えなければならない魔法使いの天敵なんやけど、一樹さんて例外やからな～」

このかの言葉に疑問を持ちながらも、ハルナは首をかしげながらも戦いを始めようとする二人に目を向ける。

この二人がこうして対峙するのはもう何度目になるだろうか。

始まりは刹那の誤解によるものだったが、それ以降は互いの鍛錬の相手として何度もこうして対峙してきた。

「一樹さん、今日こそあなたに勝たせていただきます」

一樹も魔法の前に、何度も苦汁をのまされてきた。

しかし今回刹那には秘策がある、それを用いれば目の前にいる一樹に勝てるかもしれない。

その思いを胸に刹那は目の前の一樹に夕凪を向ける。

一樹は魔本を取り出すとその場で佇んでいる。

「行きます！」

刹那はその場で刀を振るう、すると気の刃が刀から放たれる。

斬空閃、神明流の数ある中でも気で斬撃を飛ばす技である。

それを二撃、三撃、刹那は飛ばしていく。

だがそんな斬撃は一樹には通用しない、目の前から迫りくる斬撃を回避する様子もなくただ手を伸ばす。

「ギガノ・レイス」

その一言だけで、一樹の手から巨大な重力球が飛び出し、斬撃を飲み込んでいく。

それだけには留まらず、斬撃を飲み込んだ先にいる刹那に向かっていく。

「やはりこの程度では簡単に返されるか」

そうつぶやくと、刹那は重力球を回避すると、刀にさらに気を込める。

だがいやな気配を感じて、刹那はその場から急いで離脱する。

「アイアン・グラビレイ」

すると先ほどまで刹那がいた場所は地面が陥没したように押しつぶされる。

今や何度も見てきた技だが、その威力は今でも恐ろしい。

刹那は冷や汗をかきながらも、刀を強く握る。

「神鳴流奥義、雷鳴剣！」

雷を纏った刀身が一樹を襲うべく振るわれる。

「ギガノ・レイス」

一樹も魔法を放って迎え撃つ。

刀身と重力球がぶつかり合い、その場で力と力が拮抗する。

前回までの刹那ならここで力負けしていた、だが今日はそれを打ち破る。

「はぁああ！！」

夕凪の刀身が重力球を真っ二つに切り裂く。

切り裂いた先に見えたのは、重力球を切り裂いた刹那に向けられる驚きの表情。

心の中でガッツポーズを取りながら、刹那は刀を振り上げる。

「ザング・マレイス」

一樹から放たれる重力の刃は、一直線に刹那へと向かう。

「くっ」

それを刀で受けとめる刹那だったが、受け止めた衝撃で後方へと飛ばされる。

ギガノ・レイスを打ち破っても、一樹にはまだまだ強力な魔法が残されているのだ。

刹那はその事実にショックを受けながらも、同時にそんな一樹と対峙できる自分にうれしさを感じていた。

「いつもああいう風に近づく前に一樹さんに魔法で牽制されて、せっちゃんは一樹さんに手が出えへんのや」

「それじゃあ刹那さんに勝ち目はないの？」

このかの言葉に、ハルナはどうしようもないと言った表情で尋ねる。

「あれでもせっちゃんも強くなったんやで、最初は一樹さんは今使っている魔法の下位呪文しか使わんかったんや。それでも今では上位呪文を使わせるぐらいにはなったんや」

だが、一樹の持つ呪文はまだまだ上位の呪文がたくさんある、刹那自身、ディオガ以上の呪文をまだ見たことがない。

実際にディオガ以上の呪文を見たことがあるのは本人である一樹、一樹の師匠であるエヴァンジェリン、そしてクウネルの3人である。

一樹が本気でディオガ以上の呪文を使うと地形が変わる、それも洒落にならないレベルで。

それがある以上、相性の悪さも相まって、刹那と一樹の間にはまだまだ差があるのである。

しかし刹那が言ったように、今回は今までとは違い、刹那には一樹を打ち倒せるかもしれない術がある。

それは刹那が取り戻した愛する親友との絆の証。

「せっちゃんだって日々強くなってるんや、ここからやで」

このかは期待をこめた視線を刹那に向ける。

「結局いつもと同じで攻め手がなくなる・・・か」

これまで様々な手で一樹に仕掛けてきた、しかしそのどれもを目の前の一樹は打ち破ってきた。

目の前の一樹は何かを仕掛けようといった様子もなく、その場で刹那の動きを待っている。

「（このままではいつもと同じように攻め手がなくなって私が負ける、でも今の私には新しい力が、このちゃんとの絆の力が！」

刹那は懐に手を伸ばすと、その中から何かを取り出す。

「このちゃん、私に力を貸して！　アデアット」

そう叫ぶと、刹那の手に新たな武器が現れる。

「建御雷（タケミカズチ）！　これが私の新しい力です！」

刹那の左手には夕凪、右手には新しく現れた建御雷（タケミカズチ）が握られている。

「二刀流？　でも刹那ちゃんはそんなことできるの？」

戦いの最中にもかかわらず、刀を二本握る刹那の姿に興味を持ったのか、そう話しかける。

「いえ、私は二刀流など試したことはありません。ですがあなたを倒す術になるなら、私はこの二振りの刀を扱いきってみせます」

そう言いきる刹那の目は本気だ。

その刹那の目を見て、刹那の覚悟を知る。

「行きます」

刹那の右の剣（つるぎ）、建御雷（タケミカズチ）が振り上げる。

二人の距離はまだだいぶ開いている、この位置から振りかぶっても一樹には当たらない。

そう、普通の刀ならば・・・

刹那のアーティファクト建御雷（タケミカズチ）の特性、それは魔力を込めれば込めるほど刀身が巨大化する。

振り下ろされる刃はみるみる巨大化していき、一樹の目前に迫る。

だが建御雷（タケミカズチ）の特性を知る由もなかった一樹には、突然の奇襲となり、回避するという選択を与えなかった。

魔法で撃ち返そうにも、巨大化した刀身の質量と速度から、並みの呪文では抑えることもできないだろう。

一樹はついに決心して新たな呪文を解禁する。

「バベルガ・グラビドン！」

その呪文を唱えると、一樹を捉えんとしていた刃は、圧倒的な力に刀身が中ほどから音を立てて叩き折られ、さらにとどまることのなく地面を地下十数mは陥没させる。

大量の魔力を持っていかれるが、その威力は絶大なものであった。

折れた刀身は一樹に触れることなく、ほどなくその姿を消してしまう。

その直前、一樹は建御雷（タケミカズチ）には用はないとばかりにその先にいるであろう刹那に目を向ける。

だがいるはずの場所に目を向けても刹那の姿はない。

「はぁあああ！！」

その声が聞こえたのは建御雷（タケミカズチ）が消えるまさにその瞬間、巨大の刀身を隠れ蓑に、刹那は一樹に肉薄していたのだ。

「もらった！！」

刹那はもちろん、遠くからその戦いを見ていたこのかとハルナすら刹那の勝利を確信した。

夕凪の刃が一樹の胴を狙い振るわれる。

刀身には雷が纏われている、しかしその規模は先ほどの比ではない。

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！！」

刹那の渾身の力で振りぬかれたその刃は見事一樹の胴を捉える・・・ことなく、空振りに終わった。

瞬間頭に何かが触れると、相当の重量が首にかかる。

「はい、おしまい」

すぐに重量を感じなくなると、後ろからそう声をかけられる。

振り返ると左手をこちらに向けた一樹が立っている。

「ま、、参り・・ました」

刹那の降参の声を聞き、一樹はようやく左手を下す。一樹と刹那の戦いはまたも一樹に軍配が上がるのだった。

「う、うそー！　あそこから巻き返すの！」

「またせっちゃんの負けやー！」

遠くから観戦している二人も、一樹と刹那の決着に驚きを隠せない。

一樹は刀が振るわれる瞬間跳び上がり、刹那の首を支えとして後ろに跳んだのだ。

言うは簡単だが、実際にはそう簡単にできることではない。

「ふん、また一樹の勝ちか。まぁ当然と言えば当然か」

後ろから突然そう話す声が聞こえる、二人が振り返るとそこにはエヴァンジェリンの姿があった。

傍らには茶々丸も控えている。

エヴァンジェリンは何ともつまらなそうな表情で向こうの二人を見ている。

「エヴァちゃん、なんで当然なん？　せっちゃんも頑張ったやん！」

そんな様子にムッときたのか、このかがその理由を尋ねる。

だがそんなこのかを見て、エヴァンジェリンは可笑しなものを見るかのように笑う。

「確かに一見刹那の攻めは悪くない、だがそれだけだ。奇襲にはなったが詰めが甘い。あのアーティファクトを使ったのは悪くない。一樹も驚いてバベルガの呪文を使っていたからな。だが使うからには一樹の体勢を崩せんようにはな、刀身に隠れて接近しても、一樹ならあの距離からでも反撃できないわけはない。あいつはノータイムで魔法が撃てるのだからな。やらなかったのは直撃して刹那が怪我することを恐れた一樹の優しさだろう」

そこまで言ってつまらなそうに鼻を鳴らす。

エヴァンジェリンが直々に鍛えてきたのだ、あの距離からでも反撃できるし、ましてや回避することもできぬわけがない。

エヴァンジェリンは一樹の甘さをつまらなく思っているのだ。

そんなエヴァンジェリンの様子を見て、このかとハルナは言葉を失うのであった。

34．5話（後書き）

影が薄いと言われ続けるので、久しぶりの主人公の戦闘シーン！
刹那とこのかがいつの間にか仮契約！
そしてようやく新呪文！！

刹那が二刀流と言っていますが、あくまで基本は夕凪1本ですよ。
ニュアンスが難しいですが、
×↓二刀流
○↓この二本を上手く扱って戦う
という感じです・・・読者のみなさんにうまく伝わるかな？

35話（前書き）

長らくお待たせしました。

35話

「こちらは放送部です、これより学園内は停電となります。学生の皆さんは極力外出を避けるようにしてください」

放送部の放送が学園内に響き渡っている学園内だが、学園内には人の姿などなく、その放送が聴く者もおらずむなしく鳴り響いている。

そして学園内のすべての時計が午後8時を指したとき、学園のすべての建物、照明から光が失われた。

日中は学生たちであふれかえる学園内も、こうして光を失えばどこか不気味な空気が漂ってくるではないか。

そしてこのとき、まるで生まれたての赤ん坊が産声を上げるように、一人の人物が長年にわたり封印されてきた自身の力を、限定的とはいえ取り戻していた。

エヴァンジェリンは歓喜のあまり身を震わしていた。

しかしそれもほんのひと時のこと、エヴァンジェリンは己が目的のために決闘の相手が待つであろう場所に、己の従者を引き連れて目指した。

一方、決闘の相手であるネギ・スプリングフィールドはすでに決闘場所に指定していた学園外周部にある橋の前にいた。

ネギの傍らには彼の従者として契約した神楽坂アスナ、そしてネギの使い魔であるカモの姿もある。

彼らは約束の時間の前からこの場所にやって来ていて、この場所に仕掛けを施している。

無論、ネギたちが何かを仕掛けるだろうということは、エヴァンジェリンには容易に想像できることであるが、彼女はそれをあえて無視している。

圧倒的な暴力

どのような仕掛けがあろうとも、それを力づくで踏み潰すつもりなのだ。

「ネギ、本当は怖いんでしょ」

身の丈よりも大きな杖を握りしめて立っているネギの後ろ姿を見て、アスナはそう声をかける。

ビクッと体を震わせるネギだが、アスナのほうに振りかえると、不安な表情を見せないように、精いっぱいの笑顔を見せる。

「だ、大丈夫ですアスナさ、む・・・って痛いれふよ」

ネギの顔がゆがむ、それはアスナがネギの顔を思い切り横に引っ張っているからだ。

「無理してそんな風に笑うんじゃないわよ、怖いなら怖いって言いなさい」

「ですが・・・「私だって怖いわよ!」アスナさん?」

アスナのその言葉に、ネギは困惑した表情を浮かべる。

「怖いけど、だからこそ私はあんたと一緒にいるのよ。だからもう少しその・・・私のことも頼りなさいよ！」

言ったアスナは恥ずかしげに頬を掻きながらそっぽを向いている、だがそんなアスナを見てネギの不安な心も少しだけ安らぐ。

そうだ、二人の関係の始まりこそネギの犯した失態だったが、散々文句を言いながらも、時には誤解で喧嘩をしても、最後にはネギの味方としてここにいてくれるのは、目の前にいるアスナなのだ。

「はい！　アスナさん！」

ネギの顔にもいつもの笑顔が戻って来ていた。

「兄貴、そろそろ時間だぜ！！」

それまで静かにその様子を見つめていたカモだったが、もうまもなく迎える決戦の時に向けて、ネギに気を引き締めるように声をかける。

「うん、ありがとうカモ君」

そう答えるネギの顔は引き締まるも、先ほどまでの不安そうな表情は消えうせていた。

そして、その時を迎える。

「なんだこの魔力は！？」

停電とともに現れた強大な魔力に気づいたカモは驚きの声を上げる。

しかし、魔力感知に関しては疎いところがあるネギはそれに気づいていない。

ただエヴァンジェリンを待つようにその場で立ち尽くしている。

現れた強大な魔力は一目散にこちらを目指して移動してくる。

それに肝を冷やすカモであったが、自分が騒いではネギの士気にかかわると感じたのか、それ以上は何も口にしなかった。

「よくぞ逃げずに待っていたな、ネギ先生」

空から舞い降りる人影は愉快そうな声でそう告げる、その傍らには彼女の従者である少女の姿もある。

しかし現れた人影を見て、ネギたちは首をかしげる。

目の前に立つ人物の姿に覚えがないのだ。

「あの、あなたは誰ですか？」

「あんた誰よ？」

二人は声をそろえて目の前の人物に問いかける。

その人物、エヴァンジェリンであるが、彼女は現在幻術で普段の姿からは想像もつかない、絶世の美女の姿になっているのだ。

見るものが見ればエヴァンジェリンが大人になったと理解できるその姿も、目の前のネギとアスナにはそれが理解できない。

「私だ、私ー！」

ボンと音を立てると、エヴァンジェリンの身体は先程までの大人の姿から、見慣れている幼女の姿に戻る。

「「エヴァンジェリンさん！？」

二人もその姿を見てようやく目の前の人物がエヴァンジェリンだと理解した。

「まったく、いちいち面倒な奴らだ。まぁいい、ネギ先生、昨日もらった手紙だが、覚悟はできているんだろうな。言っておくが私は手加減などするつもりはない。ましてやお前を見逃すつもりもないぞ」

挑発的な表情を浮かべるエヴァンジェリンだが、目の前のネギに引く様子は一向に見えない。

その様子を見てエヴァンジェリンはネギに対する評価をほんの少しだけ修正する。

「エヴァンジェリンさん、魔法使いとして、そして先生として、僕はあなたの悪事を見逃すわけにはいけません」

そう告げると、ネギはエヴァンジェリンに向けて杖を向ける。

「なるほど、やはりお互いの主張が変わらないならそうするしかないな。茶々丸！」

「はい、マスター」

エヴァンジェリンの命を受け、彼女を背にかばうように前に出る。

「アスナさん、お願いします。契約執行（シス・メア・パルス）９０秒間、ネギの従者（ミニストラ・ネギィ）「神楽坂アスナ」」

「任せなさい、アデアット」

一方のアスナもネギをかばうように、己の武器であるハリセンを呼び出し、前に出る。

「ラス・テル・マ・ステル・マギステル」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

二人の魔法使いの呪文の詠唱の開始とともに、従者たちも動き始める。

茶々丸がネギの詠唱を妨害しようと突っ込んでくる、それに慌てることなくアスナはネギと茶々丸の間に入り込み、ハリセンを茶々丸に振りぬく。

ハリセンを己の右手で受け止める、しかし想像以上の威力を持ったその一撃は、茶々丸の勢いを跳ね返し、たたらを踏ませた。

アスナも茶々丸の突進の威力に後ろに弾き飛ばされ、数歩後ろに着

地する。

「茶々丸！」

「アスナさん！」

その声に二人は横に飛び退く。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾氷の１７矢！」

「・・・っく、魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾光の１７矢！」

エヴァンジェリンとネギ、二人は全く同数の魔法の射手を放つ、しかし力量の差か、ネギはエヴァンジェリンに比べ詠唱がわずかに遅かった。

全ての魔法の射手は互いにぶつかり合って相殺していく。

「ははっ、さすがは奴の息子、この程度で終わるわけがないか」

少し嬉しそうに笑うエヴァンジェリン、だがすでに次の詠唱を始めている。

「詠唱に時間をかけすぎだ、魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾氷の２９矢！」

「・・・・魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾光の２９矢！」

詠唱時間でエヴァンジェリンに劣っているものの、それでも必死で食らいついているネギ。

再び魔法の射手は相殺していく。

再び詠唱を始めようとするネギの眼前に、茶々丸が迫ってくる。

しかしネギは一瞬ひるむが、構わずに詠唱を続ける。

（私のことも頼りなさいよ）

ネギまであと数mというところで、茶々丸の横腹にアスナが突進をくらわせる。

それにより茶々丸はネギに攻撃を与えることができずに距離を取り直す。

「ネギ！」

「はい、アスナさん」

アスナが声をかけると、ネギは答えるように茶々丸に杖を向ける。

「貴様の相手はこっちだろう、魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾氷の２９矢！」

余所見をしているネギに向かって、エヴァンジェリンは躊躇することなく攻勢に出る。

魔法の射手は狙いをたがえることなくネギの方へと飛んでくるが、その前にアスナが立ちふさがった。

「でりゃぁあああ！！」

自分とネギに対して危険な魔法の射手を瞬時に見極めると、アスナはハリセンをふるってそれをかき消した。

文字通りハリセンに触れると同時に魔法の射手はかき消えたのだ、エヴァンジェリンは目を見開いて驚いている。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾光の１７矢！」

ネギは己の背中をアスナに任せて、エヴァンジェリンとは離れた茶々丸に向けて魔法の射手を放つ。

茶々丸は空を飛ぶことでそれを器用に回避し、エヴァンジェリンの傍に戻っていく。

「神楽坂アスナ、ずいぶんと面白いアーティファクトを持っているようだな」

アスナの持つハリセンを見つめながら、興味深そうな表情を浮かべているエヴァンジェリン。

「茶々丸、私のことはかまわん、『神楽坂アスナをネギから引き離せ』」

その力が厄介なものだと理解したエヴァンジェリンは即座にその命令を下す。

確かに厄介な力ではあるが、エヴァンジェリンはその対処法をいくつか思いついている。

実際このまま２対２の状況で戦い続けても問題はない、だがあえて茶々丸にそう命令する。

まずはネギ一人に力の差を見せつける、ただそれだけのために。

茶々丸はアスナに向けて突進していく、アスナはハリセンを構えて迎撃しようとする。

しかし悲しいかな、素人でしかないアスナでは、容易にハリセンの軌道を読まれてしまい、それを難なくかわした茶々丸はアスナを捕まえてそのまま飛び去っていく。

その様子をただ見ていることしかできなかったネギは、己のふがいなさを悔やみながらも、いまだ目の前にいる自身の敵に杖を向ける。

まだ戦いは始まったばかりである。

茶々丸とアスナは橋から数ｋｍ離れた森の中に着陸した。

「ここならすぐにはマスターたちの元には行けません、申し訳ございませんがアスナさんにはここで止まっていてもらいます」

何とか茶々丸の拘束から逃れたアスナだったが、先ほどまでいた場

所からはだいぶ離されてしまっている。

さらにネギからの魔力供給も得られない状況で茶々丸と戦わなければならない。

限りなく不利な状況だが、それでもアスナの表情はくじけていなかった。

「何よ、すぐに戻ってみせるわ！」

そういうとアスナは茶々丸へと向かっていく。

ハリセンを茶々丸目掛けて振りぬいていく、左に右にそれを難なくかわしていく茶々丸。

もともと運動能力の高いアスナであるが、何度も戦闘を重ねている茶々丸にとって、その攻勢はなんの脅威にもならなかった。

「・・・・・・」

アスナにどのような声をかければいいのかわからないい茶々丸は、ただ黙ってかわし続ける。

エヴァンジェリンに命令されたのはただアスナをあの場から引き離すこと、それを遂行した茶々丸は後はアスナがあの場に戻らないように見ていればいいのだ。

もとは一般人でしかないアスナだから、茶々丸も攻撃を加えることにためらいがある。

その結果アスナの攻撃を黙々とかわし続けているのだった。

そしてその状態が5分も続けばいくら運動神経の良いアスナも疲労がたまる。

すでに当初の勢いはなく、糸が切れれば倒れそうな状態だが、息を乱しながらも茶々丸に対峙し続けている。

「神楽坂さん」

茶々丸の声にも気付かず、アスナはハリセンを振り上げる。

だが、限界に達したのだろう、足がもつれて力なく前に倒れる。

茶々丸の失敗はその優しさであろう、本来敵であるアスナに、倒れそうな彼女に向けて手を伸ばしてしまったことだろう。

アスナを受け止めた茶々丸は、それが狙いであると気づかない。

「ごめんなさい、茶々丸さん」

力のない声でアスナがそう告げると、懐から何かを茶々丸にくっつけた。

それに気づくのが遅かった茶々丸はその身を、動きを封じられる。

「これは！？」

ネギが用意していた策の一つ、相手を捕縛する効果のある骨董魔法具（アンティーク）をアスナに持たせていたのだ。

「茶々丸さん、しばらくここで大人しくしていてね」

アスナはそう声をかけると、仮契約カードで念話を送る。

「（ネギ、茶々丸さんを結界で捕縛したわ、こっちはオッケーよ）」

するとアスナの姿はその場から消える、そこに残されたのは茶々丸一人。

「申し訳ありません、マスター。結界解除プログラム、始動」

時は少し戻り、その場に残ったネギとエヴァンジェリン。

「ふん、ちまちまと魔法の射手を撃ちあってもつまらん。好きな魔法を唱えてみるがいい」

そう言うと、エヴァンジェリンはネギが呪文を唱えるのを腕を組んで待ちかまえる。

「兄貴、これはチャンスだぜ。せっかく向こうが撃たせてくれるんだから、一気にやっちまおうぜ」

カモのその言葉に促され、ネギは呪文を唱え始める。

「ラス・テル・マ・ステル・マギステル　来れ雷精風の精（ウエニアアキリスピエストウルグリエンティ・ウルグラ）　雷を纏いて（ティオーニ）　吹きすさべ（フレット・テンペスターズアウストリーナ）　南洋の風」

「ふふ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来れ氷精闇の精（ウエニアグラキスピレストウズスクーランテス）　闇を従え（クム・オブスクラティオレット・テンペスタウスーリス）　吹雪け　常夜の氷雪」

「同種の呪文！　打ち合う気かよ」

「雷の暴風！！！」（ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス）

「闇の吹雪！！！」（ニウイス・テンペスタース・オブスクランス）

二つの魔法がぶつかり合う、それはお互いの意志の力を表すかのように一進一退を繰り返す。

「ふん、この程度か」

しかしエヴァンジェリンがそうつぶやくと、魔法に更なる力が込められる。

「（打ち負ける！）」

そう判断したネギは即座にその場から離脱する、すろと阻む物の無くなったエヴァンジェリンの魔法は、先ほどまでネギがいた場所一面を凍りつかせている。

その光景に、自分が巻き込まれていたらと想像し、ネギはぞっとする。

「寸前のところでかわしていたか、だがこんなことでは私に喧嘩を売る資格すらないぞ」

そう告げられネギは悔しそうに表情をゆがめる、そして次の言葉がネギの心を揺さぶる。

「……お前の父なら笑いながらこの状況をひっくり返すだろうがな」

その言葉に、ネギは今の状況を忘れてエヴァンジェリンの方を凝視する。

「お父さんのことを知ってるんですか！？」

「知っているも何も・・・いや、知りたければ力づくで聞きだすがいい」

不敵な笑みを浮かべると、エヴァは再び手を組んでネギの動きを待つ。

父のことで頭がいっぱいで、先ほどまでの冷静さを失いかけているネギ。

がじっと腕を噛んで、カモはネギを落ち着かせようとする。

「兄貴、自分を見失ったら向こうの思うつぼだぜ！」

「カモ君、ありがとう」

カモの言葉にネギは冷静さを取り戻す、そして先ほどと同じように

雷の暴風を唱える。

対するエヴァンジェリンも闇の吹雪を唱えている。

二つの魔法はぶつかり合う、だがさきほどネギが打ち負けた威力の闇の吹雪と、今度は拮抗している。

「（この戦いの中でも成長している…か、やはりこいつはナギの息子だな。だが！）」

さらに魔力を込めるエヴァンジェリン、しだいに耐えられなくなるネギは再びその場から離脱する。

「どうした、その程度では父の話など聞けんぞ！」

エヴァンジェリンの挑発に、今度は乗らない。

ネギは落ち着いて次の手を考える

「（この位置なら）」

橋に仕掛けていた魔法陣を起動する、すると結界がエヴァンジェリンを捕らえる。

「ほぅ」

身体にまとわりつく結界に、エヴァンジェリンは驚く表情も浮かべずネギを見つめている。

「これで動けないはず。どうです、エヴァンジェリンさん！」

言うと同時にネギの頭にアスナの声が響き渡る。

「（ネギ、茶々丸さんを結界で捕縛したわ、こっちはオッケーよ）」

「召喚（エウオケム・ウオエトラ・ネギィ）　ネギの従者　神楽坂アスナ！」

するとネギの横にアスナの姿が現れる。

アスナは肩で息をしながらも、目の前の光景を見つめるとハリセンをエヴァンジェリンに向けて構える。

「降参してください、エヴァンジェリンさん！」

だがエヴァンジェリンの口から出てきたのは、降参の言葉でもなく、おかしそうに笑う笑い声だけだった。

「茶々丸がすぐに戻ってこないということは、あいつにも結界を用いたのだろう。それは褒めてやろう」

突然語り始めたエヴァンジェリンに、二人はただそれを聞くことしかできない。

「だが、本当の強者とは、相手のすべてを力でねじ伏せる。このようにな」

エヴァンジェリンが全身から魔力を放出させる、すると彼女を捕らえている結界は見る見るうちに罅が入り、最後には音もなく崩れ去った。

そんな様子を、ネギは、アスナは、カモは信じられないといった表情で見つめるしかなかった。

「さて、次はどんな手を見せてくれるんだ」

不敵に笑うエヴァンジェリンに、ネギは戦意を失いそうになる。

「ネギ！」

だがアスナはまだあきらめていない、ネギに声をかけるとエヴァンジェリンに突貫していく。

そんなアスナを見て、ネギは折れそうな心を再び立て直す。

「契約執行（シス・メア・パルス）９０秒間、ネギの従者（ミニストラ・ネギィ）「神楽坂アスナ」」

アスナに自らの魔力を送ると、自身も三度雷の暴風を放つために詠唱を始める。

ネギの魔力でわずかに体力を回復しながらも、やはり動きが鈍くなっているアスナ。

そんなアスナの様子に、エヴァンジェリンは避ける価値すらないと見て、闇の吹雪を唱え始める。

「このー！」

バシーン！！　気持ちのよい音が鳴り響く。

エヴァンジェリンには何が起こったのか理解できなかった、気が付

いたら殴られた衝撃でその場から飛ばされて、呪文の詠唱を中断していた。

「・・・は？」

己が常時展開してる魔力障壁でダメージなど食らうはずはない、だが自分は今確かにダメージを食らった。

「（そうか、神楽坂アスナのアーティファクト！）」

アスナの姿を見て、構う価値なしとした判断、それが間違いだった。

アスナの持つハリセンの能力を失念していたのだ。

「雷の暴風！！」

そしてネギが呪文を唱え終えているのに気づいたのは、魔法が自身に迫るほんのわずか前だった。

雷の暴風はエヴァンジェリンに直撃、だがエヴァンジェリンがどうなったかは煙が立ち込めてまだ確認できない。

煙がはれると、そこには衣服がボロボロになりながらも、身体には大したダメージが見られないエヴァンジェリンの姿。

「今のは利いたぞ、だがもう油断はしない」

そう言うエヴァンジェリンは怒っているのか、笑っているのに恐怖を感じる。

「申し訳ありません、遅くなりました、マスター」

「茶々丸か」

エヴァの傍らに先ほどアスナが捕らえたはずの茶々丸が舞い降りてくる。

「これでまた2対2だな、さてどうする?」

だが、事態は思わぬ方向へと急変する。

「そんな、予定より早すぎる!?」

茶々丸の焦るような声とともに、エヴァンジェリンの体に異変が起こる。

彼女の身体に電撃が走ったかと思うと、彼女の強大な魔力が感じ取れなくなった。

そして街に明かりが灯り始めたのだ。

「ぐっ、これ以上は満月ではない今日は無理か、今日のところは退散するが私は貴様の血を狙い続けるからな!」

それだけを言うと、エヴァンジェリンは茶々丸に抱きかかえられるように、その場から飛び去っていった。

その場に取り残されたネギたちは状況を把握できない。

「兄貴、やりましたぜ!」

だがカモは何かをネギに訴える。

「闇の福音を退けたんだぜ、つまりこの勝負は兄貴の勝ちだ！」

「僕の・・・勝ち？」

「そうだぜ、さすがネギの兄貴だ！」

カモがネギを囃したてる、それに乗せられるようにネギも勝利を確信した。

エヴァンジェリンの撤退、これで今日の勝負はネギの勝利ということで話は進んでいくのだった。

35話（後書き）

原作ではエヴァが弱く感じたので、普通ならこうなるかなという作者の想像のもと描きました。
これでエヴァンジェリン戦は決着、何ともすっきりしない結末となりました。
まぁこれにも理由はあるんで、いつかはその理由が明かされます。

36話

「うん、それは負けだな。それじゃあ罰ゲーム、っと！？」

エヴァンジェリンの邸宅内、エヴァとネギの戦いからすでに3時間が過ぎている。

そして今この場には、家主であるエヴァと茶々丸、チャチャゼロ、一樹の4人。

このかやハルナはこの場にはいない、そもそもエヴァとネギの戦いを知らされていない。

もっともこの戦いについては学園長以外、学園の人間で知る者はいない。

学園長自体、この戦いを容認していたわけではない。

そのためにエヴァと登校地獄の改変を行うという契約を結び、エヴァの暴発を防ごうとしていた。

だがネギの方から仕掛けたとあっては学園長としても防ぎようはない、そもそもエヴァがそれを口止めしたのだから。

だから学園長自体この事態を知ったのは停電の直後、突如学園内に現れた巨大な魔力の存在からであり、そのことで起こるであろう学園の混乱を防ぐために学園長も奔走した。

学園長はエヴァの学園での立場を守るために、学園の魔法使いに決

闘の場に近づかないよう厳命し、学園長を囃したてる魔法使いたちに「この件はわしが直接事に当たる」と（嘘をついて）その場を収めた。

それと同時に学園の中でも信用のおける明石教授に連絡し、大停電を予定よりも早く復旧させるように指示を出した。

当初午後8時から12時まで予定されていた大停電が予定より早く復旧したのは、二人の決闘をいち早く終わらせるための学園長のとった手だった。

そして学園長自身もこの決闘の場の近くに身を伏せていて、万が一の場合にはエヴァの前に立ちふさがるつもりだった。

もっともそんなことは起こらなかったが、終わり方が終わり方だけにエヴァは納得していない。

学園長はこれからうまくエヴァの手綱を握っていかなければ、またこの二人は争うことになるだろう。

「（とほほ、なんでこんな面倒なことになっとるんじゃ。これはどちらにも一度お灸をすえるべきかの）」

学園長がそんなことを思っている中、一樹がエヴァの負けと判定し、罰ゲームのための用意を準備しようとした瞬間、一樹の頬にエヴァの放った魔法の射手がかすっていった。

つ～っと流れる血をぬぐいながら、その原因となった人物の方に目を向けるが、エヴァは機嫌の悪そうにソファに肩肘をついて寝転んでいる。

そしてもう一方の手で開いているソファを指さし、「す・わ・れ」と命令する。

目が据わっている、無視をすれば次は何処にかはわからないが、魔法の射手を直撃されるだろう。

色々言いたいことはあったが、一樹はしぶしぶソファに腰掛ける。

「貴様は今の話をちゃんと聞いていたのか、何処をどう聞けば私の負けと判定することができるんだ」

「何処をってエヴァは戦いの場から引いてきたんだろ。それって逃げたって「戦略的撤退だ」・・・逃げ「戦略的撤退だ」・・・に「戦略的撤退だ」・・・はい」

あくまでも自分の主張を覆さないエヴァに、根負けした一樹は論点を変える。

「それでも引いたってことはエヴァは子供先生との勝負を避けたんじゃないの」

その言葉に、さらに機嫌を悪くしたようだ、めんどくさそうに溜息を吐く。

「いいか、今回の勝負、私は魔法使いとして挑んだ。だがどんな思惑があったかは知らんが、学園の停電が予定外に早く復旧したことで、タイムアップとなった。つまりその時点で私と奴の決闘は水を差されたんだ。その時点で私の興は削がれたし、あの場で戦い続ける気も失せた」

そこまで言うとエヴァは身体を起こす。

「そもそもだ、あのまま戦っていても私は負けるつもりなどない、このようにな」

それを聞いて一樹は首元に違和感を感じる、何かが自分の首を軽く締めている。

そっと手を寄せると、自分の首に糸が巻きついていた。

そしてエヴァに目を向けると、いつの間にか指の先に糸が現れていた。

「私が少し力を入れるだけで、この糸は貴様の首をやすやすと跳ね飛ばす。貴様ですら気付かなかったんだ。ネギはおろか、なぜか従者になっていた神楽坂も気づかぬままあの世に行っていただろうな」

そこまで言うと、エヴァは張り詰めていた糸を緩める。

一樹の首を軽く締めていた糸もするっと緩まり、ソファへと落ちていく。

締められていた箇所を軽くさすりながら、一樹は自分の首がつながっていることを確認する。

「それにだ、どうせ血を吸うなら、徹底的に相手に絶望を与えてからの方が面白いだろう」

「（ドSだ）」

そう言って笑うエヴァの顔に、一樹は顔をひきつらせる。

「というわけでこの戦いは無効というわけだ、わかったか！」

そう言ってこの話を終わらせようとするエヴァ、だがこのままで終わるわけがない。

この結果を待ち望んで、この数週間クウネルと様々な議論を交わしながら、練りに練ったうえで用意された罰ゲーム用の衣装の数々（用意したのはクウネル、外に出られないと言っているのにどうやって用意したのかは謎である）。

「異議あり！！」

右手をビシッとエヴァに指を向ける、その姿は不利な状況を覆し、最後には勝訴を勝ち取る某弁護士のようだ。

「裁判長、異議を申し立てます」

そう言って一樹は茶々丸の方を見つめる。

「・・・異議を認めます」

茶々丸のその言葉に、エヴァはソファからずっこけ落ちる。

「ケケケ、オモシレエジャネェカ、妹ヨ」

その様子を黙って見ていたチャチャゼロも、さすがにこの茶々丸の対応には笑いが抑えきれない。

「貴様は誰の味方をしているんだこの馬鹿ロボが！？」

そう言って茶々丸の背中にあるネジを強引に巻き始める。

「マスター、そんなに巻かれては！　あっ！」

そう言うと茶々丸は艶のある声を上げる。

「エヴァの言い分はわかった、でもそれはエヴァの主観によるものだろう。客観的にみればどう思う、例えば子供先生からしたら、エヴァの方から引いていったんだ。子供先生がその様子を喧伝すれば、彼の周りはそうは思わないだろう」

一樹のその言葉に、とてもめんどくさそうに顔を歪めるエヴァ。

「そこでだ、お互いに損のない程度で折り合いをつけようじゃないか」

席を立ち、エヴァに背を向けて部屋の隅に行く。

「面白い、聞くだけ聞いてやろうじゃないか」

「エヴァとしては子供先生にそのことを喧伝されるのは都合が悪い、だからと言って子供先生たちも次は命にかかわると知れば言いふらすことはないだろう。そこで、俺がそのことをあの二人に伝える。そうすればお互い問題はないだろう」

「・・・まぁな」

一樹からは見えないが、エヴァはしぶしぶという表情だろう。

「その代わりと言っては何だが、今回の罰ゲームとして用意した衣装を数着着てくれれば、俺にとっても損はない。茶々丸！」

パチンと指を鳴らすと、茶々丸は一樹が用意していたトランクを持ってくる。

ガチャ、そのトランクが開くと、一樹とクウネルが厳選したエヴァ用のコスチュームが広がっている。

「さぁ、これで誰も損しないだろう」

そこまでいって一樹はエヴァの方に振りかえる。

エヴァはプルプルと震えながらうつむいている。

「・・・お」

「お？」

「思い切り私が損しているではないか！？」

「ぐはっ！」

エヴァの渾身のアッパーが一樹の顎を捉える。

数m飛ばされた一樹は、驚いた顔を浮かべながらエヴァに近づく。

「どうして！？　これを数着着るだけでエヴァの名誉が守られるん

だぞ！」

「そのためにこんなものを着たら、もっと大事なものを失うわ！この馬鹿が！？」

顔を真っ赤に染めながら、エヴァはそう叫ぶ。

「悪の魔法使いとして尊厳が大事じゃないのか！」

「人として尊厳を失うだろうが！？」

「どうせ負けてたらもっと衣装が用意されているんだ！　それを数着に譲歩されているんだぞ！？」

「というかこんなものを用意するなこの馬鹿弟子が！？」

「「はーはーはー」」

二人は言い合いを続けて息も絶え絶えになる。

「ふん」

エヴァはトランクに手を向けると魔法を放つ。

トランクは中身ごと凍りつき、その後砕け散っていく。

「あぁー！」

「こんなものは世にあってはならんものだ」

そう言うとふんと鼻を鳴らして粉々になった衣装たちを踏みつけていく。

「サスガ御主人、容赦ネェナ」

「先ほどの貴様の言葉通り、あの二人が言い回らないように口ききだけしておけ。それから次にこんなものを用意したら、ネギよりも先に貴様を八つ裂きにしてやるからな」

目がエヴァの言葉が本気だと語っている。

それだけ告げると、エヴァは自分の部屋へと帰っていった。

一樹は今回のことでさすがに懲りたのか。

「ちくしょう」

懲りたのか？

「クウネルさんともっとすごいの用意してやる―！」

残念、懲りていなかった。

一樹は走ってエヴァンジェリン邸から離れていくのだった。

36話（後書き）

やめて石を投げないで。
だってエヴァがおとなしくあんな衣装を着るはずないじゃないですか。
ｇｏｉｎｇ　ｍｙ　ｗａｙなエヴァが、自分の負けを認めるはずがないというのを作者なりに解釈した結果がこれなんですよ。
そして懲りない主人公、次のチャンスは果たしてあるのか・・・

37話（前書き）

最近久しぶりにやりたくなって、ポケモンを再スタートしました、
ソフトはファイアレッド（古!!
さすがに廃人プレイをやるつもりはないので、捕まえたポケモンを
適当に育てて楽しんでいます。
今はなぜかプテラがお気に入り、自分でもなぜかはよくわからない
（笑）
まぁそんなことはさておき、最新話です。

37話

エヴァンジェリンとネギの決闘から一夜が明けた。

エヴァと戦ったネギたちも、今は中等部の女子寮で心地の良い眠りについている。

昨日の疲労からか、二人は帰ってくるなり泥のように眠りについてしまった。

このかはその原因を聞かされていなかったので、この二人の様子を不思議に思いながらも深い眠りに入っている二人にそっと布団を掛けてあげた。

そして夜は過ぎ、陽が昇る。

アスナは何とか起き上がり新聞配達のバイトに行ったようだが、戻ってきてまたすぐに眠りに就いたのだろう、アスナはベッドに倒れ込むように眠っている。

いつも通りに起床したこのかは携帯にメールが入っていることに気づく。

その相手は私生活においてとても懇意にしている一樹だった。

そのメールは自分が眠りについてすぐに送られていたものらしい、このかはやや慌てながらも、メールをすぐに返すべきか、それとも直接謝罪を述べるために電話をかけるべきか悩む。

「（あーあかん、やっぱ電話をかけた方がええやんな）」

そう決意して携帯を操作しようとするこのか、その瞬間手に持っていた携帯が音を立てて鳴り始める。

「わひゃ！？」

思わず驚いてしまい、携帯の電源ボタンを押してしまう。

当然電話を切ってしまったので、携帯は静かになる。

「（あー！　やってしもうた！？　もしかして今の一樹さんやったんちゃう！？」

慌てて着信履歴を確認しようとした瞬間、再び携帯が鳴り響く。

「（今度は落ち着かんと！）」

心を落ち着かせると、携帯の通話ボタンを押す。

「はい、もしも「ちょっとこのか！　あんた電話切ったでしょ！？」パ、パル？」

こちらの言葉をさえぎって、そう大声で抗議の言葉を伝えてくるのはハルナだった。

「このか、昨日の夜一樹さんからメール来てない？」

「（確かに来てるけどなんでパルが知っとるんや？）うん、来てたけど・・・」

「あーその様子だと今気付いたみたいね。まぁ一樹さんもそう思ったから私に連絡したんでしょうけど。メールはもう見たの？」

「・・・まだ見てないわ」

ハルナ経由で連絡が来るということは、それほどこのメールは重要なことが書かれているのだろうか。

そう思ってこのかは罪悪感に駆られている。

「それなら仕方ないかー、一樹さんからの伝言。できれば学校が始まる前にネギ先生を男子エリアと女子エリアの境に連れてきてほしいんだって。なんか話があるみたい」

「ネギ先生を？」

「うん、あとアスナも連れてきてほしいみたいよ」

一樹がネギとかかわることはほとんどない。

それは一樹が自ら公言しているはっきりとした事実だ。

それが一樹からの呼び出しとなると、何かとても重要な話があるのだろう。

このかは慌てて時計を確認する。

時計は6時を少し回ったところを指している。

「やばっ！　急がないと時間ないやん！？」

「とりあえず私もついていくから、このかは二人を起こして。朝ご飯は私が用意しておくから！」

「ありがとう、パル。それじゃあ後で！」

そう言うとこのかは電話を切る、そしていまだに眠りにつく二人を起こしにかかる。

「ネギくんー！　アスナー！　起きてー！」

二人の体をゆすって、何とか二人を起こそうと試みる。

だが二人ともまだ眠り足りないのか、布団をつかんで体を丸くする。

「アカーン、お願い二人とも起きてー！」

このかは必死に二人を起こそうと試みる。

「うーん、もう時間なのこのか？」

何とか先にアスナは目を覚ましてくれるが、ネギがまだ起きない。

「アスナ、悪いんやけど急いで出かける準備して！」

「ちょ、このか！　なんなのよ」

「悪いけど説明は後や、うちはネギ君を起こすから、アスナは自分の準備して！」

このかの慌てた様子に、アスナは寝起きの頭で戸惑いながらもひとまず顔を洗いに行く。

そして何とかネギを起こしたこのかは、朝食を持ってやってきたハルナを連れて、未だ事情の飲み込めぬ二人を連れて寮を出る。

寮を出たのは6時40分を少し回ったところだった。

「うーん、このかさん。どうしてこんなに早く出かけるんですか？それにハルナさんも」

まだ眠気が覚めないのか、目を擦りながら先導するこのかに尋ねる。

「まずはじめに謝らなあかんねんけど、昨日うちが寝た後にメールがきたみたいで、うちもさっき聞いてん」

そう言ってこのかは申し訳なさそうに頭を下げる。

「まあいいけど、それで結局どういうことなの？」

「一樹さんが学校が始まる前にどうしてもネギ君たちと話したいことがあるらしいんよ」

一樹の名前を出すと、二人は驚いたような表情を見せる。

「一樹さんが・・・」

「僕たちに話・・・ですか？」

不思議そうな顔でそう尋ねるネギとアスナ。

普段積極的な交流のない一樹からの呼び出しに、呼び出される理由の見当がつかない。

「なんでも大事な用件があるみたいよ、このかに連絡がつかなくて私にも連絡があったぐらいだから、無視するわけにもいかないでしょ」

ハルナのその言葉に二人もとりあえずそれ以上理由を尋ねるのはあきらめて、ハルナの用意していたおにぎりを齧りながら先を急ぐ。

それから4人は他愛もない話をしながら目的地に向かい、そして一樹が待ち合わせに指定した場所にはすでに一樹がやって来ていて、携帯をいじってこちらの到着を待っているようだ。

まだ4人の到着には気づいていないようで、目は携帯の画面から離れない。

「おー「おーい一樹さん!」・・・」

こちらに気づいてもらおうと声をかけようとしたが、ハルナが先に声をかけてしまった。

「ああ、おはよう」

携帯をポケットに直すと、一樹はこちらに近づきながらそう挨拶してくる。

「突然こんな時間に呼び出したりして悪いね、でも早急に伝えるべ

きことがあるんだ」

「僕たちに・・・ですか？」

「そう、もともとネギ君とアスナちゃんの二人だけに話すつもりだったんだけど・・・まぁこのかちゃんとハルナに聞かれても問題はないか」

一樹は少し考えた後、そう答える。

「でもそれだと昨日ネギ君とアスナちゃんが何をしていたかなんだけど」

その言葉に二人はビクッと肩を震わせる。

「一樹さんは昨日のこと知ってるの！？」

アスナが驚愕の表情でそう尋ねる。

「まぁ知ってるというか、何があったかは昨日の夜聞いたんだけどね（本当は最初から知ってたけどそれを言う必要ないだろう）」

「そう・・・ですか」

「でもなんで一樹さんがその話を知ってるの？」

アスナがさらに質問してくるが、話が読めないこのかとハルナはその会話に割って入る。

「ちょっと私たちにもわかるように話をしてほしいんだけど！？」

「そうや、ちょっと何の話してるかわからんわ」

「それは・・・その」

ネギが困ったようにアスナと一樹の顔をうかがう。

この二人はこのかとハルナが関係者であることを知らないため、正直に話すことができないと思っている。

「ネギ君とエヴァが決闘していたんだ。魔法使いとしてね」

「「か、一樹さん!?」」

しかし一樹がなんの躊躇もなくそう話したことに驚きの声を上げる。

「あーそういうこと」

「ネギ君命知らずやなぁー」

話を聞いて二人はそんなことを口にする。

「ちょ、ちょっと!　なんで二人ともそんなに落ち着いてるのよ」

「そうです!　それに一樹さん、魔法は秘匿しないといけないものですよ!　ってあっ!?」

一樹を注意するつもりが墓穴を掘るネギ。

「ネギ君、今まで黙ってて悪かったんやけど・・・うちも魔法使い

やで」

「「え!?」」

このかの突然のカミングアウトにネギとアスナは言葉を失う。

「おじいちゃんが極力正体を明かしたらあかんて言うから今まで黙ってて ん。ごめんなー」

「そんな、このかが魔法使いだなんて!? それじゃあパルも?」

アスナがそう言ってハルナの方に目を向ける。

「私は魔法使いじゃなくて、一樹さんと仮契約したパートナーなんだけどね」

そう言って懐から仮契約カードを取り出して見せる。

目の前の二人が関係者ということが今でも信じられず、ネギとアスナは互いに顔を見合わせて真偽を確かめる。

「色々話したいことがあるだろうけど、先に今日呼び出した理由だけ話させてもらうよ。昨日のエヴァとの決闘の話、これは誰にも口外しないようにね」

一樹の言葉にネギとアスナは意味が分からず、首をかしげている。

「一樹さん、どうして話をしてはいけないんでしょうか」

「いろいろと理由があるんだけど、一つ一つ説明していこうか。ま

ず昨日の決闘のことをこの学園で知っているのは当事者であるネギ君たち以外は、俺を含めてごく少数しかいないと思う。ネギ君もエヴァの過去は知っているよね」

一樹の言葉に、ネギはエヴァがかつて高額の賞金を懸けられていた悪の魔法使いであることを思い出す。

「はい、エヴァンジェリンさんは悪い魔法使いなんですよね。だから僕のことも襲ってきたんです」

ネギは怒りを含んだ表情でそう話すが、一樹はその話がどこかおかしいと感じる。

「ネギ君、今の言ったこともう一度話してくれる？」

「いいですけど？　エヴァンジェリンさんは悪い魔法使いだから僕を襲ってきたんです」

ネギの話をもう一度聞いて、やはりおかしいことを確信する。

「ネギ君、エヴァに襲われたって何時何処でかな？」

「それは学園内で桜通りの吸血鬼の話が流れたときです。僕も気になって桜通りに行ったとき、突然エヴァンジェリンさんに襲われたんです」

ネギの言葉にアスナやこのか、ハルナも驚いた表情を見せる。

だが、一樹はその話がありえないことだと知っている。

「ネギ君、その時確かにエヴァの姿を見たのかい？　これは大事なことだから正直に答えてほしい」

真剣な表情で尋ねてくる一樹に、ネギはやや仰け反るように答える。

「い、いえ、確かにエヴァンジェリンさんの姿を見たわけじゃないんですけど。でも氷の魔法を使っていましたし、この学園にいる吸血鬼はエヴァンジェリンさんしかありえません」

ネギはあの時の犯人がエヴァンジェリンだと断定するに相応する情報を述べて、一樹を見つめる。

だが一樹はそれを聞いて、確信したかのように話し始める。

「桜通りの吸血鬼はエヴァンジェリンではないよ。そもそもあれは根も葉もない噂に過ぎないんだ」

「そ、そんな！？」

一樹の言葉に信じられないという表情を浮かべるネギ、アスナもネギから聞かされていた話とはちがうので驚きの表情を見せている。

だが一樹はさらに言葉を続ける。

「エヴァが桜通りの吸血鬼でないのは学園長が確認を取った正確な事実だよ。確かにエヴァは学園にいる吸血鬼だけど、普段はその力を封じられていて、一般人と何ら変わらない力しかもっていないんだ。魔法も触媒がなければ使えない」

一樹から話される情報はネギがどれも知らなかったものだ。

確かに魔力を感じないと思っていたが、それが普段力を封じられているなんて聞いていなかった。

「でも昨日はエヴァちゃん魔法を使ってたわよ!?」

アスナは確かに昨日エヴァが魔法を使っていたのを確認している、それはネギも同様だ。

「詳しくは言えないけど、昨日はエヴァの魔力を封印している結界が緩んだんだ。でもそれは昨日の決闘の最中に修復された。だから今はもう昨日のように魔法は使えない」

決闘の途中でエヴァが不自然にひいたのを思い出し、それが理由だと悟る二人。

「エヴァがあのとき引いたのはなんでかわかったかい、ネギ君?」

一樹の問いかけにネギは黙って首を縦に振る。

「それでこの話を話してはいけない理由だけど、まず一つはエヴァのこの学園内での立場だけど、ネギ君が思ったようにエヴァはかつて悪の魔法使いとして名をはせてきた。だからこの学園の魔法使いには当然いい目で見られていない。そこでこの話が広まったら、エヴァを学園から追い出せという声が広がることになる。だがそれはエヴァに呪いをかけこの地に縛り付けた人がいなければ、エヴァはこの学園から出ていくこともできないんだ」

エヴァに呪いがかけられている、予想だにしなかった言葉にネギはもちろん、その事情を知らなかったアスナも驚いている。

一樹とともにその話を聞いていたことのあるこのかだけが冷静に話を聞いていたが、今回の件で蚊帳の外にされていたことにわずかな怒りを感じている。

だが、今は一樹の話をさえぎっていはいけないとわかっているので、そのことは後で問い詰めると決意して話に耳を傾ける。

一方ハルナは魔法関係に首を突っ込んでまだ日が浅いのでその話は初耳だった。

「呪いをかけたって、いったいそんなこと誰が!?」

かつて暮らしていた魔法使いの人々は、ネギが3歳のころに村を襲撃されて、ネギを含むわずかな生存者を残してほとんどが殺されるか、石化の呪いをかけられている。

そしてその呪いは今でもなお解けることはない。

そんなネギにとって呪いとは一種のタブーであった。

たとえ敵対していたエヴァンジェリンの話とはいえ、そんなことをするなんて立派な魔法使いを目指すネギにとっては許せる話ではない。

「本当に誰が呪いをかけたか知りたいの?」

一樹が本当に話してもいいのかネギに問いかける。

だがネギは首を縦に振って答えるだけ、それがどんな答えなのかも

考えることなく。

「エヴァに呪いをかけたのは・・・千の呪文の男（サウザンドマスター）、ネギ君のお父さんだよ」

その言葉を聞いて、ネギは目の前が真っ暗になるような錯覚を覚えた。

世界中に知られている立派な魔法使いであり、自身が最もあこがれている正義の魔法使い。

そんな父がエヴァンジェリンに呪いをかけていた。

「・・・・・！！　・・・・・・！！」

アスナが何か大声で叫んでいるが、ネギの耳には入ってこない。

ネギは全身から力が抜け、その場で倒れこむのだった。

37話（後書き）

朝に呼び出す必要があるのかという意見もあると思いますが、まぁそれは念のためということで。

このかとハルナの関係者ばらし、これは次の修学旅行編でどっちみちわかることなので、先にばらしてもいいかと・・・

それとネギ、あれだけのトラウマがあればこうなってもおかしくないはず。

原作ではさらっと流されていたけど、自分の父親がそんなことしてると知ったら、もっとショックを受けるだろ、ということです。

今回は事実を最低限しか話していないし、まだ話の途中なので、次話でもう少し詳細な話をすると思いますが、これだけの情報だとこうなってもおかしくないはず（大事なことだから2回言いました（笑））

38話（前書き）

４０００字　書き上げ保存　試みて　なろうのエラーで　データがおじゃん
新規保存しておらず、やろうと思ってエラーでデータが吹き飛び、午前2時に作者が泣きながら詠んだ俳句です。
マジあり得ん、それから書きなおしーの、書き足しーのしてたらいつの間にか窓の外は明るいよ。

あ、更新遅くなってごめんなさい、今はもう愚痴しか出てきません。
そして最後に超展開があるよ、原作のような関係の修復をさけたら、どういうわけかこういう風になっちゃったよ

38話

「う～ん、あれ、ここはどこだろう？」

目を覚ましたネギは、目ボケ眼を擦りながら辺りをきょろきょろと見渡す。

しかしこの部屋にネギは見覚えがない。

「どうして僕はこんなところで眠っていたんだろう」

ネギは今日の自分の行動を思う出そうと頭をひねる。

朝起きると、一樹から話があるからと呼び出され、そこで話を聞いていて・・・！？

「そうだ！　お父さんとエヴァンジェリンさんの話を聞いて、それで！」

自分が気絶した理由を思い出し、ネギは寝かされていたベッドから飛び上がる。

ネギが聞かされ、気絶するにいたった話、それは立派な魔法使い（マギステル・マギ）である父、ナギ・スプリングフィールドが、自身の担当するクラスの生徒であるエヴァンジェリンに、未だ解けることのない呪いをかけていたということである。

ネギにとって、呪いとはある種のタブーである。

それはネギがまだ幼かった時までさかのぼる。

当時ネギはまだ3歳で、にもかかわらず父の姿を見たことがなかった。

両親の顔も知らず、生活を見てくれているとはいえ、おじさんの家の離れを借りて一人で生活しているネギにとって、家族とはそばにいるものとは思っていなかった。

そして従姉であるネカネからこんな話も聞かされていた、それは父について。

ネギの父、ナギ・スプリングフィールドはスーパーマンのような人間で、ピンチの時には必ず駆けつけて助けてくれると。

だからだろうか、父が死んだと言われてもそれを理解することができなかった。

ネカネは父が遠い遠い国に行ってしまったと言い、アーニャに死んだということは二度と会えないと言われても、それを信じることができなかった。

父は自分がピンチになれば必ず現れて、自分のことを助けてくれるのだと。

それからネギはわざと自分をピンチに追い込むような危険を自ら犯した。

だが何度ピンチに陥ろうとも彼の父が目の前に現れてくれることはなかった。

そしてあるとき、自ら川に溺れ、４０度近く熱を出し死にかけたことがあった。

その時駆けつけたネカネに泣きながら怒られたとき、ネギは二度とこんなことをしてはいけないということを学んだ。

しかしピンチに父が現れて助けてくれるという考えは、それでも信じ続けていた。

だが運命の日、ネギは川で釣りをしていた。だが今日はネカネが村にやってくる日であることを思い出して、慌てて村へと駆け出す。

そして村に戻ってきたネギを待っていたのは、村を出る直前の光景とはかけ離れていた。

静かな街並みであった村の中は、熱く燃え盛る炎に包まれ、燃え盛り、笑顔に包まれていた人々の姿は、恐怖に包まれるように石化したまま固まっていた。

ネカネやスタンおじいちゃんの姿を探して駆け回るがどこにも姿が見当たらない。

ここでネギは一つの考えにたどり着く、自分がピンチになれば父が助けに着てくるなんて思っていたから、だから今この村はこんな状況になっているのだと。

泣き崩れるように崩れるネギの前に、この村を襲撃していた悪魔の軍勢が現れる。

そして一体の悪魔がネギに向けてその巨体からこぶしを振り下ろす。

結果から言うとネギは助かった。

ネギにこぶしが振り下ろされる寸前、悪魔とネギの間に割り込んだ男がそのこぶしを止めたからだ。

その後ろ姿をネギは知らない、だが男は確かにネギを守った。

そして男は圧倒的と言わんばかりの魔法の力を持って、悪魔の軍勢を蹂躙していった。

そしてその場にいた最後の悪魔を倒したとき、ネギはその男にも恐怖を抱いてその場から逃げだしてしまった。

逃げ出して少しの間駆けていると、ネギの前に新たに一体の悪魔が現れる。

その悪魔がネギに攻撃を加えようとした瞬間、再び、今度は二人の人影が間に割って入る。

一人はスタンおじいちゃん、そしてもう一人はネカネである。

先ほどの男のように完全にネギを助けることはできず、スタンは完全に石化され、ネカネも足を石化され、その拍子に石化した足が砕けてしまった。

幸い目の前にいた悪魔はスタンが自身の完全石化と引き換えに、封魔の瓶へと閉じ込めた。

やがて先ほどの男がネギの前に現れる。

そして気絶するネカネとネギを連れて、安全な場所へと避難する。

安全な場所にやってきたが、ネギはその男の正体がわからない。だからネカネを守ろうと男の前に立ちふさがる。

だが男はネギの頭をなでると、一冊の本を差し出す。

「読めるか？」と尋ねられ、ネギは少し目を通すが、まったくその本を読むことができなかった。

ネギが首を振ると、男は残念そうに本をしまう。そして代わりにネギの前に一本の杖を差し出す。

「それならこの杖をお前にやろう、俺の形見だ」

ネギがおずおずと杖を受け取ると、目の前の男は空へと浮かび上がる。

ネギは男を見てあることを思い出す。

父はピンチに助けにきてくれるスーパーマンのような人間だ。

そして今の言葉を思い出す。

この杖をやろう、俺の形見だ。

そうして理解した、目の前の人物が自分の父であるのだということを。

だが父は2・3語言い残すと、空へと浮かび上がり、どこかへと消え去ってしまう。

結局ネギとネカネの二人だけが生き残り、その他の村人は全て石化の呪いにかかるか、悪魔に殺されるかという結果になった。

そして現在に至るまで石化の呪いは解除されておらず、あの時の村人たちはいまだに石化したままである。

ネカネも命こそ助かったが、石化し、砕けた脚は結局もとに戻らず、今は目立たないが義足をつけて生活している。

このときの事件はネギに大きく分けて二つの思いを心の奥に焼き付けた。

一つは、ネギの父、ナギ・スプリングフィールドは噂に違わぬ、いや、それ以上の立派な魔法使い(マギステル・マギ)であったということ。

そしてもう一つは、この事件で村人の大半が未だに解けぬ呪いをかけられたことによる、呪いに対しての忌避と恐怖。

そして一樹から聞かされた話、それはネギの根幹にかかわる話だった。

父は立派な魔法使い(マギステル・マギ)である、しかしその父がエヴァンジェリンさんに未だに解けぬ呪いをかけ、エヴァンジェリンさんはそれに苦しんでいるという。

立派な魔法使い(マギステル・マギ)とは呪いをかけるものではなく、むしろそれを打ち

払う存在である。今までそう考えて生きていたネギにとって、一樹から聞かされた内容は到底許容できるものではなく、その言葉を理解したくないがため、ネギの身体は気絶という形をもって活動を止めたのだ。

「お父さんとエヴァンジェリンさんのこと、一樹さんに詳しく聞かなくちゃ」

幽鬼のごとく歩き出すと、ネギは部屋の外に向かうため部屋の扉を目指す。

扉を開くとそこには見覚えのある部屋と、探し人である一樹が座っていた。

「一樹さん！」

ほとんど叫ぶように一樹の名を呼んだネギに対し、ビクッと驚いたように身体を震わす。

「あぁ、目を覚ましたんだね、ネギ君」

一樹はネギが起きてきたことに対して声をかけるが、ネギにとってはそれどころではない。

「一樹さん！　さっきのお父さんとエヴァンジェリンさんの話を「ストップ！」

捲し立てて話すネギに対し、一樹はネギを落ち着けるように瞳を合わせて声をかける。

するとネギも少し冷静さを取り戻したようだ。

「とりあえず今は現状を確認した方がいいと思うよ。とりあえず今日は平日だし、学校もあるはずだよ」

その言葉に、ネギの顔色は一瞬で青くなる。

自分がどれくらい眠っていたのか知らないが、今日も学校があるのだ。

そんな様子を見て、一樹はおかしそうに笑う。

「あぁ、安心していいよ。学校の方には体調不良ということで連絡してあるから。あとで謝罪の連絡をした方がいいと思うけどね」

一樹の言葉に安心したのか、ネギの顔色は急速に元に戻っていく。

「それからアスナちゃんたちだけど、自分たちもネギ君の看病をするって言ってたんだけど、彼女たちには学校に行ってもらって、クラスのフォローに回ってもらったよ」

それを聞いてネギは助かったと思った。

今のところ、どうしてもネギがクラスにがいないといけないというほどではない。だが彼女たちがフォローに回ってくれれば、ネギがいないことで起こるかもしれない騒動も、最小限のものになるはずだ。

「まぁネギ君のところの委員長さん、雪広さんだったっけ？　彼女が自分がネギ先生の看病に行くって騒いで、それに便乗した何人か

の生徒が騒いで大変だったってさっき連絡があったよ」

笑いながらそう話す一樹の言葉を聞き、容易に想像できるその光景にネギの表情にも自然と苦笑が浮かび上がる。

「目の前であんな倒れ方されて、アスナちゃんたちもネギ君のことが心配だと思う。それにのけ者にしたら怖そうだからね、幸い放課後まであと３０分弱、それに君のことが心配で急いでくるだろうから、あと1時間も待てば全員そろうだろう。だから話はそれからにしないかい？」

一樹の提案にネギは考え込む。

一樹の話はネギにとって咽から手が出るほど知りたい話である。だが一樹の言うように、アスナをのけ者にすると、必ず痛い目を見る。おもに自分が、肉体的な意味で・・・

「わかりました、あともう少し待つことにします」

しぶしぶとネギが承諾すると、ネギのお腹からグゥと音が鳴り響く。

あまりに恥ずかしいことにネギが慌てて弁解しようとすると、一樹は大声で笑いながら、ネギのために食事を用意しに行った。

そのあとを真っ赤な顔をしてネギが追いかけていくのは言うまでもない。

ドンっと扉が乱暴に開かれる音が聞こえたかと思うと、どたどたと廊下を走る音があとに続く。

「ネギ、あんた大丈夫なの!?」

「ネギ君大丈夫!?」

「大丈夫～ネギ先生」

アスナとこのかが真剣そうな表情でネギに問いかけたのに対し、少し遅れてきたハルナはどこか気の抜けた感じでネギに問いかけた。

「ちょっとパル！　あんな倒れ方した後だって言うのに。あんたネギのことが心配じゃないの!?」

それが癪に障ったのだろう、アスナはハルナに怒鳴りつける。

そんな風に怒鳴られたハルナは最初こそ身を引かせるが、落ち着いてアスナに反論する。

「そうはいっても、一樹さんから無事目を覚ましたって連絡があったんだからさ。そんなに怒鳴らなくてもいいでしょ」

ハルナの言うことも間違ってはいない、既に連絡があって無事だということはわかっていたのだから、心情的には正しくとも、ハルナを責める正当な理由にはならない。

「ごめん、言い過ぎた」

そのことを理解したのか、アスナもバツが悪そうに謝る。

「私は気にしないから、アスナが怒った理由が分からないでもないし」

そんなことで目くじらを立てても仕方がないので、ハルナも気にしていないとすぐにアスナのことを許す。

そう言うとハルナは一樹とネギが据わっているテーブルの前に腰掛ける。

すでにこのかは席についており、今は落ち着いて話ができるように全員分のカップを用意して、お茶の準備を整えている。

アスナもあいているところに腰掛け、お茶も準備できたところで、ついに話ができるとネギは一樹に話を促す。

「それよりネギ、あんた本当に大丈夫なの？さっきも言ったけどあんたの倒れ方尋常じゃなかったのよ」

「皆さん、心配掛けてすいません。一樹さんの話にショックを受けたのは事実ですが、気絶したのは僕の責任です。それにもう落ち着きましたし大丈夫です」

ネギのその言葉に、心配そうなアスナとこのかはそこまでいうなら
と引き下がる。

「一樹さん、朝話してくれたこと、もっと詳しく話してもらえますか？　今度は朝みたいにはならないと約束しますので・・・お願いします！」

ネギがそう頭を下げてくるので、一樹は話を始める。

「最初に断っておくけど、この話は聞いた話だから全てが事実とは限らないかもしれない。それでも構わないかい？」

「はい、お願いします！」

「それじゃあ・・・今から１４，５年ほど前になるかな、そのころはエヴァにはまだ多額の賞金がかけられていて、従者と、あぁこの従者っていうのは茶々丸のことじゃなくて、チャチャゼロっていう別の奴のことだから、まぁとにかく、その従者と世界各地を放浪してたそうなんだ」

チャチャゼロの存在を知らないネギとアスナは、首をかしげているのを見て、これは話さなくてもいい情報だったかなと一樹は内心反省する。

「そしてある時、エヴァが崖から足を滑らせて、落ちそうになった。それを助けたのがネギ君のお父さんだったんだ。まぁこれだけならネギ君のお父さんの美談の一つで済んだんだけど、そうはいかなかったんだ」

「え、どうしてですか？」

ネギは顔をキラキラさせているが、アスナは話の流れが読めないので尋ねてくる。

「エヴァには助けられる理由が分からなかったんだ。賞金首として自分の命を狙っているものは数多くいれど、自分の命を助けようとするものなんて皆無だったらしい。だからエヴァはネギ君のお父さんに助けられた理由が理解できなかったんだ」

一樹の口から放たれる言葉に、４人は理解が追いつかなかった。

助けられる理由が分からない、それはなんと悲しいことなのだろうかと。

「ネギ君のお父さんがどういう理由で助けたのかは俺には分からない、だがそれが理解できないエヴァは彼につき纏った」

そこまでいって一樹は突然思い出したように笑い出す、しかし４人は一樹がなぜ笑っているのか理解できないのでおろおろと一樹の方を見つめる。

「ちょ、一樹さん、いったいどうしたの？」

「ごめんごめん」

４人を代表してハルナがそう問いかけると、一樹は笑いながらそう謝る。

「エヴァはネギ君のお父さんにつき纏った結果・・・ネギ君のお父さんに求婚した」

球根？　吸魂？　・・・求婚！？

「「「「えぇえええええ！！！？？？」」」」

４人はあまりにぶっ飛んだ展開に、驚きのあまり叫んだ。

「ちょ、それどういう展開か詳しく！？」

ハルナが目をキラキラさせて一樹に詰め寄る、普段からラブ臭とか言ってる彼女にとって、このような話は三度のご飯より興味深いものだった。

アスナにハリセンでたたかれるまで一樹に詰め寄っていたハルナは、頭をたたかれると頭から煙を出して、アスナに元の位置に引きづられていった。

「まぁその辺の詳しい事情は俺も知らんけど、ここからがネギ君の知りたいところだ」

そう言うとネギの表情が引き締まる。ついに父が呪いをかけた話になるということだろう。

「これもネギ君のお父さんのことだから詳しくはわからない、ただある日付きまとわれることに嫌気がさしたのかもしれない。自分に向かってくるエヴァに対して、彼はエヴァンジェリンが怒りで我を忘れるほどあくどいやり方で罠を仕掛けていたらしい。それに見事はまったエヴァは、身動きが取れなくなった。そこで自分をこれ以上追ってこないようにするためと、エヴァに悪事をやめさせるために、ある呪いをかけることにした。それが登校地獄、エヴァにかけ

られた呪いだ」

「なんというか・・・」

「呪いなの、それ？」

呪いの効果が理解できないのか、あきれた表情でそういうアスナとハルナ。

「名前こそ間抜けっぽく聞こえるが、効果はかなりエグい。エヴァは学校がある日は３６５日、何時でも登校しないと呪いの効果でさまざまな効果がランダムに生じるらしい。具体的な効果は俺も多くは知らないけど、ひどいのだと身体に激痛が走り続けるらしい」

それを聞くと二人の顔もひきつった。

「それに呪いが解けないから、エヴァはもうすでに中学生生活を送るのは５回目らしい」

「「ひぃ！！」」

自分が５回も中学生をやり直すことを想像したのか、恐ろしそうに悲鳴を上げる。

「それに魔法の存在を知らない人間は、エヴァに関する記憶すら失われる。つまり前日までどんなに仲の良かった友達だったとしても、次の日にはエヴァとの記憶は一切ない、まったくの別人になり下がるんだ」

もう言葉すらでないのか、４人は絶句する。

「さらに問題なのは、ネギ君のお父さんなんだ」

「え！？」

自分の父に問題があると言われて、ネギは驚きの声を上げる。

「エヴァが言うには、彼がアンチョコを見ずに詠唱できる魔法は５，６個、それどころか魔法学校を中退したと自分から言ってたそうだ。そして登校地獄もアンチョコを見ながらかなり適当に唱えたらしい」

「えぇ！！？？」

実際はそれ以外にも魔法を行使する手段を持っていたらしいが、その内容を俺は聞いていない。

というよりエヴァは教えてくれなかった、これに関してはチャチャゼロも奇妙に笑うだけで話してはくれない。

話に聞く人物像とどんどんかけ離れていく父の姿に、ネギは衝撃を隠せない。

「エヴァいわく、彼の馬鹿魔力で強引にかけられた呪いは、エヴァはもちろん学園長でも解けない。これはもう本人以外解呪は無理な状態らしい」

そこまで聞いて、ネギはがくっと肩を落とす。

父がそんなことをしたのなら僕は襲われて当然じゃないか、むしろ僕は殺されてもおかしくないんだ。

ネガティブなことが頭の中で駆け巡るが、一樹はネギに声をかける。

「ネギ君、君のお父さんは呪いをかけたときにこう言ったそうだ。「光の中で生きてみろ、卒業するころには呪いを解きに来る」って。エヴァもそれを信じた。だから決して悪意があったとは言えないんだ・・・たぶん」

最後のたぶんという言葉は一樹がそのことに確証をもてなかったので、小声で話す。

だがそのことがネギの救いになったのか、ネギはわずかに顔を上げる。

「だけど君のお父さんが亡くなって「お父さんは生きてるんです！」・・・は？」

一樹が最後の言葉を締めくくろうとした瞬間、ネギがとんでもないことを話し始める。

「ぼ、僕6年前にお父さんに会っているんです。この杖はその時に渡されました。そのあとは消えてしまったんでわからないんですけど、あの時僕の頭に触れたお父さんの手は確かに暖かかったんです！」

ネギの口から語られる衝撃的事実、これが事実だとして、そんなことがエヴァに知られたら。

「ほぅ、坊や。面白い話をしているじゃないか」

一樹は黙って頭を抱えた。

般若のような表情で、エヴァは後ろに立っていた。

どうしてこの場にいるのか、それは自分が呼んだからだ。

ネギ君に話をして、最終的にエヴァとのことは口外しないと約束させるために。

だが一樹が指定したのはもっと後の時間、時計を見てもあと1時間は先の話だ。

その間にネギを説得して、さらに今話したことを口外しないよう（特にエヴァに）約束させてから、エヴァが来るように計画していたのだ。

そもそもはエヴァとネギの父の話はする予定じゃなかった。

だがそれを行ったのは、ネギへの1%の善意と、エヴァへの99%の悪意からである。

悪意が多すぎるというところは突っ込んではいけない。

とにかく今この状況は非常にまずい、一樹は今すぐにでもこの場から逃げ出して雲隠れしたい。

「お父さんがいたのは確かです」

ネギの言葉に、エヴァは俺の肩に手を置いて頷いている。

「そうかそうか」

ぐっと手に力を込める、魔力が封印されて外見年齢相応の身体能力しかないはずなのに、俺の骨が悲鳴を上げているのは消して気のせいではない。

「あいつ、絶対殺す」

かつて抱いた恋心など忘れ、本気でそう告げるエヴァ。

その様子にアスナ、このか、ハルナは生死不明のネギの父親に冥福を祈った。

「あの、エヴァンジェリンさん！」

「・・・なんだ」

ネギの呼びかけに、エヴァは苛立ちを隠さない。

「その、呪いは僕が必ず解いてみせます。だから！」

その言葉にエヴァはいっそ不機嫌をあらわにする。

「仮にお前が呪いを解けるとして、それは一体いつのことだ？」

「うっ！」

エヴァの問いかけにネギは答えることはできない。

「例えばお前が死ぬほどの量の血を一度に渡すなら、呪いは解除で

きるかもしれない」

「ちょ、ちょっと!?」

アスナが思わぬ言葉に待ったをかけようとするが、エヴァは言葉を続ける。

「それでも”かもしれない”なんだ、それほどあいつの呪いの力は強い。貴様が一生かけても届くかもわからない世界。貴様はそれに一生をかける覚悟があるのか?」

エヴァはそう問いかける、そんな覚悟もないならそのような軽口など叩くなとでも言わんばかりに。

「僕は・・・・・・」

ネギの言葉がつまる、やはり彼はまだ幼い。そんな人生を選択するには早すぎる。

「僕は・・・・・・やります!!」

「「「「「!!!??」」」」」

ネギのその言葉にその場にいた誰もが驚かされる。

「僕は話を聞いてエヴァンジェリンさんの呪いを解いてあげたいと思いました。それにお父さんにもどうしてももう一度会いたいんです。そうするには、エヴァンジェリンさんの言う世界に届かなければいけないんです」

ネギの覚悟を決めた表情に、皆が衝撃を隠せない。

「貴様が私の呪いを解くのは言うならば父の残した借金のようなものだ、だから貴様には呪いを解く義務がある。そして貴様はナギの馬鹿も探したいという」

義務とはいっているが、もともとエヴァにそんな思いはほとんど、とは言わないが、その考えは半分はあきらめていた。

親が優秀だからといって、その子が本当にその親と並ぶ優秀さを持つ例は限りなく低いからである。

だが現状、ネギの血以外呪いを解く方法がないため、まだ彼のことを諦めていなかったことも確かだ。

「面白い、そこまで言うなら貴様にはそう誓ってもらおうか。ただし逃げられたら面倒なんで貴様にもギアスをかけさせてもらう」

ギアスとは決められた出来事に強制力を持たせる一種の呪いである。

この場合はエヴァの元から逃げ出せないというものだろう。

ネギにもそれが自分の忌み嫌う呪いであるということは理解できているだろう。

「今この場では必要なものがそろっていない、だから本当に覚悟が決まったなら私の家を訪ねてこい」

実際今のエヴァは魔法が使えないので、やるなら別荘の中で、そしてネギに最後にもう一度考えるときを与える。

エヴァはそう言うと、踵を返そうとする。

「い、いえ、エヴァンジェリンさん！　必要なら後でもう一度誓います。僕はエヴァンジェリンさんの呪いが解けるまで、エヴァンジェリンさんの元から逃げ出したりしません！」

だがネギはそれらをすべて理解したうえで、エヴァの話に乗った。

エヴァにかけられた呪いは最低でも父の実力に追いつかなければならない。

それがどれほどつらいかことになるか、だがネギは覚悟を決めた。

ネギの言葉に、エヴァは今日初めて機嫌のよさそうに笑う。

「そうか、では貴様は呪いを解くことができるその日まで、私の犬だ」

その言葉に空気が凍った。

「そこまでの覚悟があるなら、私直々に死んだ方がましと思える鍛え方をしてやるから覚悟しておけ。そして私の言うことは絶対だ」

今度は一樹がネギに対して冥福を祈る番だった。

「（あぁ、ネギ君，もう人生詰んだな）」

こうして魔法先生兼犬、ネギ。という肩書を新たに手に入れたネギであった。

おまけ

「ネギのお父さんに求婚したり、ネギを犬にしたり、エヴァちゃんって変わってるのね」

アスナがぽつりとつぶやいたのをエヴァは聞き逃さなかった。

「ちょっとまて、貴様どうしてそのことを知っている!?」

食い殺さんばかりの勢いでアスナに詰め寄るエヴァ。

「か、一樹さんが!?」

アスナがそう言うや否やエヴァは一樹の方に振りかえる。

だが一樹はアスナがそうぽつりとつぶやいた瞬間に逃げ出していた。

「一樹！　貴様は殺す!!」

そう言ってエヴァは一樹の後を追っていった。

こうして鬼の交代はなし、そして捕まれば確実に死が待ち受けてい

る鬼ごっこがスタートしたのだった。

38話（後書き）

ネカネは足がどうなったとか全然わからんので想像で、石化して砕けたら足はもう治らないはず。

９９％の悪意、それが一樹のエヴァへの態度です。

そしてこの世界に新たに犬が誕生、もう小太郎には用がないということか！？

はたして2匹の犬の運命やいかに！？

39話

京都のある山の中、麓から何百何千もある石畳の階段を登りきったところに関西呪術協会の総本山はある。

京のこの地に関西呪術協会が置かれて以来、その建物は今もなお悠然とした姿を晒し続けている。

大広間には現在関西呪術協会に所属する大半の人間が集結しており、彼らから発せられるその雰囲気は騒然としていて、穏やかな状態ではないことが感じられる。

大広間の一番の上座に座る関西呪術協会の長である近衛詠春は、目の前で繰り広げられる光景に苛立ちを募らせながらも、その空気を振り払う一手を打ち払えずにいた。

初老と言ってもいい歳になった詠春は、かつて戦友とともに世界をかけた時のような若々しさこそ失っていたが、歳を取ることで得られたものも確かにある。

それは愛娘のこのかの存在でもあり、老練な精神に宿った冷静な判断力だ。

その詠春の冷静な精神力をもってしても、目の前の光景には呆れを通り越しいっそ笑いたくなった。

詠春から見て左側、そちらには関西呪術協会の中で穏健派と呼ばれる者たちが並んでおり、対する者たちの罵詈雑言に腹を立て相手側を罵っている。

詠春から見て右側、こちらにはいわゆる過激派と呼ばれる者たちが並んでいる。彼らは一向に後継者を決めない詠春の態度に腹を立て、さらにはそもそも詠春に関西呪術協会の長としての資格があるのかと騒いでいる。

穏健派と過激派、どちらも関西呪術協会に属する仲間同士だ。派閥こそ違えどここまで互いを罵りあうことなど滅多にあることではない。

だがその滅多が起こる原因を作ったのは他でもない彼らを治めるべき長である詠春その人なのだ。

数ヶ月前、長である詠春の口からにわかには信じがたい決定が発せられた。

それは詠春の娘であるこのかが魔法使いの道を選ぶと宣言し、それを詠春は了承したというのだ。

さらにこのかに危害を加わることの無いよう、呪術協会はこのかに接触することを一切禁じた。

しかしそれは呪術協会に対する明確な裏切りである。

このかという少女は未だ一般人という枠組みに捉えられていたが、その秘められた才能はこの場に集まる優れたどの陰陽師たちをも凌ぐと思われていた。

それを、その才能をみすみす関西呪術協会の宿敵である魔法使いの元に売り払うというのだ。

それをどうして彼らは許すことができるだろうか。

過激派の者たちは未だにこのかが魔法使いになるということを認めてはいない。

このかは一人しかいない詠春の直系の血を継ぐものなのだ、それをどうして対立する関東魔法協会の元へと送ることを認められるのだろうか。

穏健派にも同じような空気は流れてはいるが、あくまで長の決定であると黙認している。

これはこのかが後継者から外れたことで新たに後継者を選定しなければならないことから、有力者は次の長の座を自分のものに、もしくは自分の子供にその座をと狙っているからである。

結局のところ穏健派も過激派も早く詠春を長の座から引きづり下ろして、呪術協会を我が物にしたい。それを過激派は隠すこともせずに表に出し、穏健派は表には出さずともその思惑は言葉の端々に見え隠れしている。

今も詠春の前では終わりの見えぬ両者の罵り合いが繰り広げられている。

詠春は剣士としては世界を救う救世主の一員だったかもしれない。

しかし目の前の彼らを一つにまとめ上げる、ひいては一つの組織を運営していく政治力は剣の腕ほどのものはなかった。

「（このかを後継者を外すことでこんなにもまとまりが無くなってしまうとは）」

頭を抱えながら呪術協会の現状に嫌気がさす詠春であった。

「イヌ、飲み物を持ってこい」

部屋のソファでだらけながら読書をしているエヴァが不意にそう声をかける。普段なら茶々丸に頼むその仕事を、エヴァはイヌという人物にその仕事を任せる。

「はい！」

イヌと呼ばれた人物は素早い動きでキッチンに向かい飲み物を取りに走っていったかと思うと、それから３０秒と経たぬうちにアイスティーを運んできた。

イヌから飲み物を受け取ると、エヴァは再び読書に没頭する。

そしてイヌもエヴァの読書の邪魔にならぬよう静かに所定の位置へ

と帰っていく。

その光景を傍から見ていたアスナはイヌ一正式名称ネギ・スプリングフィールド一に憐みの視線を向ける。

ネギとエヴァは先日までネギの一方的な誤解で決闘にまで発展する対立状態であった。その後一樹からネギを襲った犯人がエヴァではないこと、さらには過去にネギの父であるナギ・スプリングフィールドの魔法によって15年間もエヴァがこの地に縛られていることを知ったネギは、エヴァに謝罪を告げるとともに彼を父がかけた呪いを解くべくエヴァのもとで魔法の勉強中なのである。

ただしエヴァはまだネギを正式な弟子とは認めておらず、現状ではイヌ扱いである。

「ネギ、あんた魔法の修行はどうしたのよ」

用事でこの場に来るのが遅れていたアスナは、自分より先にこの場に来ているネギが修行も行わず給仕のような仕事をさせられていることに疑問の声を上げる。

「貴様はこいつの従者だろう、それならまとめて鍛えた方が手っ取りやすいだろうが」

今まで読んでいた本を机の上に置きながら、エヴァは呆れた顔でアスナを見つめる。

エヴァの蔑む視線にアスナはたじろぎながらも、しかし遅れたのは自分であるので文句は言えない。

内から湧き出てくる怒りの感情を歯を噛みしめることで我慢しながら、精いっぱいの作り笑顔で謝罪の言葉を述べる。

「口より先に身体を動かせ」

それだけ言うとエヴァは何も言わずに家の奥へと足を進め、ネギもそのあとに続く。

身体を震わせるほどの怒りは今にも決壊しそうである、しかしそれを何とかこらえながらアスナも二人の後を追っていった。

アスナが家の奥に進むとそこには家の地下へと向かう階段があり、そのほかには何もない。

ネギたちの姿もないことからこの階段を下りたのであろう、アスナも階段を下りる。

「神楽坂アスナ、坊やは先に入っている。貴様もこの前に立て」

アスナの到着を待っていたエヴァはめんどくさそうにそう告げる、これ以上エヴァの機嫌を損ねると己の怒りも爆発しかねない。

アスナは黙ってその言葉に従うと、次の瞬間、世界は変化する。

「うわ！」

ボトルシップなようなものの前に立ったと思えば、見たこともない場所に立っている。

突然のことにアスナは辺りを見回すがそこはやはり自分の知る場所

ではなかった。

「あ、アスナやっと来た。こっちこっち！！」

アスナが声の聞こえるほうに目を向けると、そこにはクラスメイトである早乙女ハルナがこちらに手を振りながら呼びかけている。

なぜこの場所にハルナがいるのか、そもそもここはどこなのか。

様々な疑問を頭に浮かべながらもまずは唯一の手掛かりになるハルナと接触するのが得策であろう。

「ちょっと、ここっていったいどこなのよ。私さっきまでエヴァちゃんの家の中にいたじゃない」

ハルナの元に駆け寄ると、アスナは当然の疑問を口に述べる。

だがアスナの期待していた答えは返ってこず、ハルナはアスナを面白いものを見るかのような様子で笑っている。

「うんうん、やっぱそうなるよね。私も初めて来たときは同じことを聞いたよ」

自らの同士とでも言わんばかりにアスナの肩に手を置くハルナ。

だが何の事だか分らぬアスナの頭は混乱が増すばかりで若干の苛立ちを覚える。

「ここは一応エヴァちゃん家の中、私たちはここに来る前に置いてあった魔法球の中にいるんだって」

ハルナは己が伝聞した内容をそのままアスナに伝える。
要約自分の求めていた回答を得ることができたが、しかしアスナは細かい部分は理解できていないようで頭の上に？マークを浮かべている。

「とりあえずは不思議空間の中にいると思っておけばいいよ、私もそれで納得したし」

自分も細かいことはわかっていないのだ、とハルナがそういうのでアスナもそれ以上悩むのをやめる。

「とりあえず皆がいるところまで案内するわね」

ハルナはそういうと仮契約カードを取り出す。

皆ということはネギ以外の人物がアスナのことを待っているのだろうか。

「そう言えば私より先に来てたネギの姿がないんだけど、あいつは何処いったの？」

アスナはひとまず自分より先に来ているはずのネギの姿がないことに疑問を持った。

「ネギ君ならアスナが来る３０分も前にこのかが先に連れてったわ。あぁ、言いたいことはだいたいわかってるって、それは案内しながら説明するからとりあえず先を急ぎましょ」

アスナの疑問を封じると、ハルナは自分のアーティファクトを召喚する。

「落書帝国（インペリウム・グラフィケース）！！」

ハルナの手には羽根ペンとスケッチブックが、頭にはベレー帽が、そして身体にはエプロンが現れる。

アスナは始めてみる他人のアーティファクトを興味深そうに眺めているが、ハルナはそんなことなどお構いなしに鼻歌交じりにスケッチブックに何かを描いている。

書き始めて１０秒もたたなかっただろう。そのわずかな時間で書きあがったものは、隣で見ていたアスナにはなぜいまこんなものを書きあげるのか理解が追いつかなかった。

「紙飛行機～！」

ハルナがその名を告げると、二人の前に巨大な紙飛行機が現れる。そのサイズは二人を上に乗せてもなお余裕があるだろう。

目の前に先ほど描いた絵が現れたことに驚くアスナを尻目にハルナは現れた紙飛行機に近づいていく。

「さ、アスナも早く乗った乗った！」

ハルナはさっさと紙飛行機の上に乗り込むと、アスナにそう声をかける。

だがアスナは目の前の紙飛行機でのフライトなど恐怖心しか湧いて

こない。

「無理無理無理、これ絶対に危ないって」

アスナは後ずさりながら首を横に振って拒否の姿勢を示すが、ハルナはそんなアスナなどお構いなしだ。

「もう、大丈夫だってば！」

そう言ってアスナの手をつかむと、強引にアスナを紙飛行機の上に乗せる。

「ちょ！」

アスナの抗議の声が上がる前に、紙飛行機は宙に浮かぶ。

「それじゃあ出発ー！」

軽快なハルナの掛け声とともに、紙飛行機は地面がはるか底にある空中へと飛び出した。

「い～や～！！」

アスナの絶叫は無残にも宙に響き渡るのであった。

「もういや、ハルナの言うことなんて絶対信用しない」

「ごめんってアスナ～いい加減機嫌直してよ」

つい先ほどまで絶叫フライトを経験させられたアスナは地上にたどり着くと一目散にハルナの元を離れ、一人隅の方でいじけている。

それも当然だろう、自分の意志など関係なしに命の危険にさらされる体験をさせられたのだ。

そんなことがあったのだ、アスナが怒るのも無理はないだろう。

アスナのその様子にさすがのハルナも罪悪感が芽生え謝罪をしているのだが、今のアスナにはとりつく島もない。

困った様子のハルナは周りを見渡して助けを求めるが、その場にいる者は自然とハルナの視線が重ならぬようにそっぽを向いた。

そんな中わずかに顔をそらすのが遅れハルナと目があった一樹のもとに、ハルナは急いで近づいていくと、自分ではどうしようもないとアスナの機嫌を取るよう懇願する。

このままアスナが臍を曲げたままでは話すら始められない。

一樹は一つ大きくため息をつくと、こちらに背を向けているアスナに近づいていくとアスナと同じ目線になるようにしゃがみ込む。

「アスナちゃん、そうしている理由もわかるけどそのままじゃネギ君への話も始められないからとりあえず機嫌を直してくれない。あの馬鹿にもあとでちゃんとお灸をすえておくからさ」

一樹の言葉にアスナもしぶしぶ状況を理解したのか、両手で顔を叩くと無言で皆の待つ方に近づいてくる。

その場には一樹、アスナ、ハルナのほかにネギ、このか、刹那の3人がいた。

その中にアスナが加わると、ようやく一樹は話を始めることができた。

「それじゃあアスナちゃんも来たことだし、話を始めよう」

そう一樹が告げると、ネギはさっと手を上げる。

この場には本来居るべき人物があと一人足りないのだ。

「あのー、エヴァンジェリンさんがまだ来てないんですが」

一応は自分の師匠となる人間なのだ、その人物が不在で話を始めていいのかという疑問に思っている。

一樹はエヴァがこの場にいない理由を知っている。そしてそれがどうしようもないつまらない理由であるということも。

「まだしばらくはエヴァはここに来ない、なんでも今読んでる本が予想外に面白いそうでそっちを優先するそうだ」

一樹のその説明にネギとアスナはがくっと体勢を崩す。

当然だろう、師匠が弟子の修行の場に現れない。それもとてもばかげた理由で。

「なによそれー！」

アスナは思わず叫び声をあげるが、エヴァは言ったら絶対だ。恐らくここに入ってくる前に読んでいた本を読み終えるまではこの場に現れないだろう。

「ネギ君には説明したと思うけど、この中は時間軸が外と異なる。アスナちゃんはネギ君のすぐあとに入ってきたんだろうけど、実際にはネギ君がこっちに来てからアスナちゃんが来るまで３０分以上たってる。まぁこれは追々理解すればいいから今は省略する」

これ以上は今は話しても無駄であると判断して一樹は本題へと移る。

「とりあえずエヴァが来るまでは俺が二人の修行を見ることになった。とりあえず二人の今の実力が見たいから俺と模擬戦をしたいと思う。一切遠慮はいらないからね。俺の方は準備ができてるから二人の用意ができたら早速始めよう」

一樹はそれだけ言うとさっさとその場を離れて行ってしまう。

実際には「私が行くまで適当に相手をしてろ」としか言われていない。

にもかかわらず一樹がこうして二人の修行を見るのはあくまでも一樹の好意からである。

その理由はネギの覚悟を聞いたからだ。

ネギはエヴァの呪いを解くために今後の人生をかけるとまで誓ったのだ。

その覚悟を聞き、一樹はネギへの評価を大幅に修正し、一時はかかわるのすら控えようと思っていた考えを改めた。

「ちょっと、一樹さんと戦うって大丈夫なの？」

「いえ、僕も正直一樹さんの実力が解からないんでわかりません」

アスナの問いかけにネギも困惑した表情で答える。

二人は一樹がどのような魔法を使うのか、そもそもどれほどの実力者なのか全く知らない。

だから疑問に思うのも当然と言えば当然であろう。

「二人が何を心配してるかはわかりますが、その心配は無用です。恐らく今のお二人では一樹さんに手も足も出ないと思います」

そんな二人の考えを打ち払うかのように表情を一切変えずに刹那がそう二人に告げる。

その言葉にネギはわずかに表情をむっとさせるが、このかやハルナ

も刹那の言葉を肯定するようにうなづいている。

この場にいる人間、ネギとアスナ以外は一樹がどんな魔法を使い、どれほどの実力の持ち主であるかということを理解している。

彼女たちの認識での一樹の実力と目の前にいるネギとアスナ二人を合わせた実力を比べて、どちらに天秤が傾くかは言うまでもない。

「ネギ先生とエヴァンジェリンさんを言葉で比較するなら別格という言葉が当てはまるでしょう。文字通り現状では格が違う、別次元の相手ということです。しかし一樹さんはエヴァンジェリンさん程の実力はありません。ですが魔法使いと一樹さんを言葉で比較すると、これも別次元なんです。文字通り次元が違います。油断していたら本当に一撃で終わりますよ」

魔本を持つ一樹は通常の魔法使いとは別の次元で魔法を行使していると言っても過言ではない。

だが刹那の言葉は、魔本のことを知らない今のネギたちにはよく理解できない内容だった。

しかしその言葉の意味をすぐに二人は知ることとなる。

ネギは父から譲り受けた杖を手に取り、アスナも己のアーティファクトであるハリセンを召喚する。

一樹は魔本を取り出しているが、その様子は隙だらけだ。

あえて隙を見せることでネギたちの方から仕掛けてくるよう誘導している。

「何時でも始めていいぞ！」

一樹の声を聞き、二人は顔を見合わせるとネギはアスナに魔力を供給する。

ネギの魔力で身体能力が強化されたアスナは猛然と一樹へと向かっていき、その様子を後ろで確認しながらネギもすぐに呪文を唱え始める。

アスナが前衛でネギが後衛として役割を分ける。それはオーソドックスな戦法で、しかし一番理にかなったものでもある。

「たぁあーー！！」

一瞬のうちに一樹との距離を詰めたアスナは一刀のもとに断ち切らんとばかりにハリセンを頭上から振り下ろす。しかし何のフェイントもない、単純なその一撃は一樹にとってかわすのに何ら苦労もなかった。

すっと片足を下げ、半身の体勢をとるだけでアスナの一撃はかわされる。更に足をかけられるというおまけつきで。

冷静な一樹の対応は、しかしアスナには一樹が突然視界から消えたように見えた。

「うわたたたたー！」

突っ込んだ勢いそのままに足をかけられたアスナは何とか体勢を整えようと頑張るが、結局盛大に転んでしまった。

思いっきり顔から突っ込んでいき、一樹はわずかに罪悪感が生じる。

顔は女の命なのだ、それに傷をつけたならいくら戦闘中といえど一般良識のある一樹が罪悪感を抱かないはずがない。

実際はネギの魔力供給のおかげで体も頑丈になっているので傷一つついていないのでそれは一樹の取り越し苦労に終わるのだが・・・

しかし戦闘はまだ続いている、一樹が今戦っているのはアスナ一人だけではない。

アスナにはパートナーがいるのだ。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾光の１７矢！」

ネギは魔法の射手を一樹に向けて飛ばしてくる。一樹を狙う１７本の光の矢を、それすら一樹は魔法を使わず己の身体能力だけでかわしきってしまう。

「そんな！」

その様子にネギは驚きながらも、すぐに戦闘中であることを思い出して新たな呪文を詠唱し始める。

だが一樹は軽い失望感を覚えていた。二人の連携は拙いもので、今の戦闘も１対２というよりも１対１を２回繰り返したようなものだ。

「はぁ、これじゃあ意味がない。一度終わらせるか」

一樹は戦闘中という緊張感を一切感じさせない様子でそう呟く。

一樹は魔本を開くと、再び接近してこようとしているアスナの方に手を向ける。

「レイス！」

一樹の手から射出された重力球はまっすぐかけてくるアスナに一直線に向かっていく。

高速でアスナのもとめがけて飛ぶ重力球に、アスナは焦りから回避という選択肢を捨て去ってしまう。

「ちょ、ま！」

回避する間もなく重力球を喰らったアスナはそのまま吹き飛ばされた。

その様子を後ろから見ていたネギは思わずアスナの身を心配してしまう。

「アスナさん！？」

それまで詠唱していた呪文を放棄して、倒されてしまったアスナの名を叫ぶネギ。

だがそれは今の状況で一番やってはいけない悪手だ。

「はぁ、もう１つ矯正するところがあったか」

溜息を吐きながら一樹は魔本を閉じてネギに接近していく。

今のネギは魔法一つ使う魔力すら惜しいことをしたのだ、その制裁は自らのこぶしでやらないと気が済まない。

一樹の接近に動顛したネギはとっさに行動に移る。

「あ！魔法の射手（サギタ・マギカ）、光の５矢！」

ネギは慌てて現状無詠唱で唱えることのできる最大数の魔法の射手を放つ。

とっさの判断は悪くないが、それすらも一樹は想定していた。

自らに迫る５本の光の矢を一樹は小刻みに進み方を変えることで簡単にかわしてしまう。

今のネギの魔法の矢はただ飛んでくるだけなのだ、一つ一つには何の意味もないそれはかわすのに何の苦労もない。

そしてネギの眼前まで近づいた一樹はネギの頭に拳骨を落とした。

ネギは想像以上の拳骨に頭の上に星を飛ばしているが、これは一樹なりの優しさだ。

これがエヴァなら容赦なく鳩尾を殴りつけ、ネギはおそらく胃の中のものを全部吐き出すことになっていただろう。

数十秒も経たぬうちに気を取り戻したネギとアスナに一樹は声をかける。

「これで二人とも本当の戦闘なら死亡、ということで戦闘は終わり。反省会に移ろう」

頭の抑えるネギとお腹をさすっているアスナを一か所に集めると、一樹は早速今の反省会を始めようとする。

その光景を傍から見ていた3人は今の戦闘の感想を述べていた。

「一樹さんわざと魔本を使いませんでしたね」

「二人の動きを見て使う必要がないと思ったんやないの？」

「案外桜咲さんの言葉を聞いて、あえて使わなかったのかもよ」

実際はこのかやハルナの言うとおり、今の二人相手に使う必要性を感じなかったし、あえてアスナへの一発以外は使わなかった。

「まずアスナちゃん、思い切りはいいけど動きが単純すぎる。動きが一直線だからはっきり言って避けるのに何の苦労もないし、さっきみたいに俺にすぐに魔法を当てられる。今のままじゃはっきり言ってただの動く的だよ」

一樹の言葉にアスナは想像以上に自分の未熟さを思い知らされて顔を下に向ける。

「当面の目標は身体の運び方、はっきりいってこう言うのは俺の専門外だからこれは同じ前衛である刹那ちゃんに任せよう。刹那ちゃん任せてもいいよね」

「はい」

一樹の言葉に刹那はすぐに承諾する。

「アスナちゃんは筋がいいから今は刹那ちゃんの動き方や考え方を見て学べばどんどん強くなれる。だから気を落とさず、今できることを一つ一つ始めて行こう」

フォローのつもりで一樹が声をかけると、元気なさげに俯いていたアスナもその言葉に元気を取り戻す。

もともとアスナは失敗をくよくよするよりも気持ちを切り替えて前に進むタイプなのだ。

アスナの様子に一安心すると、一樹はネギの方に向き直る。

「次はネギ君、魔法のコントロールが甘い。魔法の射手は牽制のための魔法なのかい？」

「いえ、違います」

魔法の射手は魔法使いならだれでも使えるがゆえにあまり重要視されてはいない。

その技術を磨くよりももっと高位の魔法を覚える方が威力も高いし、何より高位の魔法を使えるということは一つのステータスなのだ。

だからと言ってないがしろにすると今回のネギのような何の工夫もないものになる。

もっとも魔法の射手に追尾の術式を加えるなど逃げ道は存在するが、今は置いておこう。

「それならもっとコントロールできる技術がないと、さっきみたいに全弾回避されて接近される。それにアスナちゃんがやられたとき詠唱を中断したね、これは絶対にやっちゃいけない」

魔法の詠唱を中断するなどもってのほかだ、いくらなんでもこれは同じ魔法使いとして見過ごせない。

一樹の言葉にネギはみるみる落ち込んでいく。

しかし一樹はネギにはなにもアドバイスもフォローも与えない。

それはネギはアスナとはちがい、むしろ自分の中で考えさせてこそ伸びると考えたからだ。

「最後に、俺は遠慮するなといった。でも二人は最初から全力でかかって来てなかった。どうしてだい？」

一樹はあくまで二人に優しく問いかける。

「その、まずは様子を見てからと思いまして・・・」

ネギはおずおずと自らの考えを答える。

その答えを聞き、一樹はそれを否定しようとはしなかった。

「それは間違いではない、実際戦闘ではペースを考えないと後が辛くなる。でも今みたいに何もできないまま終わるということもある。

負けた時、自分がまだ全力じゃなかったと言い訳することなんてできないんだ」

最初からクライマックスの状態で戦うものなど一人もいないだろう、先のことを考えていくつもの手を残しておくのは悪い選択ではない。だが今回のように様子見が裏手に出た場合、言い訳などできないのだ。

一樹の言葉にネギとアスナは何も言い返せない、彼らにはそれに反論するだけの経験もなかった。

「まぁ説教じみたことを言ってるけど、それは裏を返せば二人ともまだまだ伸びる要素はあるっていうことなんだ。ここで腐らずに次の機会で見返そうという気概でいてほしいな」

まさかそんな言葉をかけられるとは思っていなかったのだろう、二人は顔を上げると、嬉しそうに声を上げる。

「「はい！」」

「それじゃあネギ君はこのかちゃんに魔力のコントロールを教えてもらって」

魔力のコントロールが上手くなればそれだけ無駄な魔力の消費を抑えることができ、もっと言えば魔法の使い方も上手くなれる。

「頑張ろうなネギ君」

「はい！」

このかがネギを励ますように声をかけると、ネギも元気いっぱい返事を返す。

これでネギとアスナそれぞれにやることが決まった。

連携についてはもう少しお互いの実力が延びてからでも遅くはない。

できることが増えればそれだけ二人が取れる連携の幅も広くなるのだ。

それを先にするか後に取っておくか、それだけの違いだ。

「ふふーん、私は特にすることもないみたいなんで上でのんびりとさせてもらおうかな～」

一人仕事も与えられず、することがないハルナは上機嫌で上にあるリラクゼーションルームに向かおうとする。

そんなハルナの肩を一樹は掴む。

「ハルナは俺と一緒にアーティファクトを使いこなす練習だな。それにさっきのお仕置きの件も済んでいないから、これは無理ゲーレベルで頑張ってもらおうかな」

一樹は悪魔のような笑みでハルナに笑いかける。

後にハルナは証言した。

「やっぱり一樹さんを怒らせちゃいけない」

その後、刹那やこのかに指導を受けるアスナとネギの耳にも、何度もハルナの叫び声が聞こえてきた。

結局、この日一番悲鳴を上げたのはハルナだったのかもしれない。

39話（後書き）

更新が遅くなって申し訳ないです。
なかなか長時間文章を書く時間が取れなくて3か月も放置してしまいました。
作者の目標では今年中に京都編は終わらせたかったんですが、現状では不可能に近いです。
話の大筋は考えているんですが時間が足りない・・・
とりあえず今月の目標として京都編に入る直前までは書き上げたいと思います。
ですがあくまでも目標なので、作者の予定次第ではその時間すら取れないかもしれません。
鈍重なマイペース更新なのをお許しください。

40話

ネギ・スプリングフィールドがエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルのもとに弟子入り？してから数日、麻帆良学園女子中等部3-Aの教室はいつもの騒がしさにさらに輪をかけて騒がしかった。

担任のネギがその騒がしさに慌てて静かにするよう注意の声を上げるが、そんなネギの声も聞こえないほどまでに興奮状態である。

その理由はもうすでに1週間を切った修学旅行への期待からである。

基本的に全国どの学校でも修学旅行という行事は存在している。まれにそんな物のなど存在しない学校があるらしいが、麻帆良学園はその大多数の例にもれず修学旅行が予定されている。

普段教室に缶詰めにされて勉強の毎日を送る生徒たちにとっては、校外で勉強もせずに遊ぶことのできる、そして学生生活最大の思い出として残ることになるだろう行事の一つだ。

これに盛り上がらない3-Aの生徒たちであろうか、いや、ない。

さらに麻帆良学園は修学旅行の行き先を、数ある候補の中から生徒たち自身で好きに選択できるという少し特殊な方式を取っている。

これはさすがに多数決で行き先を決めるため全員の希望をかなえることはできないが、このクラスにはなぜか海外からの留学生が多いこと、そして担任であるネギ自身が外国人であるという理由から、クラスの総意として京都・奈良が修学旅行の地として選ばれた。

「京都！　京都！」

「奈良！　奈良！」

鳴滝姉妹がネギの周りを駆けながら喜びを表現すると、ネギも一緒になってその決定を喜んでいる。

「皆さーん、修学旅行まであと数日です。準備はできていますかー！？」

問いかけている自分はここ数日忙しすぎて何ら準備など行っていない。

にもかかわらず生徒たちにそう問いかけるネギ、実際彼も京都という地にはとても興味を持っており、なんだかんだで楽しみにしているのだ。

「「「「はーい！！」」」」

ネギの問いかけに対し元気よく答える３－Ａの生徒たち、だが彼女たちの中で本当に準備が整っているのは半数にも満たない。

彼女たちもテンションの高さから適当に返事をしているだけなのだ。

仲の良いもの同士で固まってそれぞれ修学旅行の地でどのような行動を取るべきか計画を立てているもの。

テンションが上がりすぎて、もはや上手く思考回路が機能してないもの。

そんな彼女たちをやや冷めて目で見ているネットアイドルや変な飲み物愛好者。

そんな中、この修学旅行に並々ならぬ思いを抱いている生徒が一人。

クラスの一番後ろに陣取り、小柄な体からは考えられないような不遜で大きな態度を取る幼女。

もちろんエヴァンジェリンである。

彼女は15年前、ネギの父、ナギ・スプリングフィールドにでたらめで力任せな呪いをかけられて以来ずっと麻帆良学園で中学生を続けており、学校をさぼることもかなわず（授業はボイコット状態であるが）、麻帆良学園の外に一歩も出られない生活を強制させられてきた。

そんな彼女の600年という遥かに長い生の中でも最大といっていいチャンスが巡ってきたのである。

それが鴨が背負ってきた”ネギ”の存在である。

ナギ・スプリングフィールドの直系の血をひくこの世にただ一人しかいない人物。

彼を襲わないことを条件に学園長から呪いの改変の約束を取り付け、勝手に向こうから襲ってきたネギを返り討ちにしたうえ、自分の呪いを解くと言っているのだ。

今現在のネギにナギの呪いを解くことなどたとえ世界が消滅の危機に瀕してもありえないだろう。

この世界はマンガの世界じゃないのだ、何の前触れもなく突然都合よくネギがレベルアップするはずがない。

だが今ここには二つの最高の素材がある。

学園長とエヴァンジェリン、世界最強クラスの魔法使いが二人。

そしてナギの血を半分引いているネギの血。

この二つがそろっていればたとえ呪いの完全解呪は叶わなくとも、確実にその効果を緩和させるに至るはずだ。

それが叶えばエヴァが長年夢見てきたあこがれの京都の地に赴くことができる。

そのためここ数日茶々丸は旅行のためにエヴァと自分の旅行用の荷物を準備するために東奔西走中であり、先日ネギが犬のようにエヴァの身の回りのことをしていたのは茶々丸が不在だったからである。

なにしろこの地に封印されてから初めての学外旅行、エヴァのこの旅行にかける思いは3-Aのどの生徒にも負けるものではなく、その並々ならぬ執念は今も体からにじみ出ている。

そして今日の放課後、ついに呪いの改変が行われるのだ。

エヴァはこの日に備え己ができる万全の準備を整え、またそれを学園長にも強要し（そのおかげで学園長はここ数日体力の温存といって学園の仕事を半ば投げ出しており、これが本人の意思によるものか、強制されているかは不明である）、ネギにも別荘の中で一日完

全に休ませた状態でこの日を迎えている。

まさにエヴァは本気だ、これで呪いが改変できず外に出ることができなかったら学園長室が見るも無残な姿に変化するだろう。

放課後まではまだ数時間以上残っている。

時よ早く過ぎよとばかりに時計を睨みつけながら、その時を今か今かと待ち続けるエヴァなのであった。

「ということはこのかのいる3‐Aの修学旅行の行き先を京都にするのは控えた方がいい、というのが婿殿の意見なのじゃな？」

女子中等部にある学園長室で、麻帆良学園の学園長である近衛　近右衛門は遠く京都の地にいる自らの親族、近衛　詠春と電話で話をしていた。

3‐Aの修学旅行先はクラス会で決まったように京都・奈良方面ということで学園側も了承していた。

しかし学園長が義理の息子である詠春に電話をしてまで、3‐Aの修学旅行先を懸念している理由がある。

それは詠春が長を務めている関西呪術協会という組織の存在があるからだ。

「はい・・・私が至らぬばかりにお義父さんに余計な負担をかけてしまうことになってしまって申し訳ない」

電話越しに聞こえてくる詠春の声は暗く、申し訳なさそうな態度が声だけで近右衛門にも伝わってくる。

先日このかを後継者から外し魔法使いになる道を認めたことで、関西呪術協会はもはや詠春一人では抑えきれぬまでに混乱している。

本来詠春は一介の剣士、それがたまたま並みの人間では到達できない、天才の中でもさらに一握りの剣の才能、その腕で築いた実績、そして関西呪術協会の重鎮「近衛」家に婿養子として入籍するなど、様々な偶然が重なりあった上に今の地位がある。

しかし彼には組織をまとめ上げる才能は人並みかそれよりも少し上程度、現状を打破するほどの力量は持ち合わせていなかった。

「全てが婿殿のせいというわけじゃない、非はこちらにもある。とは言え今から行き先を変更するにものぅ」

学園長は困った様子で髭をさすっている。その様子は他人から見れば本当に困っているのかと尋ねられかねない。

修学旅行の行き先の変更、そのためには現在は調整も終わっている京都・奈良方面の宿泊施設、観光会社、その他各所にキャンセルを伝え、代わりに新たな目的地で必要な施設各所に予約を入れなければならない。

だが修学旅行はすでに来週に控えている、それを今から調整するのは極めて難しい。

さらに3‐Aの次の希望先はハワイなのだ。

国外を出るとなってはもはや修学旅行当日までに全てを終わらせるのは不可能だろう。

それにパスポートの問題もある、目的地が国内に決まった時点でパスポートの取得を諦めた生徒もいるのだ。それを今からでは申請を出しても間に合わない。

学園長としてはせめてもう少し早く関西呪術協会の現情を知れば対応ができたのだが、自らの娘を任せた義理の息子を信頼したのが仇となった。

だが学園長は詠春を責められない、関西呪術協会の長である詠春を関東魔法協会の自分が叱責したという事実は、麻帆良に恨みを持つ者たちにとっては恰好の餌なのだ。

義理の親子という間柄をなかったものにする今の二人の立場と重責。

学園長は考える。

すでに3‐Aの生徒たちは京都に行くことを前提に計画を立て、それを楽しみに過ごしている生徒たちがたくさんいるのだ。それを学園長の一独断で変更するのは忍びない。

だが何の策も持たぬまま3‐Aを京都に向かわせれば、このかはも

ちろん他の生徒にも危害が及ぶだろう。

魔法先生を数名護衛につける、しかしそれでは余計に呪術協会の者に刺激を与えることになりかねない。

「そちらでこのかが修学旅行に行くとはすでに知られておるのかの？」

学園長が問いかけると詠春はそれを肯定した。

それは呪術協会に所属する何者かがこのかに接触、最悪拉致される可能性が懸念される。いや、可能性というよりは確実にあると言った方がいいだろう。

このかに接触しようとする者たちが無視できないほどの何か、それを用意してはどうだろうか。

だがそんな都合のよく何かは思いつくものでも現れるものでもない。

だが学園長には一つだけ思いついた策があった。しかしそれはある意味それを行うものにかなりの危険が伴う。

「婿殿、関西呪術協会の何者かがこのかを狙うように動くとして、最大何人の人間が動くと思われる？」

この人数次第では学園長の策は実行可能かが決まる。あまりにも多すぎれば危険が大きくなる。

「そうですね・・・その期間中最大限に各地の仕事を割り振っても私の管轄で収まりきらないところがあるので、１５いや２０、バッ

クアップも含めるとすると最大３０名近くは私の権限でも動かしきれないと思います」

関西呪術協会の長である詠春といえど、それぞれの派閥が抱える子飼いの構成員の数までは正確に把握しきれていない。

詠春の名で最大限使って京都の地から離れさせても、やりくりできないところが出てくる。

とは言ってもこのかを狙うために動くのはあくまでも少数だろう、それを考えれば最大３０という数字は中らずと雖も遠からずだろう。

「３０・・・か」

学園長は黙して己の考えを纏め、そして決断する。

「婿殿、いや関東魔法協会の長として関西呪術協会の長に対して正式に通達する」

学園長が決めた決断、そして学園長が魔法協会の名を出してまで詠春に伝えた内容とは・・・

放課後、学園長室には多くの人間が集まっていた。

部屋の主、学園長の他には、今日の主役でありこの時間を今か今かと待ちわびていた吸血鬼の少女、エヴァンジェリン。

そしてエヴァの従者で自身はガイノイドである絡繰　茶々丸。

かつてエヴァに勝負を挑まれそれを返り討ちにし、この地に縛り付けたナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールド。

本来は呼ばれていなかったが学園長直々の呼び出しでこの場に来ることになった魔法生徒、松井　一樹。

その他エヴァや他の人間から話を聞いて興味本位にこの場にやってきたこのか、刹那、ハルナにアスナ。

つまりはここ最近でエヴァとネギの諍いに何らかの形で関わりをもったメンバーである。

その他にはエヴァの呪いを解くことに反対する魔法先生や生徒が先ほどまでいたのだが、このことに関しては学園長が己の職責をかけると言って無理やり退出させた。

これから神経を使う儀式を始めるのだ、その時とやかく五月蝿い人間がいるのは集中が途切れて邪魔になる。

エヴァは今か今かと足を小刻みに動かしてイライラをごまかしている。そんなエヴァを茶々丸は甲斐甲斐しく世話し、他の人間はその場で邪魔にならぬよう思い思いに会話している。

「おいジジイ、まだ始めないのか！？」

我慢の限界に達したのか、エヴァは座っていたソファから立ち上がり学園長にそう問いかける。

それも無理はないだろう、エヴァはこの時を１５年間、少なくともナギが戻ってくると約束した１２年前からは一日もこの時が来ることを願わなかった日はなかった。

その時がついに目前まで迫っているのだ、文句を言うなという方が無理であろう。

「すまん、待たせたのエヴァ。準備も整ったところじゃし始めようか」

学園長は部屋の片隅に用意していた魔法陣の上にエヴァを誘導すると、その言葉に従いエヴァはその上に立つ。

この魔法陣は登校地獄という魔法を解析し、学園長が時間をかけて練りに練った上で書かれたエヴァに強引にかけられた呪いに対抗するための魔法陣である。

「ネギ君、お願いできるかの」

学園長がネギに声をかける、するとネギは頷いて魔法陣に近づいていく。

用意されていたナイフで指先に切り傷をつける、その光景を周りで眺める女性陣はやはり好ましくない状況なのか顔をそむける。

好き好んで自分の身体に傷をつける光景を見る者などいないだろうから、当然と言えばそれまでではある。

ツゥとネギの指にできた切り傷から血が流れ、重力に従ってポタポタと魔法陣の上に落ちていく。

「それぐらいでよいぞ」

必要量は十分に得られたのであろう、学園長はネギにそう告げるとネギも傷口を抑えながら魔法陣のそばから離れていく。

「ネギ君、こっち」

このかは自らの杖を取り出して回復の呪文を唱える、するとネギの指にできた切り傷は見る見るうちに塞がっていき、数瞬後には傷の後もなくなっていた。

回復系の魔法があまり得意ではないネギも、そもそもが魔法とのかかわりがなかったアスナやハルナはその様子を興味深げにまじまじと眺めていた。

「エヴァ、最終的な確認をしておく。これは重要なことじゃからの」

学園長の問いかけにエヴァも不承不承に頷いた。

「お主にかけられている魔法は学園に縛りつづけるものじゃ、それをエヴァが一時的になら麻帆良の外に出られるように改変する。それからもうお主も知っとる通りお主の魔力を抑えている結界も外では無効となる。そのため学園外にいる間は別個お主に魔力を封じる呪いが掛かるよう設定する。これはいくつかの手順を踏めば限定的

に解除できるようになるが、時間がたてば再び魔力は封じられる。これればかりはいくらお主が不服を述べようとも決定したことじゃ」

「だったら言うなボケが」

そんなことよりも早く始めろと言わんばかりの態度で、エヴァの発した冷たい一言に学園長はショックを受けながらも話を続ける。

「お主はあくまでも外では一般の中学生として扱われるじゃ、それを念頭に行動するんじゃぞ」

外見年齢はそれ以下にしか見えないのだ、それが飲酒、夜間徘徊、その他色々なことをやりかねないとなれば学園長も念を押す。

「当たり前だろそん「絶対に飲酒禁止じゃぞ！」・・・わかった」

隠れて飲むつもりだったのだろう、エヴァの態度はそれをありありと語っている。

「飲んだことが判明したら今後外出許可は出さんからそのつもりでの、お主たちは修学旅行中エヴァが飲酒をしてないかなど監視してくれるかの」

学園長はこのか、アスナ、刹那、ハルナの４人にもエヴァの監視を指示すると、４人はその任務を喜んで承った。

「それじゃあはじめるぞ」

学園長は数分にもわたる長い詠唱を続けると、エヴァの足元に描かれた魔法陣はその効力を発揮せんと光を発する。

光はエヴァの姿を包み込み、エヴァの中に埋め込まれた呪いはその形を変化させていく。

やがて光が収まるとともにエヴァの姿を目視できるようになった。

その姿は儀式を開始する前と何も変わらぬ様子で、傍目には本当に呪いが解けたのかどうか判断することはできない。

「これで大丈夫なはずじゃ。試しに学園の外に一歩足を踏み出してみるといい」

見るからに疲れ切った表情の学園長、いかに学園最強の魔法使いといわれる彼でも千の呪文の男（サウザンド・マスター）と呼ばれた真の最強の魔法使いのかけた呪いは彼をそれほど疲労させるものだったのだ。

だが悲しいかな、エヴァはすぐに部屋を飛び出していき、一樹以外はそんなエヴァの後を追いかけてついていってしまった。

「少しぐらい労ってくれてもいいのに」とショボーンと落ち込んでいる学園長の肩をぽんと叩き慰める。

「ありがとのぅ、松井君や」

学園長は一通り泣いたふりを済ませると、真剣な表情に切り替わる。

「後でエヴァも交えて大事な話がある。これはできればあの5人には知られない形で話を進めたい。頼めるかの？」

学園長の並々ならぬ様子に一樹も黙って承諾する。

エヴァと茶々丸を抜いた5人に知られないようにということは彼女らを関わらせたくない、もしくは知られたくない理由が存在するのだろう。

一樹は部屋を出るとエヴァが向かったと思われる場所、エヴァとネギが決闘していたあの橋のところに向かっていく。

そこが麻帆良学園の敷地の外に出るのに手っ取り早い場所なのだ。

彼女らに遅れて数分、一樹が橋に着いたときに目にしたのは橋の向こう側、つまり学園の外に出られたことを喜ぶエヴァと、それを見て一緒に喜んでいる5人の姿があった。

「よかったな、エヴァ」

一樹がエヴァに声をかけると、エヴァも上機嫌で答える。

「おぉ一樹か、今は最高の気分だ。なんせ15年越しの願いがかなったんだからな。今ならどんなことも笑って許してやれるぞ」

ケタケタと笑いながらそう告げるエヴァ。本人は本当に機嫌がいいのだろう。

「それなら」

一樹は己の悪行をつらつらと述べていく。

エヴァの秘蔵の酒をチャチャゼロと共に勝手に開けていること、エヴァに仕掛けたいたずらの数々、その他諸々。

はじめは笑顔で頷いていたエヴァも、徐々にその笑顔がひきつっていく。

結局一樹がこの日怒られることはなかった。

後日どうなるのかはあえて語らないことにしておこう。

４０話（後書き）

エヴァの呪い改変
修学旅行前になんとか間に合った。
まぁ外に出るときはほとんど一般人と変わらない状態ですけど。
実はエヴァ編が終わってから修学旅行編までの間が一週間しかないことを４０話を書き始める直前に知って焦りました。

それと詠春の扱いがひどくなっている件、この場で謝罪しておきます。
作者自身に詠春に対する悪意はないんですよ。
別に巫女さんハーレムに囲まれやがってなんて思っていませんよ
本当ですよ？

学園長が詠春に申し出た提案とは一体何なのか？
そして学園長が一樹とエヴァだけを呼び出しての話とは？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6390p/

黒の魔本

2011年12月17日06時49分発行